

### 3-14 滋賀県近江八幡市×モザンビーク

#### (1) 背景と目標等

##### 1) 背景と目的

本市には織田信長が築城した安土城跡を有し、令和8年に築城開始450年の節目を迎える。信長にはかつて「弥助」と称する家臣がおり、この弥助はモザンビークの出身であると伝わっている。

本市とモザンビーク共和国は、地理的に遠く、既に450年も経過している。今までにアフリカ地域との交流機会はほとんどなかったが、縁あって令和5年8月より同国大臣・大使が本市を来訪し、「あづち信長まつり」への特別参加や、安土城跡等の信長・弥助にゆかりのある施設等を訪れ、偉人が活躍した地を視察された。また令和7年2月に本市から民間視察団がモザンビークへ交流視察訪問し、双方に交流や情報交換の窓口を設けて、様々な交流機会を持つことになり、両国間の関係が徐々に身近になり、またお互いに関心も高まってきた。

歴史上の縁をきっかけに、両国共通の産業・農業振興、子どもたちの学校活動・課外活動を通じた相互交流等について、市民・団体・企業・行政等各分野で友好・交流の機会・機運がさらに増長・向上していけるよう、今回の万博国際交流プログラム事業に参画した。

##### 2) 目標

- ・今まで国際交流事業・イベント等に関わったことがない市民・団体等の積極参入を推進する。
- ・令和6年度は当市視察団がモザンビークを訪問し様々な知識や貴重な経験等を得ることができたので、令和7年度は先国の人たちにぜひ本市を訪問してもらい、本市の魅力ある自然・文化・資産・住民と触れ合える機会を創出する。
- ・令和6年度に実施した「小・中学生同士のオンライン交流」を活かして、令和7年度は両国の子どもたちが共同で協力して共通の活動を行う。(音楽・ダンスの協奏コラボ等)

#### (2) 事業内容

##### 1) 事業名

モザンビーク・アルバジーニ小学校と日本・安土中学校との音楽交流会

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

令和7年5月～ 万博国際交流事業の計画・企画案の検討、業者協議・調整  
万博会場・モザンビークパビリオンとの協議・打合せ、企画案調整

7月 国際交流調査（事業）の選定

日程・会場・出演者・イベント内容の調整  
9月13日 事業実施→同日検収（事業完了確認）

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

近江八幡市と近江八幡グローバルネットワーク〔事業主管団体〕が協働で事業計画立案、関係者協議調整を行い、常に情報共有・情報収発し互いに認識一致させて進めた。

モザンビークについては、現地在住のコンサル民間会社を通じて地元調整、通訳、相互の意見等を相手方に正確に伝え再度返答する方法で調整してきたので、それぞれの思い・意見が相手方に概ね伝わっており、双方大いに満足・達成感を以て事業終了することができた。

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日時 令和7年9月13日（土） リハーサル=14:30～15:00 本番=16:00～16:30  
場所 日本／大阪・関西万博内 モザンビークパビリオン前 〔リハーサル・屋外発表〕

〃 モザンビークパビリオン内 〔本番；映像通信で音楽交流〕

取組内容 大阪・関西万博会場とモザンビーク現地をインターネット接続で結び、ライブ映像で音楽演奏や歌、ダンスを披露し合う、オンラインで音楽と心を繋ぐ国際交流イベントを行った。 モザンビーク／斉唱、ダンス 日本／演奏、斉唱、合唱

参加者 モザンビーク／アルバジーニ小学校児童10～12歳……約20人  
教職員、現地中継スタッフ等……約10人  
日本／安土中学校生徒会・吹奏楽部生徒1～3年生……51人  
教職員……7人

近江八幡グローバルネットワーク〔事業主管団体〕、信長武将隊安土衆、中継スタッフ等……20人 万博パビリオン関係者ほか

報道対応等 滋賀報知新聞社 記者による取材、記事掲載あり

※9月3日（水）16:00～17:00に、安土中学校 ⇄ モザンビーク間で、映像・オンライン接続の事前リハーサルも実施した。

④効果

A:自治体内への波及効果について

本市立安土中学校生徒は、令和7年2月のオンライン接続交流に続いて2回目の交流（前回参加者とは別の生徒）だった。音楽演奏、合唱、ダンスによる同世代同士の交流ができ、生徒自身も感慨深い経験で非常に喜んでいて、普段、学校生活・授業等での国際交流の機会はわずか程度で、普段は直接相手の表情や合唱・ダンス等を見る・聞

く機会もあまりなく、モザンビークの曲やダンスはあまり馴染みがないものの、画面越しではあったが共に音楽でつながるといった体験が心に響いたと言っていた。

自治体内では、国際交流、友好都市交流、産業交流、青少年交流の各部門において、今回の事業実施での成果・反響がそれぞれ挙がっており、今後の事業企画・実施に向けての取組要素につながっている。今後も広く末永く多様な交流活動を継続して実施していけるよう取り組んでいければ、と考えている。

#### B:実施により達成できた成果について

ネット回線を活用してオンライン接続で今回のような交流事業が実施できたということで、必ずしも現地に赴いて直接対面でなくても交流はできるということを確認した。環境面の整備・充実により映像を介してではあるが、交流方法のあり方にも気づきがあった。手法の如何ではなく交流事業内容をより精査し、実のある交流になる企画を今後も計画していきたいと考えている。

#### C:相手国への波及効果について

今回の音楽交流会の機会に、日本・万博会場においてモザンビークの紹介や物産交流も行い、日本で加工製造した菓子（カシューナッツ；YASUKE NUTS [ヤスケ ナッツ]）の紹介・試供配布を民間団体が実施された。万博の一般客には突発のイベントで目新しい情景でもあり、予想外に関心度も高かったようである。今後も機会を通じて多面に広く情報提供・情報発信できることを認識したと共に、モザンビーク産の原材料を日本に取り寄せて加工製造したり、モザンビーク現地に加工製造場の立地の検討等、次の企画・方向性の芽が生まれたように感じている。



#### モザンビーク商工会との友好交流会、産業学習情報交換会

##### ① スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

令和7年5月～	万博国際交流事業の計画・企画案の検討、業者協議・調整 モザンビーク現地との協議・打合せ、企画案調整
7月	国際交流調査（事業）の選定 日程・会場・参画者・イベント内容の調整

7月25日 モザンビーク現地班を介して商工会[CCM]との協議、調整、事業実施→同日検収（事業完了確認）

② 体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

近江八幡市と近江八幡グローバルネットワーク〔事業主管団体〕が協働で事業計画立案、関係者協議調整を行い、常に情報共有・情報収発し互いに認識一致させて進めた。

モザンビークについては、現地在住の民間コンサル会社を通じて商工会〔CCM〕との調整、通訳、相互の意見等を相手方に正確に伝え再度返答する方法で調整した。本市内の農業団体、商業施設企業とも、本事業の趣旨や目的、実施内容を丁寧に説明し、両者が事業本意を理解したうえで説明内容・観覧場所を十分精査し事業内容を決定していたので、それぞれの思い・意見が相手方に適切に伝わり、双方とも大いに満足・達成感を以て事業終了することができた。

③ 内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日時、場所、取組内容

令和7年7月25日（金）

午前 10:35 本市到着～午後 4:45 出発

午前 11:10～11:40 農事組合法人ファームにしおいそ 現地説明・施設見学

午後 1:15～ 2:35 近江八幡商工会議所 農業学習会（講演；西老蘇宮農組合理事長）近江商人屋敷・八幡堀界わい 周遊、観光施設散策

2:50～ 4:30 ラ コーナ近江八幡 産業学習情報交換会（施設見学、講演他）

参加者 モザンビーク商工会〔CCM〕役員他……18人

日本／近江八幡グローバルネットワーク〔事業主管団体〕

安土町商工会役員、近江八幡商工会議所役員……約15人



#### ④ 効果

##### A:自治体内への波及効果について

令和7年2月に本市交流視察団7人がモザンビークを訪問し、産業経済関係の省庁・諸団体との懇談で先国・地域の農業・商工業事情等の意見交換を行った。日本・先国とも、主産業が農業・稲作という共通部分もありますが、収穫量に大きな違いがある。[例／本市地域では1反あたり平均9俵収穫に対して、モザンビークでは1反あたり平均3俵程度しか収穫できない、という状況差。]

気候・気象・日照採光・降水状況等の自然環境面、圃場整備状況（揚水配水排水整備状況）や農業施設・設備（農機具）等の普及充実、各国での農業支援補助制度の有無等、各国・地域で条件や違いもあるが、農業技術向上・継承等、日本・本市から先国に伝授できる何らかの支援もあるのではないかと、という提案を基に、今回民間団体による農業研修・講演会を実施した。今後は、日本の農業教育施設（農業大学校）等での研修受け入れや、先国現地での農業技術の支援協力の方策が見出せないか、私たちにできる範囲に限りもあるが、国県市町への提案・働き掛け等について研究していければ、と考えている。

##### B:実施により達成できた成果について

両国が相互に産業現状・農業政策実状を話し合い、各国・地域の状況把握や事情等を理解・認知しました。各国で様々な環境・条件等は違うものの、他国と異なる実状であれば何かの課題があることになる。互いに意見・提案等を出し合いながら、少しずつでも改善できること等を改めて考える機会となった。

また、前設問の回答内容のとおり、先国の農業事情では国等からの補助事業や政策が日本の制度に比べて充実度がやや低調な制度現状であった。日本や本市から農業技術伝授等での支援など、可能な範囲で支援協力の手法等を研究検討していければ、と考えている。

##### C:相手国への波及効果について

日本の農業環境、技術、政策（制度）等をモザンビークの人たちが直接見聞されて、自国の農業事情、政策、制度との違いを認識されていた。しかし、単に「違う」に留まらず、なぜ必要なのか、制度化するためにはどのようなことをすればよいのか、等、具体的な対応方法を尋ねられ、また国の省庁役員側は補助制度等の仕組み等を熱心に学ばれていた。制度化が実現できるかどうかは分からないが、直接見聞し、自国との違いを理解し、如何にしたら改善できるかを考えるようになったことは、今回の交流事業で得られた成果の一つであったと考えられる。また、先国は海洋国家として、豊富な資源を保有しているものの、加工技術や物流等が不十分であるため輸入に頼らざるを得ず、結果的に物価高騰につながっている。こうした課題を解決し、持続可能な農業の仕組みづくりが今後も必要である、と考えている。

### (3) 事業の目標に対する成果

- ・国際交流事業・イベント等への過去不参加市民・団体等の積極参入推進  
→ [音楽交流会] 安土中学校生徒会・吹奏楽部生徒 51 人、[農業学習会・産業学習情報交換会] 西老蘇宮農組合、ラ コーナ近江八幡の 2 団体、本市商工団体役員等、ほぼ初参加であった。  
いづれも、今回の国際交流事業の企画検討がきっかけで、初めて参加してもらい、参加者・団体からは「非常に楽しく貴重な経験ができて大変良かった」と高評価であった。
- ・令和 7 年度はモザンビークの人たちに本市を訪問してもらい、本市の魅力ある自然・文化・資産・住民と触れ合える機会創出  
→モザンビーク商工会 [CCM] が 7 月に本市を来訪されて、農業学習会、産業学習情報交換会および市内史跡観光等を行い、本市の魅力ある歴史資産等を所々周遊しながら住民（企画スタッフ）との触れ合い交流も行った。参加された CCM 会員のみなさんも、大いに堪能いただき、満喫されていた。
- ・令和 7 年度は両国の子どもたちが共同で協力して共通の活動を行う。（音楽・ダンスの協奏コラボ等）  
→9 月 13 日(土)に、大阪・関西万博モザンビークパビリオンの協力を得て、モザンビーク首都マプトのアルバジーニ小学校児童と、日本・万博会場内の安土中学校生徒会・吹奏楽部生徒がオンラインで繋がり、音楽と歌、ダンスを通じてお互いの交流を深めた。  
全員初めての事業参加で、同年代の外国の子ども達同士がモニタ映像・音声を介して音楽・ダンスの協奏コラボを行い、「一緒に楽しい一時を過ごせて嬉しかった、感動した」との感想が出ていた。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

令和 6 年度に、本市の民間団体（7 人）が代表してモザンビーク共和国に視察訪問を行い、現地での交流を深めた。その際に、現地の小学校から本市の安土中学校をインターネット接続で結び、生徒・児童の交流を行った。

令和 7 年度は、2 回目の交流で、万博会場に居る本市 安土中学校生徒と、モザンビークのアルバジーニ小学校児童をオンラインで結び、音楽交流会を行った。そのほかにも、産業団体のモザンビーク商工会 [CCM] が本市を来訪され、モザンビークでの農業技術向上を目指し、本市の農業現地見学や農業講演会の研修を行い、知識と技術の向上に意欲的に取り組まれた。さらには、モザンビークでも生産が盛んなナッツの加工品を本市で製造・商品化した穀物菓子の製造物販等にも着手し、今後のビジネス展開を模索・拡大する検討協議が始まりつつある。このことは、両市・両国を結ぶ非常に効果的な交流になってきている、と感じている。

## (5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

参加した中学生へのアンケートの結果では、「今回の音楽交流会は、大変楽しかった、嬉しかった」との回答が8割以上あった。初めての交流機会だったので、最初は緊張と不安があったと子たちも、お互いの歌唱・演奏・ダンスを見たり聞いているうちにすごく盛り上がり、楽しさ満載に変わっていったと答えた子が多数いた。また、言語や文化等、異なる者同士であっても、音楽やダンスは世界共通でつながり合える「魔法のようなもの」との回答もあり、生徒・児童の若年者はじっくり考えてから言動するというよりも、自然に体を動かしたり、歌声を発したり、曲を奏でたり、など、直感で楽しいと思えることを好み、すぐに実行していけることを好むという気質であることが多いと思った。

また、今回はモザンビーク、アフリカ地域との交流だったが、今後も継続して交流していきたいとか、次は他の地域の生徒・児童との交流を行いたい、現地にも行ってみたい、と好奇心あふれる回答もあった。また、日本で開催された万博ということもあって、万博の機会だからこそ世界中の色々な国・地域と沢山交流することができたので、次に開催される万博の時にも多くの国・地域の人たちとぜひ交流したいとの回答もあった。

この結果を踏まえ、モザンビークとの継続的な交流はもちろん、機会があれば他の地域とも交流事業・機会を考えていけたら、と考えている。

## (6) 特に良かった点、苦労した点

### 1) 良かった点

今回、主に取り組んだ2事業は、子ども主体に交流事業の広がり期待できる音楽・ダンスでの交流イベントと、本市とモザンビークの産業農業振興・開拓・発展につなげられそうな産業交流を実施した。子どもイベントは、やはり交流のきっかけ、興味を持ちやすい若者向けのテーマを選び、子どもたちが躊躇なく取り組むことができたことが良かったと思う。また、産業農業事業では、それぞれの国・地域において一生懸命に産業・農業に従事され、知識や技術のさらなる向上・レベルアップを目指し、その知識・経験を持続し共有しようとされていること等をみなさんに分かち合ってもらえたことが良かったと思う。単に人と人、人と団体が結びつくだけでなく、自分たちが持っているノウハウ等を広く周りに分かち合うことができれば、それが繋がりになっていくのだと思った。いずれにせよ、学校や団体が前向きに積極的に活動していくための調整役・キーパーソンの存在が今回の2事業の実施・成功につながった要素だと考えている。

### 2) 苦労した点

今回の事業企画・実施においては、企画主導の近江八幡グローバルネットワークと市が協働して企画提案・関係者調整等をうまく実施していただいたが、企画提案・調整のスムーズな流れの中で、事前準備や事務処理において一部停滞等で時間を要してしま

うことがあり、反省事項として今後留意していければ、と考えている。

## (7) 今後の展開

まだ手探り状態だが、学生・生徒・児童の交流活動の継続化、農業技術普及支援、農産物他の物流システム構築化、農産物加工・製造施設の整備等、お互いの国・地域で必要と求められていることで、できること・可能なことから少しずつでも取り組んでいけるよう、チーム、団体や関係者と協力協働で計画検討していきたいと考えている。

## (8) 今後の展開における課題

今後も持続して国際交流、国際協力支援を実施していくためには、まずは大使館の存在、大使館を通じて現地との連絡・連携を取っていくことが大事と考える。また、事業の実施に当たって、やはり財源と人材の確保が不可欠である。今回は万博関連交流事業として取り組むことができたが、今後も自主財源の確保と共に、国県等の支援補助制度の継続措置等が必要と考える。また、交流事業の継続実施には次世代の人材の養成・育成等も重要であると考え、今後も鋭意取り組んでいきたいと考えている。

## 3-15 大阪府大阪市 × ガーナ

### (1) 背景と目標

#### 1) 背景

大阪府・大阪市では、「大阪・関西万博のインパクトを生かした都市魅力の創造・発信」「安全・安心で持続可能な魅力ある都市の実現」「多様な主体が連携し、大阪全体を活性化」の3つの基本的な考え方のもと、10の目指すべき都市像を定めた「大阪都市魅力創造戦略2025」を策定した。本事業は10の施策の一つである「出会いが新しい活を生む多様都市」に含まれる「多文化理解の促進」を図るものと位置付けている<sup>1</sup>。本事業を実施することにより、大阪府・大阪市が推進する「大阪都市魅力創造戦略2025」をさらに促進させ、大阪府・大阪市が世界に誇る魅力あふれる多文化共生社会を体現する都市となることを目指している。

天満中学校では、2024年度も本事業を活用し、現2年生を対象に駐日ガーナ共和国大使館を通じた交流事業やガーナの社会・文化に関する学習等を実施し、生徒のガーナへの興味・関心を醸成した。本年度は、対象を全学年に拡大し万博ブースを訪問してガーナの方と直接交流したうえで、前年度に醸成した機運を万博のレガシーとして持続的なものとし、学校全体で今後のより密接で持続的な国際交流や相互理解を目指すため、生徒のガーナへの派遣プログラムを実施した。

#### 2) 目標

本年度の万博交流プログラム実施にあたり、天満中学校では以下の目標を設定した。

- (1) ガーナとの交流を通して、異文化や多様性を体感し、世界の事情や英語を学ぶこと、国際交流への関心・意欲を高める。
- (2) 「いのち輝く未来社会のデザイン」を掲げる大阪・関西万博を契機に、ガーナとの交流を深めるとともに、万博終了後もガーナとの交流・相互理解を継続することで、将来の国際社会の担い手として、よりよい未来の実現に貢献できるようになる。
- (3) ガーナや日本、世界の課題を自分事として捉え、解決に向け何ができるか、仲間とともに自ら考え行動できるようになる。
- (4) 異文化コミュニケーションや海外での体験を通じて、自身の可能性に気づき、自信・積極性、新たなチャレンジへの意欲、将来の選択肢を広げる力を育む。

---

<sup>1</sup> <https://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/page/0000531412.html>

## (2) 事業内容

大阪・関西万博での校外学習

### スケジュール

2025年6月3日(火)に、天満中学校の全校生徒が、大阪・関西万博での校外学習を通じて、ガーナのブースを含む各国パビリオン(ブース)を訪問し、学校で与えられたミッションに取り組んだ。事前学習を含めたスケジュールは以下のとおりである。

表1 大阪・関西万博での校外学習スケジュール

日付	実施内容
4月30日(水)	・「万博とは何か」「どういう目的で校外学習を行うのか」についての学習班ミーティング(自己紹介、役割決め、行程の計画)
5月中	各学年の英語の授業内での、英語インタビュー練習
6月2日(水)	全校集会での大阪・関西万博の校外学習事前学習
6月3日(火)	大阪・関西万博での校外学習

### 体制

全校生徒390名、引率教員(平田校長含む)38名、計428名が参加した。本プログラムの企画・実施は天満中学校の教員が行った。

### 内容

事前学習を含む大阪・関西万博での校外学習の実施内容は、以下のとおりである。

表1 大阪・関西万博での校外学習

日付	実施内容
4月30日(水)	全校集会にて、「万博とは何か」「どういう目的で校外学習を行うのか」について学んだ。55年前に行われた大阪万博との比較や、会場では多くの外国の文化に触れる機会があることが紹介された。その後、各学年生徒からなる縦割り班で集まり、親睦を深めたうえで役割決めを行った。
5月中	各学年の英語の授業内で、「会場内の外国人観光客に英語でインタビューをしよう」というミッション実施のため、英語インタビューを練習した。
6月2日(水)	全校集会にて、大阪・関西万博の校外学習の最終確認を行った。
6月3日(火) 万博ブース訪問	天満中学校の全校生徒が、各学年生徒からなる縦割り班にて、万博各国パビリオン(ブース)を訪問した。ガーナブースでは、ブース担当者との交流を行うとともに、各国の文化や社会、日本政府による開発援助等について学習した。「会場内の外国人観光客に英語でインタビューをしよう」というミッションの下、各班にてインタビューに取り組んだ。

## 効果

天満中学校の現2年生は、昨年度の万博国際交流プログラムを通じて<sup>2</sup>ガーナひいては国際交流への関心を高めていた。今年度は学校の外に出て、万博会場にてガーナや世界各国の文化に触れ、また英語でのコミュニケーションを主体的に行うことで、現2年生のガーナとのつながりの深化を図るとともに、全校を挙げたガーナや国際交流への関心を高めることができた。

## ガーナ派遣生徒の募集および選考

### スケジュール

2025年7月14日（月）の全校集会にて、今年度の万博国際交流プログラムの一環として、全学年から5名程度を選抜したガーナ派遣事業を行うことを発表した。募集および選考は、以下のスケジュールのとおり実施した。

表3 ガーナ派遣プログラム 募集・選考スケジュール

日付	実施内容
7月14日（月）	全校集会にて、派遣事業について説明し、派遣生徒の募集を開始。
7月30日（水）	保護者説明会実施
8月7日（木）	参加申込書提出〆切
8月19日（火）	一次試験（作文）提出〆切
8月20日（水）	一次試験選考実施
8月22日（金）	一次試験結果発表
8月27日（水）	二次試験（面接）実施 二次試験選考実施
8月29日（金）	二次試験結果発表、派遣生徒決定

出所：天満中学校作成

## 体制

本募集および選考は、天満中学校の教員が中心となり実施した。保護者説明会および選考には、本事業の事務局を担う近畿日本ツーリスト（株）が、全校集会での派遣事業説明、募集要項作成、保護者説明会および選考には、一部事業を委託している（株）かいはつマネジメント・コンサルティング（KMC）がそれぞれ参加した。

## 内容

各選考の内容は以下のとおりである。

---

<sup>2</sup> 授業における学習、駐日ガーナ大使館の方を学校に招いた講演会への参加、JICA 協力隊員への質問送付と回答動画の視聴、在日ガーナ人アーティストによる音楽交流等学校内での活動を通じ、ガーナに関する知識を得た。

表4 ガーナ派遣プログラム 選考内容

選考概要	実施内容
参加申込書	各申込者は、以下の質問への回答を記入・提出した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自己PR</li> <li>・趣味、特技</li> <li>・ガーナでやってみたいこと、行ってみたい場所とその理由</li> </ul>
一次試験（作文）	各申込者は、以下のいずれかのテーマを一つ選び、所定の作文用紙（1000字以内）に記入・提出した。 (1) 「ガーナで学びたいこと」 (2) 「日本や大阪のことで伝えたいこと」 一次試験には全学年から13名が応募し、7名が合格となった。
二次試験（面接）	一次試験合格者は、参加申込書および一次試験の作文内容を基にした質問や、派遣を経た後の将来に関する質問等を受け、回答した。 二次試験には全学年から7名が参加し、5名が合格・派遣決定となった。

出所: 天満中学校作成

#### 効果

本年度は、万博国際交流プログラムの参加対象を全学年に拡大するとともに、特に意欲の高い生徒を選抜し、現地派遣を行う方針とした。この変更の背景には、主体的に取り組む生徒に機会を提供することで、より充実した学びと成果が期待できるという考えがある。また、派遣されない生徒にとっても、同じ学校の仲間による体験談や学びの共有は、外部の話以上に身近で刺激的な学習機会となると判断した。応募した生徒は、国際交流や異文化理解に関心を持ち、また得られた経験を外部に発信する意欲を持っていた。現2年生以外は学校内でのガーナに関する学習の機会はなかったものの、各自自己学習に取り組み、派遣に懸ける思いを述べていた。本選考は、合格者にとっては、後述する事前学習およびガーナ派遣に向けた基礎学習のきっかけとなったほか、天満中学校ひいては日本を代表して派遣される生徒としての自信を育むプロセスともなった。可否に関わらず、時間をかけて選考準備に取り組んだ経験は、生徒が自分の内面と向き合い、また日本や世界と自分とのつながりを考える貴重な機会であった。

#### 事前勉強会

##### スケジュール

ガーナ渡航に向けた全3回の事前勉強会を、以下のスケジュールのとおり実施した。

表5 ガーナ派遣プログラム 事前勉強会スケジュール

日付	実施内容
9月19日（金）	事前勉強会① ・自己紹介 ・校長先生からのご挨拶 ・派遣に向けて (1) ガーナ政府公式プロモーション動画視聴 (2) 派遣事業のねらい ・プログラム①“3 Moments”心が動いた瞬間 ・プログラム②グループワーク：「全員が主体となって、ガーナ派遣プログラムを作り上げよう」 ・まとめ：担当分野の決定
10月3日（金）	事前勉強会② ・事前勉強会①の振り返り ・生徒からの発表および質疑応答 ・まとめ：今後の準備・確認事項および分担の決定
10月30日（木）	事前勉強会③ ・現地スケジュール ・安全対策 ・野口英世の功績 ・現地での健康面での対策、ボルタ州での訪問先および現地語の挨拶

出所:天満中学校作成

#### 体制

本事前勉強会は、天満中学校の派遣生徒5名を対象に、天満中学校の教員の協力を得ながら、KMCが中心となって企画・実施した。勉強会には、大阪市教育委員会、近畿日本ツーリスト（株）からも参加した。事前勉強会②には読売新聞社の担当者も参加し、生徒へインタビューを行った。事前勉強会③には、元JICA海外協力隊員の大谷様にオンラインで登壇いただいた。

#### 内容

事前勉強会の内容は以下のとおりである。

表6 事前勉強会

選考概要	実施内容
9月19日（金） 事前勉強会①	事前勉強会①では、チームビルディング、現地での課題設定、調べ学習（宿題）の担当分野設定を目的に、各プログラムを実施した。本報告書には、主なプログラムである以下の3つについて記

	<p>載する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラム①“3 Moments”心が動いた瞬間  派遣生徒は 1～3 年生の各学年から構成されていることから、「お互いを応援し合える仲間になるため、まずはお互いを知ろう」と題し、親睦を深めることを目的としたアイスブレイクを行った。各生徒および派遣に同行する教員から、「心が動いた瞬間」について、各自 3 つシートに記入し、全員に向け発表した。発表後は、ポジティブに受け止められる感想を送り合い親睦を深めた。</li> <li>・プログラム②グループワーク「全員が主体となって、ガーナ派遣プログラムを作り上げよう」  派遣生徒の関心や想いを現地プログラムに反映させ、より主体的に万博国際交流プログラムに参加できるよう、ガーナで訪問する各学校との交流内容や、追加で訪問・調査したいこと等に関連するキーワードを、各自が発表した。思考の枠にとらわれず自由に発想できるよう、ガーナで実現できるかは不問としたことで、さまざまなアイデアが挙げられた。</li> <li>・まとめ：担当分野の決定  グループワークで洗い出したキーワードを、6 つの分類（教育、文化、社会、運動、食事、環境）に区分し、関心に応じて各分野 1～2 名の担当者を決定した。派遣生徒は各担当分野のキーワードを基に、具体的なイベント、インタビュー、調査案を考えるため調べ学習を行い、事前勉強会②にて発表することとした。</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>10月3日（金） 事前勉強会②</p>	<p>事前勉強会②では、各担当分野の調べ学習内容の共有および現地プログラム内容の仮決定を目的とし、各派遣生徒からの発表および質疑応答を行った。各生徒からは、食やスポーツ、音楽を通じたガーナの子供との交流や、ガーナと天満中学校とのオンライン中継等が提案されたほか、発表後も提案をより良くするアイデア等が活発に飛び交った。</p> <p>提案内容を基に、①新たにプログラムを企画する、または②既存のプログラム内で実施する形で実施するか等の実施方法や実現可</p>

	<p>能性、ガーナ受け入れ側への確認事項の整理、準備や練習の要否等を、天満中学校の教員、近畿日本ツーリスト（株）およびKMCにて確認し、勉強会終了後に各自準備や確認を進めた。</p> 
<p>10月30日（木） 事前勉強会③</p>	<p>事前勉強会③では、事前勉強会②にて派遣生徒から提案のあった内容を組み込んだ最新の現地スケジュール・プログラム案をKMCから紹介するとともに、現地滞在中の安全対策・管理方法について説明を行った。また、特別講師による講義として、以下の2つのプログラムを実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・野口英世の功績 <p>天満中学校の平田校長からは、訪問予定である野口英世博士記念館にちなみ、野口英世について講義が行われた。講義では、野口英世の生涯や鉱石、ガーナの人々にとってどのような存在かについて紹介するとともに、「すでに世界的な名声を得ながらなぜアフリカでの黄熱病の研究に身をささげたのか？」「野口英世からどんなことが学べるか？」といった問いが示され、各生徒は積極的に考えを述べていた。</p> </li> <li>・現地での健康面での対策、ボルタ州での訪問先および現地語の挨拶 <p>元 JICA 海外協力隊員でガーナのボルタ州に滞在されていた大谷様からは、ボルタ州での訪問予定先の学校である、CLOUDY SCHOOL in Volta やボルタホームについて、現地での滞在中に健康面で気を付けるべきことやボルタ州で使える挨拶等とともに講義いただいた。渡航日が近づく中、各生徒からは、地域ごとの言語の違い、現地で気を付けるべきハンドサインはあるか等、具体的な質問が挙げられた。</p> </li> </ul>



出所: KMC 撮影の写真を活用し、天満中学校作成  
効果

全 3 回の事前勉強会では、互いに応援し合えるチーム作りと、ガーナ渡航時の学びを最大化するための事前学習を行うことに成功した。ガーナ渡航中の短い期間で現地の人々とのつながりを深めるためには、まずは日本側の生徒やチームが一丸となり、積極的に交流プログラムに取り組むことが欠かせない。派遣生徒が学年を超えて親睦を深め、回を重ねることにより協力し合って事前学習や交流準備に取り組んだことは、後述するガーナ派遣の成功にもつながった。

現地プログラムの追加企画検討に生徒自身も取り組むことで、選考試験を通じて得た基礎的なガーナの知識のみならず、より具体的にガーナの学校や暮らしについて想像しながら異文化理解・学習に努めた。生徒は、どのような方法であれば互いに楽しく、また学びのある交流ができるか、様々なアイデアを練っていた。これは、大阪・関西万博のテーマの一つである「いのちを高める：遊びや学び、スポーツや芸術を通して、生きる喜びや楽しさを感じ、ともにいのちを高めていく共創の場を創出する。」の実現に貢献している。

### ガーナ渡航 スケジュール

2025 年 11 月 8 日から 15 日にかけて、天満中学校の生徒 5 名がガーナを訪問した。渡航日程は以下のとおりである。

表 7 ガーナ渡航日程

日付	実施内容
11 月 8 日 (土)	・伊丹発ー羽田着／発
11 月 9 日 (日)	・ドーハ着／発ーアクラ着 ・アクラ市内視察 (マコラマーケット、グローバル・ママ)
11 月 10 日 (月)	・アクラ市内視察 (凱旋門・独立広場、オス・キャッスル、アクラモール、野口英世博士記念館・庭園、クワメ・エンクルマ記念公園・霊廟) ・在ガーナ日本国大使館表敬訪問 ・現地で働く日本人訪問 (Mago Motors)
11 月 11 日 (火)	・学校①CLOUDY SCHOOL in Volta 訪問

	・学校周辺の村やボルタ湖への訪問
11月12日（水）	・天満中学校とのオンライン中継 ・学校②ボルタホーム訪問 ・ケンテ織体験、カカオ農家訪問
11月13日（木）	・学校③JICA 海外協力隊員任地／ホ・インターナショナル・スクール訪問 ・現地で働く日本人訪問（岸邸） ・（アクラ班）アクラ市内視察（CLOUDY アートスクール・縫製工場、アグボグブロシー）
11月14日（金）	・アクラ発—ドーハ着
11月15日（土）	・ドーハ発—香港経由—関西着

出所:天満中学校作成

### 体制

天満中学校の生徒5名、平田校長を含む教員3名、大阪市教育委員会から1名、KMCから1名、添乗員1名が日本から渡航した。現地訪問にかかる調整はKMCが行い、活動内容については天満中学校の教員も含めて協議を行った。ロジ手配は近畿日本ツーリスト株式会社が担った。

### 内容

ガーナ渡航における実施内容は以下のとおりである。

表8 ガーナ渡航

日付	実施内容
11月9日（日） および 11月10日（月）	<p>・アクラ市内視察</p> <p>11月9日および10日には、以下の3つの社会学習を目的に、アクラ市内での視察を行った。</p> <p>(1) ガーナの奴隷貿易や独立の歴史 訪問先：凱旋門・独立広場、オス・キャッスル（奴隷貿易の拠点）、クワメ・エンクルマ記念公園・霊廟（ガーナ初代大統領の記念公園）</p> <p>(2) 野口英世博士の功績 訪問先：野口英世博士記念館・庭園</p> <p>(3) ガーナの社会と生活 訪問先：マコラマーケット（市場）、グローバル・ママ（フェアトレード店）、アクラモール（ショッピングモール、スーパーマーケット）</p> <p>同じ市内でも富裕層向けの大型モールから一般市民向けの市場、ス</p>

	<p>トリートチルドレンが暮らす地域まで貧富の差があることを目の当たりにしたほか、奴隷が収容されていた部屋にも訪れた。実際に目にした光景に大きな衝撃を受けた生徒たちは、各訪問先や移動中にも、ガイドに対し積極的に質問を行っていた。車窓からも行き来する車や人々の暮らしの様子を見ることで、社会分野の学習の一つとした。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>11月10日（月）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在ガーナ日本国大使館表敬訪問        在ガーナ日本国大使館では、義本大使および両宮様と面談した。万博国際交流プログラムでのこれまでの活動や、今後の訪問日程について報告した後、質疑応答を行った。生徒や教員からは、ガーナの社会課題や日本との関係、どのようなことを学んで帰るべきか等、活発に質問が挙げられた。義本大使からは、遠い、危ないといった印象を抱かれることの多い「アフリカ」にも、54カ国それぞれ異なる多様な文化や社会があることを踏まえ、「日本とは異なる色彩、音楽、気候等を見て感じて知り、帰国後もぜひ交流を続けて欲しい。」といったメッセージを頂戴した。</li> <li>・現地で働く日本人訪問（Mago Motors）        Mago Motors は、「世界最大級の電子機器の墓場」と言われるアグボグブロシーを活動拠点として、リサイクル事業やサッカーチーム運営を通じ、現地のゴミの削減や雇用創出を行う日本企業である。Mago Motors では、三坂様よりガーナでの課題と事業内容について説明を受けた後、電子機器廃棄物のリサイクル工場や、工場で作られた建材や家具、廃材を生かしたアート作品等を見学した。先進国からの廃棄物や、寄付されたはずの衣類さえもがガーナの人々の生活を脅かしているという話には、生徒たちは真剣な表情で耳を傾けていた。</li> </ul>



11月11日（火）

・学校①CLOUDY SCHOOL in Volta 訪問および学校周辺の村やボルタ湖への訪問

CLOUDY SCHOOL in Volta は、日本の特定非営利活動法人 CLOUDY が建設した公立学校で、ガーナ南東部のボルタ州アブイチタ村に所在する。幼稚園、小学校、中学校合わせて約 500 名の児童・生徒を擁する。かつては貧困のため学校がなかったこの村に、2018 年に幼稚園と小学校が、2021 年に中学校がそれぞれ建設され、2025 年には初の大学進学者を輩出した。

訪問当日は、様々なプログラムを通じた交流活動を行った。初めに CLOUDY 副理事の鳥居様から同校に関する説明を受けた後、パフォーマンス交流を行った。同校の児童および生徒からは、歓迎の歌とダンスを披露され、天満中学校からは、日本およびガーナの国歌斉唱、ひょっこり踊りの披露を行った。続いて、同校の児童・生徒への給食提供のサポート、日本の麦茶の提供等を行い、食文化を通じての交流を図った。午後には運動・遊び等のイベント交流として、互いに持ち寄った玉入れ、だるまさんが転んだ等を行い、言語の壁を超えて心を通わせる機会となった。最後に中学校の校舎にて、日本人ボランティアの國分様が行うそろばんの授業を見学し、ガーナでの学校生活を知る機会とした。

学校訪問後は、周辺の村の家々の様子を見学したほか、下校後に水を汲みに行く児童にと共に湖を訪れる等、村での生活について理解を深めた。村の人々が、経済的に余裕のない生活の中でもスマートフォンの購入を優先していることを見聞きした生徒たちは、その背景や賛否について帰国後も議論を尽くし、後述する全校生徒向けの帰国報告会でも「答えのない問い」として取り上げた。本訪問は、生徒たちが豊かさや幸せについて改めて考える大きなきっかけとなった。

	
<p>11月12日（水）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天満中学校とのオンライン中継 <p>ガーナの宿泊先から、派遣生徒と天満中学校の全校生徒とを結ぶオンライン中継を行い、前日までの訪問先や交流内容の報告、事前質問への回答等を行った。時差のためガーナ早朝の中継となり、学校同士の交流は叶わなかったが、全校生徒からは当日も活発に質問が投げかけられ、派遣生徒が体験した生の声をいち早く全校生徒に伝える機会となった。</p> </li> <li>・学校②ボルタホーム訪問 <p>ボルタホームは、親族経営の孤児院で、小中学校および協会が併設されている。児童・生徒数は約200名、そのうち孤児は約60名である。</p> <p>同校では、前日と同様のパフォーマンス交流を行うとともに、文化交流と題して、茶道の紹介、浴衣の着付け、折り紙を用いた創作活動、昆布茶の提供を行い、日本の伝統や食文化を通じた交流を図った。自由時間には、偶然互いに持っていたトランペットで即興のセッションを行う等、対面ならではの思いがけない交流で相互理解を深めた。</p> </li> <li>・ケンテ織体験、カカオ農家訪問 <p>ガーナの文化、社会や環境を学ぶ機会として、まずボルタ州の伝統であるケンテ織の工場を訪問し、技法習得までの道のりやデザインの意味等について説明を受けた後、織物体験を行った。続いてカカオ農家を訪問し、カカオの流通経路や農家にとっての課題等について説明を受けるとともに、カカオの実がなる様子を見た後、果肉を試食させてもらう等、ガーナの重要な産業であるカカオについて五感を通じて理解を深めた。</p> </li> </ul>

	
<p>11月13日（木）</p>	<p>・学校③JICA 海外協力隊員任地／ホ・インターナショナル・スクール訪問</p> <p>JICA 海外協力隊員の梶様の任地であるホ・インターナショナル・スクールは、ボルタ州の州都ホに所在する、幼稚部から中等部までの私立一貫校で、生徒数は合わせて約 250 名ほどである。体験学習を取り入れた実用的な教育に力を入れており、プロジェクトグループと呼ばれる課外活動班を結成し、理科、エンジニアリング等の学習に励んでいる。</p> <p>当日は梶様から隊員活動の様子や学校について説明を受けた後、同校からの強い要望を受け、各プロジェクトグループからの学習成果発表が行われた。天満中学校からも、前日までの訪問先と学びについて発表した後、前日と同様のパフォーマンス披露を通じ、音楽を通じた一体感ある交流を行った。同校は英語で授業を行う学校であり、派遣生徒たちは英語を用いたコミュニケーションで親睦を深めた。休憩時間中も雑談を通じて思い思いの相互理解を実現した。</p> <p>・現地で働く日本人訪問（岸邸）</p>

岸邸は、アクラに店を構える和食レストランで、オーナー兼シェフの岸かほり様が、日本式のおもてなしとともに、無添加にこだわったメニューを提供している。岸様からは、食に関心を持ったきっかけや開店の経緯、日本のために異国で奮闘する人々の努力とそれを支えたいという想いなどが語られ、生徒たちはこれまでガーナでの体験を振り返りながら、集中して耳を傾けていた。

・（アクラ班）アクラ市内視察

体調不良によりボルタ州訪問を断念した派遣生徒一名および同行者一名が、療養を経て体調回復後、別途アクラ市内視察を実施した。10日（月）の訪問先のほか、CLOUDYが運営するアートスクールおよび縫製工場、アグボグブローシー等を訪問し、貧困の現状を知り、また課題解決策を理解する機会とした。



出所:天満中学校作成

## 効果

本ガーナ渡航では、異なる環境を持つ学校 3 校との交流を軸にプログラムを実施した。生徒は、ガーナ国内においても学校の状況や教育環境に多様性があることを理解し、言語だけでなく非言語コミュニケーションも駆使しながら交流を成立させ、心を通わせる手段は一つではないことを、身を以て体感した。この経験は、異文化理解にとどまらず、コミュニケーションの本質を考える貴重な機会となった。

本渡航は、ガーナの学校および生徒にも良い影響をもたらした。NPO CLOUDY の現地代表からは、「天満中学校の生徒がガーナの学校を訪問し、交流することは、ガーナの子供にとって「勉強を続ければ、自身も同じように海外に渡航するチャンスを得られる」という気付きを得て、学習へのモチベーションを向上させる機会となった。訪問に心から感謝する。」という言葉が伝えられた。交流を通じて相互理解を深めるのみならず、互いの未来に前向きな影響を与え合った今回の渡航は、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」をまさに体現するものである。

「現地で働く日本人訪問」では、日本の方々が世界を舞台に直向きに挑戦する姿から大きな刺激を受けるとともに、現地への貢献の方法が多様であることを理解し、自身にできる国際協力のあり方を考える契機となった。首都アクラと地方のボルタ州の双方を訪問したことで、地域による生活や社会環境の違いを比較し、より立体的にガーナを理解する視点を得た。

## 事後勉強会および帰国報告会

### スケジュール

12月22日(月)に、派遣生徒5名が全校生徒に対し、ガーナ派遣事業での体験と学びを発表する帰国報告会を実施した。報告会実施に先立ち、発表準備やリハーサルのため、以下のスケジュールにて事後勉強会を行った。

表9 事後勉強会・帰国報告会スケジュール

日付	実施内容
12月8日(月)	事後勉強会①
12月15日(月)	事後勉強会②
12月19日(金)	事前勉強会③
12月22日(月)	帰国報告会

出所:天満中学校作成

## 体制

本事後勉強会および帰国報告会は、派遣生徒および天満中学校の教員が中心となり実施した。事後勉強会には、大阪市教育委員会およびKMCが参加し、発表内容に磨きをかけるための助言等を行った。事後勉強会②および帰国報告会には、大阪市北区の広報担当者も参加し、生徒へのインタビューや質問をいただいた。また、帰国報告会には大阪市教育委員会

指導主事の訪問やオンラインでの配信もあった。

内容

事後勉強会および帰国報告会の実施内容は、以下のとおりである。

表 10 事後勉強会・帰国報告会

日付	実施内容
12月8日（月） 事後勉強会① および 12月15日（月） 事後学習会② および 12月19日（金） 事後学習会③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事後勉強会①：各自の発表項目および内容の確認、質疑応答</li> <li>・事後勉強会②：発表リハーサル、質疑応答</li> <li>・事後勉強会③：発表リハーサル、質疑応答</li> </ul> <p>派遣生徒は、各訪問・交流先を担当分野ごとに分け、一人ずつ全員が発表を行うこととした。各勉強会では上記のとおり発表や質疑応答を行ったほか、勉強会以外にも教員や生徒間でも練習や協議の場を設け、発表内容の改良に努めた。</p> 
12月22日（月） 帰国報告会	<p>帰国報告会では、ガーナで披露したひょっとこ踊りで入場した後、各派遣生徒から担当分野における訪問・交流内容を共有した。その他現地で感じた率直な想い、各訪問先を比較しての学びや気づき、日本との違いやガーナから学ぶべきこと等を、自分の言葉で発表した。発表の間には、現地で収録した動画を基にしたクイズコーナーや、答えのない問いを投げかけ全校生徒や教員に答えてもらう双方向プログラムも設けられ、ガーナ渡航でのプログラムを全員が追体験できるような場となった。</p> 

出所: KMC 撮影の写真を活用し、天満中学校作成

## 効果

2回の事後勉強会および帰国報告会では、派遣生徒は現地での体験を振り返る中で、様々な想いや学びを言語化し、かつ新しい視点や理解を深める機会となった。自身の体験をわかりやすく伝える難しさや、自らの発表が全校生徒にとってガーナの印象を形づくるという責任の重さを感じながらも、自分にしか語れない想いを届ける価値を実感した。全校生徒にとっては、身近な仲間の視点で追体験することで、遠い国の出来事を他人事ではなく「自分事」として捉え、国際理解や行動の変化につながる契機となった。こうした取り組みは、学校全体に学びの連鎖を生み出し、国際交流の成果を広く共有する重要な場となった。

### (3) 事業の目標に対する成果

#### 事業目標に対する成果

天満中学校では本事業において、上述のとおり大阪府・大阪市が推進する「大阪都市魅力創造戦略 2025」の理念の下、以下の目標を掲げ、生徒のガーナ渡航および各プログラムを実施してきた。

(1) ガーナとの交流を通して、異文化や多様性を体感し、世界の事情や英語を学ぶこと、国際交流への関心・意欲を高める。

(2) 「いのち輝く未来社会のデザイン」を掲げる大阪・関西万博を契機に、ガーナとの交流を深めるとともに、万博終了後もガーナとの交流・相互理解を継続することで、将来の国際社会の担い手として、よりよい未来の実現に貢献できるようになる。

(3) ガーナや日本、世界の課題を自分事として捉え、解決に向け何ができるか、仲間とともに自ら考え行動できるようになる。

(4) 異文化コミュニケーションや海外での体験を通じて、自身の可能性に気づき、自信・積極性、新たなチャレンジへの意欲、将来の選択肢を広げる力を育む。

天満中学校が万博国際交流プログラムを通じて取り組んできたガーナとの交流、設定した4つの目標に照らし、大きな成果を上げた。

派遣生徒はガーナの学校を訪問し、生徒主体のイベント等を通じて積極的に文化交流・相互理解を行った。交流の中で、生徒は国同士の文化の違いに留まらず、ガーナ国内の学校や地域の多様性を直接体感し、言語・非言語を問わず心を通わせるコミュニケーション方法を模索する中で、目標(1)に掲げた国際交流等への意欲を益々高めていた。派遣生徒へのアンケート結果からも、「万博国際交流プログラムを通して、あなたの将来の夢や進路に影響はありましたか？または、考え方や毎日の生活に変化はありましたか？もし何か挑戦したくなったことや、新しい気づきがあれば教えてください。」という質問に対し、「なにごとにもまずは挑戦したいと思った」「将来やりたいことの選択肢が増えるきっかけになった」「自分は世界を救う人間になります。」といった感想が寄せられた。本事業での体験が、目

標(4)に掲げた「自身の可能性に気づく契機」となったことが表れている。

現地で活躍する日本人やJICA海外協力隊への訪問、インタビューを通じては、ガーナや異国での生活や働き方、それぞれの熱い想いを知り、現地における課題や自身にできることを考えるきっかけとなった。派遣生徒は事前学習や事後の振り返りを通じ、現地での学びをより一層深め、帰国報告会では、今後の学校生活での学びへの姿勢や途上国支援の在り方にまで考えを巡らせ、全校生徒に語りかけていた。これらは目標(3)に掲げた、課題を自分事として捉え、仲間とともに行動するための第一歩を、すでに踏み出したと言える。

目標(2)に掲げた万博終了後の交流継続、ひいては将来の国際社会の担い手としてよりよい未来に貢献するという点においても、成果が確認された。アンケートでは、「ガーナとの交流を今度も続けていきたいですか?」という質問に対し、派遣生徒全員が「とても思う」と回答した。「私達が学んできたことを他の人にも伝えていける重要なチャンスをいただけてとても良かった。もっともっとたくさんの人に伝えていきたい。」「もっと周りの人にガーナの魅力を伝えたいです。」というコメントも寄せられ、今後の交流継続とともに、今回の体験談の共有を通じた国際交流の意義の波及にまで意欲を見せていた。帰国報告会に参加した全校生徒へのアンケートでも、「今後、天満中学校であったらいいなと思う、取り組みは?(学校内でも、国際的な取り組みでも)」という質問に対し、「姉妹校のようなお互いの学校に迎える交流」「世界の課題に目を向けて、いろんな人と話し合ったりして、議論するような時間があっていいと思う。(国際感覚を磨く)」「ガーナに訪問するような、外国の様子を直接学ぶ活動を続けていけばいいと思う。」「ガーナだけでなく、他の国との交流(先進国や発展途上国など様々)」「交換留学」といった意見が寄せられた。派遣生徒の熱意により、全校生徒を挙げての継続的な国際交流に向けた機運が高まっていることが示されている。

#### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

今年度の万博国際交流プログラムは、天満中学校開校三十周年という節目の年に実施された。さらに万博開催年に、開催地である大阪から生徒の海外派遣を実現したことは、学校の歴史に新たな一步を刻み、かつ記念すべき年を象徴する教育活動として、強い意義を持つ挑戦となった。この度生徒がガーナを訪問し、各学校と直接交流した経験とその意義が将来にわたってレガシーとして語り継がれること、そして次年度以降も様々な方法で継続的に交流が実現され、天満中学校における実践的な国際理解の取り組みとして、本事業が今後も発展し続けていくことが、真のレガシー創造として期待される。今年度の帰国報告会での発表を通じて、全校生徒および教職員の間にも異文化理解や国際交流に前向きに取り組もうとする意識の向上が見られたことは、本事業の発展に向けた大きな第一歩である。

今後もレガシー創造にさらに貢献していくためには、生徒間の交流を一度限りで終わらせず、次年度以降に受け継いでいく仕組みづくりが重要となる。天満中学校の教員は、今後も継続的に交流を行うこと、また数年ごとに相互の派遣交流を行うこと等を希望しており、

今後の交流方法について議論するため、教職員を対象にした校内アンケート実施の準備を進めている。学内で国際交流継続のためのイニシアチブが取られていることは、大阪・関西万博を契機としたレガシー創造に着実に寄与していると言える。

また、十代前半で地球の裏側のガーナに渡航するという、世界とつながる大きな一歩を踏み出した生徒たちは、今後も国内外の様々な課題に目を向けること、英語学習や国際交流をさらに続けていくことを希望している。これは、彼らが将来の国際社会の担い手として、本プログラムの目的である「万博参加国・地域との相互交流を通じて、住民に地域の未来・課題と可能性をよりいっそう強くイメージしてもらい、住民の価値観や行動の転換点となるよう、大阪・関西万博を契機に取組むべき課題解決や地域活性化を後押し」することを体現している。中学校卒業後も、本プログラムでの体験や学びを周りに伝えること、またそれらを基にそれぞれの進路で国際的に活躍していくことで、本プログラムが天満中学校内のみならず、広くレガシーとして国内外に波及していくことが期待できる。

## (5) 特に良かった点、苦勞した点

### 良かった点

万博国際交流プログラムを活用して特に良かった点は、天満中学校の生徒が現地を訪問できた点である。選抜された5名の生徒が実際にガーナに赴き、現地の学校3校と交流を行ったこと、そして渡航中の天満中学校とのオンライン交流会やおよび帰国報告会において、全校生徒が同じ学校で学ぶ仲間の視点を通じて国際交流の経験や学びを迫体験したことは、学内でのオンラインのみのイベントや第三者からの講演だけでは困難な、異文化理解の実体験となった。

天満中学校では本年度の事業開始当初から、派遣生徒や教員の想いや希望を活かし、より良い交流内容や現地プログラムを実現させることを目指していた。生徒自身が主体となってプログラムを作り上げることに始まり、在留邦人の方々を中心としたガーナ側の協力者の支援も得ながら、現地での多くの交流や体験を経たことで、国際交流の輪は全校生徒にまで広がった。多くの方々の関わりのもと、充実した結びを迎えることができたこれらの大々的な活動は、万博国際交流プログラムによる人的および予算的支援なしでは実現しえなかった。

### 苦勞した点

万博国際交流プログラムにおいて苦勞した点は、以下の2点である。1点目は、前例のない中学生のガーナ渡航プログラムを、0から作り上げたことである。天満中学校では、多様な交流の時間を持てるよう、首都アクラのみならず地方のボルタ州にも訪問することとした。特に地方の現地情報の少なさ、通信環境や設備面での制約、時差、時間に関する捉え方の違い等により、訪問先の決定から訪問詳細の調整や協議に至るまで、時間と労力を要した。こうした中、天満中学校、近畿日本ツーリストおよびKMCが密に連携し、日ガーナ双方の意見をすり合わせながら着実に準備を進めていくことで、派遣生徒や教員の想いを最大限に組み込みつつ、ガーナの方々にも意義のある形で現地渡航を実施できた。

2点目は、生徒の派遣にあたり、学内で同意を得ることであった。大阪市では、市の事業としてオーストラリア等の先進国への派遣プログラムは実施されているが、一校での途上国への渡航については、安全面への心配や前例の少なさから、当初は教職員からの懸念の声も少なくなかった。生徒の安全や健康に関し十分に配慮して渡航プログラムを企画するとともに、応募生徒の保護者のみならず、学校周辺の地域の人々や周年事業に関わる人々にも丁寧に説明し、事業の理念や意義を深く理解いただくことで、地域全体で国際交流を推進する土壌を作ることで、結果的に学内外の賛同を得ながら現地渡航プログラムを実現した。

## (6) 今後の展開

天満中学校では、前述のとおり、今後も継続的に交流を行うこと、また数年ごとに相互の派遣交流を行うこと等を目指し、今後の交流方法について議論するため、校内の全教職員を対象とした校内アンケート実施の準備を進めている。当初は反対もあった派遣交流事業であったが、今年度の活動を通じ天満中学校全体として国際交流に積極的に取り組む風土が醸成されたことで、来年度以降もさらなる国際交流や異文化理解教育が続けられることが期待される。

なお、今年度の万博国際交流プログラムにかかるアンケート結果によると、ガーナ派遣プログラムに参加した生徒および教員からは、以下の交流事業の実施を将来的に実施したいという期待が寄せられた(原文ママ)。本アンケートおよび今後実施する全教職員向けアンケート結果を踏まえ、今後の継続的な交流事業内容を検討・実施する。

### <派遣生徒>

- ・ 話す 学んだことの発表
- ・ 同じ学校を訪れてもう一度子どもたちに会ってみたり、別の学校と交流をして更に学びを深めたりしたい。
- ・ あっちの人がこっちに来る、オンラインでガーナのことを教えてもらうなど
- ・ 自分はいってないのでわからないが、交流は続けたらいいと思う。今回はひょっとこ踊りで向こうの笑いを勝ち取ったらいい。笑いは世界共通。笑いで、大阪の自慢で、世界を明るくしてほしい
- ・ なにかしら共同制作をしたい

### <派遣教員>

- ・ 訪問した3校と定期的に手紙やオンライン等で国際理解(総合)の時間を活用し交流を図る。今回お世話になった現地で働く日本人の方々が帰国される際に、本校で講演をしていただくなどの交流をしてみたい。
- ・ 可能であれば、相互の派遣交流はしてみたい。

- ・ インターネットでの交流や、時差があるのでビデオレターなどによる交流ができればと思います

## (7) 今後の展開における課題

今後の展開の課題は、派遣交流を継続的に進めていくための予算の確保にある。同種の国際交流プログラムを実施するための予算は限られており、数年ごとの実施を目指すとしても、都度予算の獲得元を検討する必要がある、安定的な実施は難しい。

また、今回のガーナ渡航に当たっては、多くの在留邦人および関係者の協力を得て実現した。特に首都から離れたボルタ州の各交流先は、インターネットが通じない地域もあり、現地側の協力なしでは現地に無事に到着することさえ叶わなかった。派遣交流の他にも、オンラインで継続的に交流を持つことが期待されるが、このような通信環境や言葉の壁から、協力者の確保が課題となる。

上記のいずれの課題解決に向けても、学内および現地との密なコミュニケーションおよび調整が必要となる。今年度のプログラムに参加した生徒および教員が学校を離れても、強く熱意をもって交流実現に取り組めるよう、今年度の交流内容や経験、学びや成果を未来に向かって確実に受け継いでいくことが重要である。

### 継続するための方策

年度本プログラムを通じて築かれたガーナとの交流や関係を今後も継続していくためには、前述のとおり、ガーナとの交流の成果と意義を確実に次年度以降へ受け継いでいく必要がある。最初のステップとして、全校生徒のみならず、地域住民や市内他校に向けた帰国報告会の実施、報告内容の冊子化等を通じて、広く、そして将来にわたってその知見を伝えていくことが不可欠である。

JICA 海外協力隊員が在籍しているホ・インターナショナル・スクールの校長からは、今後も生徒・教員間の交流を継続したいという希望を頂戴した。本プログラムをきっかけに学校同士の対面交流を実現できたことで、協力隊員の離任後も、継続して直接交流を続けていくことが可能となった。このように、交流及び成果発表を通じて、学内外の協力者を増やしていくことで、今後の交流実現のキーパーソンを見つけていくことも、持続性の確保のために重要となる。

一方、派遣を含む対面交流を今後も継続していくためには、万博国際交流プログラムに類似する予算が割り当てられる事業がない限り、安定的な実施は容易ではない。文部科学省や他関連団体が提供するプログラム等の確認を適宜行い、適切な予算の確保に努めることも、持続性の確保のために必要である。

## 3-16 大阪府大阪市 × ケニア

### (1) 背景と目標

#### 背景

大阪府・大阪市では、大阪・関西万博の成功と、その効果を活かした持続的な成長の実現に向け、2022年5月に「大阪・関西万博を契機とした『未来社会』の実現に向けて（大阪版アクションプラン）」を策定した（2024年8月改訂）。同アクションプランでは5つの主要分野における取組が示されており、観光・文化、おもてなしの分野においては、世界各国からの観光客誘致を見据え、多様なニーズの理解と対応に加え、大阪・関西が有する多彩な観光資源の発信を推進することとしている<sup>3</sup>。これらの取組を進める上では、外国の人々との交流を通じて相互の文化や価値観への理解を深めることが重要な要素となる。

大阪・関西万博がテーマとして掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」は、人類一人ひとりの命と宇宙、海洋、大地とのつながり、ならびに多様な文化の尊重を重視している。こうした理念を踏まえ、大阪市立湯里小学校では、児童が多様な文化や自然環境への理解を深めるとともに、グローバルな視野を育むことを目的として、2024年度に本事業の前身となる「大阪市立湯里小学校の児童生徒を対象とした国際交流事業」を実施した。

本年度においても、引き続きアフリカ・ケニア共和国との交流を深め、前年度に得られた理解や学びをさらに深化させることを目的に、国際交流事業を継続して実施した。

#### 目標

上記のとおり、大阪・関西万博がテーマをして掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」を踏まえ、以下の目標で本事業を実施する。

- ① 子供たちが「命」のつながりに触れ、自然界に存在するさまざまな命の共通点や違いを認識し、互いに共感を育む重要性を学ぶ
- ② 多様な文化や考え方を尊重し合うことで、人類全体がこの地球で共に生きていくための新たな価値観を共有し、グローバルな視野を育む

大阪・関西万博を契機に、万博参加国・地域の関係者とお互いの国・地域の歴史、社会、文化、自然環境や、SDGsに関する取組について交流することにより、お互いの国の子どもたちが万博の理念にかかる理解と関心を深める。このような活動を行うことで、将来的に子どもたちが日本と海外の国々の間における様々な交流の懸け橋となることが期待できる。大阪・関西の子どもたちには、この国際交流を実施することで、持続可能な社会を担う人材を育成する。

---

<sup>3</sup> 大阪府. “大阪・関西万博を契機とした「未来社会」の実現に向けて（大阪版万博アクションプラン）”. 2024-09-03, <https://www.pref.osaka.lg.jp/o020060/seicyo/expoap/index.html>（参照 2025-12-19）.

## (2) 事業内容

本事業では、年間を通して以下のプログラムを実施した。各プログラムのスケジュール、実施体制、活動内容、効果は2.1.以降に後述する。

1. 大阪・関西万博ケニアブース訪問、ケニア・ナショナルデー訪問
2. ケニアのチャンピオンと走ろう！マラソン大会参加を通じた国際理解
3. ケニア共和国 投資貿易産業省長官夫人との交流
4. 現地校への表敬訪問・文化交流
5. 現地校とのオンライン交流会
6. 万博の歴史にふれる校外学習
7. アフリカンアートの学習と作品展
8. ケニアとつながる音楽交流会

大阪・関西万博ケニアブース訪問、ケニア・ナショナルデー訪問  
スケジュール

2025年6月12日、18日に、湯里小学校の児童が大阪・関西万博のケニア共和国のブースを訪問した。2025年6月24日にはケニア・ナショナルデーに参加し、ケニア政府の公式行事に立ち会った。

体制

本プログラムへの参画者および役割は以下のとおり。

- ・ ケニア輸出振興ブランド庁（Kenya Export Promotion and Branding Agency）職員他、万博関係者：ブース受入、交流
- ・ 大阪市立湯里小学校児童、教員：ケニアブース訪問、ケニア・ナショナルデー参加
- ・ 大阪市教育委員会職員：ケニア・ナショナルデー参加
- ・ （株）かいはつマネジメント・コンサルティング（以降、KMC）：ケニア輸出振興ブランド庁職員との事前調整およびチケット手配依頼

内容

本プログラムの実施内容は以下のとおりである。

表1 万博ブースおよびケニア・ナショナルデー訪問

日付	実施内容
2025年6月 12日(木)、 18日(水)	大阪・関西万博ケニアブース訪問 2025年6月12日には大阪市立湯里小学校の1年生から3年生までの児童59名が、同月18日には4年生から6年生までの児童91名が、大阪・関西万博のケニアブースを訪問し、ケニア輸出振興ブランド庁の職員と交流を行った。 同庁職員からは、ブース内展示に関する解説が行われるとともに、ケニ

	<p>アの自然、文化および社会に関する説明がなされた。児童は、説明を受けた後にブース内を見学し、ケニアに関する理解を深めた。</p> 
<p>2025年6月24日(火)</p>	<p>大阪・関西万博ケニア・ナショナルデー参加</p> <p>2025年6月24日に開催されたケニア・ナショナルデーに、湯里小学校の5・6年生（59名）および教員（5名）が参加した。ケニア・ナショナルデーでは文化パフォーマンス等を観覧した後、児童がステージに登壇し、ケニアで有名なスワヒリ語の歓迎の歌「ジャンボ・ブワナ」を合唱した。</p> 

出所：湯里小学校作成

#### 効果

湯里小学校の児童は、大阪・関西万博のケニアブース訪問ならびにケニア政府による公式行事であるナショナルデーへの参加を通じ、展示や文化パフォーマンスの見学、ケニア関係者との交流を行い、ケニアの社会、歴史、文化および自然環境について理解を深める機会を得た。これらの体験は、児童にとって知識の習得にとどまらず、異なる国・地域の文化や価値観を自らの感覚で受け止める学習の場となった。

また、実際に人や文化に触れる経験を通じて、児童は多様な「いのち」や社会のあり方への関心を高め、大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」について

主体的に考えるきっかけを得た。

### ケニアのチャンピオンと走ろう！マラソン大会参加を通じた国際理解 スケジュール

2025年6月22日に、ケニア政府およびケニア大使館主催の「ケニアのチャンピオンと走ろう！マラソン大会」に湯里小学校の児童が参加した。

#### 体制

本プログラムへの参画者および役割は以下のとおり。

- ・ ケニア人マラソン選手他マラソン参加者：交流
- ・ 大阪市立湯里小学校児童、教員：マラソン参加、交流

#### 内容

本プログラムの実施内容は以下のとおりである。

表3 マラソン大会参加

日付	実施内容
2025年 6月22日 (日)	<p>ケニア・ナショナルデーに合わせて大阪で開催された記念イベントの一環として、ケニア政府およびケニア大使館主催の「ケニアのチャンピオンと走ろう！マラソン大会」に湯里小学校の児童が3名参加し、マラソンに出場した。参加者のうちの1名の女子児童は3kmマラソンで第3位入賞という成果を収め活躍した。また当日は、ケニア出身のオリンピック金メダリストをはじめとする世界的なランナーたちとの交流も行った。</p> 

出所：湯里小学校作成

#### 効果

「ケニアのチャンピオンと走ろう！マラソン大会」への参加を通じ、湯里小学校の児童は、スポーツを通じた国際交流を体験する機会を得た。当日は、音楽やダンスなどの文化的パフォーマンスも行われ、会場全体がケニアの文化的特色を体感できる空間となった。

マラソンという共通の活動を通じて、児童は国や言語の違いを超えた一体感を感じるとともに、異なる文化や価値観に触れることの楽しさや意義を実感した。これらの体験は、児童が心身の体験を通じて多文化理解を深め、他者への共感や相互理解の重要性を学ぶ契機となった。

## ケニア共和国 投資貿易産業省長官夫人との交流

### スケジュール

2025年6月23日（月）午後、ケニア共和国 投資貿易産業省長官夫人である エリザベス・ワテトゥ氏および随行者が湯里小学校を訪問した。

### 体制

本プログラムへの参画者および役割は以下のとおり。

- ・ケニア共和国 投資貿易産業省長官夫人 エリザベス・ワテトゥ氏、同省テクニカルアドバイザー マーティン・キマニ氏、駐日ケニア共和国大使館国防武官 エスター・ワンジク陸軍大佐：湯里小学校訪問
- ・湯里小学校児童、教員：ワテトゥ氏、キマニ氏、ワンジク陸軍大佐受入・交流

### 内容

実施内容は以下のとおりである。

表3 投資貿易産業省長官夫人の湯里小学校訪問

日付	実施内容
2025年 6月23日 (月)	<p>2025年6月23日（月）午後、ケニア共和国 投資貿易産業省長官夫人 エリザベス・ワテトゥ氏、同省テクニカルアドバイザー マーティン・キマニ氏、駐日ケニア共和国大使館国防武官 エスター・ワンジク陸軍大佐が湯里小学校を訪問し、学校施設の見学および児童との交流を実施した。同氏らは1年生から6年生までの各教室を順に訪問し、児童はジャンボ・ブワナを歌い歓迎した。あわせて、音楽の授業において合奏や歌の様子を見学したほか、家庭科室では調理実習に取り組む児童の活動を視察した。さらに、図書室や音楽室などの特別教室も見学し、日本の小学校における多彩な学びに関心を寄せられた。</p> 

出所：湯里小学校作成

## 効果

本活動は、児童にとって日常的な学習環境の中でケニアの関係者と直接交流する機会を提供するものであり、国際的なつながりを身近に感じながら学ぶ貴重な体験となった。来訪者との交流や学校生活の紹介を通じて、児童は文化的背景や価値観の異なる人々と相互に理解を深める重要性を実感し、異文化に対する関心と理解を高める機会となった。

## ケニア現地校の表敬訪問・文化交流

### スケジュール

2025年8月19日から27日にかけて、湯里小学校の教員3名ならびに東田辺小学校の教員1名がケニアを訪問した。訪問目的は、現地の交流相手校の訪問および文化交流、ケニアの社会、歴史、自然環境にかかる理解の深化である。渡航日程は以下のとおりである。

表4 ケニア渡航日程

日数	月日	都市	スケジュール
1	8/19 (火)	関空発 ドバイ着	● 関西空港発、ドバイ乗り継ぎ
2	8/20 (水)	ドバイ発 ナイロビ着	● 空路でケニア、ナイロビへ ● 到着後、ホテルチェックイン後関係者間の打ち合わせ
3	8/21 (木)	ナイロビ	● ケニアの交流相手校であるカルバリー・ラーニング・センターの訪問 ・ 校長・教職員との懇談、教育事情等の意見交換 ・ 学校見学 ● カルバリー・ラーニング・センター周辺地域の視察 (同センター校長による案内)
4	8/22 (金)	ナイロビ	● カルバリー・ラーニング・センター訪問、日本文化紹介 ・ 合気道、折り紙、音楽(リコーダーセッション)、茶道などの紹介 ・ 昼食を食べながら交流
5	8/23 (土)	ナイロビ、 マサイマラ	● ナイロビ市内視察 ● 移動
6	8/24 (日)	マサイマラ	● 自然学習など
7	8/25 (月)	マサイマラ ナイバシャ	● 湯里小学校校長、教員、東田辺小学校教員と日本の小学校を繋いだオンライン授業 ● オルカリア地熱発電所訪問

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オルカリア地熱発電所職員との交流</li> <li>・ ケニアの再生可能エネルギー事情の学習</li> </ul>
8	8/26 (火)	ナイロビ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 児童養護施設兼学校のサイディア・フラハ訪問 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 代表や職員との交流、同団体の取り組みについて意見交換</li> <li>・ 学校見学</li> </ul> </li> <li>● 空港へ移動、空路でドバイへ</li> </ul>
9	8/27 (水)	ドバイ 発 関 空 着	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 乗り継ぎ後、関空へ</li> </ul>

出所：湯里小学校作成

### 体制

本プログラムの参画者はおよび役割は以下のとおり。

- ・ 各訪問先の教員、職員（カルバリー・ラーニング・センター、オルカリア地熱発電所、サイディア・フラハ）：交流、視察受入
- ・ 大阪市立湯里小学校教員 3 名、東田辺小学校教員 1 名：現地渡航、各訪問先との交流内容検討・交流、視察
- ・ KMC：ケニアの交流相手校の発掘、全体の工程作成、各訪問先・視察先との調整
- ・ 近畿日本ツーリスト株式会社：航空券、宿泊先、添乗員、現地ガイド等のロジ手配

### 内容

本プログラムの実施内容は以下のとおりである。

表 5 ケニア現地校の表敬訪問・文化交流等

日付	実施内容
2025 年 8月21 日(木)	<p>カルバリー・ラーニング・センター訪問</p> <p>ケニア側の交流相手校は、生徒数約 150 名を擁する現地の私立小学校である。同センターは地域の子どものための教育のために始まった学校として、周辺コミュニティとの関係性を重視した教育活動を展開している。また同センターは日本語クラスがあり日本語教育に力を入れている。日本の小学校との交流に非常に前向きな姿勢である。</p> <p>訪問当日は、まず同センターの理事長、校長および教職員との懇談の場を設け、同校における教育方針、児童の学習環境、地域社会との関わりなどについて説明を受けるとともに、日本とケニア双方の初等教育の特徴や課題に関する意見交換を行った。あわせて、教育現場における日常的な指導方法や学校運営に関する情報共有を行い、相互理解の深化を図った。続いて、校内の教室や特別教室等を見学し、授業環境や施設、授業の工夫などについて説明を受けた。さらに、学校周辺地域の案内を受け、児童の生活環境や地域コミュニティの様子について理解を深めた。</p>



8月22日  
(金)

カルバリー・ラーニング・センターの児童への日本文化紹介、交流

翌日の交流活動では、湯里小学校・東田辺小学校の教員とカルバリー・ラーニング・センターの児童との間で、文化および教育的要素を軸とした交流を実施した。具体的には、日本文化の紹介として、合気道の基本動作の実演および折り紙を用いた創作活動を行い、身体表現や手作業を通じて、日本の伝統文化や価値観を分かりやすく伝える機会とした。

また、音楽および茶道に関する交流として、リコーダーによるセッションを行うとともに、野点形式による茶道の紹介を実施した。音楽活動では、リコーダーを贈呈し、互いに旋律を共有することで、先方の児童と一体感を持って交流する場を創出した。茶道の紹介においては、所作や道具の説明を交えながら、日本文化における「おもてなし」の精神について理解を深める機会とした。

さらに、先方校の厚意により用意された昼食を共にしながら、和やかな雰囲気の中で交流を行った。食事を共にする時間を通じて、教員と児童の間で自然な交流が生まれ、文化や日常生活に関する相互理解を一層深めることができた。



8月25日 湯里小学校校長、教員、東田辺小学校教員と日本の小学校を繋いだオンライン授業

(月) ケニアの宿泊場所からオンラインで接続し、湯里小学校や東田辺小学校の児童に対してオンライン特別授業を実施した。ケニアに渡航している教員から、現地の教育の仕組みや小学校の様子、子ども達の日常生活、ケニアの豊かな自然環境について、教員が実体験したことを生の声として児童に伝えた。



オルカリア地熱発電所訪問

ケニア国内における再生可能エネルギーの中核施設であるオルカリア地熱

	<p>発電所を訪問し、施設概要や発電の仕組みに関する説明を受けるとともに、発電設備の一部を見学した。現地職員の案内により、地熱資源の活用方法、発電プロセスの特徴、ならびに地熱発電が果たす役割等について理解を深めた。</p> <p>あわせて、発電所職員との意見交換を通じ、再生可能エネルギーや持続可能な社会構築に向けた取組や課題等について説明を受けた。</p>  
<p>8月26日 (月)</p>	<p><b>サイディア・フラハ（児童養護施設兼学校）訪問</b></p> <p>児童養護施設兼学校のサイディア・フラハを訪問し、施設の見学の後、サイディア・フラハの取り組みについて説明を受けた。同施設は日本人が代表として長年支援活動を続けており、その支援活動の背景や日本人からみるケニアの課題などについて意見交換を行った。</p>  

出所：湯里小学校作成

効果

前年度の事業では、交流相手校の候補が小学1年生から中学3年生まで約3,000名規模の公立校であり、対して湯里小学校の生徒数は約160名のため、交流内容や方法について現実的な工夫が必要であった。今年度は、湯里小学校と同規模の生徒数約150名のカルバリー・ラーニング・センターと繋がることができ、互いに丁度よい規模感での交流が可能となった。さらに同センターには日本語クラスがあり、日本語教育に力を入れており、日本の小学校との交流に非常に前向きな姿勢である。

湯里小学校長ならびに教員が直接カルバリー・ラーニング・センターを訪問し、同センタ

一の理事長、校長、教員と交流することで関係性が構築できた。教職員間の意見交換や協働的な交流活動は、日本とケニアの教育実践に関する理解を相互に深めるとともに、教育を媒介とした持続的な国際交流の可能性を確認する場となった。

さらに、オルカリア地熱発電所の見学を通じて、再生可能エネルギーを活用したケニアの取組や、持続可能な社会構築に向けた具体的な実践事例への理解が深まった。これにより、環境やエネルギーと人々の生活との関係性について考察する視点を得ることができた。こうした取組を授業や学校生活を通して児童に伝えていくことで、大阪・関西万博が掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」の理念の浸透と、人と人とのつながりや文化的多様性への理解を基盤とする学びを促進するものである。

### 現地校とのオンライン交流会

#### スケジュール

2025年10月7日、10月17日に、湯里小学校の3年生とカルバリー・ラーニング・センターの5年生がオンラインで交流を行った。

#### 体制

本プログラムの参加者はおよび役割は以下のとおり。

- ・ カルバリー・ラーニング・センターの5年生、教員：交流準備、参加
- ・ 湯里小学校の3年生、教員：交流準備、参加、司会
- ・ KMC：司会、簡易通訳

#### 内容

本プログラムの実施内容は以下のとおりである。

表6 オンライン交流会

日付	実施内容
2025年 10月7 日、17日	<p>オンライン交流会は10月7日と17日の2回実施した。7日は先方のオンライン接続に問題が発生し、交流時間が十分に取れなかったことから17日に2回目を実施した。交流会は以下の流れで実施した。</p> <p>①歌交換 湯里小学校は、「頭、肩、膝、ポン」や校歌、カルバリー・ラーニング・センターは Head Shoulders Knees &amp; Toes、ケニア現地の歌をお互いに歌い、ジャンボ・ブワナと一緒に合唱した。</p> <p>②スワヒリ語・日本語の教え合い 「頭、肩、膝、ポン」の歌詞に出てくる体のパーツを日本語とスワヒリ語で教え合い、互いの言語で歌った。</p> <p>②自己紹介・質問交流</p>

双方の児童が簡単な自己紹介を行い、質問交流を行った。質問交流では、何をするのが好きか、好きな食べ物は何か、学校が終わった後何をしているか等、様々な質問が飛び交い、湯里小学校とカルバリー・ラーニング・センターの児童は元気よく回答し、交流を楽しんだ。



出所：湯里小学校作成

#### 効果

本オンライン交流を通じて、湯里小学校およびカルバリー・ラーニング・センターの児童は、歌や言語、対話を通して双方向の交流を経験し、異なる文化や生活背景を有する同世代の児童への理解を深める機会を得た。特に、共通の歌を合唱することで、言語や国境を越えた一体感を醸成し、交流への心理的な距離を縮める効果をもたらした。

また、歌詞に含まれる身体の部位を日本語およびスワヒリ語で教え合う活動を通じて、児童は異なる言語体系に触れながら、相互に学び合う姿勢や伝える工夫の重要性を体感した。自己紹介および質問交流においては、日常生活や興味関心に関する話題を共有することで、児童同士が相手を身近な存在として捉えるきっかけとなった。

言語や文化の違いを前向きに受け止め、楽しみながら理解しようとする態度が育まれた点は、本交流の大きな成果である。これにより、異文化交流が特別なものではなく、日常的な対話の延長として成り立つものであることを実感する機会となり、国際的な相互理解の基礎を育むことに寄与した。

#### その他

児童の名前、顔写真、好きなもの・ことを記載した自己紹介カードをパワーポイント資料で作成し、交換した。

万博の歴史にふれる校外学習

スケジュール

2025年10月20日、21日に、1970年大阪万博の跡地である万博記念公園に秋の遠足として訪れた。

体制

本プログラムの参画者はおよび役割は以下のとおり。

- ・ 湯里小学校の1～4年生、教員：万博記念公園訪問

実施内容

表7 万博記念公園訪問

日付	実施内容
2025年 10月20日、21日	<p>10月20日に湯里小学校の4年生が、21日に1～3年生が1970年大阪万博の跡地である万博記念公園を訪問した。万博記念公演では太陽の塔に上る等のアクティビティを行った。</p> 

出所：湯里小学校作成

効果

過去と現在の繋がりを意識し、自分たちが住む地域の移り変わり、文化と歴史の変遷、地球規模の課題について考えるきっかけとなった。大阪・関西万博のサブテーマの一つである「いのちをつなぐ」は、人と人、人と自然、そして未来へとつながっていく「いのち」のあり方を大切にするという考えを示している。この考え方は、分断が進む現代社会において、人と人、地域と地域のつながりを再構築し、相互に協力することで地球規模の課題に向き合い、より良い未来を共創していくことを目指すものである。

本プログラムはこの万博テーマを体感的に学ぶ機会となった。相互理解と協力を通じて地球規模の課題に向き合う姿勢を育むとともに、いのちの尊さを共有しながら、自然・文化・人とのつながりを深めることを通じて、持続可能な社会の実現に向けた意識の醸成に寄与した。

## アフリカンアートの学習と作品展

### スケジュール

2025年10月17日、21日、29日に、東アフリカのアート「ティンガティンガ」のアーティストである中島文子氏よりアフリカンアートの指導を受け児童が作品を制作した。作品はその後校内に展示した。

### 体制

本プログラムの参画者はおよび役割は以下のとおり。

- ・ティンガティンガアーティスト 中島文子氏：作品指導日
- ・湯里小学校児童、教員：作品制作、展示

### 実施内容

表8 アフリカンアートの学習と作品展

日付	実施内容
2025年10月17日、21日、29日	<p>湯里小学校の5年生が、東アフリカのアート、「ティンガティンガ」アーティストの中島文子氏から直接指導を受け、作品を制作した。鮮やかな色使いや大胆な構図など、異文化の中で発展してきた美術に触れることで、児童の表現にも多様性を取り入れた。製作した作品は校内に展示した。</p> 

出所：湯里小学校作成

### 効果

本活動を通じて、湯里小学校5年生の児童は、東アフリカに起源を有するティンガティンガ・アートの制作過程を体験的に学び、異文化の中で育まれてきた美術表現の特徴や価値に対する理解を深めた。鮮やかな色彩や大胆な構図といった表現手法に直接触れることで、児童は既存の表現の枠組みにとらわれない創造的な発想を養い、多様な文化的背景が芸術表現に反映されていることを実感する機会となった。また専門的な知見を有するアーティストから直接指導を受けることで、異文化を尊重しながら学び合う姿勢が育まれるとともに

に、自らの感性を主体的に表現する意欲の向上が認められた。完成した作品を校内に展示したことにより、学習成果を学校全体で共有する機会が創出され、児童一人ひとりの学びが可視化された。

### ケニアとつながる音楽交流会

#### スケジュール

2025年11月26日に、ケニアの伝統楽器奏者「ニャティティ」の奏者 Anyango 氏をはじめとする音楽家をご招待し、音楽交流会を実施した。

#### 体制

本プログラムの参画者はおよび役割は以下のとおり。

- ・ケニアの伝統楽器奏者「ニャティティ」奏者 Anyango 氏、ケニア音楽のパーカッション マサヤカマンザ氏、ダンサーkawara 氏：公演
- ・駐日ケニア大使館参事官／領事ウェリングトン・ムリ氏、観光アシスタント菅井河奈子氏：交流会参加
- ・大阪総合保育大学短期大学部 奥田教授、油井教授 他：会場総括
- ・湯里小学校児童、教員：音楽交流会準備、当日運営、参加
- ・KMC：事前準備、当日司会、記録

#### 実施内容

本プログラムの実施内容は以下のとおりである。

表9 ケニアとつながる音楽交流会

日付	実施内容
2025年 11月26日	<p>11月26日、大阪総合保育大学の坂上記念ホールをお借りし、ケニアとつながる音楽交流会を実施した。ケニアの伝統楽器奏者「ニャティティ」の世界初の女性奏者である Anyango 氏、ケニア音楽のパーカッション マサヤカマンザ氏、ダンサーkawara 氏にケニアの魅力あふれる音楽とダンスをご公演いただいた。本交流会には、駐日ケニア大使館の参事官／領事であるウェリングトン・ムリ氏、観光アシスタント菅井河奈子氏もご招待し、児童たちとの交流を行った。</p> 

出所：湯里小学校作成

## 効果

ケニアとつながる音楽交流会は、ケニア音楽の専門であるアーティストの皆様にご公演いただき、湯里小学校の児童および教職員に加え、ケニア大使館関係者を招いて実施した。演奏に合わせて参加者が歌や踊りを共にすることで、会場全体に一体感が生まれ、文化的背景の異なる参加者同士が自然に関わり合う環境が創出された。音楽を通じた国境および世代を越えた交流の場となった。

本演奏会を通じて、児童はケニア音楽の特徴や表現に体感的に触れ、音楽が言語や文化の違いを超えて人々を結び付ける力を有することを実感した。特に、児童が主体的に身体全身を使って踊り、会場の参加者全員もこれに加わった交流の場面は、本事業の目的である相互理解と多様性の尊重を具体的に体現する機会となった。さらに、大使館関係者との交流を通じ、国際的なつながりを身近に感じる契機となり、将来的に海外との交流を担う人材育成に向けた意識の醸成に寄与した。

### (3) 事業の目標に対する成果

#### 事業目標に対する成果

湯里小学校では、大阪・関西万博を契機とした国際理解教育の一環として、ケニア共和国のカルバリー・ラーニング・センターとの交流に取り組んできた。本交流は、大阪・関西万博のサブテーマ「命をつなぐ（命のつながり）」の理念を踏まえ、人類が地球の生態系の一部として生きている存在であることを改めて見つめ直し、その役割や在り方について深く考える機会を提供することを目的として、以下二点を重点目標として実施したものである。

- ① 子供たちが「命」のつながりに触れ、自然界に存在するさまざまな命の共通点や違いを認識し、互いに共感を育む重要性を学ぶ
- ② 多様な文化や考え方を尊重し合うことで、人類全体がこの地球で共に生きていくための新たな価値観を共有し、グローバルな視野を育む

異なる文化や価値観を尊重し合うことが、人類全体がこの地球上で共に生きていくための新たな価値観の共有につながり、持続可能な未来の構築に寄与し得るものであると捉えている。本校においても、こうした理念を児童に伝えたいと考え、特にアフリカ・ケニアとの交流を通して、命のつながりや文化の多様性への理解を深める教育活動を展開してきた。

本取組を通して、児童は人類が自然界に存在する多様な命と共に生きる存在であることを真摯に受け止め、命に共通する尊さや違いを認識し、互いに共感を育むことの重要性を学ぶことができた。交流を通じて、児童は言語や文化の違いがある中でも習った英語を使い、身ぶり、表情、音楽やアートなど、五感に訴える多様な表現手段を用いて相手に思いを伝えようとする姿が見られ、主体的なコミュニケーションへの意欲が高まった。また異なる文化や生活環境に触れ、世界と自分たちの暮らしが密接につながっていることを実感することができた。これらの体験は、異なる環境や背景に生きる人々への共感を醸成し、グローバル

な視野を持つ人材の育成に繋がった。さらに、SDGsをはじめとする地球規模の課題についても、実体験を通して具体的に考える学びへとつながり、国際理解教育として一定の成果を上げることができた。

#### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

##### 現地校との継続交流

本事業は、大阪・関西万博を一過性のイベントとして捉えるのではなく、将来にわたり持続的に継承される国際交流の基盤を構築する取組として位置付けられる。特に、湯里小学校とカルバリー・ラーニング・センターとの間に築かれた信頼関係は、教職員同士の直接交流やオンラインを活用した児童間の交流を通じて具体化され、カルバリー・ラーニング・センターの理事長および校長とも、今後もオンライン交流を継続していきたい旨を双方合意している。相互理解を深める実践的な国際交流の枠組みとして今後も発展していくことが期待される。このような学校間の持続的な連携は、万博を契機として生まれた国際的ネットワークの一つの成果であり、教育分野における重要なレガシーとなるものである。

##### 児童と教職員における多様な文化に対する意識の高まりやグローバルな視点の醸成

一連の交流活動を通じて、児童および教職員の間には、多様な文化や価値観を前向きに受け止めグローバルな視点から物事を考えようとする意識の高まりが認められた。異文化を「学ぶ対象」としてだけでなく、「共に関わる存在」として体験的に理解したことにより、国や文化の違いを越えて人と人が繋がることの意義について認識が深まった点は、本事業の重要な成果である。

教職員のアンケートでは、「ケニアに行って色々な経験をさせていただいたことで、子どもたちに実際に自分が見たものや食べたものを伝えることができたり、向こうで購入したものを見せたりすることができ、今まで以上にケニアを身近に感じさせることができて良かったと思います。また、現地の学校を訪問させていただいたことで、自分自身が交流に対してより前向きな気持ちになり、教職員にそのことを伝えることができたと思っています。」という回答や、「現地から日本の3校（湯里小学校（3、4年）、東田辺小学校（3年約60名）、新北島小学校（4年約70名））へのオンライン授業や大江小学校での出前授業（2年）を通して、子どもたちへケニアの様子を紹介し、興味を持ってもらうことができたと考える。また、現地での様子を書面にて、大阪市の教員グループ（理科部約150名）に対して報告を行った。」といった回答が寄せられた。教職員が体験したことを児童や他の教員に伝え続けることで、日常の教育活動や今後の国際交流の取組に継続的に反映されることが見込まれ、大阪・関西万博の理念を次世代へと継承していく人的・教育的レガシーの形成に寄与するものであった。

## (5) 特に良かった点、苦勞した点

### よかった点

- ケニアのカルバリー・ラーニング・センターとの交流を通して、児童は異なる文化や価値観に触れ、世界とつながっているという実感をもつことができた。今まで知らなかった世界のことを詳しく知ることができ、世界の国々について興味・関心をさらに高めることができた。
- 生活や学習環境の違いを知ることで、命の尊さや多様性について主体的に考える姿が見られた。
- 英語や身ぶり、表情などを用いて伝え合おうとする態度が育ち、コミュニケーションへの意欲が高まった。
- 音楽やアートなど、言語に依らない文化的活動を通して相互理解が深まった。
- またケニアは英語とスワヒリ語が公用語のため、語学への興味も大きく膨らんだ。
- SDGs や万博のサブテーマ「命をつなぐ」を、実体験に基づいて具体的に捉える学習につながった。
- ケニアに渡航した教職員は、日本とは異なる言語、宗教、生活様式に直に触れることができ、イメージや知識では補えないすばらしい経験を得ることができたことを子ども達に伝えることができた。
- 国際理解教育の実践として、教職員にとっても教育内容や指導方法を見直す契機となった。

### 苦勞した点

- 言語や文化の違いにより、意図や思いが十分に伝わらない場面が見られた。
- 通信環境や時差の影響により、オンライン交流の実施や調整に困難が伴った。
- 相手校の教育環境や社会的背景を踏まえた交流内容の検討に、より一層の配慮が必要であった。
- ケニアでの小学校訪問では、どのようなことを伝えたら日本のよさが伝えられるのか難しかった。また日本のよさをどこまで伝えられるか、どのようなことを望んでいるのかを事前にもっと話し合うことができればよかった。
- 継続的な交流を行うためには、人的・時間的体制の確保が課題である。
- 交流活動を一過性の体験に終わらせず、学びとして定着させるための事前・事後指導の充実が求められる。

## (6) 今後の展開

湯里小学校とカルバリー・ラーニング・センターは、教育を通じた国際理解の深化充実および児童相互の交流を目的として、今後、学校間パートナーシップを締結することに合意した。

児童は写真入りの「自己紹介カード」を作成しカルバリー・ラーニング・センターに送っており、引き続き顔が見える形での人と人との交流を行っていく。

アンケート結果によると、児童および教職員から以下の活動を将来的に実施してみたいという期待が寄せられた。

表 10 今後実施したい活動

アンケート質問「万博をきっかけに、どんなことをしてみたいですか？」への回答一覧（原文ママ）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 色々な国と交流したい。</li> <li>・ 現代科学を知って未来の化学に興味を湧いた。</li> <li>・ SDGs を大切にしたい。</li> <li>・ 色々な国の方々と交流したい（しゃべってみたい）。</li> <li>・ もっと外国の人と交流したい。</li> <li>・ 盛り上がる国際交流イベント。</li> <li>・ 来年の万博へ行きたい。</li> <li>・ 色々な楽器を弾いてみたい。</li> <li>・ また万博ひらいてほしい。</li> <li>・ 今度は好きな国のジャマイカやアメリカのイベントをやりたい。</li> <li>・ ケニアの交流がとても楽しかったので、またケニアの交流をしたいです。</li> <li>・ もっとのりのりで踊りたい。</li> <li>・ アイスランドと交流してほしい。</li> <li>・ 国と国が全くけんかをしない交流イベント。</li> <li>・ 中国と国際交流イベントをしてほしい。万博のようなイベントをしたい。</li> <li>・ 遊びのようなイベント。</li> <li>・ 色々な国と交流したい。</li> <li>・ ケニアの文化を教えてくれる国際交流のイベントを開催してほしい。</li> <li>・ 万博で色々なことを知れたから、学んだことをみんなに言って、もし学んだこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ミヤクミヤクに会ってみたい。</li> <li>・ 外国の人と話してみたいです。</li> <li>・ 外国のスポーツ体験のような交流会をしてほしい。</li> <li>・ アメリカに行ってみたい。</li> <li>・ 国の料理や有名な場所を見たい。</li> <li>・ ケニア音楽交流会みたいなイベントを開催してほしい。</li> <li>・ 夢のような国際交流イベントを開催してほしい。</li> <li>・ またアニャンゴさんに会いたい。</li> <li>・ アニャンゴさんみたいに楽器を弾いてみたい。</li> <li>・ 実験のような国際交流イベントを開催してほしい。</li> <li>・ 色々な建物をいっぱい見たい。</li> <li>・ 空を飛ぶ車と自動で動く車を作ってほしい。</li> <li>・ 自転車や乗り物が空を飛ぶ。</li> <li>・ 外国語を話したい。</li> <li>・ 歴史のイベントをしてほしい。</li> <li>・ 色々な外国語を話してみたい。</li> <li>・ 日本の総理大臣と国際交流してほしい。</li> <li>・ 他の万博に行きたい。ミヤクミヤクに会いたい。</li> </ul>

<p>が活かせるときができれば活かそうと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ まだ行ったことがない国のところに行ってスタンプを集めたい。</li> <li>・ 韓国が中心の交流イベント。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 楽器などを触って音を出したかったという意見が出たので、みんなで合奏などしてみたいです。</li> <li>・ また一緒に踊りたい。ケニアの遊びをしてみたい。楽器を触ってみたい。</li> </ul>
--	--

児童は本事業をきっかけに様々なアクティビティに関心を抱いている。今後も食、音楽・芸術・文化、自然環境、スポーツにかかる交流や学習を通して、児童が持続可能な社会の構築に向けて何ができるかを考える力を養っていく。

## (7) 今後の展開における課題

今後の展開における主要な課題は、現地校との交流を継続的かつ安定的に推進していく点にある。湯里小学校およびカルバリー・ラーニング・センターの双方において、同種の国際交流プログラムを恒常的に実施するための予算には制約があり、本事業の一環として実施した現地校の訪問・文化交流といった取組を、同規模で継続することは困難である。また、カルバリー・ラーニング・センターとの調整や打ち合わせは主に KMC が支援しており、中長期的な視点で交流を継続していくにあたり、学校間での直接的な連絡体制の強化や、他の外部協力者の確保など、代替的な対応策をあらかじめ検討しておく必要がある。

加えて、オンライン交流を含む取組については、ネット通信環境や言語面での支援体制の確保が引き続き求められるほか、校内展示等を通じて得られた学習成果を、他学年や保護者、地域社会へどのように波及させていくかについても検討が必要である。あわせて、気球の乗車体験や地域と連携して実施するイベント等、今年度実施に至らなかった活動についても、実現可能な形で継続・発展させていく方法を模索していく必要がある。

## (8) 継続するための方策

第7章で上述した状況を踏まえ、現地校との交流を継続的に実施していくにあたっては、予算規模および教職員の業務負担を考慮し、オンラインを中心とした交流や、自己紹介カード、手紙、ビデオレター等のデータを活用したやり取りが、現実的かつ有効な方策であると考えられる。これらの手法は、移動や準備に伴う負担を軽減しつつ、交流の頻度と継続性を確保する点において有効である。

先方校との調整については、現在も使用している WhatsApp 等のオンラインツールをさらに活用し、学校間で直接連絡・調整が可能な体制を強化することが望ましい。打ち合わせや交流実施時には、カルバリー・ラーニング・センターに在籍するケニア人日本語教員の方に協力を依頼することで、言語面での円滑な意思疎通を図るとともに、交流内容の質の向上を図る。通信環境や ICT 機器の整備状況を踏まえた実施方法の工夫や、時差・授業時間の

調整等についても、先方校と協議しながら柔軟に対応していく必要がある。

さらに、本事業を通じて育まれた多様な文化や価値観への理解、他者と協働する姿勢、地球規模の課題に目を向ける視点を児童の学びとして今後も定着させることが望ましい。本事業を通じて培われたグローバルな視野を一過性のものとせず、カルバリー・ラーニング・センターとパートナーシップを結び、児童が継続的に世界とのつながりを意識し多様性を尊重しながら共に生きる力を育む環境を将来にわたって持続的に発展させていくことが、本事業のレガシー創造に資するものと考えられる。

## 3-17 大阪府大阪市 × ルワンダ

### (1) 背景と目標

#### 背景

大阪府・大阪市では、新たな時代を切り拓くため、住民・企業をはじめ、あらゆるステークホルダーとともに、大阪が持つ豊かな歴史・文化や人々の多様な魅力、都市のポテンシャルを生かし、チャレンジし続けることにより、大阪を元気にし、府民・市民が誇りや愛着を感じることで、世界に誇る魅力あふれる都市を作り上げることを目指し、「大阪都市魅力創造戦略2025」を策定している。本戦略では、「大阪・関西万博のインパクトを生かした都市魅力の創造・発信」「安全・安心で持続可能な魅力ある都市の実現」「多様な主体が連携し、大阪全体を活性化」の3つの基本的な考え方のもと、10の目指すべき都市像を定めた。各施策を推進し、また、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献する視点を持って推進している。本事業は10の施策の一つである「出会いが新しい活を生む多様都市」に含まれる「多文化理解の促進」を図るものである。

本事業を実施することにより、大阪府・大阪市が進めている上記の戦略をさらに促進させ、大阪府・大阪市が世界に誇る魅力あふれる多文化共生社会を体現する都市とする。

大江小学校においては、昨年度においても同事業を実施しておりルワンダとの交流を進めてきた。具体的には、オンライン交流、ハガキ交換、ルワンダ学生会議による出前事業、文化交流事業などに取り組んだ。本交流事業は平和や生命について児童が自ら調べ、考える有意義な機会であることから、本年度も継続して実施する。

#### 目標

本事業を実施するにあたり、大江小学校では独自に以下の目標を設定した。

##### ①平和や生命についての理解を深める

ルワンダ国との交流を実施することで、苦難の歴史を乗り越えて発展を目指しているルワンダの方から、平和や生命について学ぶ。

##### ②両国の子どもたちが将来の交流の懸け橋となる可能性を育む

大阪・関西万博を契機として、万博参加国・地域の関係者と相互の文化やSDGsへの取組について交流し、子どもたちが万博の理念への理解と関心を深める学習活動を展開する。この活動を通じて、大江小学校の子どもは異文化に対する理解を深める。海外の子どもたちは大阪・関西との交流経験をもとに日本の社会・文化への理解と愛着を育む。これらにより将来的に日本と諸外国との間に、経済的なつながりにとどまらない多層的な交流の懸け橋が形成されることが期待できる。

## (2) 事業内容

大阪・関西万博ルワンダナショナルデーへの参加

①スケジュール：2025年7月4日

②体制：6年生児童77名、引率教員（校長含む）6名、計83名が参加  
一部事業を委託している（株）かいはつマネジメント・コンサルティング（KMC）が調整役を担い、ルワンダブースの担当者と調整を進めた。大阪市側は大江小学校が歌の発表準備を進めた。

③内容：

7月4日に大阪・関西万博ナショナルデーホール レイガーデンにて開催された、ルワンダナショナルデーにて、大江小学校児童がルワンダ国歌および日本国歌を斉唱した。

	
<p>ルワンダ国歌を披露する児童</p>	<p>The New Time (Rwanda) の報道</p>

④効果：

ルワンダとの交流を通して、平和を願う気持ちの醸成につながった。ルワンダのメディア（The New Time (Rwanda) <sup>4</sup>でも取り上げら、10月末時点で62,000回以上再生され、ルワンダ現地に対しても大江小学校がルワンダとの国際交流を実施していることを発信することができた。

副次的な効果としては、ルワンダのダンスや衣装を間近で見ることで本物の文化に触れたことや、ステージ登壇による自己成長と達成感を得たことが挙げられる。

ルワンダ現地視察

①スケジュール：2025年9月28日-10月4日

4

<https://x.com/newtimesrwanda/status/1941065967951663154?s=46&t=9Y4Am7cilGWNpziXnF2kLQ>

②体制

一部事業を委託しているルワンダの加藤雅子氏が調整役を担い、視察訪問先と調整を進めた。

③内容

詳細は別添 1 参照

本渡航中に実施できなかったバツィンダ小学校における日本文化緑茶体験は 10 月 17 日に実施した。

日程	内容
9 月 29 日	ルワンダアートミュージアム訪問 アフリカ布マーケット訪問 JICA 海外青年協力隊（教員）との会食
9 月 30 日	クラバー・イラコゼ氏訪問 KISEKI 訪問 キガリ虐殺追悼館 訪問 コメラクリエイティブ 訪問
10 月 1 日	バツィンダ小学校訪問 マリールイズ氏の作られた学校「ウムチョ・ムーザ学園」訪問 ルワンダの一般的な暮らしが見られる市場訪問
10 月 2 日	バツィンダ小学校からオンライン接続・大江小学校と交流 コーヒー農園訪問
10 月 3 日	在ルワンダ日本大使館表敬訪問



オンライン交流の様子



バツィンダ小学校訪問時の様子

#### ④効果

このたびのルワンダ渡航は、大江小学校の児童・教職員・学校全体に大きな学びをもたらした。ルワンダの子どもたちが互いを思いやり、学びを大切にする姿に触れ、大江小学校の児童は「いのちの尊さ」や「学ぶことの喜び」を実感した。また、世界とつながる体験を通して、自分の考えを表現し、伝える力も高まった。教職員にとっては、限られた環境の中でも工夫して教育を行う現地の教師の姿から、教育の原点を見つめ直す契機となった。さらに、地域や保護者にも国際理解の輪が広がり、学校としての新たな価値が生まれている。今後は、バツィンダ小学校とのオンライン交流を軸に、まずは3年をめざし、継続的に学びを深め、「質の高い教育をみんなに」というSDG4の実現に向けて、持続可能な取組として発展させていく考えである。

#### 日本ルワンダ学生会議招聘

①スケジュール：2025年9月16日

#### ②体制

日本ルワンダ学生会議のメンバー3名を講師として招き、大江小学校にて5年生に対して授業を実施した。

#### ③内容

ルワンダの産業と文化、歴史と政治、教育と芸術についてテーマ別にワークショップを行い、民芸品や現地の映像に触れたり、質問会を行ったりした。



授業の様子



集合写真

#### ④効果

日本ルワンダ学生会議のメンバーを招いて話を聞いたことで、子どもたちはルワンダの政治や教育、文化、風土、歴史を具体的に知り、インターネットによる情報だけでは分からない現地の実情や人々の思いに触れることができた。これにより、ルワンダへの理解が深まり、今後の交流活動に主体的に取り組む意欲が高まった。

## 永遠瑠マリルイズ氏との交流

①スケジュール：2025年10月27日

②体制

永遠瑠マリルイズ氏を講師として招き、大江小学校にて5年生を対象に授業を実施した。

③内容

講師はジェノサイド前年の出来事からジェノサイドに至った事実や、ジェノサイドそのものの、さらには命を長らえることにつながった奇跡についてなどを話した。戦争を起こそうとする動きには絶対反対と言える人になってほしいこと、自分さえあきらめなければ人生は開かれること、家族を大切にしてほしいことをメッセージとして児童に伝えた。



④効果

マリルイズ氏の体験を通して、子どもたちは命の尊さと平和の大切さを深く実感し、どんな困難の中でも希望を失わず生き抜くことの大切さを学んだ。これにより、命を大切に、平和な社会を築こうとする意識が一層高まった。アンケート結果からも平和の尊さや、教育の大切さ、平和な日常の尊さを学べたということが明確に表れている。

## 堀江勇真氏特別授業（招聘）

①スケジュール：2025年11月19日

②体制

堀江勇真氏を講師として招き、大江小学校にて5年生を対象に授業を実施した。

③内容

紅茶店を経営する堀江氏がルワンダ紅茶を振舞うとともに、紅茶栽培に適した気候や土地について説明した。また、大江小学校とバツィンダ小学校とをつなぐ前のエピソードについても語った。



授業の様子

#### ④効果

堀江氏の話とルワンダ紅茶の体験を通して、児童はルワンダとのつながりを身近に感じ、文化交流の楽しさや広がりを実感することができた。また、紅茶を味わう体験から、遠い国の人々の暮らしや仕事に思いを寄せる心が育ち、国際理解への関心や他校との交流への意欲が高まることが期待される。

#### バツィンダ小学校とのオンライン交流

①スケジュール：2025年10月2日、11月25日

#### ②体制

KMCが調整役を担い、大江小学校からオンライン接続、司会進行、通訳などにおいてサポートし、ルワンダでは加藤雅子氏がバツィンダ小学校においてオンライン交流、通訳をサポートした。

なお、10月2日の交流では、大江小学校樋口校長と2名の教員はルワンダ視察中のため現地から参加した。11月25日も同様の調整を行った。

#### ③内容

10月2日の交流では、学校・地域紹介を行うとともに、合唱交換を行った。

11月25日の交流では長縄を使って「連続8の字跳び」をクラス単位（またはそれに準ずる単位）で1分間に何回跳べるかを競う競技大会を行った。

#### ④効果

10月2日の交流では両校の児童・教員が相手国のことについて理解を深める場となった。11月25日に行った長縄の「連続8の字跳び大会」は、単なる運動能力を競う行事ではなく、クラスの団結力や協働性を高める貴重な機会となった。成功の鍵は一人ひとりのリズムの合わせ方や声かけにあり、子どもたちは互いに励まし合いながら、失敗を乗り越える経験を通してチームとしての一体感を育む。また、目標回数に向かって日々練習を重ねることで、粘り強さや達成感を味わうことができた。運動が得意な子も苦手な子も同じ目的のもとで

力を発揮することで、互いを認め合う心が育ち、学級づくりにも大きな効果をもたらした。

#### 交換日記

①スケジュール：2025年10月1日～2025年12月22日

#### ②体制

大江小学校5年生91名とバツィンダ小学校5年生121名が参加した。ルワンダでは加藤氏が日本からの荷物を受け取り、現地からの発送を担当した。

#### ③内容

児童同士1対1ないしは2のペアを組み、交換日記を2往復半行う。双方の学校に、ファイリングした交換日記を長く保管し、レガシーとする。

1往復目 10月1日 視察訪問時に手交 10月17日ルワンダから送付

2往復目 11月22日 日本から送付 12月8日ルワンダから送付

3回目（最終） 12月15日 日本から送付

	
バツィンダ小学校にて日記を受け取った時の様子	大江小学校にて日記を受け取った時の様子

#### ④効果

大江小学校とバツィンダ小学校の5年生が1対1または2人で行う交換日記は、互いの文化や生活を等身大の言葉で伝え合う貴重な機会となる。英語や日本語、絵などを通して思いを表現する中で、異文化理解や表現力が自然に育まれた。また、継続的な交流を通じて「遠い国の友達」としての実感が生まれ、国際的な視野と共感性が深まった。さらに、相手の言葉や考え方に触れることで、自分の生活を見つめ直し、互いの良さを認め合う態度が育っている。こうした日常的・継続的な交流は、単発のイベントでは得られない心のつながりを築く大きな効果をもつ。

#### 在日ルワンダ大使館訪問

①スケジュール：2025年11月18日

## ②体制

今年度ルワンダに渡航した3人が大使館に赴き、ルワンダ共和国駐日全権大使ムカシネ・マリー・クレイル閣下と面談を実施

## ③内容

ルワンダ渡航の内容と成果報告、今年度の取り組みと今後についての報告を行った。報告内容は別添資料2を参照のこと。

## ④効果

本年度の大江小学校とバツィンダ小学校との交流の成果や今後の展望を、東京にあるルワンダ共和国大使館で大使に直接報告することには、大きな意義と効果がある。まず、これまでの児童同士のオンライン交流や交換日記など、草の根の教育的取り組みを国家レベルで正式に共有することで、活動の信頼性と継続性が高まる。大使からの評価や助言を得ることで、今後の国際交流の方向性がより明確になり、両国の教育交流の基盤づくりに寄与する。また、子どもたちの学びが国際的に認められることは、教職員や児童にとって大きな誇りと動機づけとなる。さらに、報告を通じて日本とルワンダの友好関係の深化に寄与し、学校間交流が両国の未来をつなぐ小さな外交の一步となる点にも意義がある。

### (3) 事業の目標に対する成果

大江小学校が万博国際交流プログラムとして取り組んできたルワンダとの交流は、設定した二つの目標に照らして大きな成果を上げている。第一の目標である「平和や命についての理解を深める」点では、ルワンダの歴史や人々の“命を大切にす文化”に触れることで、児童が「命の尊さ」や「争いを生まないために自分ができること」について考える機会を得た。また、互いの暮らしや考え方を共有する中で、平和を支えるのは一人ひとりの思いやりであることを実感できた。アンケート結果からも、本事業に参加した児童・教職員の約8割が交流プログラムへの参加をとおして、ルワンダの歴史と復興の力に学び、平和について考えることができたと回答している。

第二の目標である「将来の交流の架け橋を育む」点では、オンライン交流や交換日記などを通して、国や言葉の違いを越えた友情が芽生え、子どもたちは自然に国際的な視野と共感力を身につけている。こうした経験は、将来両国の懸け橋となる人材を育てる大きな基盤となる。児童からの回答結果からも、海外への関心が高まっていることがうかがえる。「外国の文化や生活の違いを知りたい」「他の国のことももっと調べてみたい」「外国の友達や外国の人を見かけたら、自分からかかわってみたい。」など、主体的に海外に関わりたいという考えを持つ児童が多い。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

本事業は、大阪・関西万博のテーマ『いのち輝く未来社会のデザイン』を基盤とし、上述の2つの目標を掲げて実施した。万博テーマと合致した教育プログラムの実施により、日本とルワンダ双方の児童・教員が命の尊さや多様性の価値について深く考える機会を得た。ア

ンケート結果からは、本事業を通してこのテーマに対する気持ちが高まった児童が 90%を超えていることを確認した。この学びは、参加者一人ひとりの価値観形成に寄与し、グローバルな視点を持つ次世代の育成という持続的な成果をもたらしている。

交換日記を両校の資産として残すことができたことは、本交流を一過性のイベントで終わらせない基盤となった。この有形の記録は、今後の継続的な交流活動を支える重要なツールとして機能している。昨年度からの継続的な活動を通じて、日本とルワンダをつなぐ主要関係者のネットワークがさらに強化され、交流活動も多様化してきた。今後は、人的ネットワークのさらなる深化や地域社会全体を巻き込んだ交流へと発展することで、本事業が真のレガシーとして受け継がれていくことが期待できる。

## (5) 特に良かった点、苦労した点

### 良かった点

本事業で特に良かった点は、現地に訪問することができたことである。オンラインでの交流は続けていたが、対面で現地の児童や教職員と交流ができたことは、その後のオンライン交流の質向上にもつながった。上述のとおり、大江小学校の児童にとっては「いのちの尊さ」や「学ぶことの喜び」を実感することができ、教職員にとっては教育の原点を見つめ直す契機となった。

### 苦労した点

本事業で苦労した点は、一過性のイベントで終わらせないための方策を思案したことにあつた。どのようにレガシーを作っていくのかについて、オンライン交流、現地訪問、有識者による講和、交換日記などが検討され、最終的には交換日記が有形の資産（レガシー）となったことで次代に引き継がれていくことができる。

実務レベルにおいては、大阪・関西万博ルワンダナショナルデーへの参加の際の入場パスの手配が大きな課題となった。ナショナルデーに出演者として参加する際のチケット購入費は経費として認められず、関係者パスの手配も容易ではなかった。

## (6) 今後の展開

大江小学校では、ルワンダのバツィンダ小学校との交流を、今後も毎年 5 年生が担い手となって継続的に行う予定である。児童同士が、言葉や文化の違いを越えて理解し合う経験を重ねることで、互いの国への関心と尊敬の念を深めている。オンライン交流や交換日記、文化紹介などの活動を通して、子どもたちは「相手を思いやる心」「平和を願う心」を育み、学びの幅を広げている。また、交流の成果を次の学年に伝えていくことで、学校全体に国際理解の輪が広がりつつある。こうした継続的な取組は、両国の子どもたちが将来の友好と協力の架け橋となる土台を築くものであり、教育を通じた草の根の国際交流として意義深いものと考えている。

## (7) 今後の展開における課題

今後の展開における課題として、まず継続性の確保が挙げられる。担当学年が毎年変わるため、交流内容や学びを次年度に引き継ぐ仕組みを整える必要がある。次に、双方の学びのバランスである。日本側からの発信に偏ることなく、ルワンダの児童が主体的に表現できる場を設けることが、真の相互理解につながる。また、言語や通信環境の課題もあり、英語力の差や通信状況に配慮しつつ、絵や歌、動画など多様な方法で交流を継続する工夫が求められる。加えて、交流の時間をどのように確保するかというカリキュラムマネジメントも重要である。通常の学習との両立や年間計画への組み込みを工夫し、児童が無理なく主体的に参加できる体制を整えることが、今後の充実した交流の鍵となる。

## (8) 継続するための方策

上述のとおり、本事業で構築した関係性を用いた交流を継続させるためには、次年度に引き継ぐ仕組みを整える必要がある。そのためにも特定の教職員や学年だけで本交流を留めるのではなく、さまざまな学年・教職員を巻き込んでいくことが肝要である。今回の連続8の字跳び大会では、校長ではなく別の学年主任がリーダーシップを取り実施した。このような別学年の主任や学年が主体となった交流を続けていくことで、学校全体の取り組みに昇華させていく。

## 3-18 大阪府八尾市 × リベリア

### (1) 背景と目標等

#### 1)背景と目的

八尾市市政運営方針では、「OPEN FACTORY CITY YAO」を産業スローガンとして、世界に向けて、八尾のモノづくり現場を開き、ブランド力を引き上げていくとともに、「ベンチャーエコシステム創出事業」において、こどもの創造性育成プロジェクトを実施している。そのことで、八尾の産業を支える中小企業のクリエイティブな人材の輩出や、社会環境の変化に柔軟に対応できる企業力を備える支援事業とし、万博を通じて、活動を世界に向けて広げることを目的とする。

#### 2)目標

国際的な視野を広げ産業、音楽、文化を学ぶことで、クリエイティブの幅を広げる効果及び、市の総合計画の中で指標としている関係人口の対年度比率の増加をめざす。更に、当該事業を通じて、メディア等への取り上げられる機会が増えることで、「ものづくりのまち八尾」のブランド力が確立されることをめざす。

### (2) 事業内容

【事業名】 ナショナルデーイベント

① 日時：2025年8月26日（火）

事前ミーティング、現場確認、5月19日、6月5日、7月16日  
八尾市長は午餐会、リベリアレセプション出席。

② 体制：リベリア外務大臣サラ・ペイトロー・ニャンティ、リベリア万博大使、外務副大臣、八尾市長、上之島小学校6年生、(株)steam、錦城護謨(株)、

③ 内容：ナショナルデーホール、クラゲ館、国歌斉唱（上之島小学校6年生75名）、クラゲバンド、NHK取材

④ 効果 子どもたちが万博会場の舞台上に立つという経験を通じた成長と多文化理解。日本の教育現場や環境面に関する学び。

⑤ 当該事業において交流した交流相手の類型  
(推進要綱第2(1)ア～ウから選択)

ア 万博参加国・地域のナショナルデーのイベント参加、万博参加国・地域のパビリオンの準備・運営等に関わる者

イ 万博参加国・地域の関係者

ウ 万博の企画・運営等に関わる日本側の万博関係者



【事業名】 経済フォーラム

- ① 日時：2025年8月27日（水）  
事前ミーティング、6月3・23日、関係者会議10月27日
- ② 体制：BCPR、リベリア万博大使、近畿経済産業局、八尾市、錦城護謨(株)、(株)steam
- ③ 内容：フェスティバルステーション主催者挨拶、リベリア経済プレゼンテーション、近畿経済とビジネス状況、八尾市のオープンファクトリー、パネルセッション、モノづくり体験、EXPO2025大阪・関西万博公式参加者チャンネル、JETRO ネット記事、フォーラム参加者243名
- ④ 効果：リベリアと市内企業との企業間交流で、新たなビジネスに向けた商談がなされた。リベリアからの留学生の話が聞け、人材交流についての可能性について考える機会が得られた。
- ⑤ 当該事業において交流した交流相手の類型（推進要綱第2（1）ア～ウから選択）
  - ア 万博参加国・地域のナショナルデーのイベント参加、万博参加国・地域のパビリオンの準備・運営等に関わる者
  - イ 万博参加国・地域の関係者
  - ウ 万博の企画・運営等に関わる日本側の万博関係者

【事業名】 生徒交流

- ① 日時：上之島小学校への訪問7月7・14日、地域イベントへの参加8月3日、上之島小学校運動会への参加10月20日、21日議場での音楽交流（市や議会への表敬訪問）
- ② 体制：リベリア万博大使、リベリア10代歌手の兄弟、八尾市、上之島小学校、錦城護謨、steam
- ③ 内容：小学校の給食を取り、リベリア国家を通じた文化交流、地域で開催する「モノづくり体験イベント」でのリベリアとクラゲバンドとの音楽交流、運動会を通じた文化交流、市議会との交流として議場で音楽イベントの開催、市議会と市長及び八尾市の行政幹部とリベリア万博大使と意見交換の開催。
- ④ 効果：子ども達が自らリベリアの事を調べるなど主体性が育まれた。グローバルサウス諸国との産業共創の検討機会を得た。文化・教育の相互理解。
- ⑤ 当該事業において交流した交流相手の類型（推進要綱第2（1）ア～ウから選択）
  - ア 万博参加国・地域のナショナルデーのイベント参加、万博参加国・地域のパビリオンの準備・運営等に関わる者
  - イ 万博参加国・地域の関係者
  - ウ 万博の企画・運営等に関わる日本側の万博関係者





### (3) 事業の目標に対する成果

当初目標として、クリエイティブ人材の育成と産業ブランディングの向上を掲げていた。万博を通じた子どもたちのアンケート調査の結果からも、78.7%の児童が「国際交流や世界に対する興味関心」が高め、さらに、82.9%が「ものづくりや発明」に対して興味関心を示す結果となっていることから、今後のクリエイティブ人材育成への可能性を秘める結果となった。また、今回の万博国際交流について、リベリアが主催する公式レセプションで、「文化、教育、音楽を通じた交際の貢献」としてしていると評価され、リベリアから八尾市長に対し、「Golden Image Award」が送られた。このことにより、八尾市のブランド力が高められる結果となるとともに、八尾市の国際交流の取り組み自体がメディアに取り上げられ、市内中小企業からも知名度が上がり採用にも寄与したとのアンケート結果を得ている。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

生徒交流の点では、10月20日の小学校の運動会にリベリアの万博大使を含めた一行が来られ、学校教員との意見交換が行われた。そこで、生徒は毎年変わっていくことから、一定の学年を決めて、まずは、オンラインを通じて交流機会をつくるなど、今回交流を実施した上之島小学校の校長先生とリベリア万博大使との間で次年度以降の試みについて言及がなされた。

また、経済交流の観点では、中小企業が課題としている雇用面で、インターンの受け入れなども含め、民間主導となり、関係支援機関と連携し、対応策を検討中である。今

年度は、リベリア留学生へのヒアリングを行い、その結果を受けて、市内中小企業 10 社と支援機関 8 機関（近畿経済産業局、大阪府、大阪産業局、八尾市中小企業サポートセンター、JICA 関西、PREX、JITCO、KECC）が集まり、意見交換を行い、課題抽出とその整理を行っている。次年度以降についても、外国人雇用に関するセミナー開催、インターン受入れ等の市内小企業者向け相談や支援機関ネットワークについては、通常予算の範囲で対応していく予定である。

## （5）こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

万博を通じた子どもたちのアンケートの調査結果からも、78.7%の児童が「国際交流や世界に対する興味関心」を持ち、さらに、82.9%が「ものづくりや発明」に対して興味関心を示す結果となっている。学校現場においても、国際交流を通じた地元企業との交流については、「意義のあるもの」との、学校からの理解を得ることができたことにより、学校がこれまでよりも地域に開かれる存在となれた。

万博後の動きとしては、令和 8 年 1 月 28 日に「中河内ブロック都市教育委員会研修会」が、八尾市内で開催されることになっているが、そこで、今回の万博を通じた子どもたちの活動を八尾の報告としたいと八尾市教育委員会から依頼を受け、参加した地元企業がその会に出席して報告する予定となっている。

これまで以上に、地元企業と学校との更なる交流促進に繋がっている。

## （6）特に良かった点、苦勞した点

- 1)良かった点：産業部門と教育部門の横連携が、今回の万博国際交流プログラムを通じて、風通しがよくなり、事業推進がスムーズに行うことができた。また、行政だけでなく、市内の中小企業と学校現場の距離が縮まり、他の交流事業が増える結果となっている。
- 2)苦勞した点：リベリアとの交流となり、ことばや時差、文化の相違もあり、コミュニケーションがスムーズに進まず、事業実施までに臨機応変な対応が求められることが多くあり、通常事業よりかなりハードルが高かった。

## （7）今後の展開

学校での国際交流については、今回事業を受託した(株)steAm と八尾市の教育委員会が、今後の可能性について意見交換をしているところである。

産業セクションとしては、国際交流が新たなビジネスを展開するためのきっかけとなるように、国の機関と連携し、地域内の中小企業に対してサポートを継続していく予定である。

## (8) 今後の展開における課題

リベリアからは、相互理解を深めるため、オンラインだけではわからないところもあるため、リベリアに実際に来てもらいたいとの意向があったものの、具体的な事業実施がないままでの渡航費を含めた旅費の事業予算化は難しいところがある。必要な際には、オンラインを活用するなどして、交流方法を検討していくしかないと考えている。リベリアからは、環境面でのハード整備を含めた課題を投げられており、ODAに該当する範疇もあり、地方自治体のみで国と交流をすることは規模的なことを含めてハードルが高いと考えている。

## 3-19 大阪府河内長野市 × ブルキナファソ

### (1) 背景と目的

1) 河内長野市では、大阪・関西万博を契機として、本市の豊かな自然、歴史・文化、人的資源など多様な魅力を「オール河内長野」で国内外に発信することを目的に、令和5年度より「つながる河内長野」を掲げ、「ひと・もの・こと」が有機的につながる取組を推進している。

一方、本市は大阪都市圏近郊に位置しながらも、府内他自治体と比較して人口減少・少子高齢化の進行が著しく、若年層の市外流出や地域資源の活用・発信不足により、国内外からの観光誘客や関係人口の創出が十分とは言えない状況にある。こうした課題に対し、市民自らが地域の魅力を再認識し、誇りをもって発信できる機会の創出が求められている。

このような背景のもと、本事業では、大阪・関西万博という国際的かつ象徴性の高い機会を最大限に活用し、国際交流を通じて市内外、さらには世界との「つながり」を創出することを目的とした。特に、音楽・舞踊・舞台芸術といった文化を媒介とすることで、言語や国境を越え、子どもから高齢者まで幅広い世代の市民が他国の文化・歴史・芸術に触れ、相互理解を深める実体験の場を創出することを狙いとした。

また、アフリカ・ブルキナファソを中心とした国際交流を展開することで、市民参加型の創作活動を通じたシビックプライドの醸成を図るとともに、これまで本市に関心を持たなかった層に対しても効果的に魅力を発信し、「訪れたいまち」「暮らしたいまち」への転換を目指した。さらに、万博を一過性のイベントに終わらせることなく、万博後も継続的に国際的な「つながり」を深化させ、地域の活性化と新たなまちづくりへとつなげていくための基盤構築を本事業の目的とした。

### 2) 目標

- ・河内長野市内で、万博関係者やブルキナファソ政府関係者とこどもを中心とした河内長野市民が交流することで、未来を担う次世代が万博や国際交流について学ぶ。
- ・万博会場（シャインハット等）で開催する河内長野市の催事に、ブルキナファソ関係者とこどもを中心とした河内長野市民等が参加し、共に地域の資源や魅力をPRする。
- ・万博・ブルキナファソ関係者：20人以上参加、河内長野市民：300人以上（内、こどもも100人以上、団体・事業者10者以上）参加、参加者アンケート100件以上実施
- ・関係人口拡大

### (2) 事業内容

#### (1) スケジュール

以下の流れで事業を実施した。

- ・令和7年6月～7月：市内ワークショップ（全3回）
- ・令和7年8月4日：ブルキナファソナショナルデー参加
- ・令和7年8月：舞台リハーサル（全3回）
- ・令和7年9月6日・7日：大阪・関西万博 EXPO ホール（シャインハット）本公演
- ・令和7年12月6日：beyond 万博公演およびブルキナファソ大使館招聘事業

## （2）実施体制

- ・主催：河内長野市
- ・事務局支援：近畿日本ツーリスト株式会社
- ・業務委託：ヴィガーK2 株式会社
- ・芸術監督・総合プロデュース：サキタハヂメ氏
- ・協力：ブルキナファソ共和国関係者、市内文化団体・学校・市民

## （3）内容

### ① ワークショップ・リハーサル

市内で実施したワークショップでは、ブルキナファソの伝統音楽と河内長野市の文化である河内音頭の融合等に取り組み、子どもから大人まで約250名が参加し、舞台表現の創作を体験した。

### ③ ブルキナファソ・ナショナルデー

河内長野市からは副市長および特別顧問が出席し、あわせて本事業の芸術監督・総合プロデュースを担ったサキタハヂメ氏も参加した。ブルキナファソ政府関係者との交流を通じ、相互理解と友好関係の深化を図った。

### ③ 本公演

万博本番では、EXPO ホール（シャインハット）において、オルタナ民藝エンターテイメント舞台『奥河内音絵巻 2025 日月山水タイムマシン』を2日間で計5公演実施し、全公演が満席となった。本公演には、ブルキナファソ、チェコ、日本のアーティストおよび市民出演者が世代・国籍を超えて共演し、出演者・スタッフ総数は約600名に達した。また、ブルキナファソと河内長野の子どもたちによる絵画展示や映像出演も行い、多層的な文化交流を表現した。

### ④ beyond 万博

令和7年12月には、beyond 万博事業として、万博で生まれた感動や体験を河内長野市内で再現する大規模催事を実施した。市内最大の屋内ホールである市立文化会館（ラブリーホール）において公演を行い、サキタハヂメ氏が新たに手がけた河内長野市のレガシー楽曲の発表や、『奥河内音絵巻 2025 日月山水タイムマシン』の演出の一部再現を行った。本催事も全席満席となり、大盛況のうちに終了した。

あわせて、駐日ブルキナファソ大使を招聘し、市長およびサキタハヂメ氏を交えたトークセッションを実施したほか、宗教施設訪問や市民との交流を通じ、国際交流の

さらなる深化を図った。



### (3) 事業の目標に対する成果

#### (1) 国際交流による成果

- ・音楽・舞踊・舞台芸術といった非言語的な文化表現を媒介とすることで、言語や文化的背景の違いを越えた交流が実現し、参加者相互の自然な理解と信頼関係の醸成につながった。
- ・ブルキナファソ政府関係者、アーティスト、市民が対等な立場で舞台創作に関わるプロセスを通じ、一方的な文化紹介にとどまらない「共創型」の国際交流を実現した。
- ・子どもたちが外国の文化や表現者と直接関わる機会を得たことで、異文化を身近なものとして捉える意識が育まれ、国際交流に対する心理的なハードルの低下につながった。
- ・ブルキナファソ・ナショナルデーへの参加や大使招聘事業を通じ、文化交流にとどまらず、行政・文化関係者間の公式かつ継続的な交流関係が構築され、今後の人的交流や文化連携に向けた基盤が形成された。

#### (2) 市内への波及効果

- ・市民が「出演者」「担い手」として国際交流事業に関わる機会を創出し、従来の鑑賞型事業では得られなかった主体性と当事者意識や、市へのシビックプライド醸成

に寄与した。

- ・子どもから高齢者まで多世代が同一の舞台づくりに参加することで、地域内の世代間交流が活性化し、地域コミュニティの結束強化につながった。
- ・万博出演を目標とした継続的なワークショップ実施により、市内文化団体・公共施設の連携が強化され、今後の文化事業展開に資する運営ノウハウが蓄積された。
- ・市民による口コミや SNS 発信を通じて、河内長野市の文化的取組が市内外へ波及し、都市イメージ向上に寄与した。
- ・特に万博会場での公演については、初日の SNS 発信等を通じて話題となり、大阪府知事が 2 日目の公演を鑑賞するなど、高い注目を集めた。

### (3) 実施により達成できた成果

- ・大阪・関西万博という国際的かつ象徴性の高い舞台において、市民主体の国際文化交流事業を実現し、「地域が世界と直接つながる」具体的な成功事例を創出した。
- ・出演者・スタッフを含め約 600 名規模の参加を実現し、計画段階を上回る市民参画を達成した。
- ・ワークショップから本公演、beyond 万博事業までを一連のストーリーとして構成することで、万博を「点」ではなく「線」として捉えた事業モデルを確立した。
- ・本事業を通じて、「つながる河内長野 EXPO メンバー」として本市と関わりを持つ約 1,000 名のネットワークを形成し、今後のまちづくりに参画する新たなメンバーとつながった。

### (4) 相手国への波及効果

- ・ブルキナファソの伝統音楽・舞踊・文化的価値を、日本の万博来場者および地域住民に対して発信する機会を創出し、同国文化の理解促進と国際的認知向上に寄与した。
- ・ブルキナファソの子どもによる絵画制作や映像出演を通じ、相手国側においても国際交流への参画意識と誇りを醸成した。
- ・ナショナルデーへの参加や大使招聘事業を通じ、文化交流にとどまらず、人的・公式ネットワークの構築につながり、今後の継続的交流の土台を形成した。

### (5) 事業目標に対する成果

市内で実施したワークショップや関連事業を通じ、万博関係者およびブルキナファソ関係者と、子どもを中心とした多世代の市民が直接交流する機会を創出した。参加した子どもたちは、異文化理解や国際的視野を広げる貴重な学びの機会を得ることができた。

また、大阪・関西万博会場（EXPO ホール・シャインハット）での本催事においては、ブルキナファソ関係者と河内長野市民が共に舞台づくりに参画し、音楽・舞踊・舞台芸術を通じて、本市の歴史・文化・自然といった地域資源を相互に学び合いなが

ら、その魅力を国内外に向けて発信した。出演者・スタッフを含め、河内長野市民の参加は300人を超え、うち多くの子どもが舞台表現や関連展示に関わることで、地域の魅力を自らの言葉や表現でPRする、市民主体の国際交流を実現した。

参加実績としては、万博・ブルキナファソ関係者20人以上、河内長野市民300人以上（うち子ども100人以上、団体・事業者10者以上）の参加を達成し、参加者アンケートも100件以上を回収した。アンケート結果からは、「世界とつながっていることを実感した」「将来、海外の人と関わる仕事をしてみたい」といった声が寄せられ、本事業が次世代に希望を与える効果を有していたことが確認できた。

さらに、本事業を通じて構築されたブルキナファソ大使館や関係者、市民団体とのネットワークは、万博後も継続的な交流へと発展する基盤となっており、国際交流を起点とした関係人口拡大に寄与する成果を得た。

#### **(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与**

本事業を通じて構築された、ブルキナファソ大使館、アーティスト、市民団体とのネットワークは、万博閉会後も継続的な交流の基盤となる。beyond万博公演の実施は、万博を一過性のイベントに終わらせず、地域に文化的レガシーを残す取組として位置づけられる。また、本事業を通じて形成された約1,000名の「つながる河内長野EXPOメンバー」についても、今後のまちづくりに主体的に参画してもらう機会を創出し、本市の持続的発展につなげていく。

#### **(5) 子ども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果**

ワークショップや舞台出演を通じ、子どもたちや参加者は異文化に触れ、自ら表現し、世界とつながる体験を得た。アンケートにおいても、「国際舞台で一緒に参加できてうれしかった」「また世界の人と交流したい」といった声が見られ、将来に希望を感じさせる効果が確認できた。

#### **(6) 特に良かった点・苦労した点**

##### **(1) 良かった点**

- ・市民・子どもが主体となる高い参加意識が醸成された
- ・万博会場という国際舞台で、質の高い文化発信ができた

##### **(2) 苦労した点**

- ・多国籍・大規模な出演者調整
- ・限られた準備期間でのワークショップと本番の両立

#### **(7) 今後の展開**

今後は、本事業で培った人材・ネットワークを活用し、地域イベント等と連動した国

際交流事業へと発展させる。また、市民団体が主体的に交流を継続できるよう、行政はコーディネート役として支援を行う。

#### **(8) 今後の展開における課題**

- ・ 継続的な財源確保
- ・ 国際交流を担う人材の育成
- ・ 事業成果を次世代へ確実に引き継ぐ仕組みづくり

## 3-20 大阪府松原市 × タンザニア

### (1) 背景と目標等

#### 1) 背景と目的

松原市は世界437地域に及ぶセーフコミュニティ国際ネットワークメンバーの一員として、セーフコミュニティやインターナショナルセーフスクールの取組をきっかけとした国際交流、文化交流を行っている。その中、タンザニア在住のセーフコミュニティ国際認証審査員より、両地域の若者たちの国際交流を進めることについて提案を受け、令和6年度ポップアート「ティンガティンガ」の交流が始まった。令和7年度は万博閉幕後もレガシーとして交流を継続できるよう、両地域の若者が互いの地域のファンになることを目的として事業展開を図った。

#### 2) 目標

ファンを増やすことを目標に、万博会場、松原市内、オンラインという場を変えながら事業を展開する。

### (2) 事業内容

#### 1) 万博・タンザニアブースにおける交流

- ①令和7年5月9日及び11日
- ②タンザニアブーススタッフおよびまつばらゆうす（国際交流に取り組む若者の有志グループ）
- ③タンザニアブースの内、ティンガティンガのブースにおいて来日しているアーティストと令和6年度本市で開催したティンガティンガ交流について情報共有、意見交換を行った。また一方のブースにおいて、タンザニアの自然や文化について知見を深めるとともに、本市の魅力についてもスタッフへPRを行った。
- ④令和6年度のティンガティンガの交流を発展させることができた。

#### 2) 料理交流及び観光交流

- ①令和7年8月20日
- ②万博会場内スタッフ、在日タンザニア人、ADNJ及び松原市民、まつばらゆうす
- ③万博会場のアフリカンレストランのスタッフと在日タンザニア人によるタンザニア料理のクッキング交流、及び松原市在住の伝統工芸士による「大阪欄間」制作体験を通し、ファンを増やすための新たな形の交流を図った。
- ④若者にも楽しんで参加してもらえる交流内容にしたことにより、小中高大学生といった幅広い参加を得ることができた。在日タンザニア人とのつながりもでき、11月の本市の食のイベントにおいてタンザニア料理のブースを展開するなど、食を通じたタンザニアのファンを広げるきっかけとなった。

### 3) eスポーツオンライン国際交流

①令和7年11月29日

②タンザニアの大学生及び松原市の大学生

③万博レガシーとして交流を継続発展させる基盤づくりとして、eスポーツの研究をしている本市内の阪南大学の協力を得て、タンザニア現地の大学とオンライン交流を図った。

④時差やネット環境の違いはあるものの、チーム戦や会話を促すゲームを取り入れたことにより、2時間の交流とは思えないほど、両地域の参加者は国際交流の必要性や自分の成長を実感する様子が伺え、レガシーを期待できる成果を得ることができた。

### (3) 事業の目標に対する成果

駐日タンザニア大使やタンザニアパビリオン関係者、オンラインで現地の学校との交流を通して、タンザニアの文化や生活を知り、多文化理解と共に郷土愛を育み、日本とタンザニア双方の未来の地域社会の発展に寄与する人材の育成に寄与することができた。また、万博レガシーとしての基盤を整えることができた。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価) )

阪南大学と現地大学による2回目以降のeスポーツオンライン交流が期待できる。

### (5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

松原市の参加者からは「自分の視野を広げるために必要な機会」「国の垣根を越えて偏見や言葉の壁をなくすことができる大事な機会」といった感想や、タンザニアの参加者からは「文化とは単なる「違い」ではなく、「つながり・理解・尊重」であることを認識できた」「相手の文化や考え方、ライフスタイルについてもっと学びたい。つながりを持ち続けることで、互いによりよく理解し良い国際的な友情を築くことができると思う」といった感想があった。アート、食、オンライン交流といった交流内容に広がりをもたせたことは大きな効果を生むことができた。

### (6) 特に良かった点、苦労した点

1)良かった点 在日大使や総領事との連携を図ることにより、アート、食、オンライン交流といった交流内容に広がりをもたせることができた。

2)苦労した点 時差やネット環境の違いが現地との連絡調整に影響を及ぼした。

### (7) 今後の展開

松原市と包括連携協定をしている阪南大学と連携し、駐日タンザニア大使や総領事と情報交換を図りながら、交流内容を展開する。特に、eスポーツの普及研究を進めてい

る阪南大学と次年度以降の現地大学との2回目以降のeスポーツオンライン交流について協議、検討中である。

## (8) 今後の展開における課題

連絡調整や経費について大学や事業者の主体的な参加が求められる。



## 3-2 1 大阪府和泉市 × セネガル

### 1. 事業概要

本事業は、令和7年度内閣官房万博国際交流プログラムの採択を受け、2025年大阪・関西万博を契機として、大阪府和泉市とセネガル共和国との間で実施された国際交流事業である。音楽およびスポーツという普遍的な文化を媒介とし、市民、とりわけ次世代を担う子どもたちが主体的に参加することで、国際理解、多文化共生、創造性教育を同時に実現することを目的とした。

### 2. 実施内容

#### (1) 7月24日(木) いのちの祭り～World Life Band～ (いのちパーク)

大阪・関西万博会場内「いのちパーク」(シグネチャーパビリオン8館の中央、万博会場の心臓部)において開催された本公演(いのちパークイベント2回目)は、和泉市×セネガル×大阪・関西万博シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」による国際交流プログラムの中核をなす最重要事業である。クラゲ館が掲げる『創造性の民主化』(つくる喜びをすべての人に)という理念を、実践的かつ象徴的に体現する場として企画・実施された。なお、KURAGE Band の在日本セネガル太鼓奏者アブライ・ンジャイ・ローズ氏の父、DouDou N'diaye Rose は世界的なパーカッション奏者で人間国宝でもあり、今回のセネガル館でも写真が掲載されていた。アブライ氏を含む DouDou Ndiaye Rose Heritage (セネガル)、和泉市のPR大使であるいずみ太鼓 鼓聖泉に加え今回は、和泉市長を含め公募の中から地域の子ども達(1名欠席)が19名(1名欠席)参加した。久しぶりの DouDou N'diaye Rose Heritage 日本公演であり、音楽的にも奇跡的な内容となった。いのちパーク内には約400名の観客が集まった。

#### ◆和泉市の子どもたちを万博いのちパーク催事に招待

[7月24日\(木曜日\)大阪・関西万博会場でセネガルの音楽家と共演する小学生を募集! / 和泉市 - EXPO ニュースくん](#)

※子ども達19名が参加(親子20組の募集で当日1組欠席、計38名の参加)

#### ◆主賓

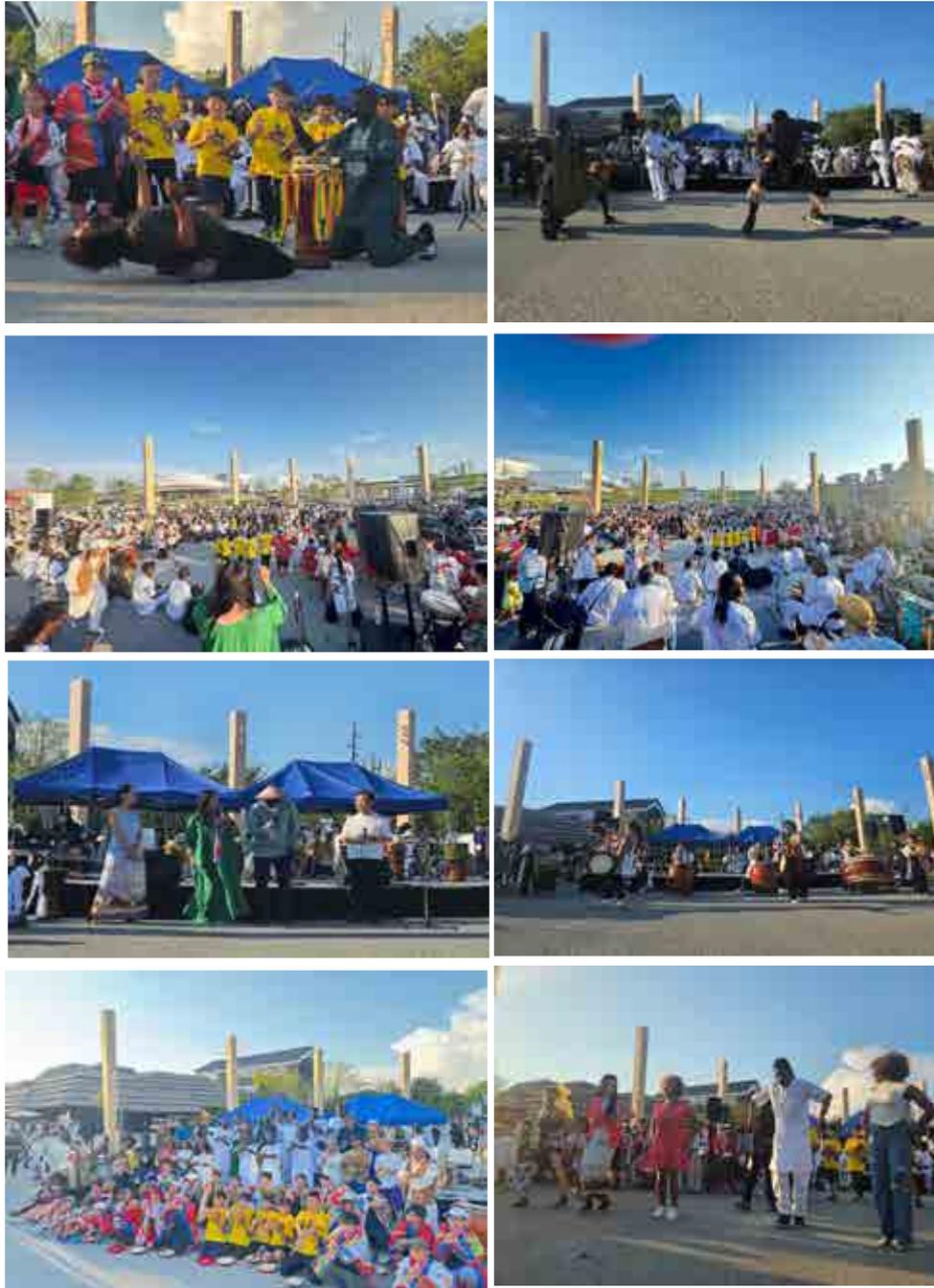
和泉市長 辻 宏康、和泉市教育長 大槻 亮志、教育委員 中西 正人

#### ◆来賓

和泉市議会議長 関戸 繁樹 様

≪DouDou Ndiaye Rose Heritage | LIVE at いのちの祭り～World Life Band～ vol.2≫

<https://www.youtube.com/watch?v=vWT-UHgH7NA>



【写真】7月24日 いのちパークにおける World Life Band 公演の様子。KURAGE Band、Doudou Ndiaye Rose Heritage（セネガル）、いずみ太鼓 鼓聖泉、和泉市内小学生が国・世代・文化を越えて協奏し、観客を巻き込んだ参加型・共創型の国際交流が実現した。

## 出演団体プロフィール

### 【KURAGE Band(クラゲバンド)】

[https://steam21.com/kurage\\_band/](https://steam21.com/kurage_band/)

ジャズピアニストかつ大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー(シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」)中島さち子が率いる多文化ミックス音楽バンド。日本、韓国、セネガル、チベットなどの音やリズムがダイナミックに絡み合う。山本能楽堂や世界のさまざまな郷土芸能とのコラボレーションライブを多く行い、五感や身体性を通じて伝統と革新の狭間を、即興的に響き合わせる



### 【Doudou Ndiaye Rose Heritage(ドウドウ・ンジャイ・ローズ・ヘリテージ)】

セネガル打楽器界の第一人者で世界中にサバル(太鼓)の魅力を広め、その功績から人間国宝に認定されたドウドウ・ンジャイ・ローズのファミリー(グリオ)から12人が来日、アフリカンパーカッションを披露。セネガルの伝統的ドラム「サバル」を現代的に昇華した音楽集団。アンサンブルは即興と多層的リズムが特徴で、家族を中心に受け継がれたドラミングスタイルを発展させ続けている。



### 【いずみ太鼓 鼓聖泉(こせいせん)】

2000年、和泉市で行なわれた「弥生まつり」を機に結成、和泉市の名の由来となった聖なる和泉の如く、太鼓の響きが聞く人の心に届くようにと名づけられた。老人施設への訪問、学校公演、地域でのイベント、海外公演など年間60回以上に活動が認められ、2013年に和泉市PR大使に任命された。東日本大震災後より、太鼓の力で何かできないかと、被災地の応援として毎年5月5日に災害復興応援チャリティーイベント「いずみの国 弥生まつり」を行うなど、被災地へのボランティア活動や訪問演奏など、慰問活動も積極的に行っている。



7月24日(木曜日)に万博会場でセネガル音楽家と和泉市の小学生が共演 (和泉市HPより)

<https://www.city.osaka-izumi.lg.jp/kakukano/syougaibu/sportssinkou/osirase/tokyo2020/hosutotaun/22271.html>

## (2) 7月26日(土) 和泉市民還元音楽祭(弥生の風ホール)

7月24日の万博会場での交流成果を市民に還元する取組として、和泉市主催による「2025年大阪・関西万博 和泉市民還元音楽祭」を開催し、出演者・来場者含め約1,500名が参加し演奏等のパフォーマンスを楽しんだ。万博という国際舞台で生まれた交流を地域に循環させることで、市民が国際交流を身近に体感できる仕組みを構築した。和泉市のPR大使を担う「いずみ太鼓 鼓聖泉」とのコラボレーションによるパフォーマンスや Doudou Ndiaye Rose Heritage(ドウドウ・ンジャイ・ローズ・ヘリテージ)とのコラボレーションによる KURAGE Band 演奏が披露された。

そのほか、市内中学校の吹奏楽部やビッグバンド、盆踊り保存会の子どもたちなど、幅広い団体が出演した。さらに、翌7月27日に万博会場 Expo アリーナ「Matsuri」で披露予定の和泉市のPR大使「いずみ太鼓 鼓聖泉」と、友好都市・中国南通市の芸術団体「南通芸術劇院」によるコラボステージも披露された。

また音楽祭後の交流会(レセプションパーティー)が開催され和泉市より辻市長や関戸議長及び和泉市の友好都市・中国南通市の芸術団体「南通芸術劇院」も参加し互いに交流を深めた。

鼓聖泉(和泉市PR大使): [いずみ太鼓 鼓聖泉 | 和太鼓 | 和泉市【TOP】](#)

7月26日イベント情報(和泉市HP)

[https://www.city.osaka-](https://www.city.osaka-izumi.lg.jp/kakukano/syougaiibu/shogaisuisin/syougaijaku/osirase/22176.html)

[izumi.lg.jp/kakukano/syougaiibu/shogaisuisin/syougaijaku/osirase/22176.html](https://www.city.osaka-izumi.lg.jp/kakukano/syougaiibu/shogaisuisin/syougaijaku/osirase/22176.html)





【写真】7月26日 和泉市民還元音楽祭の様子。セネガル音楽、日本の和太鼓、吹奏楽、KURAGE Band による演奏が段階的に展開され、市民・子どもたちが主体的に参加する多世代・多文化共創のステージとなった。

【写真】7月26日 和泉市民還元音楽祭後の交流会（レセプションパーティー）の様子  
和泉市号外 Next!

【和泉市】万博をもっと身近に！「和泉市民還元音楽祭」と「体験型環境フェスタ」が7月26日に同時開催されます

<https://izumi.goguyonet.jp/2025/07/23/izumishikangenongakusai/>

### （3）11月24日（月・祝）和泉市×セネガル サッカー交流杯

音楽交流に続く第二の柱として、スポーツを通じた国際交流事業を実施した。和泉市内の小学生を中心とした児童・青少年のサッカークラブ8団体と、在日セネガルメンバー7名（及び家族）が参加し総勢約100名が、サッカーを通じた交流を行った。セネガルにはサッカー文化が浸透しており、今回参加の7名もサッカー経験者であったためレベルが高く、子ども達は打倒セネガルチームという事で一生懸命プレーしていた。交流のはじめは、サッカーボールを使ったレクリエーションリレーでスタートし、楽しみながらも負けない真剣さがあった。子ども達の真剣なプレーにセネガルメンバーも全力で楽しんだ有意義な交流であった。

主催：和泉市

主管：和泉市サッカー連盟

協力：関西トランスウエイスポーツスタジアム

日時：令和7年11月24日（月・祝） 準備9時00分、開会9時15分、閉会16時40分

会場：関西トランスウエイスポーツスタジアム

参加チーム：和泉FC、光明台JSC、デッカ大阪、FOX SC、和泉選抜、FC岸和田、高石中央、久米田FC八木 計8チーム



【写真】11月24日 和泉市×セネガル サッカー交流杯の様子。年齢や国籍を越え、勝敗よりもフェアプレーと相互理解を重視した交流試合が行われた。





### 2025年度 和泉市セネガル交流大会（U-11）開催要項

<https://fckishiwada.or.jp/cms/wp-content/uploads/2025/11/ae760c4f9bbc44e0404caf9e642ff38d.pdf>

### 3. 成果・波及効果

本事業により、和泉市における国際理解教育の実践モデルが確立された。万博会場、市内文化施設、スポーツ施設を横断する取組は、市民参加型・還元型の万博レガシーとして好事例が創出できたと考えている。

昨年度から内閣官房万博国際交流プログラムを活用した取組として実施してきたが、和泉市の既存のイベントとの連携や、地域のスポーツ団体が一緒になって参画できるセネガルとのサッカー交流、学校訪問など、万博会期後も継続して息の長い交流が実現できるモデルとなったように感じている。

### 4. 今後の展望

今後は本事業で構築したネットワークを基盤とし、学校教育、地域文化活動、国際交流事業を連動させた継続的取組を推進する。

#### （1）今後の課題

- ・万博という契機がなくなるが持続的な交流を続けていく資金の確保。
- ・地域住民がより近くで文化に触れる機会の参加促進。
- ・ビジネス交流などの発展の模索。

#### （2）今後の展開内容

- ・在日セネガル人と和泉市民（周辺）の音楽・文化・サッカー交流継続
- ・セネガル x steAm x 和泉市による、定期 MTG の開催、オンライン交流イベント企画

#### （3）持続的に展開するための工夫

和泉市とセネガル連携において、以下の事を実行していきたいと考える。

・オンライン交流イベントの企画

上記の点を踏まえて2025大阪・関西万博以降もこの繋がりを絶やすことなく民間と行政と連携しながら交流を深めていきたいと考える。

参考：

steAm プレスリリース 万博国際交流プログラム【和泉市×セネガル x 大阪・関西万博 シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」】「いのちの祭り～World Life Band～」を大阪・関西万博「いのちパーク」にて開催！

～中島さち子率いる多文化バンド「KURAGE Band」、セネガルの人間国宝ドウドゥ・ンジャイ・ローズのファミリー、和泉市PR大使 いずみ太鼓 鼓聖泉が共演！和泉市の小学生も参加、世界・世代を繋ぐライブ～

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000054.000134299.html>

内閣官房国際交流関連テーマウィークイベント：

世界をつなぐ歌・踊り 万博がつなぐ世界の文化 ～内閣官房万博国際交流プログラム紹介～

全国で多彩に展開中の内閣官房「万博国際交流プログラム」の事例を紹介し、万博を通じた日本と世界の躍動的な出会いや創発の可能性を探ります。首長や大使、領事、文化人類学者、アーティストや教育者、子ども達らが集い、多彩な郷土文化や世界をつなぐ歌や踊り（KURAGE Band）を通じて交流し、万博を盛り上げます。

\*内閣官房内閣審議官 国際博覧会推進本部事務局次長井上 学氏にもご登壇いただきました

<https://www.expo2025.or.jp/expo-archive/theme-weeks/program/detail/6808e106493cb.html>

<https://www.expo2025.or.jp/expo-archive/theme-weeks/program/detail/6808d280c5bb0.html>

## 3-2 2 大阪府羽曳野市・藤井寺市・富田林市・大阪狭山市×エジプト

### (1) 背景と目標等

#### 1) 背景と目的

羽曳野市は、世界遺産古市古墳群、日本遺産竹内街道をはじめ、貴重な歴史資産と自然に恵まれた街で、「ひと、自然、歴史文化を育み 笑顔輝く はびきの」の実現に向け、各種施策に取り組んでいる。

藤井寺市は、将来像として掲げる「～人と歴史が活きる未来へ～笑顔と活気に満ちた快適なまちふじいでら」を実現するため、世界遺産古市古墳群、国宝など貴重な歴史資産を有する神社仏閣、落ち着いた良質な住宅都市を本市の特徴として捉え、その特色を活かせるまちづくりを、各種施策を通じ推進している。

大阪狭山市は、市のシンボルであり、現存する日本最古の人工のため池で世界かんがい施設遺産に登録されている狭山池の「水」をキーワードに、「水・ひと・まちが輝き みんなの笑顔を未来へつなぐまち」を将来像に掲げ、「みんなでつくる おおさかさやま」を合言葉に、市民や行政だけでなく、事業者や大学など、市に関係する多様な主体が力をあわせてまちづくりを進めている。

富田林市は、国史跡に指定されている新堂廃寺跡、それに連なるお亀石古墳や、国の重要伝統的建造物群保存地区の「とんだばやし寺内町」など、歴史資源と人々の暮らしが調和するまちで、「人とまちがにぎわい、こどもたちをはじめすべての市民の笑顔があふれる、麗しの富田林」の実現に向けて、各種施策を着実に推進している。

このように歴史に育まれた羽曳野市・藤井寺市・大阪狭山市・富田林市の4市は、大阪・関西万博を契機として、認知度が高く、視覚的にもインパクトのあるピラミッドという巨大墳墓を持つエジプトとの交流を通じ、エジプト文化への理解を深めるとともに、日本文化や南河内の風土等を発信し、双方が国際交流に積極的に参加することで、創造的な未来を若い世代につないでいきたいと考えている。また、将来的にSDGsなど地球規模の共通課題に関心を持って取り組んでいける人材の育成にも繋げていきたいと考えている。

#### 2) 目標

- ・7月23日に万博会場内で実施されるエジプトナショナルデーに南河内4市が揃って参加し、国内外に向けて南河内地域の魅力をPRする。
- ・エジプト出身の方々を南河内4市の学校に招待し、交流を通じて子どもたちが世界に関心を持つようなきっかけを作る。

### (2) 事業内容

#### 1) 6月26日 藤井寺市小学校交流事業

万博会場内のパビリオンで働いている2名のエジプト人スタッフを藤井寺西小学校に招待

し、エジプトについてスライドを活用した授業を実施した。授業の後、エジプト料理の給食を児童たちと一緒に食べるなどの交流を行った。

参加エジプト人

Tasneem Ehab

Hany Abdeen Mahmoud Ahmed

また、藤井寺市の観光施設を訪れ交流を行った。

●スケジュール

10:00 アイセルシュラホール見学（観光ボランティアによる説明）

10:35 葛井寺見学（観光ボランティアによる説明）

11:00 藤井寺西小学校 着

11:35 エジプト授業（4限目）

12:15 給食

13:15 お別れ



2) 7月1日、3日 富田林市小中学校交流事業

エジプト人スタッフ4名を、富田林市に招待した。

寺内町の観光交流では、エジプトのみなさんに浴衣を着用いただいた。

1日の高辺台小学校、3日の葛城中学校では、エジプトの授業とエジプト料理の給食を生徒・児童たちと一緒に食べるなどの交流を行った。

参加エジプト人

Somaiya shakir

Ali Ahmed

Mohamed Ahmed El Manawahly

Elsayed deraz

富田林市 学校給食献立について

- 7月1日 オリーブパン・ショルバホダール・ダウードバシャ・ツナのレモンあえ
- 7月3日 コシャリ・フィラハバネー・タヒーナサラダ



●スケジュール

➤ 7月1日(火)、3日(木) 共通

9:30～ 9:45 富田林寺内町「大正総漫」浴衣着付け体験

9:45～11:00 じないまちボランティア・ガイド 寺内町散策(興正寺別院、城之門筋など)

11:00 富田林寺内町「大正総漫」発

➤ 7月1日 高辺台小学校 5年生・6年生 各1クラス それぞれの教室で

11:15～11:45 学校着 準備

11:45～12:30 4時間目

12:30～13:15 給食時間

13:15～13:30 お別れ・記念撮影など

➤ 7月3日 葛城中学校 3年生 一つの教室で

11:20～11:50 学校着 準備

11:50～12:40 4時間目

12:40～13:05 給食時間

13:15～13:20 和太鼓演奏披露

13:20～13:30 お別れ・記念撮影など



3) 7月7日 大阪狭山市小学校交流事業

エジプト人スタッフ2名を西小学校に招待し、6年生の2クラスにてエジプトの授業を行った後、児童たちからエジプト人スタッフに七夕の説明を行った。

給食の時間では、七夕にまつわる料理を児童たちと一緒に食べるなど交流を行った。

また、狭山神社と狭山池博物館にて観光交流を実施した。

参加エジプト人

Gihad Hussein

Salma Hassanien

●スケジュール

7月7日（月）

9：30～10：30 エジプト出身の方々が狭山池等を観光

11：00 大阪狭山市立西小学校に到着

11：25～12：10 エジプトや大阪・関西万博パビリオン等に関する授業

12：10～12：55 エジプト出身の方々と児童との給食による交流

★給食メニュー 七夕メニュー（白米、牛乳、鶏つくねの和風あんかけ、とうがんの煮物、七夕スープ）



4) 12月4日 羽曳野市小学校交流事業

エジプト人スタッフ3名を埴生南小学校に招待し、2年生3クラス、6年生3クラスと交流を行った。

学校訪問前には、峯ヶ塚古墳も案内した。

●来訪者：Hany Abdeen ハニーさん 男性 藤井寺市の学校交流に参加

Salma Hassanien サルマさん 女性 大阪狭山市の学校交流に参加

Gihad Hussein ギハドさん 女性 大阪狭山市の小学校交流参加

●スケジュール

12月4日（木）

埴生南小学校

13:00 エジプトの皆さん到着

13:20 2年生5時間目授業開始（3クラス合同）

体育館にて講座「エジプトってどんな国？」プロジェクターとスクリーン使用  
体験「エジプトの遊びを体験しよう」

14:05 5時間目終了

14:15 6年生6時間目授業開始（3クラス合同）

※内容は2年生のものと同じ

15:00 6時間目終了

●実施内容

①講座「エジプトってどんな国？」20分

エジプトスタッフ3人で、エジプトにまつわる話をプレゼンテーション。

②体験「エジプトの遊びを体験しよう」25分

3チームに分かれて、アラビア語で1から数字をカウントし言葉を覚えてもらう。

エジプトと日本で共通の代表的なスポーツはサッカーということもあり、エジプト人と各クラス代表がリフティング対決。みんなで数をアラビア語で数える。



5) 7月23日 大阪・関西万博 エジプトナショナルデー参加

ナショナルデーホールでの国家式典にエジプトより招待状をいただき、参加した。



6) 7月23日 大阪・関西万博 観光交流会実施

万博会場内のアフリカンレストラン「PANAF」にて、4市長とエジプト人スタッフ7名の交流会を実施した。また、同店ステージスペースを貸し切り、一般のお客さんも多数いる中で、万博国際交流プログラムの事業にて令和6年度と7年度に南河内4市を訪問された、エジプトの方々による南河内各市の観光PRを実施した。ピラミッドという世界的な観光地を持つエジプト人から見た、南河内地域の魅力や観光情報を語っていただいた。

日 時： 2025年7月23日（水） 14時～16時

場 所： PANAF（万博会場内）

14:00 4市長とエジプト人スタッフ7名が交流

15:00 南河内四市×エジプト 観光PR交流会スタート

15:00 4市長ご挨拶(2分×4市長) 藤井寺市⇒富田林市⇒大阪狭山市⇒羽曳野市

15:10 司会より「エジプトから見た南河内の魅力」の説明

15:12 「藤井寺市の魅力」 登壇者：Tasneem Ehab ※6/26 藤井寺市給食参加

15:22 「富田林市の魅力」 登壇者：Mohamed Ahmed El Manawahly ※7/3 富田林市

- 15:32 「大阪狭山市の魅力」 登壇者：Salma Hassanien ※7/7 大阪狭山市給食参加
- 15:42 「羽曳野市の魅力」 登壇者：Gihad Hussein ※昨年 11/17 羽曳野周遊ツアーに
- 15:52 ギャラリー（来店者等）からエジプト人スタッフへ質疑応答
- 16:00 終了にあたってエジプト人スタッフ皆様より挨拶

#### 7) インフルエンサー招聘事業

エジプト出身インフルエンサーであるサラさんを南河内 4 市に招待し、住民や観光事業者と交流および南河内 4 市の観光の魅力をエジプトに発信し、万博のレガシーとして残るよう努めた。また、観光関係者にエジプトの文化や、ハラルに対する考え方を説明した。滞在中の様子は、地域の魅力発信としてサラさんが自身の SNS を通じ、国内外に向けて投稿された。

#### ■ インフルエンサー基本情報

- ・アカウント名：@sara\_world\_eginjp
- ・氏名：Dr. Sara Khalil（サラ・カリアル）
- ・年齢：33 歳
- ・フォロワー数：91,100 人
- ・国籍／居住地：エジプト出身、日本在住
- ・肩書き：リールクリエイター・インフルエンサー・旅行 Vlogger
- ・活動内容：ハラル対応の日本情報／旅行／アニメ／日常生活の紹介
- ・言語：アラビア語・英語・日本語を併用

#### ■ オーディエンス分析

##### ● 国別フォロワー構成

- ・エジプト：62.1%
- ・サウジアラビア：12.0%
- ・ヨルダン：3.7%
- ・イラク：2.9%

##### ● 都市別視聴者構成

- ・カイロ（エジプト）：25.0%
- ・アレクサンドリア（エジプト）：7.6%
- ・リヤド（サウジアラビア）：3.9%
- ・アンマン（ヨルダン）：3.3%

##### ● 年齢層

- ・25～34 歳：41.8%
- ・18～24 歳：38.1%
- ・35～44 歳：11.9%
- ・13～17 歳：5.0%

● 性別

・女性：92.7%

・男性：7.3%

Khalil Sara は、日本在住のイスラム女性として、中東圏（特にエジプト）を中心に強い影響力を持つインフルエンサーである。

フォロワーの9割以上が女性であり、年齢層も18～34歳が約80%を占めている。

ハラルや旅行、日本文化に関心の高い層へ直接アプローチできる非常に有力な方である。

【スケジュール】

9月2日（火）

東京 8:00

新大阪 10:30

藤井寺市 12:00 昼食 美喜寿司

13:15 道明寺天満宮参拝 対応：宮司 南坊城（みなみぼうじょう）様  
ハニワみくじ

14:00 味大かまぼこ見学 かまぼこ試食

14:40 津堂城山古墳見学、前田製菓見学 住民と交流

15:30 アイセルシュラホール見学 市長と面会

16:20 葛井寺参拝 対応：住職 森様  
ダルマみくじ

16:50 辛國神社参拝 対応：宮司 伊藤様  
恋みくじ

17:30 一番街ジャンクション

19:00 夕食 オステリア・ベッカフィーコ

宿泊 ゲストハウス 一番街ジャンクション

9月3日（水）

羽曳野市 09:00 誉田八幡宮参拝 対応：宮司 中様

10:00 大蔵屋ハニワ作り体験 対応：浅野様

12:00 羽曳野観光局見学 市長と面会

13:00 道の駅しらとりの郷はびきの「あすかでくるで」見学 特産品案内

大阪狭山市 15:00 狭山池博物館見学 市長と面会

16:00 Yamao 見学 狭山池ダムクーヘン試食

富田林市 17:30 Old Japanese House

19:00 夕食「ようそろ」

宿泊 Old Japanese House

9月4日(木)

富田林市 8:00 朝食 カフェワーハ 市長と面会

9:00 寺内町「大正紹漫」散策

11:30 農業公園サバーファーム ぶどう狩り

13:00 昼食 卵かけご飯試食

新大阪 16:57

東京 19:24



### (3) 事業の目標に対する成果

- ・ナショナルデー事業やレストラン PANAF での交流会事業、またエジプト出身インフルエンサー招聘事業を通じて、当初の目標であった南河内地域の魅力発信ができた。
- ・学校交流事業において、実施後の児童たちへのアンケートで 90%の児童が「海外へ興味を持った」と答えるなど、児童たちに与えた影響は大きかったと思う。児童たちがエジプトや海外に関心を持ち、文化を理解し世界を身近に感じる事ができたと思う。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価) )

各自治体、事業者がエジプトについて知識を得る機会となった。

レガシーとして、南河内の皆さんが「南河内は大きい観光地になれるポテンシャルがある」ということを認識したのではないかと思う。

今後もエジプトとの関係性を継続することで、観光交流ができればと思う。

### (5) 子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

児童たちに対して実施したアンケート結果が、いずれも高評価であることから、児童たちにとっては言葉や文化の違いを超えて多様な価値観に触れ、海外に対する理解や関心を深めることができた。

### (6) 特に良かった点、苦労した点

#### 1)良かった点

- ・交流や観光を契機に、地域住民・学校・行政・企業などが連携できたこと。
- ・児童が海外の文化や国際社会に関心を持つキッカケを作れたこと。

## 2)苦勞した点

- ・エジプトサイドから直前にならないと連絡や返事がもらえないことなど、文化や考え方の違いを感じた点。
- ・ハラル対応の難しさから、食事面での対応に苦勞したこと。

## (7) 今後の展開

エジプトのような観光地になっていけるように、取組みを継続する。

## (8) 今後の展開における課題

国内外の方々に南河内を知っていただくためには、地域情報や魅力をさらに発信する必要があるが、厳しい財政状況による予算面などの課題がある。

### 3-23 大阪府東大阪市 × ベナン・タンザニア・コートジボワール

#### (1) 背景と目標等

##### 1) 背景と目的

東大阪市は、製造業の事業所密度が全国第1位であり、多種多様な中小企業が集積する「モノづくりのまち」として知られている。一方で、市内企業は人材不足や技術の継承、販路開拓等の課題を抱えている。

このような状況を踏まえ、本市では、グローバルサウスとして今後の成長市場として注目されるアフリカ地域に着目し、市内企業等のアフリカに対する理解促進や将来的な事業展開に繋げる取組みを進めてきた。

そして万博国際交流プログラム事業に参加することで、これまでの取組みで高まった機運を継続し、情報を得ることが難しいと感じられるアフリカの現状やビジネス文化について知る機会を設け、相互理解の促進を図ることにより、経済的な連携や観光振興へ繋げ、交流人口増と地域経済活性化、さらには万博を契機とする長期的発展基盤を構築することを目的として実施したものである。

##### 2) 目標

「大阪アフリカビジネスフォーラム」(参加者目標数400人)や、企業の相互視察などを通し、市内企業等におけるアフリカ地域への理解促進を図り、将来的な事業展開に寄与させていく。

また、大阪・関西万博2025を契機とした、市内の小・中・高校生が参加する文化交流事業などを通して、本市が掲げる「子どもファースト」を意識しながら、多様性を認め合える次世代の育成を推進する。さらに、このような交流を観光振興に繋げ、交流人口増、産業基盤の強化、大阪・関西万博2025のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現と長期的な経済発展に寄与する。

#### (2) 事業内容

##### 事業【1】【大阪アフリカビジネスフォーラム2025(OABF)】

①スケジュール(交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過)

令和7年4月～8月:事業計画策定、関係機関との調整

令和7年8月25日:大阪アフリカビジネスフォーラム2025開催

②体制(交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制)

ADNJを主催者として、東大阪市、中小企業基盤整備機構及び大阪商工会議所が共催し実施。

また、JETRO、JICA、公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、TICAD9関係機

関、経済団体及びジンバブエ共和国大使館等の協力を得て実施。

③内容

日時：令和7年8月25日

場所：東大阪市文化創造館

参加者：来日起業家・来日企業・日本企業・ジンバブエ政府代表団・ガボン政府関係者など

参加人数：206名・オンライン参加20名

取組内容：基調講演、特別講演、パネルディスカッション、展示、ネットワーキング、BtoB・BtoG交流



(大阪アフリカビジネスフォーラム 2025 当日の写真)

④効果

A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

【A】コートジボワールの視察団が本市に来られ、市内企業のネジ配送工場を見学された。また、ベナン共和国が本市で独自のビジネスフォーラムを開催された。

【B】市内企業を含む参加者がアフリカの現状やビジネスに関する情報を得る機会となった。

(参加者アンケートにおけるイベント全体の評価で62.6%が満足と回答)

【C】相手国関係者にとって、日本の企業や自治体に自国の情報を提供する場となり、直接的な交流する機会となった。

事業【2】【大阪ウィーク（大阪・関西万博2025会場内）】

(1)「カラフルコミュニケーションフェスティバル」

①スケジュール

令和7年4月～5月:市内小学校、関係機関との調整（一部前年度より実施）

令和7年5月16日:カラフルコミュニケーションフェスティバル

(令和7年11月28日:カラコミパーク（於:近畿大学）)

②体制

本市教育委員会事業として、市内小学校やADNJを通して繋がったベナンのアフリカ

ンアーティストのほか、大阪・関西万博 2025 自治体出展支援業務の委託先である株式会社博報堂プロダクツの協力のもと実施

③内容

日時 :令和 7 年 5 月 16 日

場所 :万博会場内ギャラリーeast

参加者:市内の小学生 (3 校、130 名)

取組内容:シンポジウム、ブース交流

(アフリカの音楽や楽器に触れる体験、多文化共生について学び研究したことの発表、ベナン共和国訪問体験談など)



(カラフルコミュニケーションフェスティバル 当日の写真)

④効果

A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

**【A】** 参加した市内児童の個人レベルでの「貴重な経験」に留まらず、探求学習の実践例として、本市の事業を PR する場にもなり、教育機関における学びの深化に寄与した。

**【B】** 「世界の文化を調べて他者に紹介する」という過程で、自地域の価値も再認識でき、外国への関心が高まる取組みとなった。

参加児童アンケート「これからも外国のことを学びたいと思いますか」肯定的回答率 96%

**【C】** 交流相手国にとっては、自国の文化を日本の児童や来場者に知ってもらうなど異文化理解の機会となった。

(2) アフリカンミュージックと日本のダンスコラボステージ

「Higashiosaka is Dancing with Africa !」

①スケジュール

令和 7 年 4 月～8 月:事業計画、音源や衣装の調整、ダンス振付、練習

令和 7 年 8 月 31 日:合同リハーサル

令和 7 年 9 月 5 日:ステージ本番

②体制

本市に所在する樟蔭高等学校・中学校ダンスクラブと、ADNJ を通して繋がったアフリ

カンアーティストの協力により実施(本市は相互の連絡調整、演出や事務手続きのサポート)

### ③内容

日時 :令和7年9月5日「大阪ウィーク秋の陣」

場所 :万博会場内アリーナ「Matsuri」

参加者: 樟蔭高等学校・中学校ダンスクラブ70名、アフリカンアーティスト4名、進行1名

取組内容: アフリカンミュージックの生演奏に合わせ、ダンスチームがオリジナルダンスを披露

報道対応等: 「大阪ウィーク秋の陣」として万博の公式広報媒体にて取り上げられるほか、万博を契機とした市の取組みとして報道提供を行った。



(大阪ウィーク秋の陣「Higashiosaka is Dancing with Africa!」 当日の写真)

### ④効果

A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

**【A】** 全国トップレベルを誇るダンスクラブのオリジナルダンスを通して、国内外に本市やアフリカの魅力を発信できた。出演者(出演校)にとってはまたとない大きな舞台での経験となった。

**【B】** 未来を担う中学・高校生と、アフリカンアーティストによる伝統的楽器を用いた生演奏の融合で、会場全体に「音楽やダンスは国境を越える」ことをアピールできた。

**【C】** 交流相手国にとっては、自国の衣装を着用し、伝統楽器を用いた生演奏を万博会場で行うことによりその魅力を大々的にPRできた。

## 事業【3】【アフリカ渡航視察】

### ① スケジュール

令和7年8月～12月:事業計画、渡航者・渡航先調整

渡航期間:令和7年12月19日～令和7年12月31日

### ③体制

ベナン共和国:外務省、APIEx や商工会議所、現地小学校などの協力のもと実施

コートジボワール共和国: 大阪・関西万博2025関係者、現地企業、現地教育機関、JICA

などの協力のもと実施

④内容

渡航期間:令和7年12月19日～令和7年12月31日

渡航先: ベナン共和国、コートジボワール共和国

渡航者: ADNJ 事務局長・本市ブランドオブアンバサダー峯氏、ウスビサコ日本国際博覧会協会副会長、OABF において興味を示した日本企業ほか ADNJ 関係者

取組内容: 現地外務省や商工会議所へ本市の取組みやビジネスフォーラムについて報告。

市内企業からの依頼を受けて現地の中古デバイス販売企業の訪問、市内モノづくり事業者とのコラボレーションを目的とした現地の布の調達など、企業や教育機関との連携に繋がる具体的な調整も行った。

⑤効果

A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

【A】来日企業ツアーを受入れた市内事業者からの依頼で現地調査や布素材を調達するなど、円滑なコラボレーションの支援を行った。また、現地教育機関と市内小学校のオンライン交流実現に向けた具体的な調整ができた。

【B】日本企業からも一部同行しており、アフリカでの事業展開に向けた具体的取り組みの支援に繋がった。

【C】アフリカへの理解促進となったほか、現地の木材加工企業の訪問などを通し、具体的な連携の可能性を含む機会創出ができた。

事業【4】【アフリカ企業来日視察】

①スケジュール

令和7年4月～8月:来日企業・関係機関との調整

令和7年8月20日～25日:TICAD9参加、OABF参加

令和7年8月25日～:次回打合せ調整、事後フォロー

②体制

ADNJ が、来日企業・機関、ユース代表(ジンバブエ・ユース議会メンバー、Youth TICAD リーダーなど)を取りまとめ、進行・通訳支援・BtoB マッチングを実施。

③内容

日時 : 令和7年8月20日～令和7年8月25日

場所 : 東大阪市・横浜市

参加者: 来日企業・機関 (Invest in Gabon ほか)、ユース代表 (ジンバブエ・ユース議会メンバー、Youth TICAD リーダー) など

取組内容: BtoB セッション、パネル討議、意見交換など

④効果

A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

【A】国際ビジネス・国際交流への関心向上、関係者ネットワークの拡大

【B】BtoBによる商談機会の創出、今後の連携テーマ（例:クリーンエネルギー、農業・食品、観光／クリエイティブ分野など）の抽出

【C】日本側関係者との直接的な接点の確保による、投資手続きや連携条件に関する理解の促進

### （3）事業の目標に対する成果

（ビジネス・経済交流）

・大阪アフリカビジネスフォーラム 2025 では、参加者目標数 400 名に対して 226 名が参加。

（目標数に届かなかった要因として、同日に開催された他の万博関連イベントと参加者を分け合う結果となった旨推察している）

・市内企業等におけるアフリカ地域への理解促進においては、アンケート結果で「期待に沿う内容であった」との回答が 73.3%であった。（OABF 参加者アンケート）

・将来的な事業展開への寄与においては、「新たに海外展開を検討・実施していく」という回答が 68.8%であった。（OABF 参加者アンケート）

・大阪・関西万博 2025 を契機とした国際交流の推進において、アフリカ諸国政府関係者、日本企業、支援機関等が参加し、講演、展示、ネットワーキング、BtoB、BtoG 交流が実施された。

・上記のほか、来日企業視察においても企業・機関担当者同士の直接的な対話により相互理解が深まり、「投資に対する心理的リスク」を低減する土台が形成された。

（教育・文化交流）

・これまでの学びの深化や探求心の醸成、自発的交流を通じた多文化共生に関する意欲向上などを促進した。「これからも外国のことを学びたいと思う」が 93%（カラコミパーク参加児童アンケート）

### （4）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性)

（ビジネス・経済交流）

・アフリカ諸国政府関係者、日本企業、支援機関等が参加し、講演、展示、ネットワーキング及び BtoB・BtoG 交流が実施された。また、フォーラム内において MoU の締結が行われるなど、関係者間の交流が具体的に実施された。

・企業・投資促進機関・ユース関係者間で、オンライン商談、分野別セッション、プロジェクト検討等の継続実施が可能であることを確認している。

（教育・文化交流）

- ・カラフルコミュニケーション事業は、事業の定着や新たな展開に繋がるものとなった。  
(その他) 万博国際交流プログラム対象外の交流
- ・万博会場内での交流をきっかけに、広報連携協定として繋がったナウル共和国のパピリオンが、本市「石切参道商店街」に開設され、記念イベント当日にはスタンプラリーなどの周遊企画を行い、賑わいの創出に繋がった。
- ・市役所で実施したイベントに合わせ、寄贈を受けた万博展示品の「ヒマラヤ・ピンク岩塩」を使用したワークショップを実施したほか、ナウル共和国のパピリオン展示を再現することでコモンズH (HIGASHIOSAKA の頭文字) として限定開設するなど、多くの来場者を呼び込み交流人口の増加や消費喚起に繋がっている。
- ・上記の市役所イベントを実施した 11 月は、万博展示品効果もあり市役所 22 階の展望フロア (日本夜景遺産に認定) への来場者は 5,049 人。昨年 11 月と比べて 2,142 人増加 (174%)

## (5) 子ども (または参加者) にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

(ビジネス・経済交流)

- ・フォーラムの内容及びネットワーキング創出の機会について肯定的な評価が多く見られた。  
73% (OABF 参加者アンケート)
- ・アフリカビジネスに対する印象が変わったかについて、69%が「変化があった」とし、「アフリカビジネスへの関心が深くなった」「アフリカビジネスがより身近で具体的に感じられた」などの意見が寄せられた。(OABF 参加者アンケート)
- ・TACAD9 では、若者代表が主体的に議論へ参画し「行動によって変える (change through action)」という姿勢を共有するなど、実務家・リーダーとの対話を通じて、学びと挑戦意欲、将来への希望を促進した。

(教育・文化交流)

- ・児童対象のアンケートでは、「これからも外国のことを学びたいと思う (93%)」「これから先、家や学校で生活したり、仕事をしたりする時に、外国の人と協力して、一緒に活動したいと思う (89%)」など肯定的な回答が多く見られ、本事業が新たな出会いや学びの場、多文化共生に関する意欲を育む場となった。

## (6) 特に良かった点、苦労した点

### 1) 良かった点

- ・万博国際交流プログラム事業を通し、イベント参加者の相互理解が進んだ (OABF 参加者アンケート、カラコミパーク児童アンケート結果など総合)

(ビジネス・経済交流)

- ・アフリカ諸国政府関係者、日本企業及び支援機関等が参加し、講演、展示、ネットワーキング、BtoB・BtoG 交流が実施された。
- ・TICAD9 では、企業・公的機関・若者が同席するマルチステークホルダー型の場により、投資と社会課題を統合的に議論できた。
- ・コートジボワール、タンザニアの企業が本市のモノづくり事業者を訪問、中でも万博出展事業者「(株)松よし人形」においては、今後のコラボレーションについて具体的な検討を開始している。

#### (教育・文化交流)

- ・これまでの多文化共生に関する学びを、大阪・関西万博 2025 の会場において、一般の参加者と共有し、ともに交流できたことで新たな探求的な学習へと繋がった。
- ・大阪アフリカビジネスフォーラムのネットワーキングセッション（於：万博会場内「PANAF'」）において、タンザニアのミュージシャンを招聘し LIVE を開催、PANAF' に勤務するタンザニア出身者や関係者だけでなく、その場に居合わせた全員が大いに盛り上がった。

#### 2)苦勞した点

- ・アフリカ諸国政府関係者、国内外の支援機関、経済団体等、関係機関が多岐にわたって参加したことから、事業実施にあたり直前まで関係機関や関係者との調整が必要であった。(OABF)
- ・短期間での調整（時間枠、通訳、移動等）及び、参加者の関心分野が多様である中でのマッチング最適化が必要であった。(TICAD9)

### (7) 今後の展開

・万博国際交流プログラムや大阪・関西万博 2025 を通し、経済、文化、教育など多面的な国際交流の機会を得て、それを継続的な関係へと発展させる契機を掴んだことは、地域の発展において貴重な成果と捉えている。さらに、万博国際交流プログラム事業を通し、本市と ADNJ との関係が深まったことで、ADNJ をプラットフォームにしたビジネス交流や企業マッチングなど、今後の経済交流の基盤が形成されていることも大きな成果と認識しており、会期後も交流を継続していく予定。

・カラフルコミュニケーション事業については、学校教育の中で実施している事業であるため、参加者拡大による安全面の確保、また子どもたちの学びと参加企業のメリットのバランスを考えた運営方針を丁寧に検討していく。

・高まった機運・交流事業の継続のための事業展開

大阪・関西万博 2025 の開幕前・会期中を通し「東大阪市の万博に関連する取組み」のプレスリリースを行い、参画内容のみならず、東大阪のもつ技術、「人」のエネルギー、

観光スポットや万博会場からのアクセスの利便性、地元グルメ情報のPRなど、様々な角度からその魅力を広く発信してきた。

閉会後の交流も含め、これらの取組みを積極的に発信することで、地域に前向きな機運が生まれ、シビックプライドの醸成や交流人口増加のきっかけとなっており、これを継続させることでレガシー創出へと繋げていく。

また、会期中にはアフリカ諸国のナショナルデーイベントに本市長・副市長が都合のつく限り出席しており、交流相手国以外にも10カ国を超える国々と交流をもつことができた。首長や行政のトップとの交流により新たなネットワークや自治体連携の拡大に繋げたい。

## (8) 今後の展開における課題

大阪・関西万博2025というまたとない機会において、万博国際交流プログラムに採択されたことで、市の予算だけでは実現しなかったであろう規模でそれぞれの事業を展開できた。

柱となるビジネス交流において、具体的なビジネスマッチング案件を創出させていくためには、交流の成果を一過性のものとせず、個別案件を掘り起こしながら具体的なビジネス相談やサポートに繋げていく対応が必要であり、これを継続することで、「モノづくりのまち東大阪」の事業所が直面する課題のみならず、本市の課題である観光振興にも繋げ、その目的である交流人口の増加と地域経済の活性化を図っていきたい。

今年度、本市内でも宿泊者数の顕著な増加が数字として確認できており、この機運と本市の取り組みが複合的に作用して、万博を契機とした継続的な交流人口の増加や経済発展の基盤が育まれるよう引き続き関係機関との連携を図っていく。

## 3-24 大阪府高石市 × マダガスカル

### (1) 背景と目標

#### 1) 背景と目的

高石市では「子育てするなら高石市」というスローガンを掲げ子育て世代に選ばれるまちづくりの施策を推進している。

そのため大阪・関西万博を契機として子どもたちに未来を感じてもらえる機会を創出することを目的として、万博国際交流に積極的に参加することにした。

本市は古くから豊かな海に面しており、戦後は堺泉北コンビナートの形成により工業都市として発展していきました。

現在、人口減少傾向にある中で、発展し人口が増加しているアフリカ、特に日本と同じ島国であるマダカスカルの人々との交流を通じて、子どもたちが異文化に触れ、世界へ視野を広げる機会を創出するとともに、進展する国際化に順応する環境づくりを進めることを目的とした。

#### 2) 目標

万博をきっかけとした世界の体感

- ・高石市に万博関係者をお招きすることで市民に万博を実感する機会を創出する。
- ・高石市の関係者（特に子どもたち）が万博会場でのイベントに参加し、世界を体感するとともに、高石市の魅力を国内外に発信する。

### (2) 事業内容

#### 1) 2025年5月26日 マダガスカル政府代表 サディア氏 高石市訪問

- ①万博開催とともにマダガスカルパビリオンへ交流の打診を行い、政府代表のサディア氏が5月に来日されて日程の決定を行った。
- ②5月26日に高石市役所、夢良園、専稱寺を訪問いただき、万博開催期間中の交流の深化とレガシーとして、市内事業者によるマダガスカル産バニラビーンズを活用したジェラートの開発をスタートさせた。



- ③また、サディア氏よりマダガスカルに工場のある高砂香料株式会社の紹介を受けた。

さらに、昨年度からの交流をまとめたバナーを制作し、マダガスカルパビリオンに展示いただいた。



2) 2025年9月20日 アブラたかいし大ホールにてマダガスカルフェア2025を開催

①9月30日にマダガスカルのナショナルデーが予定されていたことから、その直前の土曜日である9月20日に市民参加型イベントとして「マダガスカルフェア2025」を開催した。

②会場内のホワイエでワークショップやブース出展を開催し下記団体に参加いただいた。

- ・南海福祉看護専門学校
- ・株式会社フォレストバンク
- ・高砂香料株式会社
- ・JICA 関西
- ・マダガスカルチーム (大阪・関西万博マダガスカルパビリオンメナ館長、ナリアンザ氏他)

大ホールでのステージイベントには下記の団体に参加いただいた。

- ・清風南海中高吹奏楽部 25人、羽衣学園高校吹奏楽部 15人、高石高校吹奏楽部 15人
- ・取石中学校合唱部 10人、高石中学校合唱部 5人
- ・桜田ミレイ氏 (高石市出身アーティスト) +ダンサー3人
- ・マダガスカルチーム 7人
- ・human note 25人
- ・Yuki☆DANCE 40人

時間	内容	出演者
13:30~13:40 (10分)	オープニング	桜田ミレイさん
13:40~13:45 (5分)	◆挨拶 ・高石市とマダガスカルとの交流を通じた2つの目的	畑中市長 ※民族衣装着用
13:45~13:55 (10分)	◆マダガスカルについて ・マダガスカルパピリオンの魅力、環境について	NOMENA さん (館長) ※通訳
13:55~ 14:15(20分)	◆海外に目をむけることの魅力について ・海外協力隊になろうと思ったきっかけは？ ・2年間どのような取組をしてきて、今後どのような取組をしていきたいか？ などを中心に、参加した学生に、福井さんのように海外で活躍したいなあと思ってくれる人材をつくりたいと考えております。 (海外に対する言語などのハードルが下がればいいなあと思っております)	JICA福井さん
14:15~14:20 (5分)	◆高石市について ・高石市の万博出展、高石市の環境への取り組みについて	畑中市長
14:20~14:40 (20分)	◆会場の学生からの質問タイム	JICA福井さん NOMENA さん (館長) ※通訳 畑中市長
14:40~14:50 (10分)	◆会場参加型クイズ大会 ・「国際交流」に関するクイズ	
14:50~15:00 (10分)	休憩	



時間	内容	出演者
15:00~ 15:10(10分) ※転換時間含む	◆演奏 (マダガスカルの国歌)	羽衣学園・清風南海学園・高石高校の吹奏楽部
15:10~ 15:25 (15分)	◆演劇 (ライオンキング) ◆ダンス (マダガスカル：踊るの好き好き)	キッズダンス (Yuki☆DANCE)
15:25~ 15:45 (20分)	◆歌 (1曲目) 地球兄弟 (human note、高石中、取石中、桜田さん) (2曲目) Choo Choo TRAIN (human note、桜田さん) (3, 4曲目) マダガスカルの曲 (ナリアンザチーム) (5曲目) ONE LOVE (human note、桜田さん、高石中、取石中、マダガスカルチーム、キッズもダンスで参加)	一般社団法人ウタのタネ、桜田ミレイさん 取石・高石中学校の合唱部 ナリアンザチーム

③高砂香料株式会社と株式会社フォレストバンクで環境問題への取組を含めたブースを展開。

マダガスカル産バニラビーンズを使用したジェラートの試作品発表。



### 3) 9月30日 COMMONS MATSURI に参加 (ナショナルデーは中止)

①ナショナルデーの公式行事のステージにて合唱を披露すべく、高石中学校、取石中学校の合唱部の参加が決定。前日の29日にマダガスカル代表とビジネスミーティングを開催することになり、市長、高砂香料株式会社、株式会社フォレストバンクの参加の準備を行ったが、急遽ナショナルデーは中止となった。その後、EXPO アリーナで開催される「COMMONS MATSURI」のステージに登壇できるように調整が行われ、「マダガスカルフェア 2025」にて披露したマダガスカルの皆さんと高石中学校、取石中学校の合唱部、human note によるステージが実現した。

②また、マダガスカル×高石市ブースにて市のPR およびマダガスカル産バニラビーンズのジェラートの販売も実施。いずれも長蛇の列ができた。

③マダガスカルの皆さんと「COMMONS MATSURI」に一緒に参加できたことは、相互理解と友好関係の深化につながり、本事業の大きなレガシーとなった。



### 4) 10月7日 マダガスカルナショナルデー参加

①急遽、9月30日に中止になったナショナルデーが10月7日に開催されることになった。

②副市長はじめ市の代表団が参加。

③公式行事、パビリオン訪問、懇親会に参加。

④マダガスカル関係者の皆さんとの交流が深まった。





5) 10月22日マダガスカルパビリオン ノメナ館長高石市訪問

1. 万博終了後、マダガスカルパビリオンのノメナ館長が高石市役所を表敬訪問。
  - ②高石市長がお出迎えし、歓談いただいた。
  - ③ノメナ館長からマダガスカルパビリオンのバナーの返却と御礼をいただいた。
  - ④ノメナ館長を高石市内の専稱寺にご案内し、交流を深めた。

### (3) 事業の目標に対する成果

当初の目標であった高石市民が参加する国際交流の取組は実現できた。また、高砂香料株式会社と株式会社フォレストバンクの交流など、マダガスカル産バニラビーンズをきっかけとする新たな経済交流が生まれた。さらに、マダガスカルパビリオンへの高石市のバナー展示などにより、本市のPR効果を高めることができた。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価) )

マダガスカル産バニラビーンズを活用したジェラートの商品化が実現し、現在ではふるさと納税の返礼品にも採用されてる。このビジネス交流は、今後も継続し、さらなる発展をめざしていきたいと考えている。

### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果

昨年来継続しているサコジャポンとの関係により在日マダガスカルの方々も高石市に愛着を持っている。マダガスカルフェア 2025 において市内高校吹奏楽部によるマダガスカル国歌の演奏に合わせた国歌の斉唱をマダガスカルの方々に参加いただいたことで、リハーサルから一体感が生まれた。また、市内中学合唱部によるマダガスカルの方々とステージでの共演は、こどもたちが目を輝かせて参加してくれていた。

また、ダンスやワークショップへの参加を通じてこどもたちに万博ならではの世界とのつながりを実感できる機会を提供することができた。

### (6) 特に良かった点、苦労した点

- 1) 良かった点

マダガスカル産バニラビーンズを活用したジェラートの商品化ができたことは大きな成果である。

## 2) 苦勞した点

万博という特殊な環境の中での相手国との調整及び、博覧会協会との調整に苦勞する点が多々あった。ナショナルデーの中止など想定外のこともあり、いろいろと調整に時間を要した。

## (7) 今後の展開

今後はマダガスカル産バニラビーンズのジェラートの販売による経済交流の継続を実現していきたいと考えている。また、企業版ふるさと納税を活用した財源確保も検討していきたいと考えている。

## (8) 今後の展開における課題

国による国際交流に対する施策の継続を期待している。

## 3-25 大阪府交野市 × エチオピア

### (1) 背景と目的

#### 1) プロジェクトの背景

一連の国際交流事業は、市の和太鼓郷土芸能団体サエキ囃子及び韓国太鼓奏者のチェ・ジェ Chol 氏からの交野市への提案をきっかけとして開始した。今年度は、昨年度の交流事業の実績を踏まえて、エチオピアを代表する音楽集団 Fendika Culture Center (Ethio Color) (以下、「Fendika」) と育んだ絆を継続するための取り組みを企画。昨年度に引き続き、サエキ囃子が、大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー中島さち子氏率いる KURAGE Band と共に、Fendika との音楽や文化交流を軸とした国際交流事業を実施した。

#### 2) プロジェクトの目的

大阪・関西万博を契機として、交野市とエチオピアアーティストグループの文化芸術交流や学生交流等の国際交流を促進し、地域の文化的多様性を高めるとともに、地域の子も達がグローバル社会に目を向け、地元交野の特色をしっかりと表現しうる機会を創出することを目的として、次の取り組みを実施した。

- 大阪・関西万博を契機とした交野市と世界をつなぐ音楽・国際交流の場の創出
- life beat コンサート (出演：サエキ囃子、Fendika、KURAGE Band、鼓童) への地域住民招待を通じた、互いの地域文化の理解を深める場の創出
- Fendika による市内小学校訪問・交流を通じた、地域の子もたちがエチオピアの文化や芸能文化に触れ体験する場の創出

### (2) 事業内容

#### 1) いのちの祭り～World Life Band～vol.1

日程：令和7年7月20日(日)

場所：大阪・関西万博会場内 いのちパーク



内容：万博会場内においてピアノや韓国太鼓、ジャンベ(セネガル太鼓)などの国際色豊かな KURAGE Band を筆頭に、Fendika(エチオピア)とサエキ囃子(交野市)のコラボ演奏を実施。特別出演として、KURAGE Band とサエキ囃子に関わりのある鼓童(新潟県佐渡ヶ島)も加わり迫力のある演奏となった。

## 2) life beat コンサート

日程：令和7年7月21日(月)

場所：星の里いわふね

内容：交野市の地域住民を無料招待し実施した国際交流イベント。前日のイベントと同じ出演者による演奏に加え、国立民族学博物館・総合研究大学院大学教授である川瀬慈氏を迎えトークセッションも実施。より深くエチオピアの文化に触れる機会を作る事が出来た。[来場者数：370名]



## 3) 学校訪問

日程：令和7年7月22日(火)

場所：交野市立交野みらい学園

内容：Fendika が学校を訪問し、パフォーマンスや質疑応答等を通して小学生との文化交流を実施。エチオピアのダンスを子どもたちが真似しながら一緒に盛り上がる様子や、次々に出てくる質問から、子どもたちの異文化への好奇心の高さを窺うことができた。また未来への希望と可能性を感じる場となった。[参加児童数：91名]



#### 実施スケジュール

令和7年7月18日(金)	Fendika 来日
令和7年7月20日(日)	いのちの祭り～World Life Band～vol.1
令和7年7月21日(月)	life beat コンサート
令和7年7月22日(火)	学校訪問
令和7年7月27日(日)	Fendika 帰国
令和7年10月2日(木)	Fendika より3名+ KURAGE Band, サエキ囃子がクラゲ館にてミニパフォーマンス

\* オンラインにて Fendika リーダーのメラクとは随時連絡をとり、  
今後について議論継続中

※別途、Fendika、KURAGE Band、サエキ囃子が参加し、下記の事業を実施

令和7年10月3日(金)	・中島プロデューサー、KURAGE Band, サエキ囃子メンバーがエチオピアナショナルデーに参加（中島 P は昼食迎賓会にも参加） ・ Fendika のパフォーマンスを観劇
令和7年10月11日(土)	クラゲ館にてエチオピアコーヒーセレモニーワークショップをエチオピア館とのコラボにて実施
令和7年12月9日(火)	庁内成果報告会を実施

#### 実施体制

交野市	申請主体
株式会社 steAm	本国際交流事業の全体管理、交野市やサエキ囃子のサポート事業者。また、経理やスケジュール調整・イベント運営を行う。
サエキ囃子	本国際交流事業の日本側の主軸団体。交野市の文化交流を推進する。
Fendika Culture Center (Ethio Color)	本国際交流事業のエチオピア側の主軸団体。エチオピアの伝統芸能文化交流を推進する。

### (3) プロジェクトの目標に対する成果

本国際交流事業を通じて、多くの市民が万博会場及び市内会場での貴重な異文化交流の機会を得て、エチオピアという国を身近に感じ、その文化や音楽に触れる経験ができたことは非常に大きな成果である。特に、サエキ囃子の一員として、一連の事業に主体的に携わった市民や子どもたちにとっては、この体験はかけがえのない財産となったものと考えられる。

また、Fendika の学校訪問等を通じて、子どもたちが異文化への興味を持ち、実体験としてエチオピアの音楽や文化に触れることができたことは、グローバルな視点・価値観の醸成に大きな意義があったと考えられる。同時に、地元である交野市の魅力の再確認の機会にもなった。

【参考 1】 7/21 開催 life beat コンサート 来場者アンケート結果

回答者数：215 名（うち、市民 151 名、市外：50 名、無回答：14 名）

満足度：99.5%（「とても満足」「やや満足」と回答した割合）

【参考 2】 7/22 開催 学校訪問 参加児童アンケート結果

回答者数：91 名

満足度：92.0%（「とてもよかった」「よかった」と回答した割合）

#### （4）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

万博の開催年である本年度は、会場内でのイベント実施を通じて、より多くの人々を巻き込んだ形で、交野市とエチオピアの国際交流事業を実施することができたため、交野市及びサエキ囃子の知名度向上に寄与したとともに、今後の交流人口の増加にも繋がるものと考えられる。

また、本国際交流事業を通じて得たエチオピア（Fendika・在日大使館等）との繋がりが、サエキ囃子や株式会社 steAm との関係性をこれからも維持継続できるよう努め、文化・音楽交流を続けていきたい。併せて、本国際交流事業では、特に小学生を中心とした交流を重点的に実施した。子どもたちが今回得た貴重な経験を活かし、将来的にグローバル社会で活躍すること、また、その経験を財産として大人になった時に次世代へ伝えていってくれることを期待する。

#### （5）特によかった点、苦労した点

##### 1) 良かった点

- 各種イベントの実施により、市民や子どもたちが Fendika のパフォーマンスを通じてエチオピアの音楽や芸能文化に触れる機会を得られたこと
- 令和 6 年度、7 年度の 2 年連続で国際交流プログラムを実施したことにより、より多くの市民や子どもたちにエチオピア文化・音楽に触れる機会を提供できた。また、昨年度から引き続き同プログラムに参加された人たちにとっては、より深いかたちで文化交流が可能になったこと

##### 2) 苦労した点

- イベント運営における Fendika との文化や感覚の違い等による調整の困難さ、言葉の壁による意思疎通の不便さなど

## (6) 今後の展開

### 1) 今後の課題

- 持続的な交流を図っていくための資金確保
- 地域住民がより近くでエチオピア文化に触れる機会の創出と参加促進

### 2) 想定される事業内容

- エチオピアと交野市の子ども達同士の交流
- 他都市との連携を踏まえての国際交流ツアー
- 食文化の交流(COFFEE セレモニー等)
- 交野市のベンガラ染め（交野市の地下水くみ上げ時に出る汚泥を利用したベンガラ）とエチオピアの伝統織など工芸品でのコラボ

## (7) 持続的に展開するための工夫

サエキ囃子と交野市の連携強化を図った上で以下のとおり実行していきたい。

- Fendika 代表のメラク氏と連携を図り、子ども達同士の交流  
→ 時差の問題はあるが、オンライン上であれば今回交流できなかった交野市内の小中学校との交流が可能
- サエキ囃子×KURAGE Band×鼓童での Fendika 日本ツアーの実施  
→ 今年度までの内閣官房の補助金が来年度以降見込めないので、別の助成金等を模索し、Fendika の日本ツアーを企画する

上記の点を踏まえて 2025 大阪・関西万博以降もこの繋がりを絶やすことなく、民間と行政と連携しながら交流を深めていきたい。

## 3-26 奈良県橿原市 × ブルキナファソ

### (1) 背景と目標

#### 背景と目的

目まぐるしく変化する世界情勢の中、固定観念にとらわれないグローバルな視点を育むことは、次世代を担う子どもたちにとって不可欠な要素となっている。本国際交流事業は、2025年大阪・関西万博という世界的な祭典を絶好の機会と捉え、子どもたちが異文化を真に理解し、共感する心を育むための取り組みとして企画された。

#### 目標

本事業は、一過性のイベントで終わることなく、参加した子どもたちの心に深く刻まれ具体的な学びや行動変容へと繋がることを目指した。

- ・ 市内小学生が大阪・関西万博のナショナルデー公演に参加する。
- ・ プロセスを通じて、ブルキナファソの文化に触れる。
- ・ 国際的な感覚を養い、異文化を持つ人々との協働を通じてコミュニケーション能力を向上させる。

### (2) 事業内容

#### 事業1: 関西万博でのブルキナファソ・ナショナルデーのオペラへの参加

- ・ 日時: 2025年8月4日 13:00~16:30
- ・ 場所: 関西万博ナショナルデーホール
- ・ 参加者: 約160名(内訳: 児童72名、保護者約80名、相手国出演者8名)
- ・ 主催・協力: 橿原市立金橋小学校、作曲家(藤家溪子氏)
- ・ 交流内容: 作曲家の藤家溪子氏や出演者との数回にわたるオペラ公演練習
- ・ ナショナルデーの公開リハーサルの実施
- ・ 現地の歌や踊りを収めた映像の上映。
- ・ ブルキナファソ出演者の橿原市の観光

#### 事業2: ブルキナファソの楽器を使ったワークショップ

- ・ 実施概要: 金橋小学校5年生に対して、ブルキナファソの太鼓のワークショップを行い、市内音楽会で太鼓の演奏を行う。
- ・ 日時: 2025年11月14日 9:00~12:00
- ・ 場所: 橿原市橿原文化会館、金橋小学校
- ・ 参加者: 全82名(内訳: 児童79名、相手国参加者2名、教員1名)
- ・ 指導者: 藤家溪子氏(作曲家)
- ・ 交流内容: ブルキナファソの太鼓6台を使用し、奈良の童歌の編曲を藤家さんにして

頂き、他にも様々な楽器と組み合わせて合奏を行う。藤家さんも数回練習に参加していただいた。

市内音楽会の発表以外にも、校内での演奏も行う。

事業 3: ゲストティーチャーによる万博と地元とのつながりについての講演

- ・ 日時: 2025年9月5日 9:35~10:20
- ・ 場所: 金橋小学校 図書室
- ・ 参加者: 全52名 (内訳: 児童 69名、教員 2名、講演関係者 2名)
- ・ 講演者: 西垣和俊氏
- ・ 交流内容: 西垣靴下の商品と思いやりの心についての講演 (奈良の地場産業, 万博のユニフォームに採用と万博への参加について)



学校での練習風景



公開リハーサル前の歌の練習風景



ナショナルディでの記念写真



ブルキナファソ大使の練習場所への激励の訪問

### (3) 事業の目標に対する成果

本事業の成果を客観的に評価するため、初期に設定した目標と実際の達成状況を検証する。評価は、アンケートから得られた意見から行った。

	設定目標	達成成果
目標①	市内小学生が大 阪・関西万博のナショナルデー公演に参加する プロセスを通じて、ブルキナファソの文化に触れる。	アンケート結果より、参加児童・保護者の大多数が異文化への関心向上と交流の価値を実感（詳細は後述）。
目標②	国際的感覚の醸成、コミュニケーション能力の向上	アンケート結果より、関心はかなり高まったものの、交流の時間が少なかった（アンケートより）

#### （４） 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

保護者：「今後もブルキナファソと交流や関わりを持ちたいと思いますか」という問いに対し、「もちたい」「できればもちたい」と回答した割合が大多数を占めた。

児童：「これからこのような国際交流のイベントがあれば参加したいですか」という問いに対し、「必ず参加したい」「できれば参加したい」という前向きな回答が圧倒的多数を占めた。ブルキナファソとの間に、イベント参加者という関係性を超えた、人的・文化的関係を育んだ。

#### （５） こども（参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果

参加した子どもたちの内面に深く働きかけ、万博という大きな舞台で成果を発表するという一連のプロセスが、子どもたちの成長に大きく関係した。その効果は、児童および保護者から寄せられた感動的なコメントに如実に表れている。

「披露し終わった時にやりきったと気持ちが1番先に来た」

--- 児童アンケートより

「万博の舞台に立てた事が子供にとって一生の思い出と自信になったと思います。」

--- 児童アンケートより

「練習を通じて友達と絆がより深まったから」「みんなと協力してダンスや歌を歌うのがとても楽しかった」

--- 児童アンケートより

「前まで知らなかった国のことを知れたし、一生忘れない思い出になると思ったから」

「ブルキナファソの国のことがすごくわかったから」

--- 保護者アンケートより

「うちの子は、あまり表にでない方ですが、今回自ら参加すると言い、途中で投げ出さず最後までやり遂げた。」 --- 保護者アンケートより

これらの声は、一連の体験が、子どもたちの自己肯定感、協調性、やり抜く力といった「非認知能力」の育成に極めて高い教育効果を発揮したことを示している。共通の目標に向かう過程で「友情」が生まれ、ブルキナファソという国への「知的好奇心」も加わり、そして練習の困難を「乗り越える経験」そのものが、かけがえのない財産となったのである。

## (6) 特に良かった点、苦勞した点

### 良かった点

プロとの協働体験 万博で実際に公演を行う作曲家やパフォーマーから直接指導を受けという体験は、極めて非日常的で質の高いものであった。プロフェッショナルの情熱と技術に触れることで、子どもたちのモチベーションは最大限に引き出され、芸術への興味・関心を深める絶好の機会となった。

「参加型」のプログラム設計 専門家のパフォーマンスを一方向的に鑑賞するのではなく、子どもたち自身が演者として舞台を「作り上げる」ことができた。オリジナルダンスの創作など、主体性が求められる活動を通じて、子どもたちは責任感を育み、仲間と協力して困難を乗り越えることで、何物にも代えがたい大きな達成感を得ることができた。文化への多角的なアプローチ 音楽やダンスといった芸術活動だけでなく、昨年度の最初の交流会で国の紹介、クイズ、給食などを通じてブルキナファソという国を多角的に学ぶ機会を提供した。これにより、子どもたちはパフォーマンスの背景にある文化や歴史にも興味を抱き、知的好奇心が大いに刺激された。

### 苦勞した点・改善点

#### 参加者間の直接的コミュニケーションの機会

パフォーマンスの練習に多くの時間を割いた一方で、子どもたちとブルキナファソからの参加者が個人的に対話する機会は限られていた。

継続的な参加意欲と周りの環境の維持 数ヶ月にわたる練習は、子どもたちにとって決して楽な道のりではなかった。子どもたちだけでは、保護者や金橋小学校の教職員にも、練習場所の確保や長期休暇中の練習日時の設定において多くの苦勞があった。

## (7) 今後の展開

オンラインでのやり取りができるもの

### 子ども同士の直接交流

- ・ 同年代の子どもたちとのオンライン交流会
- ・ 翻訳アプリを活用した対話セッション
- ・ 手紙や作品を交換する文通プログラム

### 多様な文化体験

- ・ 伝統的な遊びやスポーツの体験会

- ・ 互いの国の楽器の紹介や合同演奏会
- 言語交流
- ・ 英語や現地の言葉を使った簡単なコミュニケーション活動

## (8) 今後の展開における課題

今後の事業を成功裏に継続していくためには、熱意や希望だけではなく、克服すべき主要な課題を冷静に認識することが不可欠である。これまでの分析に基づき、特に以下の2点が重要な課題ととして挙げられる。

- 交流の深化：『イベント参加』から『個人的な関係構築』へこれまでの交流は、市が企画したイベントへの「参加」が中心であった。今後の最大の課題は、この関係性をいかにして参加者同士の「個人的な関係構築」へと質的に深化させるかである。「6.2 苦労した点」でも指摘されたコミュニケーション機会の不足を解消し、ペアでの共同作業や少人数グループでの対話セッションなど、よりパーソナルな繋がりが生まれる仕組みをプログラムに意図的に組み込む必要がある。
- 万博後のモチベーション維持と事業の自走化 大阪・関西万博というイベントは、参加者にとって今までにない高いモチベーションにつなげることができた。この大きな目標が失われた後、参加者の関心と参加意欲をいかに維持するかが大きな課題となる。また、国の支援事業から自治体主導の「自走」した取り組みへと移行するにあたり、安定した財源の確保と、持続可能な運営体制の確立が不可欠である。

## 3-27 広島県広島市 × カメルーン

### (1) 背景と目標等

#### 1) 背景と目的

- ・広島市は、「国際平和文化都市」を理想の都市像として掲げ、平和文化を市民社会に根付かせ、平和意識を醸成していくこと、すなわち「平和文化の振興」を図る取組に注力している。こうした取組は広島市だけで成し得るものではなく、世界中の各都市が国際規模で連携して「平和文化の振興」に取り組んでいく必要がある。このため、広島市長が会長を務める「平和首長会議」では、世界中の都市と「平和」についての価値観を共有しながら、連帯して「平和文化の振興」に取り組んでいるところである。
- ・こうした中、日本におけるバウムクーヘン発祥の地である広島をアピールするために令和6年3月に設立された「広島バウムクーヘン振興協議会」から、世界恒久平和の実現に貢献するために、まずはアフリカの国々に対し広島のパウムクーヘンを広めていきたいと考えており、何らかの支援を本市にお願いしたいとの申し出があった。この申し出を受けた本市としては、アフリカにおいて最も加盟都市が多いカメルーン共和国を皮切りとしてアフリカにおける平和首長会議加盟都市の拡大を図るべく、万博国際交流プログラムを活用することとした。
- ・2030年までのSDGs達成のプラットフォームである大阪・関西万博において本事業が行われることにより、SDGsが目指す「誰一人取り残さない」社会の実現と、「平和文化の振興」を通じて本市が目指す「平和」、すなわち、「単に戦争がない状態にとどまらず、良好な環境の下に人類が存在し、その一人一人の尊厳が保たれながら人間らしい生活が営まれている状態の実現」が高度に調和していくことが期待できるとともに、大阪万博が掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現に向けた「いのちをつむぐ」というテーマに沿った、バウムクーヘンが紡ぐ笑顔の輪を世界に広げる交流が推進できるものと考えている。

#### 2) 目標

- ・万博国際交流プログラム2年度目となる令和7年度においては、本プログラムに対する関係者の理解が深まった結果、広島市立似島中学校の生徒がカメルーン共和国のナショナルデーである9月16日に大阪・関西万博を修学旅行先として訪問し、カメルーン共和国と連携してバウムクーヘンイベントに従事することとなった。また、これに関連してナショナルデーまでにカメルーン関係者を似島に招き、似島中学校の生徒と交流を深めることになっている。このように未来を担う子どもたちが異文化に間近に接し協働することは、日本におけるバウムクーヘンの発祥の地である似島で学んだことを誇れる体験となり、これらの体験は郷土愛の醸成、ひいては将来の地域活性化の素地となるものである。

### 【具体的な目標】

- 広島市内関係事業者・学校等の主体的なイベント参加（10者以上）
- カメルーン共和国関係者の参加（10名以上）
- 参加者アンケートの実施（100件以上）

## （2）事業内容

### 1)事業名 「万博イベントに向けたカメルーン関係者と似島中学生との交流会」

#### ①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

- 4月 カメルーンとの交流に係る年度計画の策定
- 5月 似島中学校との協議  
カメルーン大使館との協議（エプンデー等書記官の似島中訪問決定）
- 6月 交流会における関係者の役割確認、意見交換の内容検討
- 7月 交流事業実施（7月3日）

#### ②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

- ・主催者：広島baumクーヘン振興協議会  
会長 兼田正人（株式会社櫟代表取締役）  
会員 株式会社櫟、株式会社にしき堂、株式会社八天堂、広島大学

#### 【協議会の主な役割】

- ・事業の企画及び事業実施に向けた総合調整
- ・カメルーン大使館との協議
- ・在日カメルーン人協会との協議
- ・カメルーン関係者の招へい

※イベント実務の一部を専門事業者（(株)アシスト、アオシママシンサービス）に委託

- ・協力：広島市（企画総務局地域活性化調整部地域活性推進課）
- ・相手国窓口：カメルーン大使館（エプンデー等書記官）
- ・在日カメルーン協会窓口：ネビバンガ・エビナ氏

#### ③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日時：令和7年7月3日（水） 13時10分～15時30分

場所：広島市立似島中学校

取組内容：9月16日の万博カメルーン・ナショナルデーイベントに修学旅行の一環として参加する似島中学校2年生の生徒と、万博カメルーン関係者との交流会の開催

#### 【カメルーン共和国との交流概要】

- カメルーン大使館一等書記官あいさつ
- 在日カメルーン協会会員による講演会
- 9月16日の万博イベントに向けた意見交換
- カメルーンの国民食「ンドレ」を使ったbaumクーヘンづくり体験

参加者：計26人

- (内訳) ・似島中学校 教諭4人、生徒11人  
 ・カメルーン大使館 一等書記官 エプンデ・ペンダ・アドルフ氏  
 ・在日カメルーン協会 ネビバンガ・エビナ氏  
 ・イベント運営9人

報道対応：なし（学校行事として実施したため）

写真：

・エプンデー一等書記官挨拶



・在日カメルーン協会会員による講演会



・9月の万博イベントに向けた意見交換



・「ンドレ」のバウムクーヘンづくり体験



・「ンドレ」苗木の同中学校による育成



・ <集合写真>



④効果

A:自治体内への波及効果

・日本におけるバウムクーヘン発祥の地である似島に所在する似島中学校の生徒が、カメルーンの現状を学んだ上で、世界恒久平和への願いを形にするための大阪万博会場でのカメルーン・ナショナルデー交流イベントの企画案を話し合ったほか、「ンドレ」入りバウムクーヘンを焼き上げカメルーン関係者との交流の中できともに味わうことなどを通じて、郷土愛の醸成につながった。

B:実施により達成できた成果

・9月16日に実施予定の大阪万博会場でのカメルーン・ナショナルデー交流イベントに参加する生徒とカメルーン関係者との交流が深まったほか、同イベントにおける企画について生徒自身が主体的に議論することにより、イベントへの参加意識が高まった。

C:相手国への波及効果

・本イベントの開催に先立ち、広島市及び広島バウムクーヘン振興協議会のスタッフが4月17日と5月30日にカメルーン大使館を訪問し、ピエール・ゼンゲ特命全権大使と交流事業について協議するとともに、試作した「ンドレ」入りバウムクーヘンを召し上がっていただいたところ大いに満足され、急ぎよ、本事業とは別に、6月20日に帝国ホテルで開催されるカメルーン大使館主催行事「53rd Edition of the National Day of the Republic of Cameroon」での「ンドレ」入りバウムクーヘン提供

が決定するなど、本市とカメルーンとの関係性を一層深めることができた。

2)事業名 「カメルーン食材「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくりイベント」

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

- 4月 カメルーンとの交流に係る年度計画の策定
- 5月 イベント実施事業者との協議  
カメルーン大使館との協議
- 6月 イベント会場管理者との協議  
イベント骨子決定（バウムクーヘン焼き体験、フォトコンテスト）
- 7月 広報打合せ、イベント詳細打合せ
- 8月 イベント実施（8月17日）

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

- ・主催者：広島バウムクーヘン振興協議会  
会長 兼田正人（株式会社櫟代表取締役）  
会員 株式会社櫟、株式会社にしき堂、株式会社八天堂、広島大学

【協議会の主な役割】

- ・事業の企画及び事業実施に向けた総合調整
- ・カメルーン大使館との協議
- ・在日カメルーン人協会との協議、講師招へい
- ・イベント会場管理者との調整

※イベント実務の一部を専門事業者（㈱アシスト、アオシママシンサービス）に委託

- ・共催：広島市（企画総務局地域活性化調整部地域活性推進課）
- ・協力：独立行政法人 国際協力機構 中国センター
- ・相手国窓口：カメルーン大使館（エブンデー等書記官）
- ・在日カメルーン協会窓口：ネビバンガ・エビナ氏

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日時：令和7年8月17日（日） 13時～16時

場所：無印良品 広島アルパーク

取組内容：カメルーンを紹介する講演会やカメルーンの国民食「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり体験（2部入れ替え制、各先着30人）、カメルーンフレンド・フォトコンテストの開催

【カメルーン共和国との交流概要】

- 在日カメルーン協会会員による講演会
- カメルーンの国民食「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり体験
- カメルーンフレンド・フォトコンテストの開催

参加者：計241人

（内訳） ・一般参加者 226人

(うち高校生以下 128人)

- ・在日カメルーン協会 ネビバンガ・エビナ氏
- ・イベント関係者 14人

報道対応：【広島市】・市政記者クラブ プレスリリース（8月1日）

- ・広報紙「広報ひろしま 市民と市政」8月1日号 記事掲載

写真：

- ・主催者挨拶

- ・在日カメルーン協会会員による講演会



- ・「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり体験



- ・カメルーンフレンド・フォトコンテスト



#### ④効果

##### A:自治体内への波及効果

- ・本事業は、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向け世界の10,000都市との連帯を目指す平和首長会議の活動を推進する広島市と、広島バウムクーヘン振興協議会が連携して、アフリカにおいて加盟都市が最も多いカメルーンと市民レベルでの草の根の交流を推進する契機とするために、カメルーンを身近に感じていただくための講演会と、カメルーンの国民食「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり、「カメルーン愛」を全身で表現する写真撮影会「カメルーンフレンド・フォトコンテスト」を組み合わせ一連のイベントとして実施したものである。
- ・広島が日本における発祥の地であるバウムクーヘンと、カメルーンの国民食である「ンドレ」を組み合わせることで、広く広島市民の興味を引く内容となっており、当日は200人を超える一般来場者の参加を得て、大変盛況であった。また、当日開催した「カメルーンフレンド・フォトコンテスト」は、特設ブースを設けカメルーン応援グッズやホワイトボードを用意して参加者に「カメルーン愛」を全身でPRする写真をプロカメラマンが撮影し、優秀作品5組を9月に実施する万博ナショナルデーイベントにて披露して来場者のシール投票で「ベストフレンド」を決定するという趣向であり、本事業が9月のイベントの告知を兼ねるものとなっている。万博イベント告知を兼ねつつバウムクーヘンを軸としたカメルーンとの交流イベントを実施したことで、参加した子供たちや保護者、ひいては広島市民へのカメルーンに対する愛着の醸成に一定の効果があったものと受け止めている。

##### B:実施により達成できた成果

- ・イベント参加者を対象として実施したアンケート調査では、回答者の78.9%がイベントに参加して「非常に良かった」「良かった」と回答しており、総じて高い満足度であった。また、イベントに参加しようと思った理由としては「カメルーンに興味があった」(26.3%)、「国際交流に興味があった」(21.1%)が多く挙げられ、イベントに参加して期待したことが得られたかとの問いに対しては63.1%が「期待以上のことが得られた」「期待通りだった」との回答があり、「わからない」(26.3%)を大きく上回った。
- ・また、今回のイベントに参加して大阪・関西万博に対する関心が高まったかという問いに対しては、回答者の68.4%が「非常に高まった」「高まった」と回答しており、万博への関心を喚起することについても相応の効果があった。
- ・さらに、本イベントは9月に大阪・関西万博で実施する「カメルーンフレンド・フォトコンテスト シール投票」の参加者エントリーを兼ねており、イベント内で積極的な参加呼びかけを行った結果、大阪・関西万博の会場で写真を掲出するという条件があるにも関わらず33組もの参加があり、本協議会による選考の結果、このうち5組の入賞を決定し、9月のシール投票を予定通り実施できることとなった。

##### C:相手国への波及効果

- ・多くのイベント参加者の前で在日カメルーン協会会員によるカメルーンを紹介の講

演会を行ったほか、カメルーンや「ンドレ」を紹介するパネル展示を行うことで、普段なかなか知ることのできないカメルーンを広島市民に身近に感じていただくことができ、また、カメルーンがアフリカにおいて平和首長会議の加盟都市が最も多い国であることを紹介することで、カメルーンが平和を希求する国であることを周知することができた。本イベントを通じて、国際平和文化都市として核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を目指す広島市との連帯を具体的に示すことができたことは、カメルーンにとっても有益であったものと受け止めている。

### 3)事業名 「万博会場におけるカメルーン・ナショナルデー交流イベント」

#### ①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

- 4月 カメルーンとの交流に係る年度計画の策定  
似島中学校訪問・修学旅行実施に係る協議
- 5月 イベント実施事業者との協議  
大阪万博会場視察・万博関係者との協議  
カメルーン大使館との協議
- 6月 イベント実施場所の検討及び実施場所管理者との協議  
イベント概要の決定（トークショー、バウムクーヘン焼き体験、フォトコンテスト投票）  
イベント実施場所の決定（デジタルウォレットパーク）
- 7月 イベント詳細打合せ
- 8月 イベント詳細打合せ、広報打合せ
- 9月 イベント実施（9月16日）

#### ②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

- ・主催者：広島バウムクーヘン振興協議会  
会長 兼田正人（株式会社櫟代表取締役）  
会員 株式会社櫟、株式会社にしき堂、株式会社八天堂、広島大学

##### 【協議会の主な役割】

- ・事業の企画及び事業実施に向けた総合調整
- ・カメルーン大使館との協議
- ・トークショー参加者の招へい
- ・イベント会場管理者との調整

※イベント実務の一部を専門事業者（(株)アシスト、アオシママシンサービス）に委託

- ・共催：広島市（企画総務局地域活性化調整部地域活性推進課）
- ・協力：独立行政法人 国際協力機構 中国センター  
ユーハイム似島歓迎交流センター、シャトレーゼ ガトーキングダムせとうち
- ・相手国窓口：カメルーン大使館（エプンデー一等書記官）
- ・在日カメルーン協会窓口：ネビバンガ・エビナ氏

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日時：令和7年9月16日（火） 13時～15時

場所：大阪・関西万博会場内「EXPO 2025 デジタルウォレットパーク」

取組内容：カメルーン関係者によるトークショーやカメルーンとの交流の経緯を記録した動画の放映、カメルーンの国民食「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり体験、カメルーンフレンド・フォトコンテストシール投票、万博大屋根リングジオラマ制作ワークショップ（先着120人）の開催

【カメルーン共和国との交流概要】

- カメルーン関係者によるトークショー
- カメルーンの国民食「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり体験
- カメルーンフレンド・フォトコンテスト シール投票
- 万博大屋根リングジオラマ制作ワークショップ
- カメルーン応援特設フォトブース設置

参加者：計147人※

- （内訳）
- ・本イベント一般参加者 98人  
（うち高校生以下 11人）
  - ・トークショーゲスト 4人
  - ・似島中学校生徒及び引率者 16人
  - ・広島大学学生ボランティア及び引率者 3人
  - ・イベント関係者 14人
  - ・カメルーン アタンガナ商業大臣一行 12人

※この他、デジタルウォレットパークの一般利用者として同日、270人の来場あり。

報道対応：【広島市】・市政記者クラブ プレスリリース（9月8日）

写真：

・主催者挨拶



・似島中生徒紹介



・カメルーン関係者等によるトークショーの実施



・「ソンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり体験の実施



・会場の様子（ジオラマ制作ワークショップ、ソンドレ展示）



・カメルーンのアタンガナ商業大臣の視察対応



- ・ イベント運営を行った似島中学校生徒（集合写真）



- ・ カメルーン・パビリオンに後日掲出されたパネル

万博国際交流プログラム(令和7年度内閣官房事業)  
Expo International Exchange Program (2025 Official Cabinet Secretariat Project)

**カメルーン×広島市**  
Cameroon×Hiroshima

**バウムクーヘンがつなく平和文化**  
Bringing to the Culture of Peace Through Baumkuchen

カメルーンは、核兵器廃絶に向けて世界の都市が連携する「平和首長会議」の加盟都市がアフリカで最も多い国です。万博開催を契機として、日本におけるバウムクーヘン発祥の地である広島市と、世界平和を願うカメルーンとの交流により、カメルーンの国民食「ンドレ」を使った、世界でここにはない特製バウムクーヘンが誕生しました。

9月16日の万博カメルーンデーには、特製バウムクーヘンを味わった参加者約120人が平和への思いを込め、木片をバウムクーヘンに見立てて万博ジオラマづくりに取り組みました。

Cameroon is home to the most African member cities in Mayors for Peace, a network of cities working in cooperation toward nuclear weapons abolition. Inspired by the Expo being held in Osaka, we have created a regular and unique baumkuchen. This confection, born of exchanges between Hiroshima and Cameroon, contains baumkuchen, a German confection that was introduced to Japan in Hiroshima, and ndole, a traditional ingredient from Cameroon, a country that prays for peace.

On Cameroon Day (Sept. 16), 120 people who tried this very special baumkuchen wrote their feelings on peace on small blocks that were then used to create a diorama of the Giant Robot Ring at the Expo.

**キク科の植物「ンドレ」**  
Ndole, a spicy vegetable from the Asteraceae family

**「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくり**  
Making Baumkuchen with Ndole

**カメルーン大好き!「カメルーンフレンド・フォトコンテスト」**  
Cameroon Lovers' Friendship Photo Contest

**コンテスト入賞作品**  
Awarded Entries

**ベストカメルーンフレンド賞**  
"Best Friend of Cameroon Award"

**イベント来場者が力を合わせてつくった「万博ジオラマ」**  
"The Expo Diorama Made by Visitors Working Together"

広島バウムクーヘン振興協議会  
Hiroshima Baumkuchen Promotion Council

#### ④効果

##### A:自治体内への波及効果

・本イベントは、7月3日に実施した「万博イベントに向けたカメルーン関係者と似島中生徒との交流会」及び8月17日に実施した「カメルーン食材「ンドレ」を使ったバウムクーヘンづくりイベント」の両イベントでの取組の成果を総合的に発揮する場と位置付けており、前述のイベントでの自治体内への波及効果と同様の効果があったことに加え、万博訪問者に対して、広島市が「日本におけるバウムクーヘン発祥の地」であること、そしてその発祥の地である似島の中学校の生徒がイベントに参加していることをPRすることを通じて、これまであまり知られていなかった本市の隠れた魅力を効果的に発信することができた。

・また、本イベントで放映した動画において、風光明媚な似島の魅力や令和6年4月に開業した宿泊施設「ユーハイム似島歓迎交流センター」を紹介したほか、トークショー参加者の著書を題材としたミュージカル「バウムクーヘンとヒロシマ」が本年11月16日に広島市内で開催予定であることを広くPRすることにより、今後の本市への誘客促進に向けた効果も期待できるものと考えている。

##### B:実施により達成できた成果

・イベント参加者を対象として実施したアンケート調査では、ステージプログラムについては回答者の89.8%が、また参加型プログラムについては87.8%が「非常に良かった」「良かった」と回答しており、総じて高い満足度であった。また、イベントに参加しようと思った理由としては「国際交流に興味があった」(49.0%)、「カメルーンに興味があった」(40.8%)が多く挙げられており、広島で8月に実施したイベントと比べて、万博参加者は国際交流に高い関心を示していることが示唆された。イベントに参加して期待したことが得られたかとの問いに対しては83.7%が「期待以上のことが得られた」「期待通りだった」との回答があり、広島で8月に実施したイベントと比べて、「わからない」(6.1%)と感じた参加者が大幅に少なかったことから、万博会場における参加者の期待に相当程度、応えることができたものと評価している。

・また、今回のイベントに参加して大阪・関西万博に対する関心が高まったかという問いに対しては、回答者の87.7%が「非常に高まった」「高まった」と回答しており、これも広島でのイベントと比べて高評価となっており、実際に万博を訪れた参加者はその意義を十分に認識していることが推察された。

##### C:相手国への波及効果

・本イベントの成果を含む本市とカメルーンとの交流状況をまとめたパネルを新たに作成し、10月初めから万博会期末まで、カメルーン・パビリオンにて掲出していた。万博終了後は、カメルーン大使館にて同パネルを展示することとされており、広島とカメルーンとの交流の様子が形として残ることは大きな成果であったと受け止めている。

・また、カメルーン・ナショナルデーに参加するために来日したアタンガナ商業大臣

が本イベントを視察し、「ンドレ」を使ったバウムクーヘンをご試食いただいたほか、商業大臣をお迎えしての博覧会協会主催午餐会や、同商業大臣主催のディナーカクテルパーティーに、それぞれ本市が招待されるなど、本市とカメルーンとの絆が一層深まったことが確認できた。

### (3) 事業の目標に対する成果

#### 【具体的な目標に対する成果】

#### ○広島市内関係事業者・学校等の主体的なイベント参加（10者以上）

10者 →達成

(順不同)

- ・株式会社櫛（菓子製造業）
- ・株式会社にしき堂（菓子製造業）
- ・株式会社八天堂（菓子製造業）
- ・株式会社ボンヌフ洋菓子研究所（コンサルティング）
- ・デジタルハリウッド STUDIO 広島（クリエイター養成所）
- ・ユーハイム似島歓迎交流センター（宿泊施設）
- ・シャトレーゼ ガトーキングダムせとうち（宿泊施設）
- ・広島市立似島中学校
- ・広島大学
- ・独立行政法人 国際協力機構 中国センター

#### ○カメルーン共和国関係者の参加（10名以上）

14名 →達成

(順不同)

- ・カメルーン大使 ゼンゲ・ピエール
- ・カメルーン大使館 一等書記官 エブンデ・ペンダ・アドルフ
- ・在日カメルーン人協会会員 ネビバンガ・エビナ氏
- ・漫画家 星野ルネ氏（カメルーン出身漫画家）
- ・映画監督・お笑い芸人 武内剛氏（父親がカメルーン人）
- ・アタンガナ商業大臣一行（カメルーン人9名）

#### ○参加者アンケートの実施（100件以上）

68件 →未達成

※アンケートは100件以上配布したが、実施件数を回収数と捉え、未達成とした。

なお、回収分を基に分析を行い、大きな支障は生じなかった。

(内訳)

- ・8月17日イベント アンケート回収数 19件
- ・9月16日イベント アンケート回収数 49件

#### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価) )

・この度のカメルーンとの交流を通じて、カメルーンが平和を希求する国であることを改めて認識することができ、アフリカにおける平和首長会議の加盟都市数が最も多い国であることの素地を垣間見ることができた。カメルーン大使からは平和首長会議加盟都市の活動に関する提案もいただき、この度の交流は今後の平和首長会議加盟都市拡大に向けた取組を進める上で大いに役立つものとなった。

・また、この度の交流の特徴の一つは、広島バウムクーヘン振興協議会という民間団体が中心となって様々な取組を推進してきた点にあるが、今後、関係事業者が連携してカメルーン産食材の活用を具体的に検討する意向が同協議会から示されるなど、民間団体ならではの柔軟性を生かした継続的な取組も期待される場所である。

・さらに、広島大学では、この度の交流を契機としてンドレ入りバウムクーヘン作りに複数の学生が携わり、独自のアンケート調査などを通じて成果を深掘りする活動を行ったほか、今後とも、学生が中心となって様々な形のバウムクーヘンの開発について継続して検討していく可能性も示唆されており、前述の民間団体の取組との連携も期待される場所である。

・これらは大阪・関西万博閉会後も継続して活動可能なものであり、カメルーンとの交流のレガシーとなるよう、本市としても可能な範囲で支援していきたいと考えている。

#### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

・本年度の交流の広島市側の主人公は日本におけるバウムクーヘンの発祥の地である似島に立地する似島中学校の生徒である。普段接することのできないカメルーン大使館の一等書記官とバウムクーヘン作りなどを通じて笑顔で交流したほか、事前準備を重ねて9月16日の万博会場でのナショナルデーイベントに修学旅行の一環として参加し、イベントを成功に導くなど、この度のカメルーンとの交流イベントに関わらなければ決して体験できなかった貴重な経験ができ、生徒たちにとって大きな財産となった。

・また、カメルーンの国民食とされるキク科の植物であるンドレの苗木を似島中学校の校庭で育て、それをイベント会場で展示するようにすることで普段の学校生活の中で生徒がカメルーンとの交流を意識するよう促したところであるが、学校側の計らいにより、本事業終了後も引き続き、似島中学校でンドレを育てていただけることになり、こうした取組はカメルーンとの交流の象徴として次世代にバトンをつなげる契機ともなるものと考えている。

・このほか、8月17日のイベントで実施した、こどもを対象としたバウムクーヘン焼きイベントでは普段まず接することのないンドレの現物に触れることができ、「カメルーンフレンド・フォトコンテスト」に入賞した家族も含め、多くのこどもたちにカメルーンと広島バウムクーヘンを通じた交流を心から楽しんでいただけたものと自負している。こうした経験は、広島が日本におけるバウムクーヘン発祥の地であるというエピソード

とともに、こどもたちのシビックプライドの醸成に大いに寄与するものであったと考えている。

## (6) 特に良かった点、苦労した点

### 1) 良かった点

・9月16日の万博会場でのカメルーン・ナショナルデーイベントの実施場所の検討に当たり、似島中学校側の日程の都合もあり、非常にピンポイントな形で使用可能な会場を探さざるを得ず、会場探しに大変苦慮していたところ、万博交流事務局から適切な会場の紹介を受けることができ、大いに助けられた。

・交流事業の企画・実施に当たり、こうした万博交流事務局のサポートは大変心強かった。また、経費面でいえば、自治体が関係予算を組まなくても直接、万博交流事務局が自治体を經由せず支出を行うことができるスキームは大変良かった。こうしたスキームがなければ、本市のような民間活力を主体とした万博国際交流プログラムの企画・実施は難しかったと感じている。

### 2) 苦労した点

・カメルーン側の交流窓口であるカメルーン大使館との連絡調整は主にメールでのやり取りが中心であったが、大使館側の協議状況を適切に把握するためには本市側からのこまめな連絡を心がける必要があり、要領を得るまでは気苦労が多かった。そうした中、節目においては大使館を直接訪問して膝詰めの協議を行ったところ相互の認識が格段に深まり、直接的なコミュニケーションの効果を再認識した。

また、カメルーン大使館がアレンジする関係行事に招待していただけることは大変名誉ではあったが、その案内が直前となることが多く、いくつかの行事には結果として参加できなかったことは心残りとなった。

・これらの苦労は、連絡調整に関する日本国内での一般常識的な感覚を前提として協議に臨んだことが要因となったと推察されるが、こうしたことも異なる文化的背景をもつ組織と交流する際の留意点としてよい経験となったものと受け止めている。

## (7) 今後の展開

・平和首長会議加盟都市拡大は、10,000都市の加盟に向けてすでに自走する形で継続的に取り組んでおり、その中でこの度のカメルーンとの交流の成果が生かせるものと考えている。

・民間事業者や大学による取組については、その触媒となる、この度の交流事業の主体となった広島バウムクーヘン振興協議会の動きを今後とも注視し、引き続き、可能な範囲で連携に取り組んでいく。

## (8) 今後の展開における課題

・万博国際交流プログラムの活用により市側の予算措置がなくとも様々な民間主体の取組を実施できたことは大きな成果であったが、民間主体の取組を継続していくにはある程度、商業ベースでの採算性を考慮していく必要があり、そうした場合の行政の関わり方については一定の工夫が必要だと考えている。

## 3-28 徳島県上勝町 × ナイジェリア

### (1) 背景と目標等

本報告書は、令和7年度内閣官房事業 万博国際交流プログラムに基づき、徳島県上勝町とナイジェリア連邦共和国の間で実施された相互交流事業の成果をまとめたものである。

世界的に持続可能な社会 (SDGs) への関心が高まる中、日本最小級の町でありながら「ゼロ・ウェイスト」をリードする上勝町と、アフリカ最大の人口と経済規模を持ち、急速な都市化に伴う廃棄物や自然環境の管理が課題となっているナイジェリア連邦共和国が、大阪・関西万博を契機にパートナーシップを構築する。

本プログラムでは、「いのち輝く未来社会のデザイン」という万博テーマに沿い、国際教育、文化交流、そして次世代を担う子ども達がパートナー国との対話を通じて、互いの多様性を尊重し、地球規模の課題解決に向けた具体的な一歩を標榜することを目的とする。

### (2) 事業内容

#### I. 事業概要

事業名：町の次世代を担う子ども達につなぐ産業や人の行き来を見据えたナイジェリア連邦共和国との交流事業

実施期間：2025年4月1日～2025年12月26日

交流相手国：ナイジェリア連邦共和国

#### II. 実施内容 ※実施報告書（別添）

①2025年6月25日 ナイジェリア・ナショナルデー

実施体制：上勝町企画環境課、上勝町教育委員会、上勝町立上勝中学校

徳島県万博推進課、東武トップツアーズ株式会社

ナイジェリアパビリオン、一般社団法人 在日アフリカ人ネットワーク ADNJ

上勝町は全国の自治体で唯一、ナイジェリアパビリオンからの招待により、VIPとして関係者エリアにてナショナルデーの式典に参列した。ナイジェリア政府 Federal Ministry of Industry Trade and Investment（産業貿易投資省）の方で、パビリオンの責任者である BABATUNDE JOEL OGUNBANWO 氏（以降、TUNDE 氏）をはじめとする関係者へご挨拶し、7月15日～16日の上勝町訪問交流に向けて事前に親交を深めた。

A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

万博を契機に上勝町とナイジェリア連邦共和国が世界におけるパートナーとして互いを認識し、国際交流をスタートしたことを国内外に印象付けた。

②7月15日～16日 上勝町訪問交流

実施体制：上勝町企画環境課、上勝町立上勝中学校、徳島県万博推進課

株式会社いろどり、株式会社 BIG EYE COMPANY

東武トップツアーズ株式会社

ナイジェリアパビリオン、一般社団法人 在日アフリカ人ネットワーク ADNJ

ナイジェリアパビリオンの責任者である TUNDE 氏、令和 6 年度事業参加者を含めて計 3 名のナイジェリア人を上勝町へ招聘し、上勝中学校で国際交流行事を実施するとともに、町内事業者の視察を通じて、上勝町の先進的な取り組みを紹介し、今後のパートナーシップについて意見交換を行った。

#### 1. 上勝中学校での国際交流行事

- ・学校給食を通じたアイスブレイク
- ・日本伝統の和菓子作りと上勝町特産の「いろどり」を添える体験
- ・『循環型社会「川上から川下まで」を実装するまち上勝町』のプレゼンテーション
- ・ナイジェリア連邦共和国及びナイジェリアパビリオンのプレゼンテーション
- ・ナイジェリア連邦共和国 国歌斉唱

#### 2. 町内事業者の視察

- ・株式会社いろどり  
彩農家でいろどり加工体験をはじめとする彩事業（葉っぱビジネス）のレクチャー  
上勝町特産品のレクチャー（製品への活用や調理法、彩（いろどり）方等）
- ・一般社団法人かみかつ森林環境公社  
上勝町の森の管理について紹介し、ナイジェリアの現状を交え意見交換を行った。
- ・株式会社もくさん  
KAMIKATSU WOOD BASE にて徳島県産材を使った木材加工について紹介し、まな板作りのワークショップを行った。
- ・株式会社 BIG EYE COMPANY  
上勝町ゼロ・ウェイストセンターの視察を通じて、ゼロ・ウェイストという「ごみをどう処理するか」ではなく「ごみを生み出さない」社会を目指す上勝町の考え方及び取組をプレゼンテーションした。
- ・株式会社スベック  
RISE&WIN KAMIKATSU の視察及び循環農業レクチャー

#### A:自治体内への波及効果

- ・『循環型社会「川上から川下まで」を実装するまち上勝町』の多面的な取り組みをナイジェリア代表団へ一貫したストーリーとして提示したことで、中学生や参画した町内事業者が自らの活動の国際的価値を再認識する機会となった。
- ・上勝中学校において、給食や和菓子作り、国歌斉唱といった五感を通じた交流を行ったことは、生徒にとってナイジェリアを「遠い国」ではなく「顔の見える友人がいる国」として変えた。これは、将来の町を担う人材の国際的な視野を広げる教育的効果となる。
- ・上勝町をあげて、「ナイジェリア代表団へのプレゼンテーション」という共通目的で動い

たことで、町全体で国際交流の受け皿としての体制がさらに強化された。

B:実施により達成できた成果

- ・森林管理や廃棄物問題、循環型農業といったナイジェリアの国家課題に直結する分野で具体的な意見交換を行ったことで、今後の技術協力やビジネス交流を見据えた実務的な信頼関係が構築された。
- ・万博を一過性のイベントに留めず、令和6年度の参加者も招いたことで、年度を跨いだ継続的な交流実績を確立した。

C:相手国への波及効果について

- ・ナイジェリア政府 Federal Ministry of Industry Trade and Investment（産業貿易投資省）の方で、パピリオンの責任者である TUNDE 氏が上勝町の現場を深く理解したことで、急成長するナイジェリアにおいて、上勝町の「ごみを生み出さない」という考え方と実績は、持続可能な社会モデルとして強い感銘を与えた。
- ・「地域にある資源（葉っぱ）をビジネスに変える」いざなり事業のモデルは、農村部の開発が課題となっているナイジェリアにおいて、自国の未利用資源を活用する経済発展のヒントとして持ち帰られた。
- ・東京のような大都市だけではない、地方の豊かな自然、伝統、そして食文化を体験したことで、ナイジェリア政府内における対日理解の解像度が高まった。





③ 9月17日 大阪・関西万博 ナイジェリアパビリオン訪問交流

実施体制：上勝町企画環境課、上勝町立上勝中学校、徳島県万博推進課  
東武トップツアーズ株式会社

ナイジェリアパビリオン、一般社団法人 在日アフリカ人ネットワーク ADNJ

10月13日『TOKUSHIMA FUTURE EXPO 2025』（関西パビリオン徳島県10月催事）への出展にあたり、上勝中学校全校でイベントに協力していただくナイジェリアパビリオンを表敬訪問し、パビリオン見学やナイジェリア国歌の斉唱を通じて親交を深めた。また、同じイベントに出展する、上勝町出身者がパビリオン運営に携わる「いのちの遊び場 クラゲ館」を訪問し、中島さち子プロデューサーの講話やパビリオン見学を通じて、万博に対する理解を深めた。

A:自治体内への波及効果

- ・10月催事に向けて、協力者であるナイジェリアパビリオンと直接顔を合わせ、国歌斉唱などを通じて心の交流を深めたことで、中学生のモチベーションが「共創（共に創る）」へと高まった。
- ・シグネチャーパビリオン（いのちの遊び場 クラゲ館）の運営に上勝中学校の卒業生が関わっていることを目の当たりにしたことは、生徒にとって世界と上勝はつながっているという実感を強める機会となった。
- ・中島さち子プロデューサーの講話を通じ、万博の深いテーマ性を理解することで、上勝町の活動を万博の文脈でどう表現すべきか、生徒の視座が高まった。

B:実施により達成できた成果

- ・事前にナイジェリアパビリオンを表敬訪問し、相互理解を深めたことで、10月催事における協力体制が確固たるものとなった。これにより、当日の円滑な運営と、より質の高いパフォーマンスが期待できる状態を構築できた。
- ・ナイジェリアの象徴である国歌をともに歌うことは、儀礼的な挨拶以上に相手の心に響く敬意の表明となり、短時間で深い信頼関係を結ぶことに成功した。

#### C:相手国への波及効果について

- ・10月催事に向けて、「協力依頼を受けた」という受動的な立場から、「共にイベントを成功させよう」という能動的な協力姿勢へと変化を促すことができた。
- ・小さな地方自治体（上勝町）が持つ熱意や丁寧なコミュニケーションを体感したことで、日本全体に対する好感度と信頼の向上に寄与した。

#### ④10月13日 大阪・関西万博 『TOKUSHIMA FUTURE EXPO 2025』

実施体制：上勝町企画環境課、上勝町立上勝中学校、徳島県万博推進課

株式会社いろどり、東武トップツアーズ株式会社

ナイジェリアパビリオン、一般社団法人 在日アフリカ人ネットワーク ADNJ

『TOKUSHIMA FUTURE EXPO 2025』（関西パビリオン徳島県10月催事）へ主役である上勝中学校の他、町内事業者及びナイジェリアパビリオンが共同して出展し、上勝町ブースにて2つのワークショップを実施した。

1. 上勝町から発信するファブリックブランド「KINOF」のあずま袋にナイジェリアのデザインやいろどりを模したスタンプを押して彩るワークショップ
2. 遊山箱にいろどりを添えるワークショップ

また、ステージイベントでは、上勝中学校の生徒とナイジェリアパビリオンの責任者で上勝町に来訪していただいた BABATUNDE JOEL OGUNBANWO 氏とのかけ合いにより、上勝町とナイジェリア連邦共和国との国際交流をアピールした。最後に上勝町とナイジェリア関係者でナイジェリア国歌を披露し、親交を深めた。

#### A:自治体内への波及効果

- ・万博でナイジェリアパビリオンの責任者である TUNDE 氏と一緒にステージを構成した経験は、中学生にとって、自分たちの言葉で世界に発信する強烈な成功体験となった。このことは普段の授業では得られない教育的成果となる。
- ・KINOF や遊山箱といった上勝町の伝統・技術が、ナイジェリアのデザインと融合することで、新しい魅力が引き出された。出展に関わった町内事業者にとって、自社製品がグローバルな文脈で通用することを確信させる機会となった。
- ・行政、学校、事業者が一体となって世界へつながる万博で発信したことで、町全体に「小さな町でも世界を動かせる」という連帯感とポジティブな機運が醸成された。

#### B:実施により達成できた成果

- ・万博において、自治体とパビリオンが共同でワークショップやステージイベントを行うケースは稀であり、10月催事では上勝町とナイジェリアパビリオンだけであった。来場者や

メディアに対し、質の高い、顔の見える国際交流を強力にアピールできた。

- ・日本のあずま袋に、ナイジェリアのデザインをスタンプで施す手法は、異文化交流を「言葉」ではなく「形」として具現化した成果である。
- ・万博の大舞台で共に国歌を歌い上げたことは、協力関係を友情・同志へと昇華させた。これにより、万博終了後も続く「レガシー」としての関係性が完成した。

C:相手国への波及効果について

- ・自国の伝統デザインが日本の高品質なファブリック（KINOF）と融合する様子を目の当たりにし、ナイジェリア側にとっても自国文化の新たな市場性や発信方法を発見する機会となった。
- ・上勝町の中学生たちがナイジェリア国歌を学び、共に披露したことは、ナイジェリア政府関係者の心に深く刻まれた。これは将来、上勝町の住民や企業等がナイジェリアへ展開する際の見えない外交資産となる。



⑤ 11月18日 ナイジェリア連邦共和国大使館訪問

実施体制：上勝町企画環境課、株式会社いんどり

東武トップツアーズ株式会社

ナイジェリア連邦共和国大使館

一般社団法人 在日アフリカ人ネットワーク ADNJ

上勝町の概要とナイジェリアパビリオンをはじめとするナイジェリアの方々との国際交流の経緯について説明し、今後の交流継続に向けて、協力要請を行った。

以下の点について相互協力又は検討することを確認した。

・協力事項

- 1.上勝町の次世代を担う子ども達が、世界のパートナーとしてのナイジェリアを継続的に認識するため、上勝中学校が大使館を訪問する際は積極的に受け入れすること
- 2.上勝町がナイジェリア本国と交流を行う場合に協力すること。
- 3.ナイジェリア国民が上勝町を訪問する場合は積極的に受け入れすること。
- 4.日本国内でナイジェリア関連イベント等を開催する場合は相互協力し参加すること。

・検討事項

- 1.姉妹都市・友好都市提携
- 2.子ども同士の交流の方法（まずはオンラインで英語交流から始めてはどうか？）

A:自治体内への波及効果

- ・万博期間中の一過性の国際交流で終わらず、大使館という公的機関と今後の協力について合意したことは、上勝町にとってこの事業が確かなレガシーになったという安心感と自信を得た。
- ・大使館への訪問受入が協力事項として明言されたことで、今後の上勝中学校の修学旅行において、大使館訪問が生きた国際理解教育の場として定着する道筋ができた。
- ・花本町長自らが直接大使館へ出向き、第一書記官等と合意を取り付けたことで、今後のナイジェリア関連事業における予算化や体制整備に向けた町内での合意形成がよりスムーズになる。

B:実施により達成できた成果

- ・国交樹立から65年で目立った国際交流がなかった中で、「上勝町が先陣を切った」という大使館側の発言を引き出したことは、本事業が一自治体の活動を超え、日ナイジェリア両国の外交史において意義深い一歩であったことを証明する最大の成果である。
- ・次世代交流、ナイジェリア本国との連携、お互いの訪問の受け入れ、国内イベント協力等の広範な項目で合意に至った。

C:相手国への波及効果

- ・度重なる訪問断念にもかかわらず、三度目の調整で訪問を実現させた上勝町の誠実さと熱意は、大使館側に「上勝町は信頼に値する真剣なパートナーである」という強い印象を与えた。
- ・上勝町のような特徴ある地方自治体との交流が、ナイジェリアの国民にとっても有益であるという新たな外交的価値をナイジェリア側が見出すきっかけとなった。

### （3）事業の目標に対する成果

6月のナイジェリア・ナショナルデーにおける自治体唯一のVIP招待という破格の接遇から始まり、7月の上勝町訪問交流、11月の駐日大使館訪問へと、交流の場を「世界・地

域・外交」の三層で展開した。これにより、単なる国際交流に留まらない、実利と信頼を伴う歴史的な国際交流モデルを構築することができた。

「ゼロ・ウェイスト」「いろどり（彩）事業」「KINOF」といった上勝町の先進的な取り組みが、ナイジェリア産業貿易投資省から自国の課題解決のヒントとして認識され、将来的な経済・技術交流の土台が整えられた。

また、ナイジェリア連邦共和国大使館より「まず第一に日本とナイジェリアは国交樹立から65年目にあたるが、これまでに目立った国際交流を行ったことがない。万博を契機に上勝町と交流をスタートできたことを嬉しく思っています」との言葉をいただいた。これは、一自治体の枠を超え、両国の外交史において極めて意義深い足跡を刻んだことを意味する。

本事業を通じて、上勝町は「世界で最もナイジェリア連邦共和国に近い町」の一つとなった。人口1,300人の小さな町が、2億人を超えるアフリカの大国と響き合い、未来に向けた国際交流を行ったことは、「いのち輝く未来社会」の具現化そのものである。万博という契機により芽吹いたこの絆を、次世代に引き継ぐべき貴重な財産として育み、新たな国際協力の形を今後も体現し続けていく。

#### （４）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

上勝中学校の生徒がナイジェリアパビリオン責任者と対等のステージに立ち、共に国歌を歌い、地場産品を通じたワークショップを主導して万博のイベントを創り上げた経験は、「自分たちの町が世界と繋がっている」という当事者意識を喚起し、町の次世代を担う子ども達が「地球規模の視座（グローバル・パースペクティブ）」を持つための決定的な契機となった。

#### （５）子ども達にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

11月16日に町制施行70周年記念式典の中で、上勝町に関わる人たちへナイジェリア連邦共和国との国際交流について広く発信をおこなった。

##### ◎アンケート結果

合計29名（生徒15名、教員14名）から回答があった。

全体として、生徒・教員ともに満足度が高く、未知の国への偏見が払拭され、自国のアイデンティティや「ゼロ・ウェイスト」等の上勝町の価値を再発見したという、教育効果の高い事業だったことが伺える。

上勝中学校の生徒たちに世界を立体的に捉える視点を与えると同時に、「自分たちの地元上勝町の価値」を世界基準で再定義することに成功した。特にナイジェリア＝貧困・紛争というイメージから「共に課題解決するパートナー」という未来志向のイメージへ塗り替えた点は、教育的に大きな価値があった。

Q. 以下の設問について、最も当てはまる番号に ○印 をつけてください。

1. 本プログラムの内容は、あなたにとって楽しく有意義なものでしたか？

そう思う	5	4	3	2	1	そう思わない
生徒	8人	3人	4人	0人	0人	
教員	2人	8人	4人	0人	0人	

2. 交流を通じて、ナイジェリアの国や文化についての理解が深まりましたか？

そう思う	5	4	3	2	1	そう思わない
生徒	6人	7人	2人	0人	0人	
教員	3人	5人	6人	0人	0人	

3. ナイジェリアという国に対して、親しみを感じるようになりましたか？

そう思う	5	4	3	2	1	そう思わない
生徒	6人	4人	3人	2人	0人	
教員	4人	6人	3人	1人	0人	

4. 日本とは違う文化や習慣を持つ人々と、もっと交流してみたいと思いましたか？

そう思う	5	4	3	2	1	そう思わない
生徒	9人	3人	3人	0人	0人	
教員	6人	2人	5人	0人	1人	

5. 本プログラムで特に印象に残ったことを教えてください。

<生徒回答>

- ・万博でナイジェリア国歌を斉唱したこと。
- ・交流でお互いの文化や歴史を伝え合うことで違いを身近に感じる事ができた。
- ・ナイジェリアでは食事をする時に円になって食べることを知れたこと。
- ・万博で TUNDE さんと一緒に発表したこと。

<教員回答>

- ・ナイジェリアとの交流を通じて、生徒が日本と違う文化や習慣を学ぶことができたことが良かった。
- ・万博に行き、そこで発表する経験を子ども達にさせてあげられたのが良かった。
- ・ナイジェリアの国歌指導が大変だったが、国の背景や発音など詳細に知ることができた。
- ・自校や地元の特徴、日々の取り組みを世界に発信することで、世界とのつながりを感じただけでなく、地元への誇りや郷土愛を育むことにつながった。
- ・画像や映像だけでなく、実際に人と交流できたことは大きな学びになったと思う。
- ・上勝町がゼロ・ウェイスト宣言を行っている地域であり、地域と世界とが交流できたことは有意義であった。ごみ処理という環境問題について考え発表できたことは、地球規模の課題を追及できた。

6. 本プログラムに参加する前と後でナイジェリア（またはアフリカ）に対するイメージはどのように変わりましたか？

<生徒回答>

- ・全然知らない国だったが、今は色々と知れていい国だと思った。
- ・発展していない国と思っていたが、かなり都市が発展していて驚いた。
- ・紛争のイメージがあったが、皆が楽しそうで面白いというイメージが変わった。
- ・参加前は上勝町と共通点がなく、何があるか分からない怖い国という印象だったが、参加後は共通点（ゴミを再利用、有効活用する）があり、人も優しくて、イメージがガラッと変わった。
- ・ナイジェリアの文化や歴史を知ることによって、さらに興味を持つようになった。
- ・ナイジェリア国旗を見ると「あっ！ナイジェリアだ！」と思うようになった。
- ・特に変わりません。

<教員回答>

- ・豊かな自然と歴史、文化を持ち、経済発展が著しい国だということが分かった。『TOKUSHIMA FUTURE EXPO 2025』で、発表した際に一緒に登壇してくださったTUNDE代表が「ナイジェリアのごみ問題を人々の仕事につなげ、未来を明るくすることができます」と言っていたように、グリーントランスフォーメーションを進める国として、ともに歩んでいくことができると感じた。
- ・名前だけ知っている国だったが、特色や魅力を知りポジティブなイメージを持つようになった。また、実際に交流したことで身近に感じることができた。
- ・中学校の社会科「地理」では、ナイジェリア＝石油という平面的かつ記号的な捉え方をしていたが、日本と同じようにそこに生きている息吹を感じることで、もっと立体的な捉え方に留意していこうと思った。
- ・ナイジェリアという国の文化や人について少し知ることができたが、イメージは特に変わらない。
- ・ナイジェリアは抱いていたイメージを大きく変える興味深い国になった。他民族・多文化国家でありながらも、国歌への強い想いは一致していることを特に学び、国歌の存在意義について改めて深く学んだ。
- ・貧困や医療、教育格差が大きく、環境問題については二の次にされていると思っていたため、循環型経済の構築が進んでいることに驚いた。
- ・アフリカはあまり興味の対象となっていなかったが、交流してプラスのイメージを持つことができたため、興味の範囲を広げていきたい。

7. 本プログラムを通じて学んだことを今後どのように学習や生活に活かしたいですか？

<生徒回答>

- ・国は関係なくどんな人とも優しく接していきたい。
- ・交流を続けてより関係を深めたいと思った。
- ・世界の文化の違いについて、もっと調べたいと思った。

- ・世界中の国々の知識を身につけ、将来に役立てたいと思った。
- ・家族や友達にもナイジェリアの良さを伝えたい。
- ・一つのきっかけでたくさんの人と関わることができることを学んだ。さらに行動して人脈を広げられるように活かしていきたい。

<教員回答>

・国際交流に深く取り組むことは、時間的にも経済的にも負担があり、なかなか実践できない。今回は様々なバックアップもあり実施できたので、今後の国際交流への足がかりになると考える。

・万博会場で、生徒のポロシャツの「KAMIKATSU」というロゴを見たパビリオン関係者から、ゼロ・ウェイストの町だと声をかけられ、その国の国旗や本をいただいた。このように、ナイジェリアとの国際交流事業や発表を通して、上勝町や上勝中学校の取り組みを内外にPRし、上勝町を知り、興味を持って関わってくれる関係人口を増やすことで、より良い地域づくりを進めることができると思う。これからも世界的な視野に立ち、人々と交流を図りながら、持続可能な社会を実現していきたい。

・外国との交流を通じて海外の様子を知ること大事だが、まず第一に自分自身に日本人としてのアイデンティティを問われた時に答えられる言葉をしっかりと持たなければならぬという想いを新たに。国際理解・国際協調を進める中で自国の何かに気づくということもあると思うが、まずは日本人としての自分の芯をしっかりと鍛錬していきたい。

・様々な国の様々な価値観を持った人たちが世界にいるということを子ども達にも伝えていきたい。

・子どもたち一人ひとりへ郷土愛を育む教育、プレゼンテーション能力の指導、異文化理解の大切さについての教育に活かしていきたい。

・ナイジェリアの人たちとの交流で得た経験や視野の広がりを生かして、様々なことにチャレンジしていく意欲や実践力、コミュニケーション力の向上を図っていきたい。

## (6) 特に良かった点、苦勞した点

### 1. 良かった点

上勝町の次代を担う中学生が、顔が見える交流相手と直接やりとりすることで、体験的に文化や価値観の違いを学んだり、コミュニケーション力や自己肯定感を高めたりする学びにつなげることができた。多様性を尊重する心を育み、これから町の国際化を推進し、地域発展を支える人材を育成する貴重な機会となった。

### 2. 苦勞した点

ナイジェリア側と連絡調整を行う場合に文化や習慣、感覚の違いにより、上勝町側としてはスムーズにコミュニケーションを取り合えたとは言い難く、直前まで日程が決まらなかったり、了承を得ることができなかったりと調整が難航した。そのため、多くの場合に「一般社団法人 在日アフリカ人ネットワーク ADNJ」のサポートを必要とした。

## (7) 今後の展開

次年度以降は、上勝中学校とナイジェリアの学校をオンラインで繋ぎ、言語交流や環境教育を軸とした定期的な対話の場を創出する。併せて、中学校の修学旅行時における大使館訪問や、ナイジェリア関係者による上勝町訪問の受入を仕組み化し、顔の見える交流を続けていきたい。

## (8) 今後の展開における課題

日本国内でできる取組やアプローチについては今回の事業で実施体制を整えることができた。しかし、ナイジェリア連邦共和国へ上勝町から人を派遣して行う相互交流については現地とのコネクション等、実施体制の構築がままならない状況である。また、交流事業を継続するためには、安定した財源の確保、語学力・国際感覚を持つ人材の育成、魅力的な交流プログラムが必要で、さらなる体制整備が重要となる。

## 3-29 徳島県松茂町 × ガーナ

### (1) 背景と目標等

#### 1) プロジェクトの背景

松茂町とガーナ共和国は、2024年度より内閣官房「国際交流プログラム」を活用し、松茂町および株式会社 steAm が連携して国際交流事業を推進してきた。

本事業は、同プログラムに採択された2024年6月以降、松茂町の地域住民と共に、教育・環境・文化を軸とした多様な取り組みを継続的に実施しているものである。

松茂町では、防災交流拠点施設「Matsushigate (マツシゲート)」を活用し、STEAM Laboをはじめとする学びの場を創出することで、STEAM教育の推進に取り組んできた。これらの取り組みは、教育を通じて地域の魅力を高め、過疎化の進行に歯止めをかけることを目的としている。

また、町内の子どもたちは、ごみ拾いやごみアートといった活動を通じて、SDGsに関わる課題に主体的に取り組んできた。

加えて、2025年大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー中島さち子氏と連携する、ガーナのごみから生まれたスラム街“アグボグブローシー”などで活動するアーティスト・長坂真護氏とともに、ガーナ共和国を題材とした学習や交流活動を行い、国際的な課題への理解を深めてきた。

これら松茂町の取り組みや課題は、電子廃棄物問題をはじめとする環境課題を抱えるガーナ共和国の状況とも多くの共通点を有しており、相互に学び合う関係性を構築できる素地が整っている。

#### 2) プロジェクトの目的

本プロジェクトは、「ごみ」「SDGs」「環境課題」といった共通のテーマを軸に、松茂町とガーナ共和国の相互理解を深めるとともに、STEAM教育および環境教育を融合させた国際交流モデルを構築することを目的とする。

また、単発的な交流にとどまらず、子どもたちを中心とした学びの循環を生み出し、地域の教育力向上と国際的視野を併せ持つ人材育成を図ることを目指す。

### (2) 事業内容

本プロジェクトでは、松茂町の地域資源および既存の取り組みを活かし、以下の内容を中心に事業を展開した。

#### 1) STEAM教育・環境教育の推進

防災交流拠点施設「Matsushigate」を拠点に、STEAM Labo等の学びの場を設け、地域住民や子どもたちが主体的に参加できる教育プログラムを実施した。

## 2) SDGs をテーマとした体験型学習の実施

ごみ拾いやごみアートなどの活動を通じ、環境問題を自分ごととして捉える体験型の学習機会を創出した。

## 3) ガーナ共和国との国際交流・学習活動

中島さち子氏および長坂真護氏と連携し、ガーナ共和国が抱える社会・環境課題について学ぶとともに、交流活動を通じて国際的な視点を養った。

また、大阪・関西万博において、ガーナを題材とした国際交流ワークショップを実施し、これまでの学びの成果を広く発信する機会を創出した。

## 4) 地域に根差した交流イベントの実施・検討

2024 年度に実施した「マツシゲート学園祭」をモデルとし、地域住民が継続的に関われる国際交流イベントの確立に向けた取り組みを進めた。

## 5) 持続的交流に向けた関係構築

相互訪問を含む人的交流を視野に入れながら、息の長い国際交流へと発展させるための基盤づくりを行った。

### 実際に実施したスケジュール

#### 1. Woman in Tech Ghana 松茂町訪問

日時：令和 7 年 4 月 28 日（月）9：00～16：30

令和 7 年 4 月 29 日（火）9：00～16：00

場所：松茂町

参加者：

株式会社 steAm／四国大学 准教授 鈴鹿剛（プロジェクトマネージャー）

株式会社 steAm／四国大学 大学生 2 名（マツシゲート WS ファシリテーター）

株式会社 steAm 三好彩加（マツシゲート WS サポート）

株式会社 steAm 森 昭子（通訳）

Woman in Tech Ghana（海外バビリオン関係者ガーナ人 4 名）

Luvina Sandra Atsu, Cordelia Ivy Sackey, Dr. Ama Mbeaba Keelson Quarshie, Dzifa Cletus,

4 月 28 日（月）

8:20

ホテルお迎え・ホテルロビー集合

9:00 長原小学校訪問（全校生徒 3 名による小規模授業）

校長より、松茂町および長原小学校の特徴やこれまでの経緯について説明があり、質疑応答を行った。その後、液晶タブレットのモニターやプロジェクター機器を活用した英語および国語の授業を見学した。あわせて、生徒による和太鼓演奏を鑑賞し、児童との交流を行った。

13:15 四国大学訪問

本部棟にて松重学長室を訪問し、挨拶を行った。

13:45 メディア情報学科 各施設訪問

メディア情報学科の各施設を巡り、教育・研究環境について理解を深めた。

- ・ 撮影収録スタジオの視察
- ・ U館（液晶タブレット、3Dプリンター等の機材見学）〈上野昇准教授ガイド〉
- ・ タグリバススタジオ見学（eスポーツを活用した学びの紹介）
- ・ 健康スポーツ館アリーナ見学（保育分野の取り組み）〈林夏木准教授ガイド〉
- ・ 藍染工房の施設見学

#### 実施内容

松茂町立長原小学校を訪問し、学校説明および授業視察を行った。はじめに図書室にて校長より挨拶があり、松茂町職員立ち会いのもと、学校および地域に関する説明と質疑応答を実施した。説明では、松茂町の漁村としての歴史や津波をはじめとした防災対策、長原小学校の学校概要、少子化や過疎化の影響による閉校予定の状況、これまでに行われてきた国際交流の取り組み等について共有がなされた。

その後、防災や少子化への対応、STEAM教育への取り組みについて活発な質疑応答が行われ、参加者間で意見交換を深めた。あわせて、液晶タブレットのモニターやプロジェクター機器を活用した英語および国語の授業を見学し、ICTを活用した教育実践について理解を深めた。



## 実施内容

松茂町立長原小学校において、児童による和太鼓演奏の披露が行われた。演奏後、Woman in Tech Ghana のメンバーからは、伝統的な藍染衣装や生徒による和太鼓演奏に対する賞賛の言葉が寄せられた。特に、女性教員が太鼓演奏の指導を行っている点については大きな関心が示され、ガーナでは主に男性が伝統的な太鼓演奏や技芸の継承を担っていることから、日本の教育現場における女性の関わり方に驚きの声が上がった。

こうした交流を通じて、教育現場や社会においてリーダーとして活躍する女性の姿をロールモデルとして視察する機会となり、参加者からは感嘆の意を示すコメントが寄せられた。



## 実施内容

四国大学を訪問し、施設見学および授業視察を行った。はじめに本部棟にて松重和美学長へ挨拶を行い、新学科創設に関する説明を受け、大学の今後の教育方針や取り組みについて理解を深めた。

その後、メディア情報学科の各施設を訪問し、実践的な教育環境について視察を行った。撮影収録スタジオでは、防音設備や撮影機材を見学し、学生が実際にどのような環境で収録演習や機材操作を行っているかについて説明を受けた。U館では、液晶タブレットや3Dプリンター等の機材を視察し、上野昇准教授のガイダンスのもと、タブレット操作によるデザイン制作からTシャツへの印刷に至る工程を体験した。完成した試作品のTシャツは記念品として持ち帰った。

続いて、タグリバスタジオを見学し、eスポーツ関連設備や録画・配信機材を視察した。最先端のeスポーツを活用した学びの事例について説明を受け、実際に機材を操作する体験も行った。さらに、健康スポーツ館アリーナでは、林夏木准教授による体育授業に参加し、学生とともにアクティビティを行った。

最後に藍染工房を訪問し、藍の原料や加工工程について学んだ。実際に加工中の染料原料を視察するとともに、上階のギャラリーを訪れ、歴史的な藍染の民芸品を見学することで、日本の伝統文化への理解を深めた。



4月29日（火）

8:10

ホテルお迎え・ホテルロビー集合

9:00 防災交流拠点施設 マツシゲート見学

マツシゲートの施設見学を行い、都市鉱山の概念や環境教育の取り組みについて説明を受けた。あわせて、ワークショップ内容のガイダンスを行い、レジンを用いたアクセサリ制作ワークショップに参加した。また、教育用ロボットレゴ®エデュケーション SPIKE™プライムの紹介を通じて、STEAM教育の実践事例に触れた。

13:00 株式会社富士スレート訪問

馬淵社長より挨拶および事業説明をいただいた後、工場視察を行い、製造現場の取り組みについて理解を深めた。

14:30 あすたむらんど徳島館（科学博物館）視察

担当課長より挨拶および施設説明を受けた後、館内を視察した。

16:00

徳島空港にてガーナ参加者を送迎、解散

#### 実施内容

防災交流拠点施設マツシゲートを視察し、松茂町の防災施設としての建築的特徴や年間を通じた催事・活用状況について説明を受けた。あわせて、地域防災と交流拠点を兼ね備えた施設としての役割について理解を深めた。

続いて、鈴鹿より徳島県におけるごみ分別およびリサイクル制度の取り組みや、都市鉱山の概念についてガイダンスを行い、資源循環や環境教育に関する基礎的な理解を共有した。その後、レジンとガーナの e-Waste、藍染の端切れを活用したアクセサリ制作ワークショップに参加し、環境問題と創造的なものづくりを結びつけた体験型の学習を実施した。あわせて、レゴ®エデュケーション SPIKE™プライムの紹介を行い、ロボット競技会の取り組み等について説明することで、STEAM教育の実践事例への理解を深めた。



## 実施内容

株式会社富士スレートを訪問し、馬淵祐三社長より挨拶をいただいた後、同社の事業概要および主力商品について説明を受けた。あわせて、今後ガーナで設立を予定している工場に関する計画についても紹介があり、事業の国際展開や現地での取り組みについて理解を深めた。その後、工場視察を行い、製造工程や品質管理の取り組みについて説明を受けた。

## 2. 事前準備・国内ワークショップ

### 第1回 事前ワークショップ

日時：令和7年5月24日（土）10:00～12:00

場所：防災交流拠点施設 マツシゲート

テーマ：万博国際交流プロジェクト「Ghana と交流しよう!!」参加メンバー募集

参加者：

株式会社 steAm／四国大学：鈴鹿 剛

株式会社 steAm：三好彩加

四国大学生：10名

イノベーションラボメンバー：6名

松茂中学校ボランティア委員会：18名

松茂町一般参加者：22名

実施内容：

本事前ワークショップでは、はじめに万博国際交流プロジェクトの概要説明を行い、これまでに実施してきた取り組みについて参加者間で共有した。続いて、関係者および参加した大学生による自己紹介を行い、参加者同士の相互理解を深めた。

その後、8月・10月・11月に予定されているワークショップを含む今後の関わり方や活動の流れについて説明を行った。

後半では、参加者を複数のチームに分け、今後実施予定のワークショップ内容について検討を行い、各チームがどのように本プロジェクトに関わっていくのかグループになり検討、結果を発表することで、プロジェクトに対する理解と主体的な参加意識の向上を図った。

### 第2回 事前ワークショップ

日時：令和7年6月28日（土）13:00～15:00

場所：防災交流拠点施設 マツシゲート

テーマ：万博国際交流プロジェクト「Ghana と交流しよう!!」参加メンバー募集

参加者：

株式会社 steAm／四国大学：鈴鹿 剛

株式会社 steAm：三好彩加

四国大学生：16名

イノベーションラボメンバー：9名

松茂中学校ボランティア委員会：21名

松茂町一般参加者：21名

実施内容：

本ワークショップでは、万博国際交流プロジェクトの今後の展開について説明を行い、参加者が事業の目的や進行スケジュールを具体的に理解できるようにした。続いて、松茂中学校の生徒よりワークショップ案の発表が行われ、これまでの検討内容やアイデアを共有することで、多世代による協働の機会を創出した。

その後、ガーナ共和国国歌の練習を通じて、相手国の文化への理解を深めるとともに、国際交流への意識醸成を図った。

後半では、グループごとに分かれて8月に万博会場にて予定をしているワークショップ内容の検討を行い、実施に向けた具体的な準備を進めた。最後に、事務局より今後必要となる手続き（AD証等）について説明を行い、参加者が円滑に活動へ参加できる体制を整えた。

### 3. フィールドワーク・継続的交流

フィールドワーク・交流活動

日時：

令和7年7月22日（水）13:00～20:00

令和7年7月23日（水）9:00～20:00

令和7年7月24日（木）8:30～16:00

参加者：

株式会社 steAm／四国大学：鈴木 剛

株式会社 steAm：三好彩加（23日のみ）

株式会社 steAm：森 昭子（通訳）

四国大学生：計9名

松茂町町民：複数名

ガーナ共和国教育省施設団：計24名

フィールドワーク・大阪万博テーマウィークスタジオイベント、及びガーナ共和国教育省使節団のクラゲ館視察

令和7年7月25日（金）14:00～15:00

令和7年7月27日（日）10:00～12:00

参加者：

株式会社 steAm：中島 さち子（登壇）株式会社 steAm／四国大学：鈴木 剛（イベント来賓、クラゲ館案内）

株式会社 steAm：三好彩加ほか計5名

株式会社 steAm：森 昭子（通訳）

ガーナ共和国教育省施設団：計24名

#### 4. 万博本番に向けた準備・実施

##### 第3回 事前ワークショップ

日時：令和7年8月2日（土）13:00～15:00

場所：防災交流拠点施設 マツシゲート

参加者：

株式会社 steAm／四国大学：鈴木 剛

四国大学生：16名

イノベーションラボメンバー：3名

松茂中学校ボランティア委員会：16名

松茂町一般参加者：14名

##### 大阪・関西万博 クラゲ館 ワークショップ

日時：令和7年8月4日（月）14:00～16:30

場所：大阪・関西万博会場 クラゲ館

テーマ：ガーナ文化を題材とした国際交流ワークショップ

参加者：

株式会社 steAm／四国大学：鈴木 剛

四国大学生：7名

松茂町ワークショップ参加者：25名

当日の流れ：

松茂町出発

万博会場到着、クラゲ館にて準備

ワークショップ実施

スノードーム制作

ケンテ柄コースター制作

クラゲ館内見学

ワークショップ終了・片付け

他国パビリオン（ヨルダン館）見学

実施内容：

本ワークショップでは、これまでの取り組みを振り返るとともに、今後の全体的な流れについて参加者間で共有を行った。続いて、8月4日に実施予定のワークショップ当日の進行について説明を行い、各自の役割や当日の動きを具体的に確認した。

その後、10月・11月に実施を予定している班ごとに分かれ、ワークショップ案の検討を行い、内容の具体化を進めた。

後半では、ガーナ共和国国歌の練習を行い、相手国の文化への理解を深めるとともに、国際交流に向けた意識の醸成を図った。最後に、グループディスカッションを通じて意見交換を行い、今後の活動に向けた共通認識の形成を行った。

#### 4. マツシゲート学園祭・イベント実施

日時：令和7年11月2日（日）9:40～15:00

場所：防災交流拠点施設 Matsushigate

参加者：

株式会社 steAm／四国大学：鈴木 剛

株式会社 steAm：中島 さち子（登壇）

株式会社 steAm：森 昭子（通訳）

株式会社 steAm：東丸 慎太郎（イベント統括）

株式会社 steAm：三好 彩加（全体サポート）

MAGOCREATION：エンバス（登壇）

MAGOCREATION：木村王（通訳）

四国大学生：35名

一般来場者：1,935名

当日の流れ：

8:30

会場準備

9:40

開会式・イベント開始

9:50

KURAGE Band Live パフォーマンス

15:00

閉会式

実施内容：

マツシゲート学園祭は、松茂町内の小学校・中学校の子どもたちを主役とし、地域・学校・大学・企業が連携して実施した、参加型の学びと交流の場である。会場となったマツシゲートを舞台に、子どもたちがこれまでの学習や探究活動の成果を発表・体験として共有することで、地域に開かれた学園祭を創出した。

当日は、各小学校・中学校による STEAM 教育や SDGs をテーマとした展示・ワークショップ（「よりよい松茂を未来につなぐ～SDGs for Matsushige～」 「松茂町食料自給 UP☆大作戦！」など）が行われ、来場者は子どもたちの実践的な学びに直接触れる機会を得た。また、地域企業や大学との協働により、太陽電池の配線体験、海ごみアート、ペーパーグライダー教室、カードゲームを通じた地域理解など、多様な体験型ブースが展開された。

さらに、徳島大学鳥人間プロジェクトの機体展示、四国大学による書道パフォーマンスや国際交流（ガーナワークショップ）など、専門性や国際性を取り入れた企画も実施され、学びの幅を広げる構成となった。

ガーナ交流イベント：

- ・ケンテコースター

ガーナの伝統的な布のケンテには、色ごとに意味があり、その色の意味を学びながら、コースターに好きな色を塗ってオリジナルのデザインのコースター作りを体験

- ・アフリカしおり

ガーナにいる動物が描かれた画用紙に、アフリカ風の柄の布を貼り付けて、オリジナルのしおり作りを体験

- ・キラキラドーム

ガーナの伝統的なアクアバ人形と捨てられるはずだった電子廃材をスノードームの中に入れてアップサイクルし、ラメやビーズで飾り付け、オリジナルスノードーム作りを体験



## 5.現地渡航

### 1. 渡航概要

期間: 2025年11月30日(日)～12月4日(木)

訪問国: ガーナ共和国(アクラ)

目的: STEAM教育普及に向けた政府・教育機関との連携協議、JICAプロジェクト形成、万博レガシー継承

主要メンバー: 株式会社steAm 中島さち子、鈴鹿剛(四国大学)、東丸慎太郎、森昭子

### 2. ガーナ渡航のハイライト(成果要約)

国家レベルの合意: 教育大臣よりSTEAM連携への「Full Support」を獲得。提案からわず

か1日で予算委員会での実施承認が得られるという異例のスピードで政策決定がなされた。STEAM教育の共通認識: ガーナ側の「STEM」と我々の「STEAM(創造性重視)」の理念が一致することを確認。

具体的施策の策定: 予算制約(98%が人件費)を打開するため、高校生・大学生をメンターとして活用する持続可能なエコシステムを提案し、合意された。

高い注目度: 大統領出席イベントにて最前列の賓客として招待され、唯一の日本人ゲストとして紹介を受けた。

#### 【日程別 詳細活動報告】

11月30日(日)

15:20 アクラ(コトカ国際空港)到着。翌日からの政府協議に備え、市内にて準備および夕食。

12月1日(月)

#### 【現状把握と戦略の転換: 持続可能なモデルの提示】

14:00 - 15:00 JICA ガーナ事務所 協議

対応者: 小田 遼太郎 次長、佐藤 未来 氏(教育担当)

協議内容:

支援状況の共有: JICA および世界銀行等がガーナで行っている義務教育段階への支援実績について情報共有を受けた。

事業相談: 来年度の「草の根技術協力事業」への応募可能性について相談を実施。

活動報告: 徳島県でのMoE(教育省)職員14名の研修受け入れの成果、および万博カンファレンスにおける松茂町ナショナルデー参加について報告を行った。

15:00 - 15:30 Ghana Education Service (GES) (教育省ガーナ教育サービス) 表敬挨拶

国会予算委員会開催中のため、まずは挨拶のみ実施。

17:30 - 19:00 GES 実務協議

対応者: Prof. Davis Ernest Kofi (局長)、副局長2名 (Dr. Issahaque Munawaru, Prof. (Mrs.) Smile Gavua Dzisi)、Mrs. Olivia Serwaa Opare (STEM担当)、Mr. Frederick Birikorang (提携担当)

主な議論と合意:

理念の一致: ガーナ側の表記は「STEM教育」であるが、目指しているのは創造性や探究心を重視した「STEAM教育」であり、我々の理念と完全に合致することを確認した。

小学校連携への関心: 小学校への「STEM BOX」設置に関心が示された。

課題と解決策: 教育予算の98%以上が人件費で占められており、新規予算確保が困難である現状が共有された。これに対し、我々はJICAや世銀の動向を踏まえ、「高校生や大学生をトレーニングし、彼らがメンターとして小学生を指導する」という、低コストかつ教育効果の高いエコシステムを提案した。

推進体制:予算をかけずに直ちに始動できる枠組みとして、「関係者による定例 MTG 組織」を設置することで合意した。

12月2日(火)

【外交・行政サイドとの連携深化と「できることから」の合意】

14:00 - 15:30 在ガーナ日本国大使館 表敬訪問

対応者:義本 博司 特命全権大使、雨宮 こずえ 一等書記官

議論内容:

インフラ課題:「Life with Tech」推進には、公立校のインターネット環境整備が不可欠であることを確認。

地方連携の意義:松茂町のような地方自治体が国際協力に関与することによる地域活性化のメリットを共有。

STEAMの質:単なる理系教育ではなく、アートや文化を通じた自己表現(中島氏提案)を含む、日本独自のSTEAM教育の重要性について説明し、理解を得た。



16:30 - 17:30 教育省(MoE)副大臣面会

対応者:Dr. Clement Abas Appark 副大臣

成果:前日のGESでの議論(学生メンター制度等)を踏まえ、改めて連携を提案。予算的な課題は認識しつつも、副大臣より「できることから全て行っていこう」という力強い賛同を得て、省として推進する方針で合意した。



12月3日(水)

【トップ会談と異例のスピード決定:即時承認の確認】

10:00 - 10:30 教育省(MoE)大臣面会

対応者:Mr. Haruna Iddrisu 教育大臣

同席:三坂氏(MAGO MOTORS社員/パートナーとして同行)

協議経緯:

当初予定時間は6分間であったが、大臣が提案内容に強い関心を示し、約20分間の実質的な協議となった。

GESと同様の提案を行ったところ、大臣より「再来年のスタートでは遅すぎる。早期から着手すべきだ」との強い意向が示された。

成果: STEAM 連携への「Full Support」の確約を得るとともに、翌日開催される STEM BOX イベントへの招待を受けた。



#### 11:30 議会訪問（教育部会 議長面会）

概要：夏以来の再会を喜び合うとともに、全面的に協力して進めることで一致。

事実判明：12月1日に我々が行った提案内容はその日のうちに大臣・副大臣へ共有されており、翌2日の予算委員会にて「この内容を実施すること」が説明され、既に承認されていたことが判明した。

意義：具体的な予算額は調整中ながら、ガーナ教育省として本事業を推進する意思決定が、提案からわずか1日で完了していたことを確認した。

#### 15:00 JICA ガーナ事務所（再協議）

対応者：小田次長、佐藤氏

報告：教育省・GESとの協議が異例のスピードで進展し、政府承認が得られた経緯を共有。

リベリア案件についての協議：

背景：リベリア大使が日本の八尾市（錦城ゴム）を視察した経緯や、リベリア JICA 同窓会との連携について説明し、リベリアでの教育事業展開の可能性を相談。

JICA 側の見解：

リベリアには JICA 事務所（支所）がなく、フィールドオフィスのみ（日本人スタッフ2名）で、道路・電力・医療等が重点分野である。

結論：事務所が存在しないため、「草の根技術協力事業」の申請対象国ではない（対象外）ことを確認した。

助言：外務省の NGO 連携スキームなどは可能性があるが、JICA の直接的なスキームでは支援が難しい現状を共有した。

#### 17:00 アグボグブローシー視察

視察内容：

MAGO MOTORS / Gallery: アートを通じた廃材再生の現場を視察。

技術連携：徳島県の富士スレート株式会社と連携した廃プラスチック利用タイルの製造機械、およびEVバスの組み立て工場を確認。

展望：いずれも立ち上げ期であり、今後はガーナ大学などで導入される計画であることを確認した。



12月4日（木）

【国家的イベントでの認知拡大と現場の熱量】

10:00 大統領&教育大臣主催「STEM BOX」イベント

概要：大統領も出席する国家的イベントに、大臣直々の招待により参加。

待遇：来賓席の最前列（VIP席）に招待され、日本人として唯一、我々のチームが紹介を受けた。

方針：ガーナ政府として、この「STEM BOX」を全国の小学校へ配置し、教育改革を推進する方針を現地で確認した。



14:00 Accra High School 訪問

施設：別棟に設置された「STEAM センター」を視察。

設備：多数の LEGO、プログラミングツール（Arduino 等）に加え、3D プリンターや船舶修繕用の本格的な工具などを完備している。

活動状況：初期の指導段階では STEM 教育の要素が強いが、応用段階では学生自身が発案し、Arduino を使って様々なモノづくりを展開していた。

印象・成果：学校側は自分たちの技術力に非常に自信を持っており、実践的な教育環境が整っていた。我々との連携について強い希望が示された。

21:00 アクラを出発し、ヨルダンへ移動。



#### （４）実施体制

松茂町：主催

株式会社 steAm：事業の企画・運営・各種関係団体との調整

#### （３）事業の目標に対する成果

Woman in Tech Ghana の松茂町訪問を通じて、教育現場・大学・企業・防災施設といった多様なフィールドを横断的に共有し、教育・文化・防災・産業の実践を総合的に発信することができた。特に、長原小学校での授業視察や和太鼓演奏を通じた交流は、ICT を活用した教育実践や、女性教員が伝統文化の継承に主体的に関わる姿を示す機会となり、ガーナ側参加者にとって教育・ジェンダー・文化の観点から大きな学びを得る場となった。

四国大学やマツシゲート、地元企業（富士スレート）への訪問を通じて、STEAM 教育、環境教育、資源循環、産業連携といったテーマを一体的に捉える視察・体験の機会を提供した。特に、e-Waste や藍染の端材を活用したワークショップは、環境問題と創造的なものづくりを結びつける実践的な STEAM 教育の好例となり、相互理解を深める成果を上げた。

加えて、事前ワークショップから万博本番、フィールドワーク、現地渡航に至るまで、大学生・中学生・地域住民が段階的かつ主体的に参画する仕組みを構築できた点は、本プロジェ

クトの大きな成果である。特に、ワークショップ企画や運営に若者が関わることで、国際交流を「体験」に留めず、自ら考え、発信する学習機会へと発展させることができた。

さらに、ガーナ現地渡航においては、教育省、GES（ガーナ教育サービス）、在ガーナ日本大使館、JICA との協議を通じ、国家レベルでの STEAM 教育連携に関する明確な合意を得るに至った。提案からわずか1日で予算委員会承認がなされ、教育大臣より「Full Support」を得たことは、本プロジェクトが単なる交流事業に留まらず、実効性のある国際協力モデルとして高く評価された成果である。

#### （４）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

大阪・関西万博を一過性のイベントとして捉えるのではなく、万博を起点とした持続的な国際交流と人材育成のレガシー創造を強く意識して実施された点に大きな意義がある。

万博会場（クラゲ館）でのワークショップでは、これまで松茂町で積み重ねてきた学びや交流の成果を、国内外の来場者に向けて発信した。ガーナを題材としたものづくり体験は、文化理解と創造性を融合した STEAM 教育の実践例として、万博の理念である「いのち輝く未来社会のデザイン」を体現する取り組みとなった。

また、万博本番に至るまでの事前ワークショップやフィールドワークを通じて、地域住民や学生が「万博に参加する側」から「万博をつくる側」へと意識を転換していった点は、人的レガシーとして極めて重要である。特に、若い世代が国際交流の企画・運営・実践に主体的に関わった経験は、万博終了後も地域や将来の国際活動へと還元されることが期待される。さらに、ガーナ政府との STEAM 教育連携合意は、万博を契機として生まれた国際的な制度・政策レベルのレガシーであり、地方自治体発の国際協力モデルとして高い波及効果を有する。このように、本プロジェクトは、地域・教育・国際協力を横断しながら、万博後も継続・発展する人的・制度的・教育的レガシーの創出に寄与した。大阪・関西万博を「点」ではなく「線」として活かし、地域から世界へとつながる持続可能な交流基盤を構築した点に、本事業の大きな価値がある。

#### （５）特によかった点、苦勞した点

##### 【良かった点】

松茂町住民たちが、STEAM Labo やガーナとの国際交流活動を通して、「ごみ」「環境」といったテーマを今まで以上に自分事として捉え、主体的に行動する姿が見えた。

防災交流拠点施設「Matsushigate」を活用することで、STEAM 教育・環境教育・国際交流を横断的に実施できる拠点が形成された。

長坂真護氏をはじめとするアーティストや専門家との連携により、ガーナの現状を「知識」だけでなく、「表現」や「体験」を通して理解する機会を創出できた。

##### 【苦勞した点】

文化観や価値観、スピードの違いによりガーナ側との意思疎通やスケジュール調整に想定

以上の時間を要した。

## (6) 今後の展開予定

### 1) 今後の展開内容

- ・ 定期ミーティングの実施と体制強化（2026年～） 2026年より、ガーナ教育省および関係機関との定期ミーティングを確実に実施する。これにより、すでにガーナ側が進めている自国予算確保や実施体制の整備状況を共有・同期し、強固なパートナーシップを確立する。
- ・ JICA 草の根技術協力事業への申請準備（2026年9月目標） 定期ミーティングを通じてプレ・プロジェクトの成果を検証し、2026年9月を目途に JICA への正式申請を行う。
- ・ 時差を克服するハイブリッド型交流の実施 時差の影響を受けにくい「ビデオレター」や「SNS」を活用した非同期型の交流と、特定の日時に合わせたリアルタイム交流を組み合わせ、教育効果の高いプログラムを展開する。

## (7) 今後の展開における課題

### 1) 今後の課題

- ・ 9時間の時差を考慮したプログラム設計 日本とガーナの間には9時間の時差（日本が進んでいる）があり、リアルタイムでの学生間交流を実施する場合、活動時間が極めて限定される点がネックとなる。そのため、同期型（リアルタイム）と非同期型（録画や作品交換等）を組み合わせた、時差を乗り越える柔軟なプログラム作りが必要不可欠である。
- ・ JICA 申請に向けた着実な実績作り 2026年9月の JICA 草の根技術協力事業申請に向け、日本側で確保できたミニマム予算とガーナ側の自己資金を最大限に活用し、申請の採択要件を満たす確実な連携実績を積み上げることが求められる。

### 2) 持続的に展開するための工夫

- ・ ガーナ側の主体的な予算・体制構築との連動 ガーナ側はすでに自国分の予算確保や実施体制づくりを早い段階から進めている。日本側も確保したプログラム予算（ミニマム）を活用し、双方がリソースを出し合う「両輪」の体制でプロジェクトを推進する。
- ・ オンラインツールを活用した効率的なプロジェクト運営 物理的な距離と時差を埋めるため、オンライン会議やデジタル教材（動画等）を積極的に活用する。特に、ガーナ側教員へのノウハウ共有（OJT）や学生交流において、時間や場所に縛られない手法を取り入れることで、持続可能な運営を可能にする

## 3-30 愛媛県 × モザンビーク

### (1) 背景と目標等

#### 1) 背景と目的

県では、労働人口の減少に伴う地域経済の担い手として外国人材に大きな期待が寄せられているところであり、受入環境の整備に向けて、県民一人ひとりが広い視点と地球市民としての自覚を持ち、国際理解の増進に努める必要があるほか、教育現場においては、グローバルな問題に関心を持ち、次代の国際人としての教養を身に付け、国際社会において活躍する国際人材の輩出が求められている。

このような中、万博を契機とした国際交流において、本県 NGO と従前より、親交を深め、東京オリパラで愛媛県がホストタウンを務めた縁があるモザンビークに焦点を当てた住民交流を進めることが、同国の歴史や文化に触れる中で、互いの違いを認め、尊重し、理解しあうことを学び、国際理解の向上や多文化共生社会の進展へと繋がると共に、アフリカ諸国が抱える諸課題をはじめ、南北経済格差や環境問題など幅広い分野において、グローバルな視点で考え、行動する真の国際人の育成に資するものと考えている。

### (2) 事業内容

#### 1) 令和7年度愛媛・モザンビーク万博国際交流事業（万博期間中）

##### ① スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

令和7年5月9日から令和7年9月30日まで

##### ② 内容

日時：令和7年7月27日

場所：大阪・関西万博 モザンビークパビリオン

取組内容：これまでモザンビークとの交流活動に取り組んできた中高生等18名が、モザンビーク人スタッフと協働して同国のPR活動を行う。

- ・モザンビーク人スタッフとの共同での同国PR
- ・愛媛とモザンビークの交流パネル・武器アートの展示及び交流活動発表
- ・ティンビラ（モザンビーク伝統楽器）によるミニコンサート



7月27日交流イベント

参加者：これまでモザンビークとの交流活動に取り組んできた中高生等18名

##### ③ 効果

A:自治体内への波及効果

当日のモザンビークパビリオン来訪者数は、万博開催以来最高記録で 33,000 人を超えたことから、愛媛とモザンビークの交流の歴史や活動について広く周知できたと考える。

B:実施により達成できた成果

アンケートの回答結果は、国際的取り組みへの関心：94.8%、国際理解の進展：94.7%、モザンビークへの興味関心・理解：93.8%、今後も関わりたい（継続意欲）：100%、全体満足度：「とても満足」89.5%/「やや満足」10.5%（合計 100%）という結果となった。

C:相手国への波及効果

当日の様子やインタビューがモザンビーク国営放送で紹介されたことから現地にも交流を PR することができた。

2) 令和 7 年度愛媛・モザンビーク万博国際交流事業（万博期間中追加分）

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

令和 7 年 7 月 27 日から令和 7 年 11 月 28 日まで

②内容

日時：令和 7 年 10 月 4 日

場所：大阪・関西万博 モザンビークパビリオン

取組内容：これまでモザンビークとの交流活動に取り組んできた中高生等が、モザンビーク人スタッフと協働して同国の PR 活動を行う。

- ・モザンビーク人ティンビラ演奏者であるマチュメ・ザンゴ氏及び万博テーマ事業「いのちの遊ぶ場 クラゲ館」を象徴する音楽バンドと共演
- ・モザンビーク『平和の日』を題材に、来館者と参加型で共に学ぶ
- ・ジンバブエ副大統領とモザンビーク通信・デジタル変革大臣等を迎えた特別演奏（ティンビラによるパフォーマンス）
- ・モザンビークパビリオン内での多様な人々との交流

参加者：大学生・専門学校生、高校生、中学生小学生などで構成され、県内でモザンビークとの交流を積極的に進めている団体である BoF(Bridge of Friendship)や RTF (Ricky & Timbila Family：県内で活動するティンビラ演奏チーム)メンバー及びモザンビーク人スタッフを含む計 18 名



10 月 4 日交流イベント

② 効果

A:自治体内への波及効果

令和 7 年 7 月 27 日に実施の交流イベントが盛り上がったことを受け、モザンビークパビリオンから、再度実施してほしいとの要望があり、追加で開催したもの。

愛媛とモザンビークの交流の歴史や活動について改めて広く周知できたと考える。

#### B:実施により達成できた成果

事後アンケートによると、参加者の総合満足度は9割以上となり、交流意欲については全員が「高まった」と回答し、モザンビークへの理解や関心も91.7%が増加したと答えていることから、国際理解や文化理解の向上という事業目的は概ね達成されたと考える。なお、8.3%の回答については、もっと交流したかったという参加者からの意見だった。

#### C:相手国への波及効果

イベント実施日はモザンビークでは「平和の日」の祝日であり、来場者に内戦後の歴史やティンビラが復活したことなどを伝え、イベントの意義や文化的価値を深く理解する契機となった。

### 3) 令和7年度愛媛・モザンビーク万博国際交流事業（万博期間後）

#### ①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

令和7年5月9日から令和7年12月26日まで

#### ②内容

日時：令和7年11月1日から令和7年11月10日

令和7年11月13日から令和7年11月22日

場所：（令和7年11月1日から令和7年11月10日）

- ・三島公民館（四国中央市）
- ・道の駅 霧の森（四国中央市）
- ・松山市立宮前小学校
- ・松山市立荏原小学校
- ・宇和島市立遊子小学校
- ・宇和島市立城北中学校
- ・宇和島市立城南中学校
- ・松前町岡田中学校
- ・愛媛県立松山聳学校
- ・愛媛大学附属高等学校
- ・愛媛県立松山北高等学校
- ・愛媛大学
- ・西条市立玉津小学校
- ・新居浜市生涯学習センター

（令和7年11月13日から令和7年11月23日）

- ・松山市桑原小学校
- ・城山公園
- ・西条市立三芳小学校
- ・愛媛県立松山北高等学校



マチュメ氏学校訪問

- ・松山市立宮前小学校
- ・八幡浜市立真穴小学校
- ・愛媛県立吉田高等学校
- ・松山市立新玉小学校
- ・松山市立荏原小学校
- ・四国グローバルネットワーク

取組内容：大阪・関西万博を契機とした国際交流を通じ、県民の国際理解の向上及び多文化共生地域づくりの推進

(令和7年11月1日から令和7年11月10日)

- ・モザンビーク概要紹介
- ・国際交流事業の紹介
- ・マチュメ・ザンゴ氏、RTFの紹介
- ・ティンビラ演奏ワークショップ
- ・モザンビーク文化体験(ティンビラ楽器演奏、カプラナ試着体験等)

(令和7年11月13日から令和7年11月23日)

- ・モザンビーク概要紹介
- ・国際交流事業の紹介
- ・ケスター氏(アーティスト:武器アート製作者)、ネリー氏(画家)の紹介
- ・ワークショップ(アルミホイルアート、画用紙に平和についての絵を描く)

参加者:(令和7年11月1日から令和7年11月10日)

- ・三島公民館(約80名)
- ・道の駅 霧の森(約150名)
- ・松山市立宮前小学校(100名)
- ・松山市立荏原小学校(66名)
- ・宇和島市立遊子小学校(37名)
- ・宇和島市立城北中学校(278名)
- ・宇和島市立城南中学校(28名)
- ・松前町岡田中学校(270名)
- ・愛媛県立松山聾学校(13名)
- ・愛媛大学附属高等学校(43名)
- ・愛媛県立松山北高等学校(23名)
- ・愛媛大学(約100名)
- ・西条市立玉津小学校(129名)
- ・新居浜市生涯学習センター(25名)

(令和7年11月13日から令和7年11月23日)

- ・松山市桑原小学校(165名)

- ・城山公園（約 200 名）
- ・西条市立三芳小学校（20 名）
- ・愛媛県立松山北高等学校（80 名）
- ・松山市立宮前小学校（188 名）
- ・八幡浜市立真穴小学校（48 名）
- ・愛媛県立吉田高等学校（18 名）
- ・松山市立新玉小学校（93 名）
- ・松山市立荏原小学校（58 名）
- ・四国グローバルネットワーク（7 名）

### ③効果

#### A:自治体内への波及効果

24 か所の学校や公共施設等を訪問し、全行程を通じて、約 2,200 名以上の幅広い層が参加し、県民の国際理解が深まったと考える。

#### B:実施により達成できた成果

音楽交流では「音楽には人をつなぐ力があると感じた」といった感想があり、異文化理解が深まった。

アート交流では、武器アートや子ども兵士の存在を学び、戦争は二度と起こしてはならないという認識を改めて感じる機会となった。よって、国籍や言葉を越えた交流から国際理解や文化理解の向上という事業目的は概ね達成されたと考える。

#### C:相手国への波及効果

モザンビークの人たちがアートや音楽を通して平和を訴えている姿を知ったり、戦争や貧困、生活環境の違いを理解したりすることで世界の現状に関心を持ち、自分たちにできることを考えるきっかけとなった。

## 4) 令和7年度愛媛・モザンビーク万博国際交流事業（万博期間後追加分）

### ①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

令和7年5月21日から令和7年12月12日まで

### ②内容

日 時：令和7年11月24日、29日、30日

場 所：・松山市男女共同参画推進センターCOMS（コムズ）（24日、30日）  
 ・愛媛県生活文化センター（29日）

取組内容：（令和7年11月24日）

- ・料理教室：ヴェロニカ氏の指導のもと、サモサ、マタパ、トコサード、シマ、バオバブクリームなど、モザンビークの代表的な家庭料理を調理。
- ・交流会： 関西万博モザンビークパビリオンのスタッフだったケネディ氏を迎え、ティンビラ演奏やダンス、モザンビーク産のお茶の試飲等を行った。

（令和7年11月29日）

- ・料理教室：ヴェロニカ氏の指導のもと、サモサ、マタパ、トコサード、シマ、バオバブクリームなど、モザンビークの代表的な家庭料理を調理。
- ・交流会：モザンビーク共和国のアルベルト・パウロ大使を迎え、日本との交流やモザンビークの現状や課題についての大使のスピーチやモザンビークでの生活や教育、経済活動といった内容の質疑応答を行った。

(令和7年11月30日)

- ・料理教室：ヴェロニカ氏の指導のもと、サモサ、マタパ、トコサード、シマ、バオバブクリームなど、モザンビークの代表的な家庭料理を調理。
- ・交流会：元 UNDP モザンビーク事務所ナショナルエコノミストのケンボ氏を迎え、自己紹介、モザンビークの紹介、ケンボ氏とのトークセッション、参加者一人ひとりとの意見発表、相互交流、ティータイムを行った。

参加者：・令和7年11月24日

料理教室：32名

交流会：23名

・令和7年11月29日

料理教室：26名

交流会：34名

・令和7年11月30日

料理教室：25名

交流会：24名

報道対応：・令和7年11月24日

(料理教室)愛媛朝日テレビ

共同通信・讀賣新聞

(交流会)共同通信・讀賣新聞

・令和7年11月29日

(料理教室)愛媛新聞

(交流会)愛媛新聞



10月29日料理教室



10月29日 交流会  
アルベルト・パウロ大使と

### ③効果

#### A:自治体内への波及効果

料理教室では現地の食材や調理法を共に体験することで、参加者同士やモザンビーク出身のゲストとの間に自然な対話が生まれ、世代や国籍を超えた交流が深まった。また、交流会ではティンビラ演奏や民族衣装の体験を通じて、異文化の理解を深め、多様性を楽しむことのできる機会となった。

#### B:実施により達成できた成果

事後アンケートでは、料理教室、交流会ともに「とても満足」という意見が多数を占め、国際理解や文化理解の向上という事業目的は概ね達成されたと考える。

#### C:相手国への波及効果

モザンビークの文化や生活、食文化に触れることで、理解や関心が深まった。

### (3) 事業の目標に対する成果

事後アンケートでは、「国際交流への関心が高まった」、「平和への意識が高まった」という意見が多数あり、また、各イベント参加者のうち、モザンビークの歴史・文化への理解又は国際理解が進んだと答えた者が9割以上占めていることから、本事業の取組を通じて、国際理解、国際協力、グローバルな問題への関心を持つ県民の増加に大きく寄与できたと考ええる。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

これまでの県内 NGO 等による現地とのコネクションに加え、県下学校・公共施設において音楽やアート、料理等の交流をしたことで、異文化への親近感やSDGsへの関心を高める成果を得ることができた。行政主体ではなく、民間団体や、次世代を担う若い世代による交流を図れていることから、今後の両国の継続的な交流に向けた強みとなっていると感じる。

### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

万博期間後の音楽交流では、児童や生徒は言葉が通じなくても音楽を介して交流ができることを実感し、本事業の成果は、今後の国際交流や多文化共生教育に通じるものとなっていると感じる。また、アート交流では、戦争で使われた武器がアート作品に生まれ変わる体験は、戦争を身近に感じさせ、平和の大切さを感じさせられる機会となった。また、創作活動は楽しさや達成感を味わうことのできる体験となった。よって、将来的な国際交流や平和活動への関心や意欲を高める活動となったと考ええる。

### (6) 特に良かった点、苦労した点

#### 1)良かった点

事後アンケートによると、各イベント参加者のうち、モザンビークの歴史・文化への理解又は国際理解が進んだとアンケートに答えた者が9割以上占めていることから、本事業の取組を通じて、国際理解、国際協力、グローバルな問題への関心を持つ県民の増加に大きく寄与できたと考ええる。

#### 2)苦労した点

7月27日の万博会場でイベントを行う際には、熱中症など体調を崩すことないようリスク管理を心掛けたり、一部の参加者にとっては今回が万博に行くことができる唯一の機会であったことから「他のパビリオンにも行きたかった」という要望を満たせなかつ

たという点を含め、1日の交流イベントとして実施した限界もあったと感じると同時に複数日間の交流とした場合、夏休み期間の部活動等の兼ね合いで、日程・参加者調整が難しくなると感じたりした。

## **(7) 今後の展開**

参加者の交流意欲を維持・深化させるため、事後のフォローアップや地域でのモザンビーク関連イベントの継続的な実施が大切だと考える。

## **(8) 今後の展開における課題**

今回の万博国際交流事業のような特別な機会を捉え交流を続けていきたい。交流事業実施の際には、文化理解や言語学習の事前学習を強化するなどし、参加者全員が自信を持って交流に取り組める環境を整えることで、より質の高い国際交流体験につなげることを提供することを目指す必要がある。

### 3-3 1 高知県本山町・土佐町 × セーシェル

#### (1)背景と目標

高知県本山町と北海道大空町は、いずれも豊かな自然環境と農林業・観光業などを基盤とする小規模自治体である。美しい山河や湖といった地勢は地域の強みである一方、少子化に伴う若年層の流出、地域産業の担い手不足、国際的な接点の不足といった課題を抱える。

またいずれの地域も多くの子どもが保育園から高校まで同じメンバー・同じクラスで過ごしており、関係性の硬直化が課題であった。一度築かれた関係性は子どもにとって変え難く、多様性にも乏しいため、新たな刺激を受ける機会が著しく少なかったと言える。そのような状況を打破するために、高知県立嶺北高等学校および北海道大空高等学校は生徒の全国募集を行い、多様な生徒が集い協働性を育む教育環境を構築してきた。今回のセーシェル共和国の中高生との交流は、その延長線上にあり、越境を通して新たな関係創出の機会といえる。

本事業は、大阪・関西万博を契機に、セーシェル共和国の生徒・教育関係者と大空町/大空高校、土佐町・本山町/嶺北高校の関係者を中心とする交流を通じ、両国の生徒にとっても、国際理解の促進はもとより、地域の持続可能性にフォーカスし、相互に学び合う機会を創出することを目的に実施した。また同時に、この交流を契機として、将来の交流人口化や教育環境の多様性創出を念頭に、短期での留学生受入につなげることを目指している。



高知県嶺北地域の棚田



北海道大空町のじゃがいも畑

#### (2) 事業内容

1) 事業名：万博国際交流プログラム

①スケジュール

8月25日(1日目)

伊丹空港 → 関西国際空港 → 大阪市内ホテル

8月26日(2日目)

大阪市内ホテル → 住吉大社 → あべのハルクス → 心齋橋 → 大阪城 → 大阪市内ホテル

8月27日(3日目)

大阪市内ホテル → 大阪万博見学およびセーシェルパビリオンお手伝い → 大阪市内ホテル

8月28日(4日目)

大阪市内ホテル → 高知市内ホテル → 高知城 → 高知市内ホテル

8月29日(5日目)

高知市内ホテル → 龍河洞(鍾乳洞) → 桂浜 → 紙漉き体験 → 沈下橋 → 高知市内ホテル

8月30日(6日目)

高知市内ホテル → 嶺北地域本山町で町長表敬訪問 → 嶺北高校で歓迎イベント → 汗見川で遊泳 → 嶺北地域宿泊施設

8月31日(7日目)

嶺北地域宿泊施設 → 高知空港 → 羽田空港 → 女満別空港 → 大空高校交流拠点施設にて町長表敬訪問およびモルック大会 → 網走市内ホテル

9月1日(8日目)

網走市内ホテル → 大空高校で歓迎イベント → 調理実習体験 → オホーツク流水館 → 網走監獄博物館 → 網走市内ホテル

9月2日(9日目)

網走市内ホテル → 知床半島(知床五湖高架木道・自然センター・ウトロ道の駅) → 大空高校(ここで大空高校生とはお別れ) → 網走市内ホテル

9月3日(10日目)

網走市内ホテル → 女満別空港 → 羽田空港 → 東京大学にて成果発表 → 羽田空港 → 嶺北メンバーは高知へ、セーシェルメンバーは(ドバイ経由で)セーシェル共和国へ

## ②体制

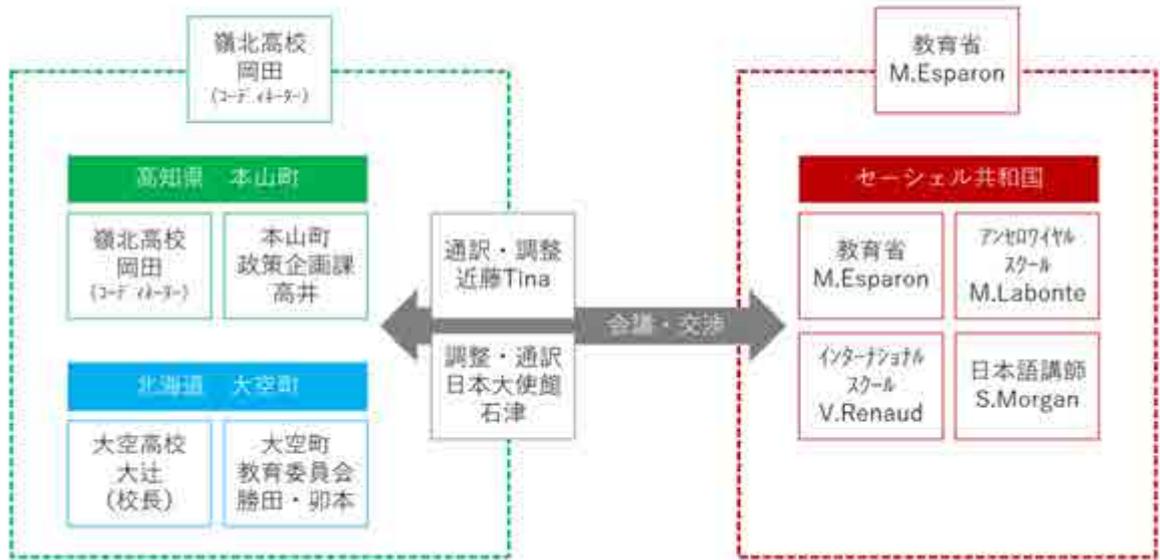
### 【受入側体制】

- ・大空町(教育委員会)/北海道大空高校
- ・本山町(政策企画課)/土佐町(企画推進課)/高知県立嶺北高校
- ・在セーシェル日本大使館(会議等調整および通訳)
- ・近藤多津子氏(通訳/旅程コーディネーター/相手国調整)  
(・アフリカ開発協会 事務局長 長谷川 仰子 氏)

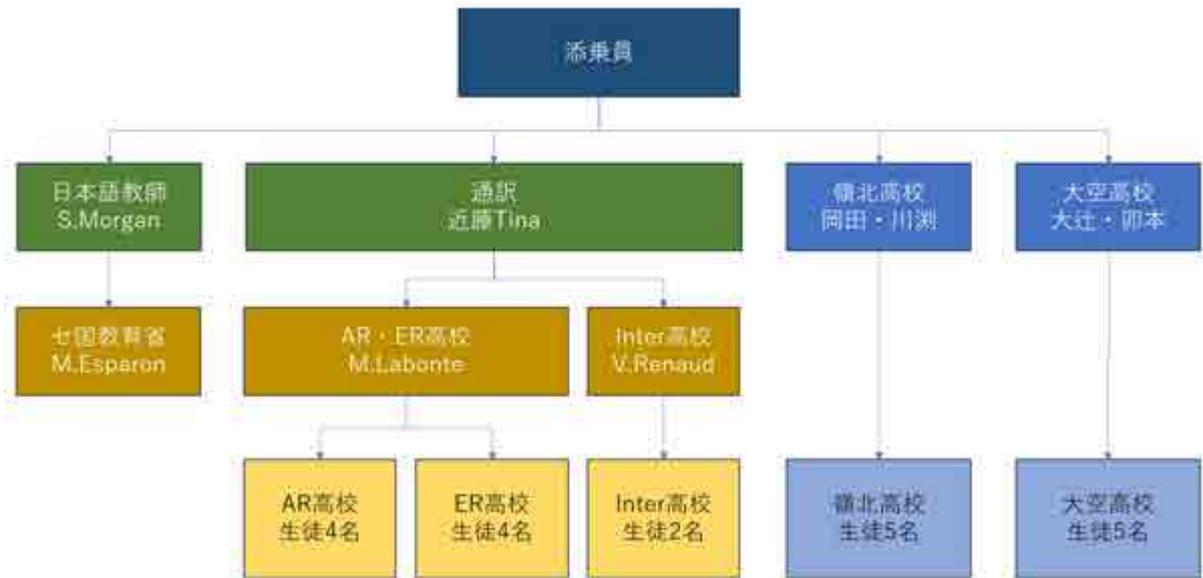
### 【相手国体制】

- ・セーシェル共和国 教育省(生徒派遣)/観光庁(万博会場での交流プログラム)
- ・Anse Loyal Secondary School(生徒/引率派遣)
- ・English River Secondary School(生徒派遣)
- ・International School(生徒/引率派遣)
- ・Sophie Morgan 氏(現地日本語講師/生徒引率他)

・プログラム実施前コミュニケーション体制



・プロジェクト実施体制



③内容

A-1. 大阪（都市部）視察

日時：2025年8月26日

場所：住吉大社／あべのハルカス／心齋橋／大阪城

内容：日本の都市部において歴史・文化・技術を学ぶことを主目的においている。セーシェル共和国の人たちだけでなく、高知嶺北地域の子どもにとっては「都市部文化・高層ビル」は目新しく、北海道の子どもたちにとっては「歴史的建造物・都市部文化・高層ビル」が学

びとなった。



## A-2. 万博パビリオン交流 (8/27)

日時：2025年8月27日 13:00-17:00

場所：大阪関西万博・夢洲会場内 Seychelles Pavilion (Commons A)

内容：入口での3問ミニクイズでセーシェルの自然・文化・言語・持続可能性に触れ、館内鑑賞を経て、出口付近での短い対話とメッセージ記入（デジタル／カード）につなぐ

「Know-Connect-Leave a Trace」の導線で実施。

通常のパビリオン運営では展示物への個別解説は想定されていなかったが、1月にセーシェルを訪問した日本側メンバーを中心に、来場者へ同国の魅力や展示物の意図を端的に紹介した。これにより来場者の理解度と満足度が向上。生徒も積極的に声をかけ、短い質疑や感想交換が随所で生まれた。



## B-1. 高知市内 (8/28-29)

日時：2025年8月28日

場所：高知城

内容：28日に大阪市内を出発し、高知市内に移動。歴史的建造物である高知城を見学した。高知城は日本国内に僅かに残る「現存天守」の城郭であり、8月26日に訪れた大阪城よりも歴史的文化的価値が高いと考えられる。セーシェル共和国には城という概念すらない国

であることから、日本の歴史に興味を寄せる場面が多く見られた（城壁の狭間・石落としなどセーシェル共和国の歴史では生まれない建築上の構造などに興味を持っていた）。同じく北海道にも同様の建造物は少なく、大空町の子どもにとっても貴重な体験となった。



日時：2025年8月29日

場所：龍河洞／桂浜／いの町くらうど（紙漉き体験）／沈下橋

内容：セーシェル共和国には素晴らしい自然環境があるが、鍾乳洞はなくセーシェル・高知・北海道いずれの子どもたちにとっても初めての体験となった。桂浜では龍馬像を見るにあたり日本の歴史を学習し、いの町くらうどでは紙漉き体験を行った。高知県において日本の自然環境や歴史を学ぶ機会となった。



## B-2. 嶺北地域交流（8/30）

内容：本山町内で町長表敬、棚田・権現の滝の見学、嶺北高校での交流、汗見川での自然体験を一体的に設計。地域住民も含む公開型の交流とし、地域資源の価値を国際的視野から再発見する機会となった。宿泊は汗見川ふれあいの郷・清流館。

効果：一般住民を含む多数が高校での交流に参加し、学校・自治体・住民が一堂に会することで、関係人口の見える化と、地域において国際的な交流を継続していく布石となった。



### C-1. 大空町交流：町長表敬訪問・レクリエーション

日時：2025年8月31日 15:00-17:00

場所：北海道大空高等学校 交流拠点施設「ソラポート」

内容：大空高校の交流拠点施設「ソラポート」において大空町町長を表敬訪問。そののち大空高校生（交流団以外）の生徒と交流を深めるため、大空高校寮生たちとモルック大会を開催。ルールが簡単なためノンバーバルな交流が進んだ。

### C-2. オホーツク地域交流①「歴史・文化」

日時：2025年9月1日 9:00-17:00

場所：北海道大空高等学校／オホーツク流水館／網走監獄博物館

内容：セーシェル共和国の方々・嶺北高校生が大空高校を訪れ、書道パフォーマンスやよさこいソーランでおもてなし。日本文化の理解が進んだ（嶺北高校生にとっては高知発祥のよさこい踊りが北海道においてどのような独自文化として発展していることを知る機会となった）。またセーシールのダンスも披露して頂き、日本の高校生も入り混じってともに踊ることで、相互の文化理解を深めた。

その後、家庭科実習室で調理実習を行い日本料理である「おにぎり・天ぷら」をつくり、皆で一緒に会食した。

高校をあとにし、オホーツク流水館では厳しい北海道の冬、網走監獄博物館では「収容されていた人々が道作りのため多くの犠牲になった」という負の歴史を学んだ。



### C-3. オホーツク地域交流②「自然」

日時：2025年9月2日 10:00-17:00

場所：知床半島・大空高校

内容：セーシェル共和国の方々・嶺北高校生・大空高校で世界自然遺産である知床半島の大自然を体感した。当初、フェリーで知床半島を見て回る想定であったが、強風のため船が欠航。知床五湖の高架木道および自然センターさらに鮭の遡上を見学する行程へと変更した。セーシェルは自然あふれる島であるが、蝦夷鹿などの大型動物は少なく自国とは異なる自然に感動をしていた。日本の高校生にとっても知床半島を訪れる機会はそう多くはなく、いずれの国の中高生にとっても稀有な経験となった。その後、大空高校に戻り、翌9月3日の報告発表会のプレゼンテーションづくりに勤しんだ。

効果：北海道の雄大な自然と学校の特色ある教育を直接体験することで、再訪・再交流への意欲が高まり、翌日の都内報告会（9/3）に向けた共同制作の素材・語りの厚みが増した。



### D.成果報告発表会

日時：2025年9月3日 14:30-15:30

場所：東京大学情報学環・福武ホール地下2階ラーニングスタジオ

内容：今までの行程で体験したこと・学んだことをプレゼンテーション形式にまとめ、東京大学情報学環にて発表を行った。テーマは

- ・セーシェル共和国の魅力
- ・大阪万博の魅力
- ・高知県（嶺北地域）の魅力
- ・北海道（オホーツク地域）の魅力

の4つで、それぞれセーシェル・日本の中高生混合チームで編成し資料作成および発表を行った。それにより相互理解が深まった。また聴衆者としてアフリカとの交流を行っている団体（MJP）や東京大学職員、保護者なども参加し盛況であり、緊張感をもって発表を行うことが出来た。



### (3) 事業の目標に対する成果

#### 1. 相互理解の深化

- 都市文化・歴史理解 (A-1 大阪視察)  
各地域の子どもたちが都市部の歴史・文化・技術を学ぶ機会となり、セーシェル参加者にとっても日本の都市の多様性を知る入口となった。  
→ 異文化・異地域の背景理解を広げる効果あり。
- 万博パビリオン交流 (A-2)  
通常展示に加え、日本側メンバーによる補足解説や質疑応答が加わり、単なる鑑賞以上に理解が深まった。  
→ 「セーシェルを知る」「日本人に伝える」という双方向性が生まれ、相互理解が強化された。
- 嶺北地域交流 (B)  
棚田や自然資源を通じて地域の価値を再発見し、セーシェル・日本の双方が「自国／他地域の良さ」を語り合う場となった。  
→ 地域資源を国際的な視点でとらえるきっかけとなり、相互理解が生活文化・自然領域に拡張。
- 北海道交流 (C-1～3)
  - ノンバーバルなレクリエーション (モルック) が、言語を超えた交流の効果を生んだ。
  - 書道・よさこい・セーシェルダンス・調理実習といった「体験型」の文化共有は、単なる見学以上に共感的理解を形成。
  - 知床での自然体験は、互いの環境的特徴を比較する中で理解が深化。
- 成果発表会 (D)  
混合チームでの発表準備・実施を通じ、学んだことを言語化・再共有する過程

が、理解をさらに定着させた。

聴衆の前で発表することで緊張感と達成感があり、互いの文化を「自分の言葉で説明できる」状態に至った。

## 2. 今後の交流機会の拡大

- 公開型交流（B 嶺北地域）  
住民・自治体・学校を巻き込んだ設計により、関係人口の可視化や「地域ぐるみの国際交流」という継続性の基盤が形成された。
- 大空町での寮生交流（C-1）  
寮生など交流団以外の層とつながる機会をつくったことが、「点」ではなく「面」として交流を広げるきっかけとなった。
- 東京での発表会（D）  
MJP や大学関係者など、今後の交流支援に関わり得る第三者が聴衆として参加し、新たなネットワーク形成の可能性を高めた。

## 3. 総合評価

- 相互理解の深化：  
各行程で「見る・聴く」だけでなく「体験・対話・共同作業」を組み込んだことで、文化・歴史・自然・生活習慣といった多層的理解が進んだ。
- 今後の交流機会の増加：  
公開型設計（地域住民参加）、多様な接点（学校・自治体・大学・NPO）を通じて、継続的交流につながる土台を築いた。

→ よって、本事業は当初の目標である「相互理解を深めること」「今後の交流機会を増やすこと」に対し、高い効果を上げたと総括できる。

## 4. アンケート結果及びその考察

- 国際理解の促進と多様な価値観の獲得  
本事業の核である国際理解促進に関して、参加者全員（100%）が「国際交流の取組は価値のあるものだと思うようになった」と回答した。特に自由記述からは、「日本との文化的な違いを受け入れる力が身についた」「多様な価値観や固定概念に気付けた」といった具体的な変化が確認される。これは、異文化理解が抽象的な知識に留まらず、参加者自身の柔軟な思考力として定着したことを示している。
- 地域の持続可能性へのフォーカスと相互学習  
事業目標の一つであった「地域の持続可能性」に関する学びと交流についても、高い成果が得られた。参加者の自由記述には、「セーシェルの文化を教えてもらったり、SDGs やセーシェル、日本の環境問題なども考えるヒントをもらえた」という言及

があり、相互学習の機会が創出されたことを裏付けている。また、セーシェル交流団との交流に対する「とても満足」(80%)という高い評価は、深い交流を通じてテーマ学習が進んだことを示している。

- 将来の交流人口化と教育環境の多様性創出への契機  
本事業は、短期留学生受入や将来的な交流人口化への布石となることも目指していた。アンケート結果は、参加者の国際的な活動への意欲が大幅に向上したことを示している。
- 継続的な交流意欲：参加者全員(100%)が「今後もセーシェルの方と交流を持ちたい」と回答している。また、本事業を経ての国際交流に対するイメージや価値について身近なものに変容したことが自由記述欄よりうかがえる。よってこの交流が単発で終わらず、長期的な国際交流関係の構築(交流人口化)の契機となったことを示している。
- 進路意識への影響：国際的な仕事・取り組みに対する関心が全員(100%)で「高まった」と回答しており、「進路について『海外に行ってみたい』と思うようになった」という記述も得られた。本アンケートは、国内生徒のみの回答ではあるが、これは、事業が教育環境の多様性創出(留学への意識変化)に貢献し、次なるステップ(短期留学生受入)への布石として有効であったことを示唆している。

#### (4) レガシー創造への寄与

本事業については、当初より相手国の教育に対する考え方や経済状況を踏まえ交流相手国を選定し、またアフリカ開発協会事務局長の長谷川氏をはじめ、従来より相手国との関係構築に尽力されてこられた関係者並びに諸機関の協力が得られたことで、本事業を契機として持続的な交流のスキームを構築していくことが可能になったと考える。

また、今万博における相手国のテーマである「持続可能なツーリズム」は、我が国にとっても極めて重要なテーマであることは言うまでもない。パビリオンでのプログラムやその後の嶺北地域、並びに大空町での観光探究を通じては、両国の生徒が相互にツーリズムのあり方や、地域の持続可能性について考える契機となったものとする。今後両校における探究学習等を通じて、今回の経験を活かした活動や取組へとつながっていくようにしていきたい。

#### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

当初、両国の生徒は言語面の不安や距離感を抱えていたが、移動・学習・生活を共にする中で、言語・非言語の双方を駆使した関わりが自然と育まれた。最終日には互いに抱き合っ別れを惜しむ姿が見られ、固い絆で結ばれたことが分かった。バスの中ではセーシエルの生徒が日本語で感謝を伝える挑戦もあった。

現在でも生徒間では SNS を利用して相互のやり取りが続いており、恒常的な関係性づくりに寄与したと考えられる。

万博会場での多数の来場者との対話、地域での自然体験と学校交流、そして都内での最終報告会は、生徒に英語での発話・傾聴・要約の成功体験をもたらし、観光・環境・コミュニティデザイン等への興味を広げ、「海外と地域の双方に関わる進路」への想像力を具体化した。



## (6) 特に良かった点・苦勞した点

### 1) 良かった点

#### 1. 体験型・参加型の交流が多かった

見学や鑑賞だけでなく、クイズ・パフォーマンス・調理実習・ダンス・モルック大会など「一緒にやる」活動が多く、自然に会話や笑顔が生まれた。

言語の壁を超えた交流が実現した点は大きな成果。

#### 2. 地域住民や多様な関係者を巻き込めた

嶺北地域での公開交流や、大空町での寮生との交流、さらに東京での発表会で大学・団体を巻き込むなど、限定的な交流団だけでなく“地域ぐるみ”で国際交流が広がった。

これにより「関係人口の見える化」や、継続的なつながりを意識できた。

#### 3. 多様な文化・歴史・自然に触れられた

都市（大阪）、地域（嶺北）、自然（知床）、歴史（網走監獄）と、異なる文脈での日本を多面的に体験できた。

それぞれの場面でセーシェルと比較が自然に行われ、相互理解が広がった。

#### 4. 共創型の成果発表で理解が定着

東京大学での報告会では、セーシェルと日本の生徒が混合チームを組み、発表を共同で作りに上げた。

学びを「整理・言語化・共有」する過程で、相互理解が一過性でなく持続的な記憶と経験として定着した。

#### 5. 柔軟な対応ができた

知床での船が欠航した際、すぐに陸上ツアーに切り替え、結果的にサケの遡上やシカなど貴重な自然に触れる機会となった。

トラブルを逆に「共有体験」として価値化できたのは、交流の一体感を強めた。

### 2) 苦勞した点

#### 1. 教育背景や文化背景が異なった

事前のオンラインミーティングなどセーシェル側のドタキャンなどがあり、調整に苦勞した。

プログラムを進めるにあたって「整列する」「時間を守る」などの概念がセーシエルの中高生になく（ときにはセーシェル引率団も）集団行動をするにあたって苦勞がともなった。

## 2. 多地点から集い、多地点を巡る

2 拠点の交流ではなく、セーシェル・本山町（嶺北）・大空町の 3 拠点交流であり、連携事業であったため関係者が複数の組織を横断することとなり、調整や行程の編成について苦労があった。

多くの参加者を伴う行程であったため、途中で体調不良者なども現れ、臨機応変に対応する必要があった。

## （7）今後の展開

当面は、数か月から半期程度の留学生受入から初めて行く方向で先方教育省関係者らと確認をした。（8）に記載の課題等、検討すべき事項は多いものの、今回の渡航を契機として、相手国生徒の日本に対する興味関心、留学に対する意欲は高まったものと考えており、早期の制度検討に努めたい。

自治体単独で事業を検討していくにはハードルが高いことは否めないが、相手国政府、在セーシェル日本大使館をはじめとする国内外関係機関との協力体制を構築し、財源確保等含めて検討していきたい。

## （8）今後の展開における課題

### 1. 渡航コスト

留学生の受入にあたっては、両国間の物理的距離とそれに伴う渡航費の捻出が課題となることは言うまでもない。比較的経済的にも豊かな同国を相手国として選定した背景もこの点にあるが、依然として大きな課題として捉えている。

今後関係諸機関や民間等との連携を通じて、渡航費の一部を補助する等の仕組みについても検討していく。

### 2. 言語の壁

今回のプログラムを通じては、全体を通してノンバーバルなコミュニケーションも含め、日常的なコミュニケーションの部分に関しては十分に対応可能なことが分かった。

一方で、留学での長期滞在、かつ学校での学習を受けるとなると、日本語能力の有無が与える影響は大きく、今後の課題である。

今回帯同いただいた Sophie Morgan 氏を中心に、先方教育省の協力のもと、渡航前に一定の日本語教育が受けられる体制も同時に整備していく必要があるものと考えている。

### 3. 学校間のカリキュラム調整等

留学プログラムの実施にあたっては、相手国の教育過程や留学生に対する何らかの資付与（Certification）の可否についても調整していく必要があるものと考えている。

## 3-3 2 大分県杵築市 × ジンバブエ・ブルンジ

### (1) 背景と目標

#### 1) 背景と目的

杵築市では少子高齢化など多くの解決すべき課題に直面しているが、安心・安全で活力あるまちづくりに取り組んでいる。JICA で活躍し、アフリカに多くの人脈を持ち、ニューズウィークの世界が尊敬する日本人100人に選ばれた坪井達史氏が幼少期を過ごし、現在在住する杵築市は古き良き日本の残る街である。

大阪・関西万博を契機として、世界に貢献してきた坪井さんの活躍を知ってもらうことは、杵築市のこどもたちはもちろん、日本中の地域のこどもたちに未来を感じてもらえ、また、新しい農業人交流の契機を万博国際交流に積極的に参加することで取り組んでいきたいと考えている。現在、日本が人口減少傾向にある中で、発展し人口が増加しているアフリカと交流することで、坪井さんの経験を生かして、広く日本の地域が元気になるように取り組みできればと考えた。

ジンバブエ共和国とブルンジ共和国からの熱烈なオファーを受け、いのち輝く未来社会のための交流ができればと願っている。それが、杵築市のこどもたちが元気になり、世界とつながり、活力あるまちづくりができていくことにつながると考えている。

#### 2) 目標

令和6年度は杵築市内の全中学校でウスビ・サコ先生と坪井氏の講演会を開催した。また、杵築市内全小学校でADNJの皆さんとの交流会を開催し、坪井氏にも講演していただいた。

杵築市の未来を託すこどもたちに万博会場でのイベントに参加するための、持続可能な交流を行う下地はしっかりとつくれた。

また、ジンバブエ大使を杵築市にお招きすることもできた。杵築市内関係者にウスビ・サコ先生の講演会に参加いただく機会を作ることができた。

令和7年度は、万博開催当年度であるため、本市の未来を担うこども達に「世界の今を知り、未来を考え想像する場」である万博へ参加してもらい、夢や力を育み、みらいへ希望を抱けるものとし、グローバル人材の育成や多文化共生の理解を深める取組としたい。

### (2) 事業内容

#### 1) 5月8日ネリカ米種まき企画

①令和7年2月にジンバブエ大使が杵築市を訪問いただいた際から、動き出した。

万博会場のパビリオンにて実際のネリカ米を見ていただけることを目標に、準備をした。

②ジンバブエ大使館を通じたジンバブエパビリオンの協力を得られるように日々コミュニ

ケーションをとり、実現した。

③2025年5月8日にCOMMONS Bのジンバブエパビリオンにて開催。

実際に坪井さんによる種まきの実演を行いました。ジンバブエパビリオンスタッフ及び来場者に見学いただいた。

ジンバブエパビリオンに展示出来たことは素晴らしい成果だと思う。ジンバブエ、ブルンジパビリオンを坪井さんに訪問いただき、杵築市をあらためてアピールいただいた。ジンバブエ、ブルンジは今後の交流の意義を十分に理解していただいた。写真を大分合同新聞にも提供し、掲載いただいた。



2) 6月15日ブルンジナショナルデー企画

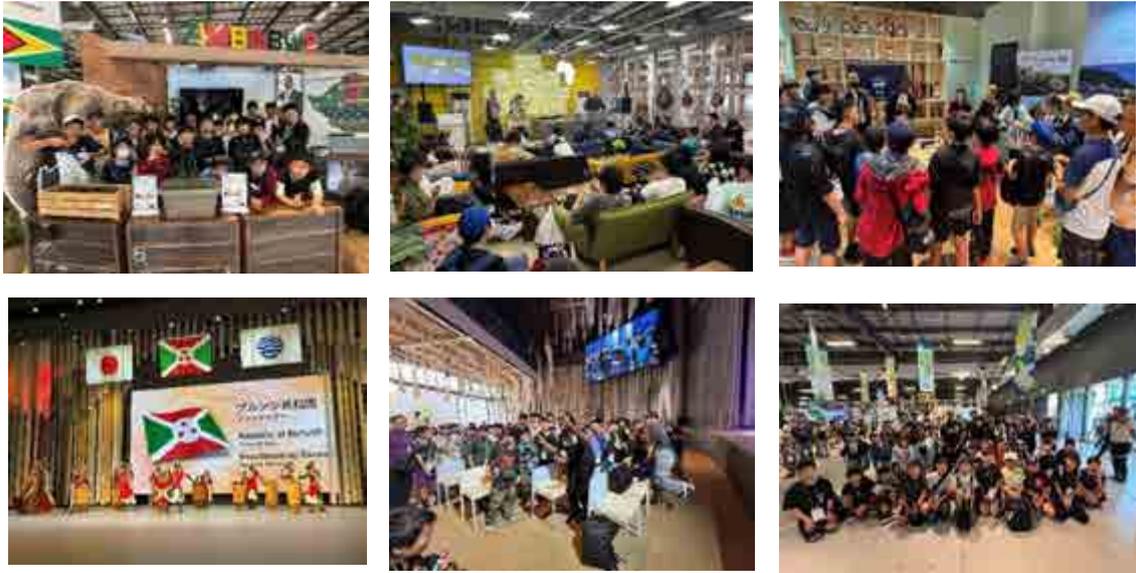
①万博国際交流に取り組んだきっかけが、杵築市子どもたちに郷土に坪井さんのような偉人がおられることを知っていただき、子どもたちにジンバブエ、ブルンジを起点として、世界に興味を持っていただけるようにすること。多くの子どもたちに参加いただけるように6月15日日曜日に開催のブルンジのナショナルデーに万博に行くことを計画し、杵築市内の小中学生を対象に募集をさせていただいたところ希望者多数で抽選にて参加者を決めさせていただいた。

②コクリ研究所と東武トップツアーズと連携をし、準備にあたった。ブルンジパビリオンの協力を得て、ナショナルデーへの子どもたち全員の参加を調整した。また、午餐会に永松市長と坪井さんをお招きいただいた。

③2025年6月14日15日の2日間万博を見学した。14日にジンバブエパビリオンを訪問した。また、アフリカレストランPANA Fにてアフリカの方々との交流会も開催した。令和6年度に杵築市の3中学校でご講演いただいたウスビ・サコ先生もかけつけてくださり子どもたちにご挨拶くださった。ジャンベの演奏で子どもたちも盛り上がっていた。15日はブルンジナショナルデー公式行事にお招きいただいた。子どもたちはブルンジの太鼓のパフォーマンスに感動していた。

④効果

杵築市子どもたちにとりまして、かけがえのない経験になったと思う。杵築市の最大の目標の子どもたちに万博を経験してもらうことが達成出来たことはもちろん、その中身を子どもたちも理解してくれていた。ジンバブエ、ブルンジ両国からも大変感謝いただいた。



### 3) 7月16日ジンバブエ・ナショナルデー企画

①7月16日水曜日に杵築市内の事業者の方々に参加いただき、ナショナルデー公式行事への参加を行った。

②コクリ研究所がジンバブエ大使館と連携して、準備。

7月15日16日万博見学。

16日のジンバブエ・ナショナルデーには元衆議院議員中森先生、万博首長連合の阪口相談役なども来場いただき、永松市長、坪井さんとともに、ムナンガグワ大統領をはじめとした、ジンバブエの方々との交流を深めていただいた。

#### ④効果

杵築市内に万博国際交流の取組みを啓蒙することができた。ジンバブエ関係者に杵築市との関係をあらためて理解いただけた。



### 4) 9月26日収穫祭企画

①5月に種まきを行ったネリカ米を万博会場内で2つのプランターで栽培したが、生育状況はあまりよくなかった。杵築市内で植えていただいたネリカ米を刈り取りいただき、アフリカレストランPANA Fで試食会を出来る状況でしたので、準備を進めた。

また、杵築市役所屋上でプランター栽培したネリカ米の生育がよく、そちらを万博会場を持っていき、実際の刈り取りをしていただく企画の準備を行った。

②コクリ研究所と連携をし、万博会場での受入れ準備、PANA Fとの調整、来賓への案内を行った。ネリカ米プランターの移送は杵築市よりトラックのレンタカーで運び、何とか開催出来る形が整った。

③2025年9月26日の来賓は下記。

- ・ジンバブエ大使はじめ大使館より数名
  - ・ブルンジパビリオン
  - ・ウガンダパビリオン
  - ・JICA アフリカ部 白川 佑希（ゆうき）様
  - ・高科大阪・関西万博副事務総長
  - ・内閣官房国際博覧会推進本部事務局 内田参事官
  - ・ 同上 石居主査
  - ・万博首長連合 阪口相談役
  - ・万博首長連合 宮井様
  - ・大阪府山口副知事（奥野秘書同席）
  - ・大阪府市万博推進局 彌園局長、九之池課長、他2名
  - ・中森ふくよ元衆議院議員（秘書青木様同席）
  - ・坪井達史
  - ・杵築市副市長、議員3名、他職員4名（市長選挙につき市長欠席）
  - ・万博国際交流プログラム事務局（近畿日本ツーリスト）山川幸則
- 事前にNHKでも報道いただいた。

④効果

ジンバブエ大使が参加くださり、杵築市との関係は今後も持続していくお話をいただいた。また、万博国際交流の成果を広く示すことができた。



### （3）事業の目標に対する成果

当初の目標であった杵築市子どもたちに万博を経験していただくことができた。報道のお陰で、坪井さんのご活躍を大分県内でも知っていただくことができ、ご講演などでも活躍いただいている。杵築市内の事業者はじめ、杵築市民に万博が身近な物になり、万博を契機として国際交流出来る機会を得たことで、子どもたちの視野が広がったのみならず、広く市民に喜んでいただけたのではないかと思う。

#### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価) )

杵築市の事業者が、ネリカ米を活用した高タンパクな商品開発をしたり、市内に新しい動きが芽生えてきている。ネリカ米の栽培を小学校が取り組んだりしてくれており、市民がアフリカ（ジンバブエ、ブルンジ）を身近に感じてくれるようになっている。

この2年間の交流のレガシーとして、ジンバブエ大使館、万博関係者、ブルンジ万博関係者やJICAの関係者との関係性の構築ができたことをレガシーとして、継続できればと考えている。

#### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

昨年度、市内の全中学校、小学校に坪井氏とともにサコ先生やADNJの方々に訪問いただけたことで子どもたちの世界感が変わったと感じている。その上で、本年度子どもたちが万博会場に行くことが出来、ブルンジナショナルデーへの参加や、ジンバブエ、ブルンジパビリオンでの交流などかけがえのない体験をしてくれた。PANA Fでの交流ではウスビ・サコ先生はじめADNJの皆さんとの再会も楽しむことができた。

また、アンケート結果では、「非常によかった」という意見が大半を占めており、自由意見として「坪井さんの今までの活動がとてもすごいことだと思った」や「ただパビリオンを見て回るだけと思っていたが、ブルンジの方々と様々な交流ができてよかった」、「このような機会を杵築市が積極的につくってくれてありがたい」など肯定的な感想や意見が多くあり、参加したこども達がアフリカの国々に対する理解が深まり、グローバルな価値観を身につける大きなきっかけになったと感じている。

#### (6) 特に良かった点、苦勞した点

##### 1)良かった点

2カ年で事業実施したことにより、市内全小中学校で交流相手国や坪井氏の国際貢献の取組を学び万博開催年を迎えたことが、交流事業ができたことがこども達にも自然と理解ができ世界に目を向けるきっかけとなった。

また、アンケート結果において、今後も継続した国際交流事業に取り組んでほしいという意見が多くあった。

##### 2)苦勞した点

万博という特殊な環境の中での相手国との調整及び、博覧会協会との調整に苦勞する点が多々あったが、坪井氏のネリカ米を通じた国際貢献の実績を高く評価していただいたお蔭で、交流相手国も特別な対応をしてくれ、交流事業を実施することができた。

## **(7) 今後の展開**

今後はJICAとの関係による交流の継続を実現していきたいと考えている。また、企業版ふるさと納税を活用して継続的な財源を確保し万博を契機とした国際交流を継続・発展させていきたいと考えている。

## **(8) 今後の展開における課題**

国による国際交流に対する財政的支援をお願いできればありがたい。

### 3-33 宮崎県えびの市 × マダガスカル

#### (1) 背景と目標等

##### 1) 背景と目的

- マダガスカル共和国との交流を機に、中等教育段階で日本語を学ぶマダガスカル共和国の生徒の留学先となり、マダガスカルの大学で日本語を専攻する学生の進路としてえびの市を選択できるように関係構築と体制整備を進めていく。中学生と高校生が減少している中で、日本語を学んでいて意志ある若者がえびの市で活躍し地元の人材と価値観や文化の交流が起こることを期待する。
- えびの市にある宮崎県立飯野高等学校は市内で1校しかない公立高校であり、地域との交流が盛んである。さらに、地域みらい留学という制度を導入しており宮崎県外から高校に通う生徒もいるため学生寮を含めた受け入れ体制は整っている。さらに、当校は（一財）地域教育魅力化プラットフォームが掲げるみらいハイスクール構想に参画していて、「越境」をテーマに地域や社会に開かれた学びを生徒が得られる環境を提供している。そのため、マダガスカル共和国で日本語を学ぶ中学生が留学先として選ぶことができる土壌がある。マダガスカル共和国の課題として、日本語を学んでも活かせる場所がないという現状があるが、当校への留学やえびの市内企業へ就労という方法で課題解決につながると考える。さらに、当校の在籍生徒にとっても留学生を受け入れることで日々の学校生活が国際空間になるため、高校生段階から多様性の考えや国際性を養う環境になることを期待する。

##### 2) 目標

- 交流後にえびの市内中高生とマダガスカル共和国の学生による年間3回のオンライン交流会を定例化すること。
- 隔年で相互に行き来できる体制を整備すること。
- 初期段階で短期（最大半年）の研修、将来は3年間の留学を実現すること。
- マダガスカルからえびの市に就労する人材の発掘。

#### (2) 事業内容

##### 1) 事業名：【えびの市万博国際交流プログラム】

###### ① スケジュール

(交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過を記載してください。)

- 3月上旬：令和6年度より連携している遊佐町と（一財）地域教育魅力化プラットフォームとで令和7年度も申請することを確認。
- 3月中旬：マダガスカル共和国関係者と協議。
- 3月下旬：内閣官房に申請。

- 4月初旬～5月初旬：えびの市教育委員会と市内中学生のプログラム参加実現に向けて協議。
- 5月初旬：市内各中学校に参加者募集の案内送付。各中学校から1名の代表生徒選出を依頼。
- 5月23日：市内中学生4名の参加者及び引率する中学校教員も決定。
- 6月12日：第1回 参加者会議
- 7月9日：第2回 参加者会議
- 7月24日～26日：マダガスカル共和国参加者とえびの市内交流
  - ・ 7月24日：市内観光および歓迎交流会
  - ・ 7月25日：市長表敬、市内観光、異文化交流
  - ・ 7月26日：市内産業見学、自然アクティビティ体験、文化交流
- 7月27日～28日：大阪交流
  - ・ 7月27日：大阪・関西万博見学および発表
  - ・ 7月28日：大阪フィールドワーク
- 8月4日：西諸県地域が集まる教育委員会の会議にて報告会
- 9月19日：マダガスカル共和国、えびの市、遊佐町の参加者で振り返り会
- 12月20日：えびの市教育フォーラムにて報告（予定）

## ② 体制

（交流事業の達成に向けた自治体、相手国、交流関係団体の実施体制を記載してください。）

- えびの市企画課：申込窓口、各所調整
- えびの市教育委員会：市内中学生および引率教員参加の調整
- 宮崎県立飯野高等学校：高校生2名および引率教員参加の調整、文化交流
- アウトドアステーションえびの：市内アクティビティ調整
- 株式会社 terra：えびの市内研修企画・運営
- 明石酒造株式会社：市内見学先
- 有限会社東康夫養鶏場：市内見学先
- PACHAMAMA：えびの市内研修撮影および万博会場で流す動画の作成
- 遊佐町：プログラム連携自治体
- （一財）地域教育魅力化プラットフォーム：両自治体との調整、マダガスカル関係者との連絡、将来的な留学や就労に関する調整
- アンタナナリボ大学：キーパーソンであるラクトマナナ先生の所属大学
- Eagles' wings Montessori School：交流するマダガスカル共和国生徒の所属学校
- Lycee Capucine：交流するマダガスカル共和国生徒の所属学校

## ③ 内容

[7月24日]

場所:えびの市（矢岳高原、真幸駅、AgritelOBENO）

取組内容:市内観光および歓迎交流会

参加者:マダガスカル共和国 6 名、CPF 職員 1 名、飯野高校生 2 名、中学生 4 名、引率教員 2 名（高校 1 名、中学校 1 名）、市担当職員 1 名

報道対応等:南日本新聞

[7 月 25 日]

場所:えびの市（えびの市役所、森岡城、道の駅えびの、飯野高等学校）

取組内容:市長表敬、市内観光（道の駅えびの・森岡城）、異文化交流（飯野高校にてバスケットボール・書道・茶道・折り紙の体験）

参加者:えびの市長、副市長、教育長、企画課長、学校教育課長、マダガスカル共和国 6 名、CPF 職員 1 名、飯野高校生 2 名、えびの市内中学生 4 名、引率教員 2 名（高校 1 名、中学校 1 名）、担当係長、市担当職員 1 名、飯野高校生

報道対応等:南日本新聞、MRT 宮崎放送、えびの市広報

[7 月 26 日]

場所:えびの市（矢岳高原、真幸駅、AgritelOBENO）

取組内容:市内観光および歓迎交流会

参加者:マダガスカル共和国 6 名、CPF 職員 1 名、飯野高校生 2 名、中学生 4 名、引率教員 2 名（高校 1 名、中学校 1 名）、市担当職員 1 名

報道対応等:南日本新聞

[7 月 27 日]

場所:大阪・関西万博

取組内容:マダガスカルブース訪問および 2 年間の取組発表

参加者:マダガスカル共和国 6 名、CPF 職員 1 名、飯野高校生 2 名、中学生 4 名、引率教員 2 名（高校 1 名、中学校 1 名）、市担当職員 1 名、遊佐町関係者 16 名

報道対応等:

[7 月 28 日]

場所:大阪府

取組内容:えびの市と比較するフィールドワーク

参加者:マダガスカル共和国 6 名、CPF 職員 1 名、飯野高校生 2 名、中学生 4 名、引率教員 2 名（高校 1 名、中学校 1 名）、市担当職員 1 名、遊佐町関係者 16 名

報道対応等:

[8 月 4 日]

場所:えびの市

取組内容:西諸県郡教育委員会へ中高生が発表

参加者:高原町教育委員会、小林市教育委員会、えびの市教育委員会、飯野高校生 2 名、中学生 4 名、引率教員 2 名 (高校 1 名、中学校 1 名)、市担当職員 1 名  
報道対応等:なし

[9 月 19 日]

場所:えびの市、オンライン

取組内容:万博国際交流プログラムの参加者振り返り

参加者:マダガスカル共和国 6 名、CPF 職員 3 名、遊佐町関係者 10 名、飯野高校生 2 名、中学生 4 名、引率教員 2 名 (高校 1 名、中学校 1 名)、市担当職員 1 名

報道対応等:無し

[12 月 20 日 (予定) ]

場所:えびの市

取組内容:えびの市教育フォーラムにて取組の発表

参加者:調整中

報道対応等:

### (3) 事業の目標に対する成果 (総括)

本事業は、日本語教育を中等教育段階で行うマダガスカル共和国の生徒が留学先や就労先としてえびの市を選ぶきっかけを作ることに対し、関係構築と受入体制整備にむけた起点となった。

留学・就労に向けて:えびの市の自然・文化に加え、地元の酒造会社や特産品の卵を生産する養鶏場といった地域の事業所 (7 月 26 日) を視察させたことで、マダガスカルの学生にえびの市での生活と就労を想定させることができた。大都市大阪との比較 (7 月 28 日) も踏まえ、えびの市の生活の良さや自然の美しさが伝わり「将来えびの市で学ぶこと」や「就労人材が出てくること」へ期待が持てるようになった。実際に、大阪においてマダガスカルの参加者は「自然の多いえびの市に戻りたい」と声を漏らしていた。

持続的な関係構築:市内観光や異文化交流 (7 月 24 日、7 月 25 日) を通じて、両国の学生が少しずつ打ち解けていった。これにより、「交流後に年間 3 回のオンライン交流会を定例化すること」の基盤ができ、継続交流に向けた起点となると期待できる。

地域の受け入れについて:市長表敬 (7 月 25 日) などを通じて行政とマダガスカル共和国との関係構築を行った。また、万博での発表や教育フォーラムでの報告 (12 月 20 日予定) は、市民の国際理解と本事業をきっかけとしたマダガスカルとの交流継続に向けて起点となることを期待する。

#### **(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与（総括）**

本事業は、万博を最大限に活用し、日本語教育を起点とした相互交流と地域教育魅力化のモデルというレガシーを創造した。

長期的な交流：万博会場での発表（7月27日）は、えびの市とマダガスカル共和国の交流が長期的なプロジェクトになることを参加者たちが望んでいることを示し、万博閉会後の事業継続のためのきっかけとなり得る。

他自治体との連携：遊佐町との合同振り返り会（9月19日）により、地方自治体間の国際交流の知見を共有し、運営を相互に補完し合うモデルを構築した。これを起点に遊佐町との交流も活発になるようにしていきたい。

人材確保：市内事業所見学（7月26日）を通じて、海外の日本語専攻をしている学生の進路選択肢にえびの市が浮上し、将来的な「就労」という目標達成に向けて一歩前進した。

#### **(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮（総括）**

本事業は、えびの市内の中高生に対し、地域への誇り、自信、キャリア教育という点で将来に希望を持ち、地元愛につながることを期待できる。

世界と繋がる地域：飯野高校生徒を中心に、市内中学生を含めてマダガスカルメンバーを「おもてなし」し、自らの学校や地域資源を主体的に紹介したことで、生徒たちは地元の魅力を再認識できた。自分たちの日常の風景が「世界にとっての魅力」であることを実感したことは、将来への希望となったと考える。

生徒の学び：万博会場での発表（7月27日）は今後の人生で同じような機会が訪れるかわからないほど貴重な経験で、生徒たちは自信を持つことができた。この経験は、将来国内外を問わず、新時代を生き抜く力につながっていると考える。

自身の将来について：えびの市内の事業所訪問や大阪との比較を通じて、生徒たちは地元での仕事や生活について魅力を発見する機会になった。さらに、地方でも国際的な仕事をするができるという視点を持たせることもできた。

#### **(6) 特に良かった点、苦勞した点（総括）**

良かった点

本事業において最も評価できる点は、中高生を中心としてプログラムを進めた点である。市内観光や異文化交流では、中高生自身が、行政職員や教員のもと、説明役、通訳、観光案内を主体的に行った。この生徒主体の運営により、マダガスカルとの間に心理的な壁を

作ることなく交流ができた。また、単なる文化紹介に留まらず、留学・就労を意識したプログラム作成を行った点も評価できる。さらに地域の事業所（酒造、養鶏）を訪問させたことで、マダガスカルの子生はえびの市を「将来働く場所」として具体的にイメージでき、交流事業が地域の人材確保に繋げる可能性が生まれた。実際にアンケート結果でも、「えびの市で就労するなら」という質問に視察先の農業が入っていた。

#### 苦勞した点

事業運営における壁は、市の教育委員会管轄で義務教育課程にある中学生（市内各中学校所属）と、県の教育委員会管轄である高校生（飯野高校所属）を同一の国際交流プログラムに加えた際の、制度的・行政的な調整であった。中学生と高校生では、活動の経験値や学校現場での安全管理基準が異なり、えびの市教育委員会、各中学校、飯野高校という複数の機関の間で、活動内容、安全管理、広報活動の範囲に関する合意形成を図ることに時間と労力を要した。特に、中学校側で求められる義務教育の枠組みでの調整や、公的文書の作成と配布までに時間を要したが、申請窓口である企画課と中学校を管轄する市教育委員会が中心となり、高校生と同じ活動を中学生段階から経験できる価値を相互で確認し、プログラム実施ができるように各所調整を行い実現にたどり着くことができた。

### （7）今後の展開

今後の交流継続に向けて：年間 3 回のオンライン交流の実施に向けて、引き続きマダガスカル共和国側との連絡を続けていく。英語表現などの時間をうまく活用し教育機関で実施しやすい形を模索していく。将来は高校 3 年間をえびの市に留学する生徒が出てくることが理想だが、まずは短期研修（最大 10 日）や短期留学（半年から 1 年）を受入れ、体制が整った段階で 3 年留学を行うというステップを目指し協議を進めたい。就労については、マダガスカル共和国の人材と連絡を密に取り、希望をヒアリングし該当する企業と企業側の意向を確認しながら、就労ビザ発給などの調整が必要である。

### （8）今後の展開における課題

交流継続について：本事業後の交流についてはオンラインが軸となるが、単なる継続にせず、互いの関心を高め合う内容にしていくことを念頭に置く。さらに、隔年での対面交流の実現に向けて、飯野高校の探究学習をモデルとした相互理解や両国の中高生の学びに直結する内容の作成が必要である。このような取り組みを続けていくことで、マダガスカルで日本語を学ぶ生徒に対し、「日本語学習を活かせる場所はえびの市である」というイメージを定着させていく。その希望があれば、学習意欲が高まり、留学に来る生徒の日本語能力が向上する期待が高まり、えびの市にとっても人材確保の点において効果が見込める。

長期留学・就労に向けた整備：3 年間の留学を実現するためには、日本国内の身元引受人の調整が必須である。また、マダガスカルの子生が帰国後、同国の大学入試制度に円滑に対応

できるような履修・単位認定に関する制度調整も必要となる。※日本の大学に進学する場合はこの限りではない。就労については就労ビザ取得が必要になり、就労が実現した場合でもその人材が短期で離職することなく地域に定着するため支援も必要になる。

次世代の地域内人材育成へ：本プログラムの成果を、参加した一部の生徒だけでなく市内の全生徒・全市民の学びや地域活性化に繋げるため、このような活動機会を行政と教育現場が連携して実施に向けた協議をしていく必要がある。児童生徒数が減少しているえびの市だが、子どもたちが今回のような経験を得ていくことで地域や社会のために考え行動する人材が増え、その子どもたちが次の世代を考え、社会を創っていく未来が期待できる。

### 活動写真





### 3-34 鹿児島県三島村 × ギニア

#### (1) 背景と目標

##### 1)背景と目的

本村は、3つの小規模外海離島を合わせて人口 360 名という小さな自治体ながら、これまでママディ・ケイタさんという一人の演奏家を核に交流を継続し、愛知万博、東京2020とその機をとらえることで、ギニアとの交流及びジャンベの振興を図ってきた。愛・地球博での演奏をきっかけに中学校でのジャンベが定着し、東京2020での交流がきっかけでそれが村内の4校に広まり現在に至ったように、大阪・関西万博でもこの機を得て、次世代へのジャンベの定着と発展を図ることが目的である。

##### 2)目標

2025年2月に在京ギニア大使が三島村役場を訪問した。計画していた島への訪問は荒天によりかなわなかったが、これまでの取り組みや令和7年度における計画の説明を行った。大使からは、日本におけるジャンベ文化及びギニア文化の発信を担う存在として三島村への期待が述べられた。

本番のナショナルデー交流においては本村の取り組みの成果を実際にギニアの関係者にご覧いただく機会でもあり、国内においてもギニア文化の発信拠点としての存在を広くPRする場となる。これらを通じて、ジャンベを核とした住民の広いギニア文化理解、全国、国外の方々との繋がり強化を図る。

#### (2) 事業内容

##### 1)万博に関する事前学習

###### ①スケジュール

4月 博覧会協会及び出展予定事業者への公演依頼打診  
事務局である近畿日本ツーリストへ依頼  
学校および講師とのとの日程調整、講演内容打合せ

5月 事前学習実施

###### ②体制 万博国際交流プログラム事務局

③内容 5月21日、三島村硫黄島に講師にお越しいただき硫黄島学園にて事前学習公演を行った。村内の他の3校もオンラインでつなぎ、講演後には質問も活発に出された。児童生徒51名参加。

④効果 A、B) ナショナルデー参加に先立ち、イベントに参加する児童生徒51名は、万博の意義や万博全般に関する基本情報について講師から説明を受けた。さらにギニア展示ブースの準備状況なども紹介された。子ども達は万博の回り方や自分の行きたいパビリオンについて混雑状況などを訪ねるなど活発に質問がな

され、万博への関心を高めることができた。

C) 相手国関係者との関与は無かった。

## 2)ギニア・ナショナルデー交流

### ①スケジュール

4月 演奏指導業務委託

移動に係る旅行業務業者の選定

行程作成・リハーサル会場手配等

引率教員との打ち合わせ

5月 ギニア側担当者との情報共有

行程・人数等確定、旅行業務発注

6月 ステージに関する打合せ、バックパス手配等

ナショナルデー交流実施

### ②体制 万博国際交流プログラム事務局

ギニアパビリオン担当者 Mme.Challoub Yolande COLLE

在京ギニア大使館、在ギニア日本大使館

ギニアパビリオン出展 SOKO フーズ

③内容 6月10日、万博会場にて開催されるギニア・ナショナルデーにおいて、三島村から参加の児童生徒51名によるジャンベ演奏を披露した。指導者として本村に招聘中であったギニア人ジャンベ奏者も一緒に出演した。また、前日は本村で確保したりハーサル会場を共用とし、ギニア側にも利用いただくことでリハーサル時にも交流が生まれ、当日プログラムに対する指導も頂いた。また本村から村長、教育長、講師は午餐会にも招待いただき、ギニア側日本側双方において三島村の存在を示す機会となった。児童生徒51名参加。

④効果 A) 普段島を出ることのない本村の児童生徒達にとっては大冒険であり、さらにギニアにとって大切なイベントへ参加できるとあって、本人はもとより、保護者や関係者においても誇らしく感じることであり、村内での万博への関心はとても高まった。実際にナショナルデー当日の見学者の中には多くの関係者、保護者の顔を確認できた。

B) 本村内の児童生徒はジャンベに親しみながらも、ギニア人とあったり話したり、またジャンベ以外の文化に触れることは稀である。今回、前日リハーサルでの指導や本番前のひと時、また本番後にお互いの演奏をたたえ合う姿など、実際に肌と肌で触れ合う本物の交流をする場面をたくさん目にすることができた。後述するが、ジャンベ以外のギニア文化への関心の向上も確認された。

C) ナショナルデーにはギニア首相をはじめ、両国大使といった、まさに国の代表と言える方々が参列する中、三島村のこれまでの取り組みの成果を披露する事ができた。特に、本村の活動が実際にギニア側の代表者の目に触れる機会のごく希少であることから、大きな成果であると認識している。

### (3) 事業の目標に対する成果

ジャンベに取り組み30年を超える本村としては、その取り組みの集大成を関係者の目前で演奏という形で披露できた上、午餐会などを通じてトップ同士が直接交流する場面もあり、国内におけるギニア文化の発信拠点としての本村の立ち位置を国内外に示す成果があった。また、ナショナルデーイベントに参加した児童生徒及び教員にとっては、自分たちが普段取り組んでいるジャンベという楽器が本国の文化においてどのような位置づけなのかを肌で体感することができ、ギニア文化をより深く知る体験となった。当初見込んでいたとおりの成果を達成することができた。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与（大阪関西万博閉会後の事業継続性（相手国との関係性の評価））

ナショナルデーというのは、日本側から見れば万博期間中の一イベントであるが、ギニア側から見ればただ1日の、ギニアの文化を発信する重要な場面である。参加者は、それに関わることで、本村がこれまで継続してきたジャンベの取り組みが相手国においていかに評価されたかを実感することができた。万博交流の実施後、来年度にギニア本国で行われる国際ジャンベフェスティバルへの参加打診もあるなど、ギニア本国における認知を獲得したことは大きなレガシーと言える。なにより、国内において「ジャンベの島」としての立ち位置を確固たるものにできたことは、今後本村がジャンベ活動及びギニアとの交流を継続していく為の原動力となる。

余談ではあるが、今回のギニアの万博チームは、他の国際イベントなどと比較すると、比較的規模が大きく積極的であったように感じた。ギニアの通常の運営を知る者からすれば、ギニアとしてはありえないほど前々から準備を重ね計画が推進されていたことがうかがえた。令和6年度のプログラムにおいて、今回のナショナルデー交流の打合せなどでギニアを訪れ担当大臣と面会するなどしていたことが奏功したのかもしれない。事務方としては、ギニア本国との交流のパイプを持つことができた以上に、ギニア本国の行政内部の事情をうかがい知れたことは大きな収穫であった。

### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本村の児童生徒は学校教育の中でジャンベ学習が組み込まれており、常日頃から親しんでいる。一方で、それ以外のギニア文化や直接ギニア人との交流を図る機会はほとんどなかった。今回、ギニア人アーティストから直接指導があったり、ステージ全後での交流、また万博におけるギニアパビリオンの見学などを通じて、ジャンベ以外のギニア文化に高い興味を示すようになった。アンケート結果では、大きく「ジャンベ以外の文化も知りたい」「ジャンベ以外の楽器について知りたい」という意見が多かった。

ナショナルデーのステージでは、ギニア人のプロ演奏家によるステージを観る機会があった。自分たちが親しむジャンベ、ドゥンドゥンといった打楽器については、本場の方々が同じような形態の演奏をするのを見て親しみや自信を得たことと思う。一方でそれ以外に

バラフォンという木琴楽器や違う形の太鼓があったり、ダンスがメインの演目構成であったりと、自分たちがやっている音楽はギニアのそれのただ一部であったことを初めて知った参加者も多かったようだ。アンケートでは特にダンスに興味を持った子が多かった印象である。

また、アーティストと意思疎通を図るときに、日本語→フランス語→現地語（複数）というように通訳を行うのだが、そういった現場を目の当たりにする機会もありつつ、英語であれば直接会話することができた、言葉はわからなくても音楽で通じあった、という体験も参加児童生徒にとっては貴重であったようだ。

## （6）特に良かった点、苦勞した点

### （1）良かった点

やはり実際に人と人が出会って交流する場ができたことがよかった。ナショナルデーにおける演奏が無事完了すればそれはそれでよかったのだが、ただ演奏だけであまり交流にならない可能性も実はあった。しかし実際は前日のリハーサル会場を共にすることで密な交流を行うことができた。リハーサル中の出来事として、生徒が練習をしていた演目のうち、ダンスについて、相手方の監督の指示によって急遽取りやめとなるアクシデントがあった。練習をしてきた生徒たちにとってはショッキングな出来事であったが、見かねたアーティストが急遽ダンスを一節教えて、それを覚えて本番に臨むことになった。ハプニングではあるが、こうした人と人の中で生まれる交流こそが、本来の目的でもあると改めて感じた。

そしてやはり国の代表が揃うイベントに関われたことで参加者がギニアの文化に関わることに自信や誇りを持てたことも大きい。本村としてもそのような場での認知を得た事で、今後のジャンベ活動の推進力となる。

### （2）苦勞した点

ギニアという国は日本のようにあまり前々から準備や計画というものをしないのだが、このような大イベントになると準備が進まないどころか計画が立てられない、というのが実情である。今回は令和6年度から国際交流プログラムを活用して現地に赴き連携を図ったことで、交流計画の大枠については比較的早い段階で確定できたが、やはり直前まで決まらない項目はかなり多く、特に当日プログラムに関しては、現場で調整・調達を行う必要があり、バックパスの手配や当日の楽器運搬などにはかなり苦勞した。

計画を立てない代わりに、現場での変更が多いのもギニアの特徴である。前述したリハーサルでの出来事その他、土壇場でのプログラム変更は当日リハーサルでも起きた。児童たちが三島村の紹介の時間を準備していたのだが、まるごと削除された。ナショナルデーという性質上、ギニアの意向に全面的に沿って対応したが、ギニアの文化や情勢、アーティストたちの立場などについて事情を知らない引率教員への説得などは苦勞した。本来は、現場教員とギニア側アーティストがこういったすり合わせを通じてお互いの理解を深めていくことも国際交流の目的ではあるのだろうが、その機会を提供できなかったことは多少悔やまれる。

## (7) 今後の展開

本村のこれまでのジャンベの取り組みは大きく分けて3つあり、一つは児童生徒への学校教育におけるジャンベ指導である。もう一つはジャンベ留学制度である。本村硫黄島にある「みしまジャンベスクール」では、ママディの遺した「タムタムマンディングジャンベアカデミー」の一つとして、日本全国からジャンベ留学生として若者を受け入れて半年間のジャンベ習得プログラムを提供している。そして不定期に開催するジャンベイベントの3つである。これらをベースに今後もジャンベ活動を核としたギニアに関する取り組みを継続していく。

今回、アンケート結果を受けて「ギニアの食事に関する体験活動」「バラフォン（木琴）ワークショップ」の二つの開催を検討したが、費用の捻出がかなわず次年度以降に持ち越しとなった。また、本村では今年度ギニア人ジャンベ奏者を招聘しており、これによるジャンベワークショップも計画したが、講師が体調不良の末入院することとなり、対応に追われこちらも現在のところ延期となっている。

## (8) 今後の展開における課題

ジャンベに関する活動は継続的に行っているものの、今回大きな成果をあげたようなギニア人と直接交流する場面が少ない事が課題である。実際に人を移動させるとなるとそれなりの費用が掛かるため、本村のような財政規模では継続的に行う事は難しい。そのため万博やオリンピックといった機に大きな交流を図っている。またこれまでオンラインでの交流も幾つか行ってきたが、時差の関係でリアルタイムにつなぐことができる時間帯は限られており、学校がメインの活動においては実施の難しさもある。

また、ギニアの情勢も課題である。ギニアは現在軍事クーデター政権であり、民政移管を掲げてはいるが依然情勢は不透明である。本村のジャンベの礎であるママディ・ケイタ氏の出身地であるギニアのバランドゥグ村との交流を本村は強く望んでいるのだが、かの地は外務省の渡航危険レベル3のままであり、邦人の往来はできない。では今回のようにギニア中央政府とのやりとりや、文化の集積する首都コナクリを拠点とした交流に振り切ることができるのか、本村もまだ判断しかねるところである。つまり、これまではママディ氏の縁に頼って交流を継続してきたが、今後ギニアとの人的交流といったときに、ギニアの誰を相手方とするのか決めかねている状態である。

実施状況（写真）

■事前学習の様子



■前日リハーサルの様子



■当日の演奏の様子

■保護者や元ジャンベ留学生も観覧に来ていた



■ギニアアーティストの演奏を観覧



■演奏後にお互いの演奏をたたえ合い交流を深めた



### 3-35 沖縄県宜野座村×カメルーン

#### (1) 事業の背景・目的

本事業は、内閣官房が推進する「万博国際交流プログラム」の採択を受け、2025年民族バカ族との間で実施された国際文化交流事業である。

宜野座村は、祈り・音楽・身体表現が生活文化として根付く地域であり、森と共生し、音楽や踊りを通じて知恵を継承してきたバカ族の文化と、価値観の親和性を有している。バカ族のポリフォニーと宜野座村のエイサーが会う場として、今回のプロジェクト大阪・関西万博を契機として、沖縄県宜野座村とカメルーン共和国、とりわけ先住は構想された。アフリカ中央部の熱帯雨林に暮らすバカ (Baka) 族は、「ba (人々)」と「ka (葉っぱ)」を語源に持つとされ、「森の民」と呼ばれる彼らは、同時に「音楽の民」とも呼ばれる。

本事業では、音楽・身体・対話を媒介として、文化を「紹介する対象」ではなく「共に作り、共に考える営み」として位置づけ、万博会場内外を横断する国際交流モデルの構築を目的とした。

#### (2) 実施内容

(1) 7月29日-8月2日 宜野座村にて、沖縄のこどもたちと、カメルーン・バカ族、そして steAm (KURAGE Band) チームの文化交流

■実施日：2025年7月29日-8月2日

■会場：沖縄県宜野座村内

■対象：宜野座村のこどもたち

28日初めて日本を訪れたバカ族の皆さんと、宜野座村のこどもたちが出会い、steAm チーム (KURAGE Band) と共に、8月2日の宜野座村公演、および8月5日 (当初は6日の予定であったが5日のみに変更となった) の万博公演に向けて、まずは練習というよりも出会い・遊びの共有、発展を目指し、交流が行われた。



国際音楽交流コンサートに出演するために来日したバカ族の演奏者、宜野座村役場の関係者ら=30日、宜野座村のがらまんホール (琉球新報)

また、本件に先んじて、本国際交流事業に連動し、以下の交流も企画・実施された：

■実施日：2025年7月27日28日

■会場：沖縄県宜野座村ふれあい交流センター

■対象：宜野座村の子どもたち

\*マナラボ 環境と平和の学びデザイン協力

2025 地球たんけんたい 体験型ワークショップ

7月27日（日） 「アフリカの森で歌おう！」

7月28日（月） 「とどけよう！宜野座のものがたり」

7/27.28 ワークショップ（宜野座村 HP）

<https://www.vill.ginoza.okinawa.jp/soshiki/1008/oshirase/1160.html>

## （2）8月2日 宜野座村 国際交流コンサート

■実施日：2025年8月2日

■会場：沖縄県宜野座村がらまんホール

■対象：宜野座村住民（子どもから高齢者まで）

8月2日、宜野座村において、カメルーン・バカ族を迎えた国際交流コンサートを、宜野座村の子どもたち、KURAGE Band の協働により実施した。本取組は、万博会場外においても国際文化交流を実現することを目的に企画されたものである。

当日は、バカ族による伝統歌唱・リズム・身体表現と、沖縄の芸能文化が「Oka Go-Ni à Beléーみんなで森へ行こうー」のキャッチフレーズのもとで交差し、鑑賞型ではなく参加型、公演型ではなく遊びの延長のような形での交流が自然に生まれた。稀有な形での公演となった。

本事業は琉球新報により報道され、地域における国際交流の新たな実践として社会的評価を得た。



宜野座に「バカ族」来訪 国際交流コンサート 伝統芸能と融合「毛遊び」

2025.08.02 18:00



写真一覧



「カメルーン・バカ族来訪 国際交流コンサート」の模様（左：宜野座村がらまんホール）



■ ガラマンホール：大阪万博関連イベント カメルーン×宜野座村 国際音楽交流コンサート Oka Go-Ni à Belé ーみんなで森へ行こうー

<https://garaman-works.com/post-15312/>

■ 琉球新報：宜野座に「バカ族」来訪 国際交流コンサート

<https://ryukyushimpo.jp/region/entry-4530010.html>

### (3) 8月4日 テーマウィークスタジオ「いのちを考える会 Dialogue on Life」

■実施日：2025年8月4日 18:00～20:30

■会場：大阪・関西万博 テーマウィークスタジオ

■テーマ：平和と人権

■登壇者：

<18:00-19:20> 「多様性のよろこび：多様ないのちが花咲く社会を多角的に模索する」  
LGBTQ+活動家や女性脳科学者らとともに、ジェンダーや障害、世代間ギャップなどを多角的に探る。

■モデレーター 中島 さち子

■登壇者

杉山 文野 NPO 法人東京レインボープライド・公益財団法人日本オリンピック委員会  
中島 美保 理化学研究所脳神経科学研究センター 副チームディレクター  
ロバート・キャンベル 早稲田大学特命教授・せんだいメディアテーク館長・早稲田大学  
国際文学館顧問・2025年日本国際博覧会協会理事・シニアアドバイザー  
ロッセーラ・メネガッツォ 大阪・関西万博イタリア館文化部門代表

<19:25-20:30> 「先住民文化の精華：世界のさまざまな文化を未来へと繋いでいくために」  
マオリやバカ族など先住民の文化に学びます。祭りや芸能、工芸などの文化に宿る力を通じて、いま私たちの社会や企業のあり方を問い直します。

■モデレーター 中島 さち子

■登壇者

吉田 憲司 2025年日本国際博覧会 シニアアドバイザー

メッセ・ベナン NGO OKANI 代表・カメルーンバカ先住民族  
アマンダ・レオーム シンガーソングライター・Ishkode Records 共同創業者（カナダ）  
ホン・ナナイア・マフタ マオリ リーダー・ニュージーランド元閣僚

■形式：二部構成／日英同時通訳

本プログラムは、分断や格差、人権、多様性といった現代的課題を背景に、「いのち」を軸とした国際対話の場として開催された。

第1部では、日本社会における性別・世代・障害・文化的背景の違いに起因する課題について、参加者を交えた対話が行われた。

第2部では、世界の先住民族文化に根ざした知見を共有する英語セッションが展開され、メッセ氏は、バカ族における音楽・身体表現・教育の役割、文化継承や言語保存の危機について語った。

本対話は、2025年の大阪・関西万博「テ・アラティニ先住民ウィーク」初日である8月4日、国際先住民デー（8月9日）に先駆けて実施され、万博が「世界の知と経験をつなぐ場」であることを体現する取組となった。



シグネチャーパビリオン  
「いのちの遊び場」  
クラゲ館  
関連イベント

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000061.000134299.html>

（4）8月5日 シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」にて、公演（ワークショップ）

■実施日：2025年8月5日 17:00～18:00

■会場：大阪・関西万博シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」

■対象：万博来場者（親子・若者・海外来場者含む）

■パフォーマー：バカ族、宜野座村からのエイサーチーム・KURAGE Band

クラゲ館では、まず宜野座村のこどもたちがエイサーを披露し、その後、バカ族の音楽・リズム・身体表現を起点に、来場者が輪に加わり共に場をつくる体験型交流を実施した。異文化理解を知識ではなく身体感覚として獲得する教育的実践となった。

最後はバカ族の方が伝統的な民話や独特な歌（オディールさん）を披露し、宜野座村のこどもたちや KURAGE Band もポリフォニー的に参加し、極めて稀有な、音楽文化交流が生まれ、場は全体として一体となった。遊びからはじまる、新たな体験型”公演”のあり方が模索できたと考えている。パフォーマンス時は、約150名ほどのクラゲ館来場者が観覧した。



\*元々予定されていた、8月6日のいのちパークにおける公演は事情により実施せず。しかし、バカ族の皆様（体調不良のメッセ氏を除く）は会場にやってきて、自らお能を見たいと残り、最後は一緒になって踊り、写真をとった。彼らから文化を伝えてもらうのみならず、日本の伝統芸能やマオリのハカなどに触れることで、世界の文化に出会う貴重な機会になったと思われる。いのちパーク内には約400名の観客が集まった。



■タモリ・山中伸弥の!?「第3回 ヒトはなぜ音楽を愛するのか」

11月15日（土）19時30分～20時48分 NHK 総合テレビにて放送

\* 沖縄宜野座村でのこどもたちとバカ族の交流の様子が一部放映された

## ■大阪万博先住民ウィーク（共同通信）

2025/11/26 福島民友新聞

2025/11/21 愛媛新聞

2025/11/25 熊本日日新聞 他

## ■沖縄タイムス plus

排外的社会に理念届いたか 関西万博「先住民ウィーク」 狩猟採集民「バカ」 響く歌声  
沖縄のエイサーと共演 多様な価値観を発信（2025年11月20日）

<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/1717356>

### （3）教育的効果・成果

本事業を通じ、沖縄から本事業に参加したメンバー及び steAm、KURAGE Band のメンバーは、バカ族の皆さんとの交流やクラゲ館での「歌」や「遊び」の体験を通じて異文化を身体的に体験することができた。

子どもから大人までが主体的に関わる構成により、国際理解、多様性尊重、自己肯定感の醸成といった教育的効果があったと考える。森の外へ出たことのない「バカ族」の方々と数日間過ごす体験は、受け入れを行った関係者メンバーにとっても、繊細に相手を思う、貴重な経験となった。

また、メッセ氏に万博テーマウィークプログラムに登壇いただいたり、中島さち子氏の活発なメディア発信等により、社会に向けてバカ族を含む先住民に関連した発信を効果的に行うことができた。

### （4）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

本事業は万博会期中の一過性の交流に留まらず、宜野座村における国際文化交流の基盤形成として位置づけられる。

今後は、学校交流、地域ワークショップ、オンライン対話等へ展開し、アフター万博においても交流が継続するモデルを検討していく。

事業背景・目的の深化（政策文脈・地域特性・先住民族交流の意義）

本事業は、内閣官房が推進する万博国際交流プログラムの基本理念である『万博を一過性の祭典とせず、地域・教育・国際交流の持続的レガシーへと転換する』という政策文脈に明確に位置づけられるものである。とりわけ、万博会場内外を横断し、地方自治体が主体となって国際交流を実装する点に、本事業の先進性がある。

宜野座村は、沖縄の中でも自然環境と共同体文化が色濃く残る地域であり、音楽・踊り・祈りが生活の一部として受け継がれてきた。この地域特性は、森と共に生き、音や身体表現を通じて知恵を継承してきたカメルーン・バカ族の文化と高い親和性を有している。

本事業は、先住民族文化を『紹介』や『鑑賞』の対象として扱うのではなく、対等な文化的主体として向き合い、共に場をつくり、対話し、学び合う関係性の構築を目指した。これは、国際交流における新たな倫理的モデルの提示でもあり、多文化共生社会の形成に向けた実践的取組である。

教育的効果・成果指標（層別整理）

本事業では、参加者を大きく『子ども』『大人』『万博来場者』の三層に整理し、それぞれに異なる教育的効果が確認された。

#### 【子ども層】

宜野座村および万博会場で交流に参加した子どもたちは、言語に依存しない音楽・身体表現を通じて異文化と出会い、違いを恐れず関わる姿勢を自然に身につけた。特に、輪になって音を重ねる体験は、自己肯定感と協働性の醸成につながった。加えて、地域のアイデンティティを再認識し、自然への敬意や地域資源への意識の高まりへとつながった。

#### 【大人・地域層】

地域住民や保護者世代にとっては、自らの地域文化が国際的文脈で評価される経験となり、地域への誇りと主体性を再認識する機会となった。

#### 【万博来場者】

国内外から訪れた来場者に対しては、先住民族文化や沖縄文化を身体的に体験する機会を提供し、多様性理解と平和的共生への気づきを促した。

今後の展望（アフター万博施策レベル）

本事業で構築された宜野座村×カメルーンの交流基盤は、万博会期後も継続的に発展させることを前提としている。

具体的には、学校教育への接続（出前授業・オンライン交流）、地域文化ワークショップの継続実施、クラゲ館およびKURAGE Bandとの連携によるアフター万博公演等が検討できるのではないかと考えている。

また、先住民族文化の記録・発信を通じた国際ネットワーク形成や、多文化共生をテーマとした人材育成プログラムへの展開も視野に入れており、宜野座村モデルは、他自治体へ波及可能な万博レガシーとして位置づけられる。

### （５）こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業では、宜野座村の子どもたちがカメルーン・バカ族と直接出会い、音楽や身体表現を通じて交流する体験を得た。

言語に依存せず「歌」や「遊び」を共有する過程で、異文化を恐れず関わる姿勢が自然に育

まれ、自己肯定感や協働性の醸成につながった。

また、万博会場において自らのエイサーを披露し、世界の来場者と同じ空間を共有した経験は、地域文化への誇りと、世界とつながる可能性を実感する契機となった。

## （６）特に良かった点、苦勞した点

### （１）良かった点

宜野座村の芸能団体とカメルーン・バカ族が対等な立場で共演し、共同制作を含む文化交流を実現できた点が大きな成果である。

万博会場内外で交流を展開し、テーマウィークやクラゲ館公演を通じて、多様性や先住民族文化の価値を広く発信できたことも意義深い。

### （２）苦勞した点

カメルーン側との調整は仲介者を通じて進められたが、直接的な既存関係がない中での折衝であったため、調整には慎重さを要した。

また、万博会場での公演日程変更や運営条件への対応など、流動的な状況への柔軟な調整が必要であった。

## （７）今後の展開

本事業は万博会期中の一過性の交流にとどまらず、宜野座村における国際文化交流の基盤形成として位置づけられる。

今後は、学校交流や地域ワークショップ、オンライン対話等へ展開し、アフター万博においても交流を継続するモデルの検討を進める。

また、相互訪問や共同制作の継続を通じて、双方向型の文化交流を深化させていく。

## （８）今後の展開における課題

万博終了後も交流を継続するためには、相手国との調整合制の維持と安定的な実施基盤の確保が必要である。

また、共同制作や対話を継続的に実施するためには、文化的背景への理解と対等性を尊重する姿勢を持続することが重要である。

さらに、子ども世代を中心とした教育的取組をどのように制度的・継続的な事業へ接続するかが今後の検討課題である。

参考：

### ■ Walker Plus

【万博国際交流プログラムレポート／アフリカ編 07】北海道浦幌町、大阪府交野市、沖縄

県宜野座村とアフリカ各国の交流の様子

<https://www.walkerplus.com/article/1251984/>

■ Walker Plus

【万博国際交流プログラムレポート／中南米編 09】 富山県南砺市とトリニダード・トバゴの交流の様子

<https://www.walkerplus.com/article/1251470/>

■ 内閣官房国際交流関連テーマウィークイベント：

世界をつなぐ歌・踊り 万博がつなぐ世界の文化 ～内閣官房万博国際交流プログラム紹介～

全国で多彩に展開中の内閣官房「万博国際交流プログラム」の事例を紹介し、万博を通じた日本と世界の躍動的な出会いや創発の可能性を探ります。首長や大使、領事、文化人類学者、アーティストや教育者、子ども達らが集い、多彩な郷土文化や世界をつなぐ歌や踊り（KURAGE Band）を通じて交流し、万博を盛り上げます。

\* 内閣官房内閣審議官 国際博覧会推進本部事務局次長井上 学氏にもご登壇いただきました

<https://www.expo2025.or.jp/expo-archive/theme-weeks/program/detail/6808e106493cb.html>

<https://www.expo2025.or.jp/expo-archive/theme-weeks/program/detail/6808d280c5bb0.html>

## 第4章 成果の分析

### 4-1 成果の5分類

本事業では、大阪・関西万博を契機として、地方公共団体と海外の国・地域との間で多様な国際交流の取組が実施された。これらの取組は、文化交流、教育交流、産業・経済分野の連携、住民参加型イベントなど、その内容や形態は多岐にわたっている。一方で、各地域において生まれた成果を整理・分析すると、個別の事例の違いを超えて、地方創生の観点から共通する成果の方向性が見られた。

そこで本報告書では、実施された取組全体の成果を横断的に整理し、地方創生への寄与という視点から分析を行った結果、成果は主に5つの類型に分類する。この5分類は、単に事業の実施結果を列挙するものではなく、国際交流が地域にもたらした意識の変化、行動の変化、関係性の変化、そして制度・仕組みの変化を総合的に捉えたものである。

具体的には、第一に、国際交流を通じて地域の文化や価値が再認識され、住民の郷土愛やシビックプライドが高まるといった「愛着と誇りの醸成」に関する成果が確認された。第二に、こどもや若者を中心とした学びや体験を通じて、探究心や価値観に変化が生まれ、将来を担う人材の成長につながる「教育・人材育成」の成果が見られた。

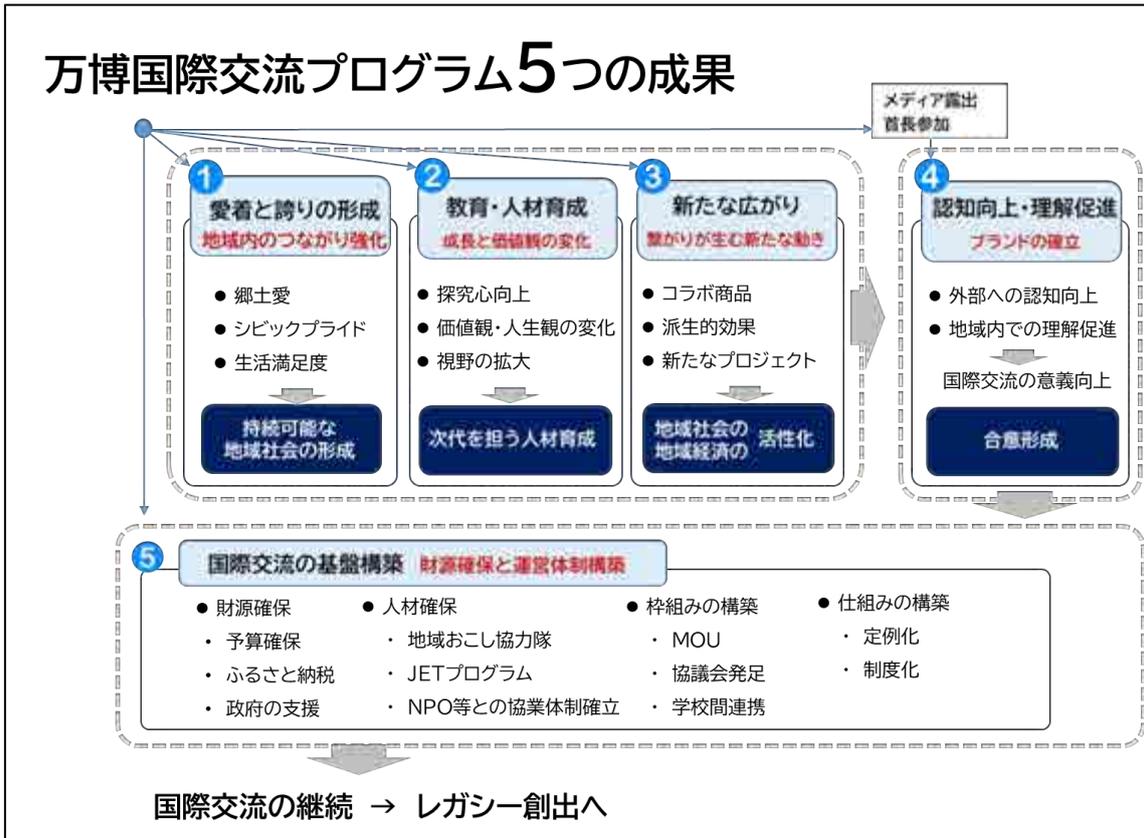
第三に、国際交流を契機として、地域内外の多様な主体が結びつき、新たな活動やプロジェクト、派生的な取組が生まれるなど、「新たな広がり・つながりが生む新たな動き」が確認された。

第四に、メディア露出や対外的な発信、首長や行政トップの関与を通じて、地域の認知度や評価が高まり、国際交流が地域ブランドの確立につながる「認知向上・理解促進」の成果が現れている。

そして第五に、こうした取組を一過性のイベントにとどめることなく、継続的な国際交流へと発展させるための財源確保、人材確保、連携枠組みや運営体制の整備といった「国際交流の基盤構築」に関する成果が各地で確認された点も重要である。

これら5つの成果は、それぞれが独立して存在するものではなく、相互に関連し合いながら地域に波及している点に特徴がある。たとえば、住民の誇りや愛着の醸成が次の活動への主体的な参画を促し、それが新たな連携や取組を生み、結果として地域の認知向上や制度的な基盤整備につながるといった好循環が見られる。

以下の各節では、この成果の5分類それぞれについて、具体的な事例や変化をもとに詳細な分析を行い、地方創生にどのように寄与したのかを明らかにしていく。



(全体概念図)

### 4-1-1 愛着と誇りと形成

本事業を通じて確認された成果の一つとして、国際交流を契機に、地域に対する愛着や誇り（シビックプライド）の醸成が挙げられる。多くの自治体において、海外との交流が単なる対外的な活動にとどまらず、地域住民が自らの地域の文化、歴史、産業、暮らしの価値を改めて見つめ直す契機となっていた。

国際交流の場では、地域の伝統芸能や文化、日常の暮らし、地域資源などが「相手国に伝える対象」として整理・発信される。その過程で、住民自身が「自分たちの地域の強みや魅力とは何か」を言語化・再認識する機会が生まれた。これにより、これまで当たり前とされてきた地域の文化や風土に対する評価が高まり、「自分たちの地域に誇りを持つ」「この地域特有の価値がある」という意識の醸成につながった。

また、交流事業には、自治体職員、学校関係者、地域団体、住民、企業など、多様な主体が関わるケースが多く見られた。これまで接点の少なかった人々が国際交流という共通の目的のもとで協働することで、地域内のつながりが強化され、地域コミュニティとしての一体感が生まれた点も重要である。こうした協働を通じた体験は、地域に参与す

る意識を高め、地域活動への主体的な参画を促す効果をもたらしている。

さらに、万博を契機とした大きな舞台や、海外からの関係者の来日、万博会場内でのナショナルデーイベント等の特別な機会を通じて、地域の取組が注目される経験は、住民にとって強い印象を残す「特別な体験」となった。これらの体験は、感動や達成感と結びつき、地域に対する肯定的な感情を高める要因となっている。結果として、「この地域に住み続けたい」「この地域に関わり続けたい」といった心理的变化が生まれ、将来的な定住志向や関係人口の拡大につながる基盤が形成されつつある。



400名を超える河内長野市民が EXPO 会場内のステージでパフォーマンス (大阪府河内長野市ホームページより)

このように、「愛着と誇りの形成」は、数値で測定できる成果ではないものの、地域社会の持続性を支える重要な内面的成果である。国際交流を通じて育まれた地域への誇りや愛着は、次なる挑戦や新たな取組への原動力となり、他の成果（新たな活動の創出、認知向上、基盤構築等）を生み出す土台として機能している。地方創生の観点から見ても、こうした内発的な意識変化は、地域の将来に向けた持続的な発展を支える重要な成果であると評価できる。

#### 4-1-2 教育・人材育成

本事業における国際交流の取組は、こどもや若者を中心とした教育・人材育成の面においても顕著な成果をもたらした。学校交流、出前授業、共同学習、万博関連イベントへの参加など、実体験を伴う交流を通じて、参加者の学びに対する姿勢や価値観に変化が見られた点が特徴である。

多くの自治体では、海外の国や地域と直接関わる機会を通じて、参加者が異文化や異な

る社会背景に触れ、「もっと知りたい」「理解を深めたい」という探究心や学習意欲の高まりが確認された。特に、教科書や座学だけでは得られない、**実践型学習**の国際交流は、**400名を超える市民がステージでパフォーマンス**を自分事として捉えるきっかけとなり、主体的な学

また、異文化との出会いは、自らの地域や生活を相対化して捉える視点を生み出し、「自分は何者か」「自分が暮らす地域にはどのような特徴があるのか」といったアイデンティティーの形成や地域に対する理解の深化につながった。こうした経験は、参加者にとって単なる一時的な体験にとどまらず、将来の進路選択や生き方を考える上での重要な契機となっている。



大阪市の加美北小学校とパプアニューギニアの Sogeri 小学校がナショナルデーで共演

さらに、国際交流の場では、年齢や立場、国籍を超えて人と協働する機会が多く生まれた。共同での発表やイベントの運営に取り組む経験は、「人と協力して何かを成し遂げる」成功体験や達成感をもたらし、協働・共生を重視する価値観の形成に寄与している。これらの体験は、将来にわたり社会と関わりながら生きていくための基礎的な素養として、参加者の内面に蓄積されていると考えられる。

このような教育・人材育成の成果は、短期的には意識や行動の変化として現れ、中長期的には地域を担う人材の育成につながる重要な成果である。地方創生の観点から見ても、国際交流を通じて育まれた探究心、主体性、協働性、広い視野は、将来的に地域内外で活躍する人材を創出する土台となり、地域の持続的な発展を支える要素として高く評価できる。

### 4-1-3 新たな広がり

本事業を通じて実施された国際交流の取組は、既存の枠組みにとどまらず、地域内外において新たなつながりや活動の広がりを生み出した点に大きな特徴がある。交流を契機として、多様な主体が関係を築き、その関係性が新しい動きへと発展していることが各地で確認された。

具体的には、自治体、学校、地域団体、企業、NPO、住民など、これまで必ずしも接点のなかった主体同士が、国際交流を共通のテーマとして結びついた。こうしたつながりは、一過性の交流事業にとどまらず、新たなイベントや共同プロジェクト、継続的な活動へと派生している。国際交流が「目的」ではなく、「次の取組を生み出すきっかけ」

として機能した点は、本事業の重要な成果である。

また、異文化との交流を通じて、地域資源や文化、技術、産業が新たな視点で捉え直され、新しい価値の創出につながった事例も見られた。海外の視点や海外からの反応を受けることで、地域の魅力が再解釈され、新商品や新たな表現方法、教育プログラム、発信手法などが生まれている。これらは、国際交流が地域にイノベーションをもたらす契機となり得ることを示している。

さらに、国際交流を通じて形成された人と人とのつながりは、地域内に閉じない広がりを持ち、他の自治体や地域との連携、さらには次年度以降の新たな交流構想へと発展している。自治体単独では実現が難しかった取組が、ネットワークの強化により可能となるなど、交流の広がりが新たな行動を生み出す好循環が生まれている。

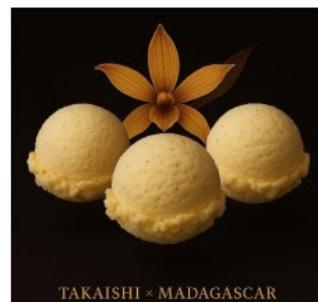
このような「新たなひろがり」は、短期的な成果としてだけでなく、地域の将来に向けた可能性を広げる点に意義がある。国際交流を通じて生まれたつながりが、次なる挑戦や継続的な活動へと発展することで、地域の選択肢や活動領域が広がり、結果として地方創生の取組の厚みを増すことにつながっている。

以上のことから、本事業における「新たなひろがり（つながりが生む新たな動き）」は、国際交流を起点として地域に変化をもたらし、他の成果（愛着と誇りの形成、教育・人材育成、認知向上、基盤構築）を促進する役割を果たす重要な成果であると評価できる。

#### 4-1-4 認知向上・理解促進

本事業における国際交流の取組は、地域の内外に対する認知向上および理解促進という面においても、明確な成果をもたらした。万博という国際的な注目度の高い舞台を背景に、各地域の取組が可視化されたことで、地域の存在や魅力がこれまで以上に広く発信される機会が創出された。

多くの自治体では、国際交流の取組が新聞、テレビ、ウェブメディア、SNS 等を通じて紹介され、地域外に向けた情報発信が強化された。こうした報道や発信は、単なるイベント紹介にとどまらず、地域の文化や住民の活動、地域らしさを伝える内容として取り上げられるケースも多く、結果として地域の知名度や社会的評価の向上につながっている。



大阪府高石市ホームページ  
より  
マダガスカル産バニラビーンズを利用したジェラード

また、対外的な認知向上と同時に、地域内での理解促進が進んだ点も重要な成果である。メディア報道や万博関連イベントを通じて、国際交流の取組が広く共有されることで、住民の間においても「なぜ国際交流に取り組むのか」「地域にどのような波及効果があるのか」といった理解が深まり、共感や支持が広がった。これにより、国際交流が関係者だけの活動ではなく、地域全体の取組として認識されるようになっていく。



三島村ホームページより  
ギニアのナショナルデーでシャンベの演奏を披露。多くのメディアに取り上げられた

さらに、地域の首長等が国際交流事業に直接関与し、その成果を体感したことにより、国際交流を地域政策の一環として捉え直す意識変容が見られた。首長自らが万博会場内の公式式典や交流の場に参加し、地域の反応や変化を目の当たりにすることで、国際交流の意義が再認識され、継続的な取組や次の施策に向けた判断につながった点も、本事業の重要な成果である。

このように、国際交流を通じた認知向上・理解促進は、地域のイメージや評価を高めると同時に、地域内外の住民に「その地域らしさ」を共有する役割を果たしている。地方創生の観点から見ても、こうしたブランドの確立は、関係人口の拡大、外部との新たな連携、さらには継続的な交流や投資を呼び込む基盤となるものであり、本事業がもたらした重要な成果の一つであると評価できる。

#### 4-1-5 国際交流の基盤構築

本事業を通じて、国際交流を継続的な取組として展開していくための基盤構築に向けた成果が各地で確認された。国際交流を一過性のイベントとして終わらせるのではなく、次年度以降の展開や将来の継続を見据えた動きが、一定の広がりをもって現れている点が本事業の特徴である。

国際交流のイベント等の実施に向けた財源確保の面では、国の補助事業を活用した取組を起点として、自治体内で国際交流を継続的に位置づける検討が進んだ事例が見られた。事業を実施した経験を通じて、国際交流を地域施策として捉える視点が共有され、次年度以降の予算措置や関係機関の支援事業等の活用に向けた議論が始まるなど、継続に向けた基盤形成の動きが確認されている。

人材面においても、自治体職員に加え、学校関係者、地域団体、民間事業者、NPO 等、多様な主体が国際交流に関与する体制が形成された。これにより、国際交流が特定の担当者のみで担われるものではなく、地域全体で支える取組として認識されるようになった点は重要な成果である。事業を通じて得られた知見や経験は、今後の取組に活かされる人的資産として蓄積されつつある。

また、相手国や関係機関との間で、覚書 (MOU) の締結や学校間連携、継続的な協議の枠組みづくりに向けた動きが生まれた自治体もあり、国際交流を支える関係性がより発展・深化する兆しが見られた。こうした枠組みは、国際交流を継続・発展させていく上での重要な基盤となるものである。



杵築市の取組杵築市の取組。  
万博会場において実施したネリカミの収穫祭の様子。ジンバブエからの JICA 研修生を杵築市へ招聘する取組について、次年度以降を見据えた予算確保が進められている。

さらに、国際交流を定例的に実施することや、成果を振り返り次につなげる意識が自治体内に共有されるなど、運営面においても「仕組みづくり」に向けた意識の変化が確認された。事業を実施した経験そのものが、国際交流を持続的に行うための前提条件を整理する機会となっており、今後の展開に向けた土台が形成されたと評価できる。

このように、本事業を通じて、財源、人材、関係性、運営の各側面において、国際交流の基盤構築に向けた成果が段階的に積み重ねられた。地方創生の観点から見ても、これらの成果は、万博を契機とした国際交流を将来へとつなげていくための重要なレガシーの一部を形成するものであり、今後の継続的な取組の基礎として位置づけられる。

## 4 - 2 成功要因

本事業を通じて、万博国際交流プログラムが地域に定着し、万博会期後も継続・発展する取組へとつながった背景には、以下の成功要因が確認された。

### (1) 国際交流の意義の明確化と地域課題との接続

国際交流を「交流そのもの」を目的とするのではなく、地域活性化、教育、人材育成、産業振興、関係人口創出等の具体的な地域課題の解決手段として位置づけたことが、国際交流を推進する大きな原動力となった。

交流の意義が明確であった自治体では、住民や関係団体の理解と協力を得やすく、予算確保や継続的な交流につながっている。

## (2) 首長等の積極的なコミットメント

地域の首長等が国際交流の意義を理解し、首長自ら現場に関与した自治体では、調整が円滑に進み、国際交流の取組に対する優先度が高まった。

首長が国際交流を「地域政策の一環」として位置づけたことにより、自治体内の部局横断的な連携や、次年度以降の継続的な取組への合意形成が促進された。

## (3) 推進役となる人材・組織の存在

自治体職員、民間事業者、NPO、教育機関など、強い熱意と実行力を持つ「推進役」の存在が、国際交流の質と持続性を大きく左右した。

特に、地域に根差した民間団体や市民団体が主体的に関与した事例では、行政依存型ではない自走的な交流モデルが形成されている。

## (4) 民間主体を活かした官民連携体制

行政がコーディネート役・支援役に徹し、民間事業者や地域団体が主体となって交流を展開したことで、以下の波及効果が生まれた。

- ・地域産業との接続
- ・新たなビジネスやプロジェクトの創出
- ・交流の継続性向上

相手国側にも明確なカウンターパートが存在したことが、対等で実務的な関係構築につながっている。

## (5) 持続可能性を見据えた仕組みづくり

国際交流を一過性のものとして終わらせないため、財源・制度・人材の面での仕組みづくりが重要な成功要因となった。

具体的には、通常予算措置、ふるさと納税、企業からの協賛、国や関係機関の支援制度の活用、MOU の締結や協議会の設置などにより、担当者変更後も継続可能な体制が構築された。

## (6) 地域全体への波及効果を意識した交流設計

こども、学校、住民、企業など多様な主体が関わる交流設計とすることで、以下の効果

が確認された。

- ・地域内での理解促進
- ・郷土愛やシビックプライドの醸成
- ・関係人口の拡大

交流の成果を「見える化」し、地域内外へ発信したことも、評価と共感の広がりにも寄与している。

### 4-3 今後に向けた課題

本事業を通じて、大阪・関西万博を契機とした国際交流が、地域住民の意識変化や学びの深化、地域の魅力再発見など、地域活性化に資する多面的な効果を生み出すことが確認された。一方で、こうした取組を万博会期中にとどめることなく、万博閉幕後もレガシーとして継続・発展させていくためには、いくつかの課題への対応が必要である。

第一に、国際交流を持続的な取組として定着させるための実施体制の強化と仕組みづくりが挙げられる。現状では、熱意ある自治体担当者や外部人材等の尽力により国際交流が推進されている事例も多く、自治体担当者の異動や関係者の交代により取組の継続性が損なわれる可能性がある。今後は、自治体内部の複数部局による連携体制の構築や、教育機関、民間事業者、地域団体等との協働関係を明確に位置づけることで、属人的な運営から移行し、国際交流を継続する体制づくりが求められる。

第二に、中長期的な視点に立った財源確保の検討が課題である。国の補助事業による実施段階から、万博閉幕後の自走化を見据え、自治体予算への位置づけや、企業からの協賛、ふるさと納税、関係機関の支援制度の活用など、複数の財源を組み合わせた運営モデルを検討していく必要がある。そのためにも、事業の成果や効果を整理し、将来に向けた展開の方向性を明確にしていくことが重要である。

第三に、国際交流の意義や成果について、自治体内および地域住民への浸透を図っていくことが重要な課題として挙げられる。国際交流が関係者や参加者に限られた取組として受け止められるのではなく、地域全体の将来につながる施策であるという共通認識を形成していくことが求められる。そのためには、交流の目的や成果を分かりやすく発信するとともに、学校教育や地域行事、広報媒体等を通じて、住民が国際交流を身近に感じることができる機会を継続的に創出していく必要がある。

さらに、交流相手国との関係性についても、単発的な訪問やイベントの実施にとどまらず、共通のテーマや課題を軸とした継続的な関係構築を進めることが重要である。交流内容を深化させることで、相互理解の向上のみならず、教育、人材育成、産業、地域づくりといった分野への波及が期待される。

今後は、これらの課題を踏まえつつ、各自治体が地域の特性や課題に応じた国際交流の位置づけを明確にし、大阪・関西万博を契機とした取組を、将来にわたって地域を支えるレガシーとして定着させていくことが求められる。

#### 4-4 今後の展望

本事業を通じて、国際交流が地域にもたらす多様な効果や可能性が明らかになる一方で、継続的な取組とするためには、財源および人材の確保が共通の課題として浮き彫りとなった。今後は、万博を契機に生まれた関係性や成果を一過性のものに終わらせず、地域に根付いたレガシーとして定着させるため、以下の観点から取組を深化させていくことが重要である。

##### (1) 多様な財源を組み合わせた持続可能な運営の展開

今後の展開においては、単年度予算や補助事業の活用から移行し、複数の財源を組み合わせた持続可能な運営体制の構築が求められる。具体的には、国の補助金・委託事業の活用に加え、ふるさと納税を通じた財源確保や、企業版ふるさと納税、民間企業による協賛・参画など、地域の実情に即した財源の多様化が有効である。

また、JICA 事業や関係機関の国際交流・地域活性化関連施策等を段階的に活用することで、事業の発展フェーズに応じた資金確保が可能となる。こうした支援策を戦略的に組み合わせることで、万博会期後も国際交流を継続・発展させる基盤を整備していくことが期待される

##### (2) 人材の確保と「推進役」の育成・定着

国際交流事業を継続的に推進する上では、行政内部の担当者のみならず、地域内外の多様な人材を巻き込んだ体制づくりが不可欠である。今後は、地域おこし協力隊や JET プログラム等を活用し、国際交流や地域づくりに関心を持つ人材を地域に呼び込み、実務面での推進役として位置付けていくことが有効である。

加えて、地域 NPO、民間事業者、教育機関等との協業体制を構築することで、行政の負担軽減と事業の専門性・実行力の向上が期待できる。特定の個人に依存するのではなく、複数主体が関与する体制とすることで、担当者の異動等があっても取組が継続される仕組みづくりが重要となる。

##### (3) 枠組みの制度化と事業の定例化

今後は、万博を契機に構築された相手国・関係機関との関係性を、覚書（MOU）の締結や協議会の設置等を通じて制度的な枠組みへと発展させることが望まれる。これにより、交流内容や役割分担が明確化され、国際交流の継続性と再現性が高まる。

さらに、学校交流や人材交流、文化・産業分野での取組を定例化・制度化することで、国際交流を地域政策の一部として位置付け、計画的かつ中長期的に展開していくことが可能となる。

#### （４）万博レガシーとしての自立的展開に向けて

これらの取組を通じて、国際交流は「万博会期中の特別な取組」から、「地域恒例の活動」へと移行していくことが期待される。財源、人材、枠組み、運営体制の４つの要素を段階的に整備することで、自治体が主体となり、自立的に国際交流を継続・発展させる好循環が生まれる。

今後は、本事業で得られた知見やモデルを他の自治体へ横展開するとともに、地域の実情に応じた形で応用していくことで、万博の成果を全国各地に波及させ、持続可能な国際交流のレガシー創出につなげていく。

## 第5章 アンケート結果

本章では、万博国際交流プログラムに参加した各自治体において実施されたアンケート結果を整理し、参加者の意識変容や学習効果、国際交流に対する態度の変化を分析する。

アンケートは主に児童・生徒を中心に実施され、一部自治体では教職員・地域住民も対象とした。設問は、交流への満足度、相手国への理解度・親近感の変化、今後の交流意欲、学びの活用意向等で構成されている。

本分析では、単なる満足度や評価にとどまらず、地方創生や人材育成の観点から、国際交流がもたらしたアウトカムに焦点を当てて整理する。

### 5-1 回答から得られた主な傾向

#### ■ 交流への満足度は総じて高水準

多くの自治体で相手国との交流に対して「満足」「とても良かった」といった回答が大半を占めており、体験型・対話型の交流は参加者にとって肯定的に受け止められている。

特に、万博会場内での発表や国歌斉唱、共同ワークショップの実施など“当事者として関わる機会”は評価が高かった。

#### ■ 相手国へのイメージの転換が顕著

多くの回答で、「貧困・紛争のイメージが変わった」「発展していない国だと思っていたが違った」「怖い・遠い国から、身近な国へ変わった」など、固定的・表層的なイメージから、具体的で立体的な理解への転換が確認されている。

これは本事業の重要な成果であり、単なる知識の習得ではなく、認識構造の変化が生じている点が特徴的である。

#### ■ 「世界」と「地元」の再発見

特筆すべき点として、「自国・自地域の価値を再認識した」「ゼロ・ウェイストや伝統文化への誇りが高まった」など地元を世界基準で考える視点が得られたといった回答が複数自治体で確認されている。

国際交流が「外を見る機会」であると同時に、「自分たちの地域を再定義する機会」となっていることが明らかである。

#### ■ 将来志向・行動意欲の向上

多くの自治体で、「もっと交流したい」「英語を学びたい」「将来国際的な仕事をしたい」

「世界の文化をもっと知りたい」など、継続的な学習意欲・行動意欲の向上が確認された。これは短期的なイベントの効果を越えた、中長期的な人材育成への波及効果を示唆するものである。

### ■ 地方創生への示唆

教員や地域関係者の自由記述には、「関係人口拡大への期待」「地域資源の国際的発信の可能性」「若者の郷土愛醸成」といった記述も見られ、国際交流が教育施策にとどまらず、地域ブランディングや将来的な国際展開の基盤形成に寄与していることが読み取れる。

### ■ まとめ

アンケート結果を横断的に見ると、本プログラム「[異文化理解の深化]」「固定観念の払拭」「郷土への誇りの再発見」「将来志向の醸成」という四つの効果を各地で生み出している。万博という国際的契機を活用しながら、地方自治体が主体となって実施した本事業は、教育的成果と地域的成果を同時に創出するモデルとなっていると評価できる。

## 5-2 アンケート結果一覧

自治体名	アンケート結果まとめ
北海道東神楽町 (ケニア)	<p>本事業に関するアンケート結果から、参加者の意識に前向きな変化が見られた。子どもたちは世界を身近に感じ、将来への可能性や国際社会への関心が高まったと回答している。</p> <p>また、交流や万博での体験を通じて異文化への抵抗感が低下し、多様性を尊重し自ら発信しようとする姿勢が育まれた。学校関係者からは、体験型の国際理解教育により児童生徒の主体性が向上したとの評価があり、地域住民からも町が世界とつながることへの誇りや国際交流への関心の高まりが確認された。</p>
北海道大空町 (セーシェル)	<p>参加者全員(セーシェルから来日した学生と交流した大空高校の生徒)が国際交流の取組を「価値あるもの」と評価しており、異文化理解や多様な価値観の受容に対する意識の向上が確認された。</p> <p>特に、大空町での学校交流や体験型活動を通じ、言語に依存しないコミュニケーションの有効性や、地域の教育・自然環境への関心が高まった。</p> <p>また、今後も交流を継続したいとの回答が多数を占め、将来的</p>

	<p>な再訪や留学生受入れ等、継続的な国際交流につながる意欲醸成の成果が認められた。</p>
<p>北海道浦幌町 (マリ)</p>	<p>万博という国際的な舞台で、自らの想いや地域への思いを絵や音楽を通じて発信する経験を通し、「自分の声の世界に届く」という実感を得るとともに、自己肯定感や表現力の向上が見られた。</p> <p>事後の振り返り会では、活動感想文の発表や演奏を通じて学びや成長を共有し、達成感や自信につなげる様子が確認された。また、異文化理解や国際交流への関心の高まりも見られた。</p>
<p>宮城県利府町 (ガーナ)</p>	<p>参加した子ども達及び関係者の多くが、本事業を通じて国際交流への関心や異文化理解が高まったと回答している。</p> <p>そして、同世代のガーナ高校生との直接交流や英語によるコミュニケーションにより、国際交流に対する心理的ハードルが低下し、自信の向上が確認された。</p> <p>また、自らの地域を紹介する活動を通じ、利府町への誇りや愛着が深まったとの声も多かった。これらの結果から、本事業は国際理解教育及び次世代人材育成に有効であったと評価できる。</p>
<p>秋田県にかほ市 (リベリア)</p>	<p>アンケート結果では、参加者の97%以上が事業内容を「良かった」または「非常に良かった」と評価し、国際交流への満足度の高さが確認された。</p> <p>特に、異文化理解の深化や英語による発信、スポーツを通じた交流体験により、国際交流への関心や将来の国際的活動への意欲が向上したとの回答が多数を占めた。</p> <p>また、今後も相手国との交流を希望する声が多く、継続的な国際交流施策につながる意識醸成の成果が認められた。</p>

<p>山形県遊佐町 (マダガスカル)</p>	<p>参加した中高生を中心に、異文化への関心や国際交流への意欲が大きく向上したことが確認された。</p> <p>とりわけ、マダガスカルの生徒との共同生活や体験活動を通じ、外国への心理的な距離が縮まり、自身の価値観や将来観に変化が生じたとの回答が多く見られた。</p> <p>また、地域や学校の魅力を再認識し、留学や国際的な進路を前向きに検討する契機となったとの評価があり、次世代の国際人材育成に有効な取組であったと整理できる。</p>
<p>群馬県みなかみ町 (コンゴ民主共和国)</p>	<p>アンケート及び聞き取り結果から、参加者の多くが、コンゴ民主共和国に対する理解が深まり、国際交流への関心が高まったと回答している。</p> <p>学校での出前授業やスポーツを通じた直接交流により、従来のイメージとの違いに気づき、異文化を身近に感じる機会となったとの声が多く寄せられた。</p> <p>子どもたちから積極的な質問や意見が見られ、国際的視野の拡大や将来の進路選択への意識変化が確認されたことから、本事業は次世代育成に有効であったと評価できる。</p>
<p>神奈川県横浜市 (ウガンダ・コートジボワール・セネガル・ブルキナファソ・マラウイ・マリ)</p>	<p>子どもたちからは「様々な国の文化を知ることができた」「世界に挑戦したい」「将来は国際的な仕事に関わりたい」「自分の目で世界を見にいきたい」といった声が多く聞かれた。</p> <p>また、自分たちの学びが世界の課題解決につながるという気づき生まれ、学習意欲の向上につながったという声もあった。</p> <p>加えて、生徒の英語スピーチやブース紹介は高い評価を受け、国際交流の成果を発揮できた。</p>
<p>神奈川県横浜市 (エチオピア)</p>	<p>参加者からは「エチオピアという国が自分にとって特別な存在となった」「文化や歴史を学ぶことができた」「直接質問し、生の話を聞いたことで理解や関心が高まった」との感想が寄せられた。特に、大使や留学生との直接交流により、エチオピアの文化・歴史を身近に感じたとの回答が多く見られた。満足度は「とても満足」55.6%、「やや満足」44.4%（合計100%）であった。また、国際的な仕事への意欲が「高まった」とする声も見られ、国際交流の取組を「価値あるもの」と評価する意見が示されている。参加体験が学習意欲や将来展望に好影響を</p>

	<p>与えたことから、次世代育成に有効な取組であったと評価できる。</p>
<p>神奈川県横浜市 (ガーナ)</p>	<p>アンケート及び聞き取り調査の結果から、参加した生徒はガーナの文化や生活を実体験として理解し、国際交流への関心と学習意欲が大きく向上したことが確認された。</p> <p>現地の生徒や政府関係者との直接交流を通じ、英語による発信力や主体性が高まったとの声が多く見られた。</p> <p>途上国の課題に触れることで、自国の生活環境を見直す契機となり、将来国際的な分野で活躍したいという意識醸成につながった点が評価できる。</p>
<p>神奈川県横浜市 (ケニア)</p>	<p>アンケート結果から、参加した生徒の満足度は極めて高く、異文化理解や国際協力への関心が大きく向上したことが確認された。</p> <p>特に、現地の高校生や地域住民との交流、孤児院・村落訪問等の体験を通じ、価値観や生活環境の違いを実感し、自身の将来像や進路意識に変化が生じたとの回答が多く見られた。</p> <p>また、英語による実践的な交流経験が自信の向上につながり、今後もアフリカとの関わりを継続したいという意欲醸成が認められた。</p>
<p>神奈川県横浜市 (タンザニア)</p>	<p>アンケート結果から、参加した生徒の多くが、タンザニアの同世代との直接交流を通じて異文化理解が深まり、国際交流への関心が大きく向上したと回答している。特に、英語による対話や共同活動を通じ、自身の語学力や主体性を見直す契機となったとの声が多く見られた。また、文化や価値観の違いと共通点を実感したことで、将来海外と関わる進路を志向する意識変化が確認され、次世代育成に有効な取組であったと評価できる。</p>

<p>神奈川県大磯町 (ウガンダ)</p>	<p>アンケート結果から、参加者及び保護者の多くが、本事業を通じて子どもたちの主体性や学習意欲の向上を実感したと回答している。</p> <p>特に、ウガンダの関係者と直接交流し、万博や学習会で得た気づきを自らの言葉で発表した経験が、視野の拡大や自己肯定感の向上につながったとの評価が多く見られた。</p> <p>また、「今後も継続して実施してほしい」との意見が多数寄せられており、国際交流を通じた次世代育成施策として有効であったと整理できる。</p>
<p>滋賀県近江八幡市 (モザンビーク)</p>	<p>万博会場でモザンビークの生徒とオンライン交流をした生徒からは、音楽を通じて相手国を身近に感じられたという声が多く、異文化理解の深化が確認された。「音楽やダンスは世界共通でつながり合える魔法のようなもの」との声も聞かれた。</p> <p>特に、生徒が楽しさや達成感を強く感じている点が特徴で、国際交流に対する前向きな印象が形成されている。</p> <p>交流後も「また続けたい」という意欲が見られ、継続的な国際交流への関心が高まった結果となっている。</p>
<p>大阪府大阪市 (ガーナ)</p>	<p>アンケートでは、全員が本プログラムは「ガーナを知るためにとても役に立った」と回答し、生活の中でガーナのことを「考えるようになった」との回答も100%であった。</p> <p>また、ガーナとの交流を「今度も続けていきたい」と全員が回答している。印象に残った活動としては、CLOUDY SCHOOLやボルタホーム訪問、アクラ市内視察等が挙げられ、「言葉が通じなくても音楽で通じ合えた」「先進国の発展の代償を知った」などの具体的な気づきを示された。</p> <p>将来についても「なにごとにもまずは挑戦したい」「留学したい」「将来やりたいことを選択肢が増えた」等の変化が見られた。</p>

<p>大阪府大阪市 (ケニア)</p>	<p>アンケート結果によれば、「本事業を通してケニアにもっと興味がわきましたか」という問いに対しては、88名(66%)が「すごく興味がわいた」と回答している。</p> <p>さらに、「国際交流や世界のことを学ぶのに役立ちましたか」には97名(73%)が「役に立った」とし、「将来外国の人たちと交流するイベントがあったら参加したいか」には109名(82%)が前向きに回答しており、交流を通じた関心の高まりと国際理解の深化が確認されている。</p>
<p>大阪府大阪市 (ルワンダ)</p>	<p>本事業に参加した児童・教職員の約8割が、交流プログラムを通してルワンダの歴史や復興の歩みに学び、平和について考えることができたと回答している。また、万博テーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に対する気持ちが高まった児童は90%を超えている。児童からは「外国の文化や生活の違いを知りたい」「他の国のことももっと調べてみたい」「外国の友達や外国の人に自分から関わってみたい」といった回答が見られ、海外への関心の高まりが確認されている。</p>
<p>大阪府八尾市 (リベリア)</p>	<p>万博を通じた子どもたちのアンケート結果によれば、78.7%の児童が「国際交流や世界に対する興味関心」を持ち、82.9%が「ものづくりや発明」に対して興味関心を示す結果となった。これにより、国際的な視野の広がりとともに、クリエイティブ人材育成への可能性が示唆されている。また、学校現場からも国際交流を通じた地元企業との交流は「意義のあるもの」との理解が得られ、学校がこれまで以上に地域に開かれる契機となったことが確認されている。</p>
<p>大阪府河内長野市 (ブルキナファソ)</p>	<p>アンケートでは、「世界とつながっていることを実感した」「将来、海外の人と関わる仕事をしてみたい」「国際舞台と一緒に参加できてうれしかった」「また世界の人と交流したい」といった声が寄せられている。</p> <p>単なる鑑賞ではなく、ワークショップや舞台創作に主体的に関わった経験を通じて、自らのまちの文化を世界に発信する当事者意識が芽生えたことがうかがえる。異文化理解とともに、地域への誇りや関係人口拡大につながる意識の変化が確認された。</p>

<p>大阪府松原市 (タンザニア)</p>	<p>アンケートでは、松原市の参加者から「自分の視野を広げるために必要な機会」「国の垣根を越えて偏見や言葉の壁をなくすることができる大事な機会」との感想が寄せられている。</p> <p>また、タンザニア側からは「文化とは単なる違いではなく、つながり・理解・尊重であると認識できた」「相手の文化や考え方についてもっと学びたい」との声があり、交流を通じた相互理解と国際的な友情への意識の高まりが確認された。アート、食、オンライン交流といった多様な手法が効果を生んだと整理されている。</p>
<p>大阪府和泉市 (セネガル)</p>	<p>アンケートでは、「一体感のある音楽交流が印象的だった」「子どもたちの成長を感じた」といった肯定的な回答が多数を占めた。</p> <p>参加した児童からは、海外文化への関心が高まったとの声が多く、教育的効果が確認された。</p> <p>また、保護者や来場者からは、今後も同様の国際交流事業を期待する意見が寄せられ、事業の継続性に対する高い評価が示された。</p>
<p>大阪府羽曳野市・藤井寺市・富田林市・大阪狭山市 (エジプト)</p>	<p>参加者からは、「複数市が連携することで交流の広がりを実感できた」「歴史を通じて異文化を理解しやすかった」といった意見が多く寄せられた。</p> <p>特に、地域資源への再認識につながったとの声が目立ち、市民の郷土意識の向上が確認された。次年度以降の発展的な展開に向けた示唆が得られた。</p>
<p>大阪府東大阪市 (ベナン・タンザニア・コートジボワール)</p>	<p>各事業におけるアンケート結果では、企業関係者からアフリカの現状理解や今後のビジネス可能性への関心が高まったとの声が多く、実践的な交流の有効性が確認された。</p> <p>また、教育、文化交流に参加した児童・生徒からは、「海外を身近に感じた」「将来海外と関わる仕事に興味を持った」といった声が寄せられた。全体として、経済・教育の双方において高い満足度が示され、今後の継続的な国際交流への期待が明らかとなった。</p>

<p>大阪府高石市 (マダガスカル)</p>	<p>参加者からは、「万博を通じて世界とつながる実感を得られた」「海外の視点から自分たちのまちを見直す機会になった」との意見が多く寄せられた。</p> <p>特に子どもたちからは、異文化への興味関心が高まったとの回答が目立ち、教育的効果が確認された。一方で、交流機会のさらなる拡充を望む声もあり、今後の事業展開に向けた改善点が明確となった。</p>
<p>大阪府交野市 (エチオピア)</p>	<p>参加者アンケートでは、「異文化を身近に感じることができた」「音楽を通じた交流が印象的だった」といった肯定的な意見が多数を占めた。</p> <p>児童からは、エチオピア文化への関心が高まったとの声が多く、学習意欲や国際理解の向上が確認された。</p> <p>また、地域住民からは、継続的な交流の実施を期待する意見が寄せられ、事業の継続性に対するニーズも明らかとなった。全体として、本事業が国際理解の促進および地域文化への誇りの醸成に有効であったことが示された。</p>
<p>奈良県橿原市 (ブルキナファソ)</p>	<p>アンケートでは、児童・保護者ともに異文化への関心が高まったとの回答が大多数を占めた。</p> <p>特に、舞台をやり遂げた達成感や感動が強く印象に残っており、国際交流を前向きに捉える意識変化が確認される。</p> <p>一方で交流時間の短さを課題とする声もあり、今後の継続的な交流への期待と意欲がうかがえる結果となっている。</p>
<p>広島県広島市 (カメルーン)</p>	<p>アンケート結果によれば、参加理由として「国際交流に興味があった」「カメルーンに興味があった」との回答が多く、参加後には「期待以上のことが得られた」「期待通りだった」とする声が多くを占めた。似島中学校の生徒がカメルーン関係者と協働し、ンドレ入りバウムクーヘンづくりやイベント企画に主体的に関わった経験は、郷土が日本におけるバウムクーヘン発祥の地であることへの誇りを再認識する契機となり、地域資源を活用した国際交流の可能性への気づきにつながったと整理されている。</p>

<p>徳島県上勝町 (ナイジェリア)</p>	<p>アンケートでは、生徒・教員ともに肯定的回答が大半を占め、ナイジェリアの国や文化への理解が深まり、親しみを感じるようになったとの結果が示されている。参加前は「貧困・紛争」「発展していない国」といったイメージを持つ生徒もいたが、交流後は「共に課題解決するパートナー」「都市が発展している国」「優しく身近な国」へと認識が変化したとの記述が多い。また、ゼロ・ウェイストや地域の取組を世界基準で再定義する機会となり、郷土への誇りやアイデンティティの再認識、今後も交流を続けたいとの意欲が確認された。</p>
<p>徳島県松茂町 (ガーナ)</p>	<p>ワークショップや万博での発信を通じて「ごみ」「環境」「SDGs」を自分事として捉える意識が高まったことが示されている。</p> <p>また、ガーナの社会課題や文化を学ぶ中で、相手国を一方的に支援する対象ではなく、共に学び合うパートナーとして認識する姿勢が育まれたと整理されている。</p> <p>大学生・中学生・地域住民が企画や運営に主体的に関わった経験は、国際交流を通じた学びの深化と地域への誇りの醸成につながったことが示唆された。</p>
<p>愛媛県 (モザンビーク)</p>	<p>アンケートでは、国際的な取り組みへの関心や国際理解が大きく向上したとの回答が多数を占め、モザンビークへの理解・関心の深化も明確に示された。</p> <p>特に「今後も関わりたい」とする継続意欲が全員から示された点は、交流が一過性に終わらず、行動意欲へと転化したことを示している。</p> <p>満足度も非常に高く、参加体験が肯定的な学びとして内面化されたことが読み取れる。</p>
<p>高知県本山町・土佐町 (セーシェル)</p>	<p>アンケートでは、参加者全員（100%）が国際交流を「価値ある取組」と認識するようになり、異文化への理解や多様な価値観への気づきが深まったことが示された。特に、文化や環境問題、SDGsを相互に学び合う経験が、柔軟な思考力として定着している。また、交流への満足度は高く、今後も継続的に交流したいとの意欲や、海外や国際分野を進路として意識する変化が確認され、本事業が将来の交流人口創出や教育環境の多様化に向けた重要な契機となったことがうかがえる。</p>

<p>大分県杵築市 (ジンバブエ、ブルンジ)</p>	<p>アンケートの自由意見では、「坪井さんのこれまでの活動がとてもすごいことだと思った」「ブルンジの方々と様々な交流ができてよかった」といった声に加え、「このような機会を杵築市が積極的に作ってくれてありがたい」との意見が見られた。単なる見学にとどまらず、直接的な交流を通じてアフリカ諸国への理解を深め、自分たちの地域から世界につながる実感を得たことがうかがえる。</p> <p>郷土の人材の活躍を知り、地域に誇りを持つとともに、国際交流が地域の未来づくりにつながるとの気づきが生まれている。</p>
<p>宮崎県えびの市 (マダガスカル)</p>	<p>参加した中高生の振り返りでは、「将来海外と関わる仕事を考えたい」「違いを知ることで自分の地域の良さにも気づいた」といった意識変化が多く見られた。</p> <p>マダガスカルの学生との交流を通じて、国際交流を特別なものではなく、身近な将来の選択肢として捉えるようになったことがうかがえる。</p> <p>また、受入れ側としての経験を通じ、多様な価値観を尊重する姿勢が育まれ、学校や地域が国際的な学びの場になり得るという認識が共有された。</p>
<p>鹿児島県三島村 (ギニア)</p>	<p>児童・生徒へのアンケートでは、「ジャンベ以外のギニア文化も知りたい」「本場の人と直接会えたことが印象に残った」といった回答が多く見られた。自分たちが日常的に取り組んできた活動が、相手国の文化の中でどのような意味を持つのかを体感したことで、学びへの関心が広がっている。また、保護者や地域からは「誇らしい」「村の取組に自信を持てた」という声があり、地域全体の自己肯定感や一体感の高まりが確認できた。</p>
<p>沖縄県宜野座村 (カメルーン)</p>	<p>アンケートや振り返りからは、参加した子どもたちが「言葉が通じなくても一緒に楽しめた」「文化は違っても気持ちは共有できると感じた」といった実感を得ていることが読み取れる。異文化を学習対象としてではなく、遊びや音楽を通じた体験として受け止めたことで、外国文化への心理的距離が縮まり、多様性を前向きに受け止める姿勢が育まれた。</p> <p>また、大人世代からも「地域の文化の価値を再認識した」という声が見られ、世代を超えた意識変化が確認された。</p>

## 第6章 成果発信・広報の取組

### 6-1 自治体通信を活用した成果発信

本事業の成果発信の一環として、自治体の首長・職員・議員等を主な読者層とする専門媒体「自治体通信」(2025年9月特別号)において、万博国際交流プログラムの特集記事を掲載した。

#### 6-1-1 実施概要

- ・ 媒体名 : 自治体通信 (2025年9月特別号)
- ・ 発行形態 : 紙媒体およびWEB掲載
- ・ WEB掲載期間: 2025年10月~2026年2月
- ・ 主な読者層 : 自治体首長、幹部職員、議員等
- ・ 送付対象 : 全国自治体の首長あてに送付

紙媒体による直接送付と、WEBによる継続掲載を組み合わせ、首長層への到達と情報の持続的発信を図った。



#### 6-1-2 目的 (狙い)

本媒体への掲載は、万博国際交流プログラムの制度周知に加え、国際交流を地域政策の文脈で位置づけ直す視点を提示することを狙いとしたものである。

第一に、事業の制度趣旨と自治体の実践をあわせて発信することで、国際交流を「地域課題解決の手段」として捉える考え方を共有することを意図した。

第二に、万博を契機とした一過性のイベントとせず、会期後の継続や制度的基盤構築までを見据えた取組であることを明確に示すことを狙いとした。

第三に、首長および自治体幹部層に直接届く媒体特性を活かし、自治体内での政策検討や合意形成に活用されることを期待した。特に、全国自治体の首長あてに送付することで、首長自身に国際交流の政策的意義を理解いただく機会とすることを意図した。

### 6-1-3 掲載内容

誌面では、万博国際交流プログラムの制度概要（交流計画登録数 154 件、登録自治体 95 団体）、会期前・会期中・会期後の 3 段階による取組設計、自治体自らが交流計画を策定する仕組み等を紹介し、制度の全体像と趣旨を整理した。

制度の説明にとどまらず、「国際交流を目的化しない」という基本姿勢や、こどもを中心とした人材育成、地域産業やシビックプライドとの接続といった政策的観点も示した。

あわせて、内閣官房国際博覧会推進本部事務局次長へのインタビュー記事を掲載し、本プログラムの制度設計の背景と狙いが示された。主な発言は以下のとおりである。

- ・ 万博は多くの国・地域が集う国際的機会であり、これを地域活性化や人材育成につなげる契機とすることが重要である。
- ・ 国際交流自体を目的とするのではなく、地域ビジョン達成のための手段として活用する視点が求められる。
- ・ こどもにとって国際交流は代えがたい学びの機会であり、将来を担う人材育成の観点からも意義がある。
- ・ 交流を一過性の取組で終わらせず、「会期前」「会期中」「会期後」の 3 段階で継続的に取り組む制度として設計している。

さらに、北海道浦幌町、山形県遊佐町、富山県南砺市、和歌山県有田市の首長インタビューを掲載し、各自治体が国際交流を地域課題とどのように接続しているかを紹介した。

- ・ 北海道浦幌町：独自の教育課程「うらほろスタイル」を基盤とし、マリ共和国との交流を通じて、こどもたちの郷土理解と国際的視野の拡大を図る。国際交流を教育とまちづくりの延長線上に位置づける考えが示された。
- ・ 山形県遊佐町：高校存続という地域課題を背景に、マダガスカルとの交流を通じて若者の国際感覚を醸成し、将来的な海外人材受入れも視野に入れた持続可能な地域づくりを目指す姿勢が示された。
- ・ 富山県南砺市：伝統文化を万博の舞台で発信することにより、こどもたちの郷土への誇りを育み、「万博のレガシー」を地域に根づかせたいとの考えが語られた。
- ・ 和歌山県有田市：産業構造転換期にある地域において、UAE との交流を通じて国際的視野を持つ人材を育成し、将来的な産業振興や持続可能なまちづくりにつなげる狙い

が示された。

これら5名の発言を通じ、国際交流を教育、人材育成、産業振興、地域アイデンティティ形成等と接続する多様なアプローチを紹介し、各地域における取組の方向性を示唆する内容とした。

## 6-2 万博国際交流プログラム「成果報告会」

本事業の成果発信の一環として、「万博国際交流プログラム 成果報告会 ― 地方創生の観点からみた自治体の取組共有 ―」を令和8年2月17日にオンライン形式で開催した。

### 6-2-1 実施概要

開催日：令和8年2月17日（火）13:30～15:30

開催形式：オンライン（ウェビナー形式）

対象者：本事業に取り組んだ自治体およびその関係者

主催：内閣官房（事務局：近畿日本ツーリスト）

#### 【プログラム構成】

第1部 事業実績のまとめと成果の分析

第2部 事例紹介

第3部 支援策・制度の紹介

なお、本報告会で使用した資料は、内閣官房ホームページに掲載。

### 6-2-2 目的（狙い）

第一に、内閣官房より交流自治体数や登録件数等の実績を報告するとともに、「成果の5分類」に基づく分析結果を共有することで、万博国際交流プログラムが各地域にもたらした成果や変化を体系的に整理し、地方創生の観点からその意義を可視化・共有することを目的とした。

第二に、自治体による具体的な取組事例を通じ、国際交流を「地域課題解決の手段」として位置づける実践のあり方を共有することを狙いとした。

第三に、万博会期後の継続や展開を見据え、自治体等が活用可能な支援策・制度を紹介することで、今後の制度接続や体制構築に向けた具体的示唆を提示することを意図した。

## 6-2-3 実施内容

### 第1部 事業実績のまとめと成果の分析

内閣官房より交流計画登録数、参加自治体数、交流規模等の実績が報告され、続いて事務局より「愛着と誇りの形成」「教育・人材育成」「新たな広がり」「認知向上・理解促進」「国際交流の基盤構築」の5分類に基づく成果分析が示された。これにより、個別事例を超えた成果の構造化が図られた。

### 第2部 事例紹介

#### ・ 上板町 × ヨルダン

地域の象徴「藍染」を核にした国際交流

～教育・文化継承・シビックプライドを高める取組～

地域の象徴「藍染」を核に、文化継承・担い手育成・学校教育の充実を国際交流と接続。

JICA 事業申請、MOU 締結、相手国予算活用等、財源確保や体制構築が進展し、首長を含む地域内の理解が深化した点が特徴として示された。

#### ・ 八尾市 × リベリア

民間主導の官民連携による国際交流モデル

～多様な主体を結集し、産業・教育・関係人口に波及～

国際交流を地域活性化戦略の中に位置づけ、産業振興・担い手育成・関係人口拡大へ波及。商工会、教育委員会、中小企業、行政部局、外部機関等による「地域コンソーシアム」が形成され、官民連携モデルとしての取組が示された。

#### ・ 遊佐町 × マダガスカル

高校存続に国際交流を活用した中山間地域の教育モデル

～マダガスカルからの留学生受入れに向けた体制整備～

高校存続という地域課題に対し、国際交流を教育魅力化の手段として活用。協働活動を通じた行動変容が見られ、留学生受入れや地域おこし協力隊登用構想など、継続に向けた体制整備が進展していることが報告された。

### 第3部 支援制度の紹介

万博国際交流プログラムは本年度をもって終了するが、国際交流を「地域づくり」「教育振興」「産業振興」といった政策分野と接続して捉えることで、既存の国・関係機関の支援制度を活用しながら継続・発展させる可能性が示された。

本報告会では、内閣官房より、今後活用が期待される制度として、JET プログラム、地域おこし協力隊、CLAIR 等による支援制度等が紹介された。これらは単独で活用するだけでなく、教育分野・人材育成分野・産業振興分野など、各自治体の政策目的に応じて組み合わせることで、国際交流を持続的な取組として展開することが可能であることを示唆した。

## 第7章 まとめ（総括）

本調査は、2025年大阪・関西万博を契機として、日本の地方公共団体とアフリカ地域との間に、地域活性化に資する持続的な国際交流をいかに構築し得るかを明らかにすることを目的として実施したものである。とりわけ、万博会期中のみならず万博会期後も継続する「レガシー」としての国際交流の可能性を検証した。

本調査を通じて明らかになった最大の成果は、国際交流が単なる文化紹介や一過性のイベントにとどまらず、教育、人材育成、地域産業、住民意識、行政体制といった多面的な領域に波及効果をもたらし得る点である。特に、学校教育やこどもを中心とした交流は、異文化理解の促進に加え、学びへの意欲や探究心の向上、将来の進路や価値観に影響を与える「原体験」となり得ることが確認された。これは、万博が掲げる「未来社会の実験場」という理念を、地域レベルで具体化する重要な取組である。

また、地域資源や既存の強み（文化、スポーツ、産業等）を核とした交流設計は、住民の郷土愛やシビックプライドの醸成につながり、地域内の合意形成や主体的な参画を促進する効果を持つことが示された。首長の関与や民間事業者・市民団体の主体的な参画、さらには大使館や国際機関との連携が進むことで、国際交流が地域政策の一部として位置づけられ、予算措置や制度設計に向けた動きが生まれた点も重要な成果である。

一方で、持続的な交流を実現するためには、人的リソースの確保、調整役となる推進主体の存在、財源確保や枠組みづくりといった基盤整備が不可欠であることも明らかとなった。これらが不十分な場合、担当者の異動や周囲の環境の変化等により取組が停滞するリスクが高い。したがって、国際交流を「事業」ではなく「仕組み」として地域に根付かせる視点が求められる。

本調査で得られた知見は、アフリカ地域に限らず、先進国を含めた他の地域との国際交流にも応用可能であり、地方創生と国際交流を結び付ける再現性の高いモデルとして横展開が期待される。大阪・関西万博を起点として生まれたこれらの取組が、万博会期後も各地域において発展・定着し、日本全体の国際的な関係人口の拡大と、次代を担う人材育成につながることが強く期待される。